
愛とアイと哀と

雛花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛とアイと哀と

【Nコード】

N4054R

【作者名】

雛花

【あらすじ】

人から「愛」を貰う。人に「愛」を届ける。時々「哀」になることもある。「I」自分のことしか考えられなくなることもある。

愛とアイと哀と

それだけで世界を紡いで行ける――

＊コ哀・新志中心の短編集
＊快志・快哀もあり

無色（コ哀）（前書き）

上原あずみさんの曲です。

文章力ないですが、最後まで読んでやってください。

無色（コ哀）

星が空いっぱい広がる夜。
少女は1人、そこにいた。

――

工藤君、ごめんなさい。

私をもっとしっかりしてれば、貴方はジンに撃たれずにすんだの
かもしれないのね。

私を庇ってくれたこと、感謝してるわ。

でも、貴方は死なくてよかったのよ。
私が死ねば良かったのに……。

貴方がいない世界で私は誰を頼ればいいの？

いくら泣いても涙ってものは枯れることがないのね。
初めて知ったわ。

この星空がこんな輝くのは、このどれかに貴方がいるからなんでしょうね。

1人にしないでよ。
昔は1人なんて当たり前だった。だけど、今の生活に慣れてからは、1人が怖い。

目に映るものが全て歪み始めた。

顔を上げれば、空は広がり星たちは輝く。
けれど、星に手が届くはずない。
どうして、こんなに空は遠いのかしら？

貴方に会いたい……。

工藤君はいつも私のことを守ってくれた。
最後だって、工藤君は、

『灰原。 幸せに、なれよ……』

そう言った。

無理よ。

貴方がいない世界で幸せになるなんて。

この星空がこんなに切なく見えるのは、このどれかに貴方がいるからなんでしょうね。

いつから私はこんなに臆病になったのかしら？
貴方がいなくなってから何もかもがなくなった。

貴方のいない世界なんて、絶えられない。

目に映るものが全て色を失った。

顔を上げれば、空は広がり星たちは輝く。

いつも、私の大切な人とは一緒にいられない。

お父さんも、お母さんも、お姉ちゃんも……、それに、工藤君まで……。

どうして、みんな私を置いて逝くの？

みんなに会いたい……。

そろそろ日が昇る。

街がざわめき始める。

そして、広がっていく……。

貴方のいない、『無色』の世界が。

貴方と会わなければ良かった、なんて思う日もあった。

でも、貴方と会えて良かったわ。

こうして色々な思いができたんだもの。

あの時、ガス室で死ななくて良かった。
運命から逃げなくて良かった。

でも、

もう限界よ。

やっぱり、私、貴方がいないとだめみたい。
貴方が命を賭けて守った命なのに、無駄にしてごめんなさい。

やっと、会えるわね……。

――

そして、少女は星空へと飛び立つ。

無色（コ哀）（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。
ちなみに続きます。

七色（コ哀）（前書き）

コ哀。

無色の続編です。

七色（コ哀）

真っ白い光が広がっている。
少女は1人、そこにいた。

—

ここは、どこ？

全てが白い。 無色の世界。

確か、崖から落ちたんだ。 死ぬために。

じゃあ、ここは天国？

いや、私は天国へなんかは逝けないわ。

犯罪者だもの……。

ま、どっちにしろここは死の世界なのね……。

『は、い……どうぞ』

え？
何？

『……ぼ……ら』

誰？ 誰なの？

『灰原！』

目の前にずっと会いたかった人が現れた。

「工藤君！」

ということは、やっぱり私死んだのね。

彼はやっぱり怒ってるのかしら？

命を賭けて守った命が無駄にされたんだものね……。

「やっぱり、怒ってる？」

『なんで？』

「なんでって、私、貴方が守った命、無駄にしたのよ？」

……。

『お前、何か勘違いしてるぞ？』

「え？」

『お前はまだ死んでない』

彼の言っていることが上手く理解できない。

『今、お前は、生と死を彷徨っている状態なんだ』

生と死を彷徨ってる？

「じゃあ、なんで貴方はここにいるの？」

『俺は、お前を助けに来た』

「助けに？」

『だって、お前絶対”死”を選ぶだろ？』

「ええ」

『だめだ』

彼は、即答した。

「でも、私もう限界なの。貴方のいない世界なんて……」

おもわず、本音をぶつけてしまった。

『……俺がいなくても、みんながいるだろう？ 灰原の仲間が、たくさん』

仲間……。

『お前は1人で抱え込みすぎなんだよ。周りをもっと頼れ。一点ばっか見ないで、周りをよく見ろ。そうすれば、おのずと道は見えてくるさ』

周り……。

博士、吉田さん、小嶋君、円谷君、蘭さん、FBIの人たち……。いつのまにか、こんなにたくさんの人たちが私の周りにいた。

昔は、孤独だったのに……。

『なあ、灰原。生きてくれ。俺の最初で最後の我儘くらい聞いてくれ。灰原が死んだら、明美さんに会わす顔ないだろう?』

お姉ちゃんも、生きることを望むかな?

私、生きていいのかな?

「……私、生きるわ。」 灰原哀”としてもう一度人生をやり直す」

『おうっ! 灰原なら大丈夫だ。俺、いつでもお前の側にいるから。守るって約束したもんな』

そう言った彼は笑っていた。

それにつられて私も笑う。

『向こうが出口だ』

彼は出口を指差す。

出口は、七色に光っていた。

「ええ。もう、お別れね……」

『ああ』

やっぱり辛い。

必死に涙をこらえる。

『哀、好きだ』

こらえていたはずの涙が零れ落ちる。

止まらない。

これは何の涙なのかしら？

嬉しさ？

悲しさ？

不安？

安心？

それとも、どれにも当てはまらないのかしら？

ここからが、新しい人生の始まり。

「私も、好きよ」

私は出口に向かって走り出す。

『哀！ お前の両親や姉さん、それに俺の分までしっかり生きて
こいよ！』

私は彼の言葉に後押しされ、出口まで走りだす。

「ありがとう、工藤君」

この言葉が、工藤君に聞こえたかは、彼にしか分からない。

少女は次への一步を踏み出した。

七色の世界へと……。

七色（コ哀）（後書き）

哀ちゃんには生きてて欲しかったです。
最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

朝焼け、君の唄。(コ哀)(前書き)

コ哀で哀ちゃん視点。
ほえほえPfeat. 初音ミクの曲です。
短いです……。

朝焼け、君の唄。(コ哀)

窓の外はもう朝焼けが滲んでいる。

ああ、綺麗だね。

私とは大違い……。

何も気にせず、貴方の隣にいた。

「お前、最近元氣無いな？」

「別に……」

それでいいと思ってた。

「そうか？ 悲しい時は、笑えばいいんだよ」

見慣れた筈の笑顔が眩しい。

胸が痛む。

他の子にも同じように笑うんでしょね。

一晩中泣いて、枯れるほど泣いて。

私の眼は見事に赤く腫れた。

優しい貴方はきっと心配するでしょうね。

次の日、学校へ行く時、

「灰原、昨日泣いた？ 眼腫れてるぞ」

思った通り。

「ただの寝不足よ」

「ならいいけど。 なんかあったら俺に言えよ」

私が泣いたことは知らなくていい。

それでいいの。

オリオン星を見つけた夜。

祈って、すぐにやめた。

この気持ちは貴方との間にあるの。

星の上なんかじゃないわ。 きっと……。

たった一言、それだけでいい。

言い終えたら、走って逃げればいい。

それだけ。

それだけなのに……。

春、夏、秋、冬。

気づけば貴方は側にいた。

あと一步の距離が近くて遠いの……。

あの日のオリオン星、貴方も見ていたかしら？
知らぬ間に積もっていた貴方への唄。

馬鹿みたいね。

勝手に期待して、勝手に諦めて、勝手に傷付いて。

本当、どうしようもないわね。
つたなくて、でも愛おしい私の恋歌。

響け——。

一晩中泣いて、涙枯れる頃。
やっと気づいたわ。

貴方が、好きだと……。

窓の外はもう朝焼けが滲んでいる。
ああ、綺麗だわ。

私になれるかしら？

朝焼け、君の唄。(コ哀)(後書き)

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

名前（キ十哀）（前書き）

キッドと哀ちゃんが屋上で何か話しています。
コ哀。でも、コナン君出てこない……。

名前（キ十哀）

月が空に浮かび、綺麗に輝いている。

そこで、あまり見かけない組み合わせの2人がビルの屋上で話している。

「名探偵じゃなくて、貴女が来るとは……、流石に私も驚きましたよ」

白い衣装の怪盗が言います。

「あら、ごめんなさいね。彼はまだ貴方の暗号が解けないみたいよ」

クールな少女が言います。

「へえ、あの名探偵がね。で、貴方は私を捕まえますか？」

「クスッ。捕まえたいところだけど、同じ犯罪者として見逃してあげる」

少しの沈黙。

「え？　　どういふことですか？」

「なんでもないわ」

「気になります」

「中森警部呼ぶわよ」

「それだけは勘弁してほしいです。　……それにしても貴女に敵う気がしませんよ」

「あら、怪盗さんがそんな簡単に諦めていいのかしら？」

「……やっぱり、貴女には敵いません」

「……ねえ、私の前でわ、そんな紳士のような話し方しないでいわよ」

「あ、ありがとう。　結構辛いんだよ……」

怪盗の性格がガラリと変わった。

「なあ、哀ちゃん。俺も素の俺を出すからさ、哀ちゃんも素直になりなよ」

「え？」

「……哀ちゃん、工藤のこと好きなんだろ？」

「そんなわけないわよ」

「怪盗をなめたらだめだぜ。哀ちゃん」

「……」哀ちゃん” って言うの止めてくれる？ 寒気がするわ」

「えー。俺は可愛くていい名前だと思うよ」

「とにかく、止めて」

「じゃあ、」

と言い、怪盗は少女に背をあわせて、耳もとにより、コナンの声色を使って、

「哀」

と言った。

「!?!」

少女は見事に動揺した。

頬が少し赤く染まっていた。

怪盗は無邪気に笑っている。

「やっぱり好きなんですよ?」

「……そうよ……」

と、小さく少女は言った。

「俺は素直になったほうが可愛いと思うぜ。 工藤もわかってる筈。 俺、哀ちゃんのこと応援してるから」

と怪盗はそれだけ言い残し、空へと飛んで行った。

「馬鹿ね……。 素直になれるなら、もうなってるわよ。 彼には私と正反対の明るくて元気で真っ白な彼女がいるもの……」

彼女は小さく呟いた。

月はそんな彼女を悲しく照らしていた。

名前（キ十哀）（後書き）

哀ちゃんは可愛い。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

哀切（志↓新蘭）（前書き）

新一と蘭が結婚しちゃう設定。
志保視点です。

哀切（志↓新蘭）

「宮野、ちょっと話したいことがあるんだけど……」

そう言って、工藤君は私の部屋に入ってきた。

工藤君は少し悲しげで申し訳なさそうな顔をしていた。
私は、なんとなく言われることがわかった気がした。

「あのさ、……蘭と結婚することになった」

やっぱり……。

いつか言われると思ってた。
でも、辛い。

「おめでとう」

精一杯作り笑いをした。

「無理すんじゃないよ」

「え？ 別に無理なん」

「涙」

”無理なんてしていない”と言おうとしたが、彼の言葉で遮られた。

気がついたら、私の目から涙だ流れていた。

「違うっ。 た、ただのあくびよ」

「じゃあ、こっち向けよ!」

「無理!」

「泣いてんだろ?」

「泣いてなんか、ない……」

止めようとしても、自然と零れ落ちる。

「無理すんな。 ……。 自分から言いづらいけど、お前って俺のこと好きなんだろ?」

「!?!」

工藤君には何もかもお見通し。

「その顔は凶星、だな」

ええ、大当たりよ。

貴方が大好き……。

「悪かったな」

「え？」

私は工藤君が謝ってきたので驚いた。

「貴方は何も悪くないじゃない」

「悪いのは俺だ。 ” 守ってやる ” なんて言っときながら、結局は蘭優先だったし。 それに、お前の気持ち考えないで、お前の前で蘭の話したりして……。 辛かったよな？ 本当、ごめん」

「別に、どうってことなかったわよ」

嘘。 そんなわけない。

すごく辛かったし、悲しかった。

でも、私は工藤君と蘭さんの幸せを願ってるから。
2人を引き離れたのは、私だから……。

「お前、もう無理すんなよ。 宮野の悲しい顔、もう見たくないから」

「そんな優しい言葉かけないで」

本当は嬉しい。

でも、心とは逆の言葉。

私って、素直じゃないわよね……。

彼女とは大違い。

「可愛くねえ。 まあ、そこがお前らしいよな」

そう言って、彼はニカッと笑ってみせた。

私もつられて頬が緩む。

いつもの私たちに戻り、安心したのか、彼は言った。

「ってことだから、お前も幸せになれよ。 俺の好きなやつは蘭
だけど、お前だって大切な仲間だ。 ……いや、宮野は”相棒”だ
な。 これからもよろしくな、相棒」

「あら、調子いいこと言っちゃって」

なんて言うけど、内心嬉しい。

でも、ポーカーフェイスはくずさない。

「まじ、可愛くねえ」

「はいはい、じゃあまた」

ニコッと笑って言う。

「ああ。 宮野、俺のこと好きだったことなんか忘れて新しい人
見つけろよ！」

「あら、私いつ貴方のこと好きって言ったのかしら？」

「え！？ 違うの！？ 俺、すげえ恥ずかしい人じゃねえか」

「クスッ。　そうね。　私の好きな人は、

——江戸川コナンよ」

「へえ」

と言って、彼は部屋を出て行った。

もう一言残して———」。

「江戸川コナンは、灰原哀が好きだったと思うぜ」

彼が出て言ってから、私は泣いた。
声を押し殺して、たくさん泣いた。

最後の一言を聞いて、私は解毒剤なんて作らなきゃ良かったと思
った。

最低ね……。

”恋”って哀しくて切ない。

哀切（志↓新蘭）（後書き）

原作ではこんな悲しい結末になってほしくないです。
最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

リグレットメッセージ（コ哀）（前書き）

悪ノP feat. 鏡音リンの曲です。

コ哀。でも、コナン君は哀ちゃんを庇って、ジンに撃たれて死んでしまった設定。

リグレットメッセージ（コ哀）

この街の海には、昔から伝わる小さな秘密がありました。

――

波の音が聞こえる。

潮風が吹く。

いつもなら気持ちいいと感じていた。

それでさえ、私の心は晴れない。

理由なんて分かっている。

貴方が、いないから……。

私なんて庇うから。

私をもっと強ければ。

私のせいだ。

私のせいで彼は殺された。

そういえばあの時……。

――

初めて彼とここへ来た時。

「なあ、知ってるか？」

彼は急に私に聞いてきた。

「”願いを書いた羊皮紙を小瓶に入れて、海に流せばいつの日か
思いは実るでしょう”」

「何それ？」

「この海に伝わる素敵な秘密」

「へえ。 意外とロマンチックなのね」

「哀もやってみない？」

「やらない」

「なんで？」

私は貴方がいるだけでいいから。
なんて言えない。

「ひ・み・つ」

――

あの頃は幸せだった。
工藤君がいたから。

でも、今は……。

彼は私を助けてくれた。
守ってくれた。

なのに、私は何もしてあげられなかった。

貴方はもういない。

だから、この海に私の思い届けてもらおうの。

――

彼と私は毎日海へ行った。

彼は毎日のように小瓶を流していた。

一度、何をお願いしてるのか聞いたことがあった。

「毎日、何をお願いしてるの？」

「ん？ ああ。 哀がもっと可愛くなりますようにって」

「余計なお世話よ」

「嘘」

「え？」

「もう十分可愛いし」

そう言った彼に少し照れる。

「そ、それで、本当は何をお願いしてるの？」

「ああ、本当は」

彼は笑ってこう言った。

「哀がいつまでも幸せでありますように」

彼の顔が赤くなっていくのが分かる。

「どうしたの、名探偵さん？ 顔が真っ赤よ」

「バ、バーロー。 夕日のせいだよ。 それで、哀は？ なんか言うことないの？」

「そうね。 ずっと側にいて。 そしたら、私幸せだから」

「ああ、分かった」

――

流れていく、小さな小瓶。

「工藤君」

願いを込めたメッセージ。

「ずっと側にいてって言ったじゃない」

水平線の彼方に静かに消えてく……。

「1人は、もういや……」

海の水に波紋ができる。

雨？ いや、違う。

これは、私の、

涙。

その時、彼の声がした気がした。

『哀、大好きだ』

涙が止まらなくなった。
1人で、生きなきゃ。

「工藤君、大好きだった」

——
もしも生まれ変われるならば、

『その時はまた側にいてね』

リグレットメッセージ（コ哀）（後書き）

悪ノPさん好きです。

リグレットメッセージはとてもいい曲なので、1度聞いてみてください。
い。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

繋いだ手（新志）（前書き）

新志。

可愛い志保を書きたかった。

繋いだ手（新志）

「宮野、一緒に帰ろうぜ」

学校が終わると、工藤君が私の机に来てそう言った。

「ええ」

毎日そう言われてた。
でも、今日は違う。

——昨日から、私たちは付き合い始めた。

「帰り買い物していいかしら？」

「ああ、もちろん」

笑顔で言う彼に少し照れる。

――

学校を出て、商店街による。

「えーと、豚肉とじゃがいもとニンジンと玉ねぎと……」

私が買う物を言っていると、彼が、

「カレーだ！」

と言った。

「正解」

「よっしゃ！」と言って、嬉しそうに笑っている。

――

一通り買い物が終わった。

「宮野、荷物持ってやるよ」

彼が買い物袋をもってくれた。

「ありがとう」

すると、彼が急に言った。

「なあ、走ろうぜ！」

「え？」

彼は私の手をギュッと握って走り出した。
身体が熱い。
ドキドキが止まらない。

――

少し経って、走るのを止めた。

「手、離してくれる？」

彼はずっと私の手を握っていた。
いい加減、私の心臓がもたなくなる。

「いやだ！」

とか言って笑う。

「……は、恥ずかしいじゃない」

「宮野可愛い」

真面目な顔で言われた。

一気に顔が赤くなる。

彼の顔見てられない。

「その公園で話そうぜ」

――

私たちは公園のベンチに座った。

手はやっと離してくれた。

本当、心臓が破裂しそうだった。

冬なのに、熱い。

私、どうかしてるわ。

「夕日、綺麗ね……」

気を紛らわそうとして、言った。

「……宮野のほうが、綺麗だよ」

彼の急な言葉。

馬鹿……。

私、壊れてるかも。

彼を見ると、言った本人が照れていた。
彼も同じ気持ちなんだろうね。

——昨日を思いだすわ……。

『宮野っ！ 俺、お前のことが好きだ！！』

帰りに家の前で、大きな声で言われた。
辛い周りには誰もいなかった……と思いたい。
嬉しかった。

素直に嬉しかった。
だから、私は……、

『私も、好き』

そう言った。

その時、初めて私は、”幸せ”を知った。

――

「宮野、ずっとずーっと一緒にいような」

今までより、笑顔で言う彼。

「ええ」

私も、心から笑う。

――2人でいつまでも幸せでいられるなら、それ以外、何もいら
ないわ。――

――

色々と雑談をしていたら、いつの間にか、時間が過ぎていき、辺
りはもう真っ暗になっていた。

「そろそろ帰るか」

楽しい時はすぐに過ぎる。
辛い時は長いのに……。

「ん」

彼は手をさしのべてきた。

そっぽを向く彼。

きつと照れているんだろう。

私は彼の手を握る。

――

もう、家に着いてしまった。

この時以上に家が近いことを悔やんだことはない。

「じゃあ、また明日」

「ああ」

私が家に入ろうとした時。

「俺、お前が辛かった時のこと忘れるくらい、幸せにしてやるから！ 繋いだ手、離さねえから！ 覚悟しとけよ！！」

「ええ」

私はニコツと笑ってみせた。

「夕食食べに来る？」

「もちろん！」

彼はこれを見ていたかのように、駆け寄って来た。

——奇跡って起こるものなのね——

繋いだ手（新志）（後書き）

照れた志保は素晴らしくかわいい☆
最後まで読んで下さってありがとうございます。

卒業式（中学コ哀）（前書き）

中学生コ哀。

卒業シーズンということで……。

卒業式（中学コ哀）

「以上をもちまして、第31回帝丹中学校の卒業式を終了いたします」

その言葉で、中学校最後の行事が終わった。

周りの人はほとんど泣いていた。

まあ、別々の高校に行く人が多いからかしら？

第2の人生はとても楽しい。

前とは比べ物にならないくらい。

だから、悲しさとかも知ってしまった。

私は、歩美と小嶋君と円谷君と違う高校に行くことになった。

やっぱり、寂しい。

でも、江戸川君とは同じ。

だからいい、なんても思ってたわ。

「僕、灰原さんのことずっと好きでした」

「……ごめんなさい」

「そっか。　気持ちだけ伝えたかったから」

今ので、12人目。

疲れるわ……。

卒業式に告白する人が多いって聞いたけど、ここまで多いとは思わなかった。

そのほとんどの人に屋上で告白された。

でも、本当に好きな人は1人に一途で私なんか恋愛対象にならない。

もう夕日が沈みそう。

綺麗……。

「何黄昏てんだよ」

後ろから声がした。

私の好きな人の声が。

「工藤君。　何しに来たの？」

「いや、ちょっと用があったって」

「あ、そう」

「お前、何人に告られた？」

「え？ 12人かしら？ まあ、全部断ったけど」

だって、私が好きなのは貴方だから……。

「うわあ。 大変だな。 俺は10人かな？ 俺も全て断ったけど」

「あら、そんなに告白されて、舞い上がってるんじゃないの？」

「全然。 本命からは何も言われてないからな」

「どうせ、愛しの彼女でしょ？」

「あ？ 蘭のことか？」

「あら、分かってるじゃない」

「あのな、前にも言ったけど、俺もう蘭のことなんとも思っ
てないからな。 それに、好きな人は他にいるし」

「どうだかね？」

言われたのは覚えてる。

でも、信じれない。

彼は急に解毒剤がいらない、と言い出した。

その時以上に驚いたことはなかった。

あんなに欲しがっていたのに……。

理由を聞いたら、コナンになって好きな人ができたから、と言われた。

誰？、と聞いたけど、まだ言えない、と言われた。

まだってことはいつか教えてくれるって考えていた。
それが今なのかしら……。

「ちなみに好きな人って誰？」

知りたい。

コナンで好きになったということは、10歳年下の人を好きになった可能性が高い。

私そんな子に負けたってことなのかしら？

「知りたい？」

「ええ」

「コナンと一緒に運命を共にしてきた、運命共同体」

「……っえ？」

彼の言葉にドキッとした。

「俺が好きな人はお前だよ、灰原」

……夢じゃないことを願いたい。

工藤君が私のことを好き？

そんなことってあるのかしら？

「本当は、もっとはやく言いたかった。でも、お前はきっと蘭への罪悪感があって、俺の気持ちを素直に受け入れてくれないと思った。だから、ずっと言える日を待ってた」

「……本当なの？」

「嘘言ってどうすんだよ」

ずっと好きだった人が目の前にいて、私を好きと言ってくれている。

私の都合のいい夢？

夢でもいい。

今、幸せだから。

そう思うと、涙が溢れてきた。

「えっ!？　な、なんで泣くの？　俺なんか悪かった?」

「ち、違う」

涙声で、上手く喋れない。

「……嬉しい、の。　私には届かない存在だと、思ってた、から」

涙が自然と流れ落ちる。

嬉し泣きって本当にあるものなのね。

「で、灰原、返事は?」

今の状況でも恐る恐る聞く彼が可愛く思える。

「私も好きよ」

彼はニカッと笑った。

「その言葉、9年間待ってた」

そう言うと、彼はギュッと私を抱きしめた。
私は彼の背中に腕をまわした。

「下の名前で呼んでいい？」

「だめって言ったら？」

「ノーは受け付けない」

「じゃあ、初めから聞かないでよね」

彼の鼓動が聞こえる。

彼の全てが愛おしい。

好き、きっと貴方が思っている以上に……。

「哀、大好きだ」

彼の言葉の1つ1つが胸に刻まれていく。

「お前は？」

「言わなくても、分かってるくせに」

「哀の言葉で聞きたい」

彼の言葉に弱いな、と改めて実感した。

「工藤君、好きよ」

本日2回目の告白。

恥ずかしさなんてどこかへ消えていった。

私は軽く彼の頬にキスをした。

彼は顔が真っ赤になっていった。

「顔が真っ赤よ」

「誰のせいだと思ってんだよ」

「夕日のせい？」

「おめえのせいだよ」

そういい終えると、彼は私の唇にキスをした。

「っ!？」

「お返し」

そう言って彼は無邪気に笑った。

私の顔が赤くなったことは言うまでもない。

卒業式（中学コ哀）（後書き）

私的には頑張ったと思います。
最後まで読んで下さって、ありがとうございます。

ホワイトデー（コ哀）（前書き）

短いですが、ホワイトデーということで……。

ホワイトデー（コ哀）

まだ少し寒いが、春の近づきを感じる今日。

3月14日。

男の子がバレンタインデーのお返しをする日。

お返しといってもその意味は人それぞれ違うもの。

恋人としてだったり、友達としてだったり、もしくは別れの意味であったり……。

これは自分の気持ちに素直になれない2人の男の子と女の子のお話です。

2人はソファ―に座って、何やら話していた。

「最近事件多いよな」

メガネをかけた少年は珈琲の入ったカップを持ちながら呟いた。

「そうね。 まあ、仕事が増えて嬉しいんじゃないの、探偵さん？」

赤みがかった茶髪の少女がそう答える。

「そんなことねえよ」

「あら、そう」

もう夜の9時だ。

普通の小学生はもう寝る時間だ。

まあ、彼らは普通じゃないが。

「そろそろ帰るか」

「はやく帰りなさい。 彼女が心配してるわよ」

「彼女じゃねえし」

「あら、そのポジション狙ってるんでしょ？」

2人はそんな会話をしながら、玄関へ向かう。

ドアを開け、帰ろうとした少年は、あ、と言い少女の方へ向き、バックから小包を出す。

「ん」

「え？」

少女は頭の上にはてなマークを浮かべる。

「ん」

「それ何？」

「お返し」

「なんの？」

「今日、ホワイトデーだろ？」

「そうだけど、バレンタインデーにチョコもらった人にお返りする日よ。私、あげた覚えはないんだけど」

少女が少年に冷たく言う。

「え、ああ。その日ここ来たら誰もいなくてよ、腹減ってたから丁度いいところにチョコが置いてあったから食べちゃったんだ」

「あ、チョコが減ってると思ったら、食べたのは貴方だったのね」

「だから、これあげる」

にこっと少年が言う。

「気休めならいらないわ」

「んなんじゃねえから。　な、これうまいから、食ってみろ」

少年の強い押しに負け、少女は小包を受け取った。

「……ありがとう」

少女は下を向きながらも、お礼を言う。

「そんじゃ、帰るわ」

そう言って、少年はドアノブに手をかけた。

「ええ」

「あ、灰原」

「何？」

「おめえの手作りチョコうまかったぜ。　愛情が感じられた」

「そう」

「来年もよろしくなっ」

そう言い残し、少年は帰って行った。

「調子いいこと言っちゃって」

ホワイトデー（コ哀）（後書き）

いや、原作のバレンタインの話を読み返して、新一は「どこの店のだ？」とか言っておいしさをアピールしたみたいですけど、裏を返せば、蘭のチョコを手作りチョコだとわからなかったってことにもとらえられますよね。

だから、今回は手作りってことを強調しましたっ！

ってか、新一のホワイトデーのお返しがのど飴ってセンスな（orz
って、ことで、ホワイトデーの話でしたゝ

二択（新志）（前書き）

サブタイトルが残念……

新志っぽい感じですよ！ あ、でも、新↑志かな？
新一視点で。

二択（新志）

「お邪魔しまーす」

俺は博士の家に来た。

なぜかというと、博士の発明品を見に来た。

っていうのは、うわべだけの理由。

本当は宮野に会いに来た。

特に宮野が好き、という感情はないがなぜか気になってしまう。
この気持ちってなんだろうな？

「博士？ いる？」

リビングに来たが、博士はいなかった。

多分、出掛けているんだろう。

なら地下室行くか。

宮野何してっかな？

なんかの薬を作ってるかも……。

部屋入ったらいきなり、実験台になってちよーだい、とか？
あり得る……。

いやもしくは、蘭さんとうまくいってる？、とか聞いてくるかも

……。

あいつそればっか気にしてるからな。
でも、蘭とは何もないんだよな。
怒るかも。

なんて色々なことを考えながら、地下室へ向かう。
俺が考えていたことよりも、ことは重大だった。

そのことを地下室のドアを開ける前の俺には知るよしもなかった
……。

ガチャ、という音と共に、ドアを開けた。

「宮野、遊びに……」

俺は部屋を見た瞬間、呆然とした。

「なっ……」

「工藤君」

宮野の部屋は、綺麗に片付いていた。

綺麗、という表現はおかしいな。

何もない、という表現が正しいだろう。

宮野は荷物をバックにまとめて、ここから出ようとしてる所だった。

「宮野っ、お前何してんだよ」

「見てわからない？」

宮野は少し呆れた顔をして言った。

「今から、ここを出て行くのよ」

「意味わかんねえよ」

「あら、平成のホームズが聞いて呆れるわね」

さらっと言う。

でも、俺には分かる。

宮野は辛いんだって。

こいつのこと誰よりもわかってるつもりだからな。

「もう、こんな所はこりごりよ。私、優しさに慣れてなくてね
……。優しくされると逆に辛いのよ」

「それだけの理由じゃ、ここから出て行くことは許さない」

「なんで、貴方が決めるの？ 私の問題でしょ？」

「いや、お前は俺の相棒だ。俺に止める権利はある」

俺がそう言うのと彼女は微かに笑った。

「……私の言うこと聞いてくれたら残ってもいいわよ」

「ああ、わかった」

宮野は不敵な笑みを浮かべながら、こう言った。

「私と、付き合って」

「っえ？」

予想もしなかった言葉。

「付き合ってくれないなら、私はここを出る」

どうしたらいいのか、迷った。

本気で考えた。

宮野にはここにいて欲しい、でも好きというわけでもないのに付き合うのは無理だ。

どうすれば？

「その二択しかないのか？」

「そうよ」

「……きつい二択だな」

「そうかしら？ 簡単よ。だって二択なもの」

そう言って、クスッと笑った。

はは、余裕だな。

俺の答えで未来が左右されるっていうのに。

俺はこんなに悩んでるのに……。

なら……。

「……俺、宮野にここにいて欲しいよ。でも、好きでもないのに付き合うのは、悪い。だから、もう少し、待って欲しい。これじゃ、だめか……?」

そう言うとき宮野ははあ、とため息をついた。

「呆れた」

「はっ?」

「嫌いなら、嫌いって言えばいいのに。なんで、そうやって優しくしてくるの?」

「嫌いってわけでもないから」

ニカッと笑ってみせた。

彼女は驚いていた。

「っ、私の負け」

宮野は笑って、

「ここに残るわ」

そう言った。

「……良かったっ」

本当にそう思った。

「私ね、貴方のことが好きなのよ……」

少し照れた顔で言われた。

正直、驚いた。

俺は宮野の恋愛対象になってたんだな。

「だから、ね。 貴方と蘭さんが一緒にいるのを見てるのが辛くて……。 だから、ここを出ようとしたの」

「だからって、何も言わず出て行くことないだろ」

「止められなくなかったの」

そう言った彼女の顔は酷く辛そうだった。

「貴方に止められたら、決心が揺らぐから。 実際、揺らいじゃったし……。 ここにいますと、貴方に甘えちゃうから」

彼女は下を向き、ポツポツと言う。

「いいんじゃないか？」

「え？」

「別に俺に甘えてもいいんじゃないか？」

「どうして？」

「理由なんてねえよ。甘えたけりゃ、思う存分甘えろ」

「……いい、の？」

「ああ」

宮野は、クスッと笑った。

それは今までで一番可愛くて、綺麗な笑顔だった。

「ありがとう」

そんな宮野が可愛くて、つい抱き締めてしまった。

「工藤、君？」

やっぱり、俺は宮野が好きなのかな？

でもまだ分からなくていい。

答えはゆっくり見つけよう。

だから、答えが出るまでどこにも行くなよ。

二択（新志）（後書き）

うーん……、微妙。

まずサブタイトルのセンスなくて泣けてくる。

ヘルプミー!!!!

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

真冬の雪（コ哀）（前書き）

タイトルどおり、真冬の話です。

コ哀というより、コ↑哀です。でも、密かにコ↓哀。
哀視点で。

ちなみに、組織はまだ潰れてません……

真冬の雪（コ哀）

白。

それは決して私には似合わない色。

一度真っ黒に染まってしまったら、二度と真っ白にはなれないの
……。

私の好きな人は黒い人間を許さず、白い人間を求める探偵。

なのに、どうして、私に優しくするの。

根っこから黒に染まっている私を……。

真冬の夜、私は工藤君と一緒に近くの公園へ行った。

「月が綺麗だな……」

「そうね」

特に目的はないが、ここに来た。
彼が来たいと言ったから。

できるだけ、彼の側にいたくて。
いい加減、しつこいかしら？

「なあ、俺たち、元に戻れるのかね？」

月を見上げながら、彼はそう呟いた。

「……さあ、わからないわ。でも、これだけは言える。私は
貴方を工藤新一に戻すまで死なないわ」

「俺が元に戻ったら、死ぬのかよ」

苦笑いする彼。

「さあ、それは一番わからない質問ね」

「おいっ」

そうやって突っ込む彼は可愛い。

「まあ、俺はお前を死なせないけどな」

そう言った彼の瞳はしっかりしていた。

そんな言葉かけるから、彼を好きになっちゃおう。

「余計なお世話よ」

そして素直になれない自分がここにいる。

「はは、まじ可愛くねえ」

ええ、可愛くなんてないわよ。

でも、それ言われると意外と傷付くのよ……。

そんなこと貴方は一度も思ったことはないでしょうね。
今だって、胸がギシギシ痛む。

「あ、雪」

気が付くと、ちらちらと雪が降ってきていた。

白。

黒の私とは正反対。
だから、雪は嫌い。
だって、白いから。

「……私、雪って嫌い」

「なんで？」

「白いから」

「はあ？」

「私の黒とは正反対だから。もう二度と私は真っ白になれないの……。だから、雪を見ると切なくなるの」

「そんなくだらないこと考えてたのか？」

「くだらない？ こっちは真剣なのよ」

くだらない、なんて言う彼に少しイラッときた。

「だって、この世に心の奥底まで真っ白な人間がいると思うか？」

「え？」

彼は空をそっと見上げた。

「人間なら誰しも腹黒い部分があると思うけどな。実際、俺にもあるし。探偵は犯人を暴くためなら手段を選ばないからな。騙したりもするし」

そう言う彼の横顔は酷く切なかった。
私だけじゃないんだ……。

私だけが黒いつていうのは勘違い？
被害妄想もいいところね。

「雪、俺は好きだな」

「どうして？」

「そういう人間の腹黒い所を白で綺麗さっぱりにしてくれそうだから」

彼はこちらを向き、そう言った。

「クスッ。　そうね」

なんだかくだらなことで悩んでいた私が馬鹿らしく思えた。

「またなんか悩んでることあったら、遠慮なく俺に言えよ」

彼の優しさに笑顔で答えた。

「ありがとう」

さっきまでの私なら、余計なお世話よ、と言って、素直になれなかった。

でも、今素直になれた。

きつと雪が私の黒を少し白に直してくれたんだわ。

「……雪、少し好きになったわ……」

「そうか、良かった」

少し風が吹きはじめ、寒さがましてきた。

手袋を忘れてしまったので、両手を合わせてこすりながら、はあ、と自分の息をかける。

彼はこつちをチラッと見て、また前に向き直した。

「さ、寒いなら、手握ってやってもいいぜ」

彼は右手を差し出してきた。

急に頬を赤らめて言う彼に少し戸惑った。

私は何も言わず、私の左手を差し出した。

彼が私の手をギュッと握る。

彼の手も冷えていて、冷たい。

でも、それとは裏腹に体温は上がっていく。

「雪、積もるといいな」

「ええ」

その夜はとても幸せだった。

もっと雪が積もって、私が白くなったら、貴方にこの想い、伝えるわ。

好き……って。

真冬の雪（コ哀）（後書き）

探偵って大変ですよね。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

修学旅行（中学コ哀）（前書き）

中学生コ哀。

微妙に卒業式とかぶるかも……。

哀視点です。

修学旅行（中学コ哀）

今は修学旅行の2日目の夜。

なんかわからないけど、修学旅行の夜は女子で恋バナとかいうやつをするのが好例らしい。

私のクラスの女子は16人。

みんなが1つの部屋に集まって話をしている。

私は自分の部屋で本でも読んでいたかったけど、歩美に哀も来て、と言われたので渋々ついてきた。

「やっぱりこの学年で一番人気な男子って江戸川君だね」

「当たり前じゃん！」

「頭いいし、スポーツ万能だし」

「ああ、私告白しようかな？」

と女子が色々と話している。

江戸川君結構人気なのね……。

ただの推理おたくだと思っけど。

まあ、私はそんな彼が好きだったりする。

「ねえ、哀はコナン君のこと好きなの？」

みんなには聞こえないように歩美が小声で聞いてきた。

「前にも言ったけど、彼は恋愛対象になってないから」

最後の言葉を言い切る前に歩美は言ってきた。

「そんなわけないでしょ？　だって哀いつもコナン君のこと見つめてるよ？」

「えっ？」

歩美には何もかもお見通しってわけね。

「ね、本当のこと教えてよ、哀」

やっぱり私は歩美に弱いわね……。

「そうよ、彼のことが好き」

「そっか」

「歩美もでしょ？」

「うん、好きだよ。でも、哀とはライバルになりたくないから……、」

「あら、そんな弱気でいいのかしら？　私、本気だすわよ」

「哀に勝てる気しないよお」

歩美の笑顔はとても可愛いと思う。

……と、そんなこと話してる間にクラスの話は進んでいた。

「でもさ、江戸川君、絶対好きな人いるよね」

「だよね」

「私は灰原さんだと思うな」

え？ 私？

「わかる！ だっていつも江戸川君灰原さんのこと見つめてるよね」

彼が私を好き？

ない、ない。

「それはないと思うわ」

でも、心の奥深くでは、そうであつたらいい、と願っている。

「そうかな？」

コン、コンとドアを叩く音がした。
廊下が少し騒がしい。

「入っていいよ」

と女子の人が言うと、私の学年でイケメンで有名な4人の男子が入ってきた。

女子たちがきゃー、きゃーと叫んで喜んでいた。

私はその人らの名前も知らないけど……。

「は、灰原さんいる？」

1人の男子がそう言った。
私？

「ええ」

とりあえず、返事をした。

「外に来てくれないかな？」

「え、ええ。わかったわ」

始めは何のようかと思っていたが、部屋にいる女子たちが口々に言う。

告白だ、って。

歩美に頑張って、と言われた。

何も頑張ることなんてないのにね。

外にある小さな庭に着いた。

4人みんながもじもじしていて、少しイラッとした。

「用があるなら、はやくしてくれる？」

「あ、うん」

そう言うと、4人が一斉に、

「灰原さん、好きです」

なんて言う。

本当に告白だったのね……。

「ごめんなさい」

全て断った。

きつと後で女子たちに何かブーブー言われるだろう。

男子4人は何も言わず、その場を立ち去った。

外に1人とり残された。

風が気持ちいい。

この風と同時に木々たちが揺れる。

と、不意に後ろから誰かに抱きつかれた。

始めはその腕を振りほどいて逃げようとしたが、止めた。

だって、それが工藤君だったから。

「工藤君、なんの冗談？」

……。

彼は沈黙のまま答えてくれなかった。

「なんか言ったら？」

「どうして俺を拒まないんだ？」

「え？」

始めに彼が発した言葉はそれだった。

「あら、拒んでほしいの？」

「お前、それ答えになってないぞ」

「……」

さすがに恋愛には疎い推理おたくさんも私の気持ちに気づいたのかしら？

「んじゃ、俺が当ててやる。お前は俺のことが好きなんだろう？」

「さあ、どうかしらね？」

当たってるわよ、探偵さん。
でも、真実は教えてあげない。
だって、まだ証拠がないもの。

「ぜってえそうだろ」

「あら、随分自信満々なのね」

「ああ」

よくそんなこと平気で言えるわね……。
でも、彼の表情がわからない。
もちろん、今も後ろから抱かれている状態だからである。
まあ、私の表情が見られないのは幸いだった。

「じゃあ、私から質問していい？」

「ああ」

「貴方はどうしてわたしを抱いているの？」

工藤君、どう返してくるのかしら？

「え？ そんなの当たり前だろ？ 俺は哀のことが好きだからだよ」

「!?!」

そう言うのを離して、お互い向き合うようになった。
彼の顔をまともに見れない。

「哀、好きだ」

もう私のポーカークフェイスは崩れ、顔が真っ赤になっていく。

「私は別に好きじゃないから」

「素直になれよ」

「なってるわよ」

「嘘だ」

彼は私の心臓に手を当ててきた。

「お前の心臓バクバクいってんぞ?」

そう、口では嘘を言っても、心は嘘をつけない。

「気のせいじゃない?」

まだ、私の気持ちは言えない。

高校生まで待たないと。

彼が元の姿に戻るまでは待つて決めたから。

形はどうあれ、彼が高校生に戻れば、私の役目は終わり。

それから恋をすればいいの。

それまでは、彼の相棒ってところかしら？

だから、まだ……。

「もう少し、待ってくれる？ その気持ちに答えるのは……」

「ああ、わかった」

最後、彼は私をギュッと抱いて“哀、いつまでも待ってるから”
と言って中へと戻って行った。

ごめんなさいね。

私の我儘で……。

でも、後少しだから、待ってて貰えるかしら？

—

哀が素直になり、
両想いになるのはもう少し先のお話。

修学旅行（中学コ哀）（後書き）

うん、なんか微妙かな……

やっぱり、私はコ↓哀が好きなんですよね☆

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

この気持ちを伝えたい No. 1 (快志) (前書き)

キ↓志↓新ですかね？

今回はキッドと志保の話。

この気持ちを伝えたい No. 1 (快志)

深夜、私は眠れなくてベランダに行った。

風が吹いてるが、寒いわけではない。

春の訪れをすごく感じる。

星空が広がり、満月が輝いている。

1人になると、思い出してしまう。

工藤君と蘭さんが仲良く街を歩いている姿を……。

工藤君は私には見せたことのない笑顔を蘭さんに向ける。

蘭さんもとびきりの笑顔で答える。

絵にかいたような仲のいいカップル。

私の入る隙間なんてこれっぽっちもない。

こんなこと考えたくないのに。

その時、ふと空に白い鳥が見えた。

と思ったら、その白い鳥はベランダに降り立った。

「こんばんは、お嬢さん」

それは白い鳥ではなく、怪盗だった。

白いタキシードを着て、銀のモノクルをつけ、シルクハットをかぶっている、今世間を騒がせている怪盗キッドがいた。

「なんのようかしら？」

「ようは特にないです……」

彼は最近毎日のように私の家に来る。

目的は知らない、聞いても教えてくれないし。

「じゃあ、帰ったら？」

「冷たいんですね」

「ええ、悪い？」

「でも、私は貴女が優しいことを知っていますよ」

声は工藤君そのもの。

だから、そういうことを言われると嬉しかったりする。

「あら、ありがとう」

一応、お礼は言っておく。

「どうして、貴女はいつも、いつも辛そうなんですか？」

「別に、辛くなんかないわよ」

「知ってますか？ 顔の表情は嘘をつかないんですよ」

凶星をつかれて、私はうつ向く。

「人生笑っていないとつまらないですよ」

彼はそう私に言う。

「笑えないわよ、私の人生は最悪。何もかも思い通りにいかない」

「そろそろ、教えてくれませんか？ 貴女が何に悩んでいるのかを」

そう言えば、彼は毎日これを聞いてきた。いつも適当に流していたけど……。

まあ、悩みを話すのも悪くはないのかもね。

「恋の悩み」

「恋、ですか？」

「あら、おかしいかしら？」

「いいえ。それでどんな悩みなんですか？」

おかしいわね、なんで私こんなこと話しているのかしら？

「私ね、工藤君のことが好きなのよ」

「名探偵のことが、ですか」

「でも、彼には好きな人がいるのよ、とても可愛い天使のような子が」

彼は黙って私の話を聞いてくれた。

どうして、こんなに優しいのかしら？

「貴方も知ってる通り、私はあの2人を引き離した本人、だから私には幸せになる権利はないのよ……」

「権利、ですか……」

「何よ？」

「幸せには権利なんてものはないんですよ。誰だって幸せになっ
ていいんです」

「どうして？」

彼はいつものように不敵に笑った。

「理由なんてありません」

「え？」

「貴女が幸せになってはいけないなんて、誰が言いましたか？」

幸せは権利ではなく、自分で見つけるものですよ」

その言葉で私は救われた。

この私が幸せになっていい。
本当に？

「でも、私は犯罪者だから、」

「だからなんですか？」

「えっ？」

「罪を償う気持ちはあるんですよ？」

「ええ」

「なら、いいじゃないですか。私だって幸せになりたいと思いますよ」

「あら、好きな人でも、いるのかしら？」

「もちろん、いますよ。一生手が届かない存在ですけどね」

少し悲しげな表情でこっちを見た。

「教えてくれないの？ 私は教えたのに」

「そうですね、時期がきたら、教えますよ」

天下の大怪盗も恋をするのね……。

「私、工藤君に気持ちだけは伝えることにするわ」

「いいですね、それも」

「今日はありがとう」

「私は貴女の悩みを聞けて良かったですよ」

そう言って、白いハンググライダーを広げ、空に飛び立とうとした。

私は彼に質問をした。

「最後に1ついい？」

「ええ」

「貴方、何歳なの？」

彼は夜空に飛び立つ前にチラッとこっちを見て言った。

「貴女とお似合いの17歳ですよ」

この気持ちを伝えたい No. 1 (快志) (後書き)

最後の言葉好きです。

キッドはかっこいい。

続きますね。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

この気持ちを伝えたい No. 2 (快志) (前書き)

志保視点。

前の続きです。

この気持ちを伝えたい No. 2 (快志)

次の日の夕方5時頃私は工藤君の家に向かった。

私のこの気持ち、伝えたい。

やっぱり、気持ちを伝えないままだと後悔するし、後に引きずってしまいうから。

インターホンを鳴らす指が震える。

緊張？ 私らしくないわね……。

インターホンのボタンを押す。

『……はい、工藤です』

数秒後彼の声がインターホンから聞こえた。

「工藤君、私」

『ああ、宮野か、開いてるから入っていいぞ』

インターホンが切れた。

私は言われた通りドアを開け、家に入った。

彼がいると思われるリビングへ行った。

彼はソファ―に座って本を読んでいた。

「よお、宮野。とりあえず、座れよ」

そう言われたので、私は彼と向かい合わせになるようにして反対側のソファ―に座った。

「今、コーヒー入れるから」

「いいわよ、話終わったらすぐ帰るから」

「そっか」

言うんでしょ？

はやくしないと、今日言わないと一生言えない気がする。
だから……。

「……私、工藤君のことが好き」

「え？」

彼は驚いていた。

いきなり好きなんて言われたら驚くわよね。

「……そっか。俺はお前も知ってる通り、蘭が好きなんだ、ごめんな」

わかってた。

こうなるって、でも、やっぱり辛いわ。

「でも、お前のことも好きさ。相棒として」

彼の笑顔は今だけ私に向けての笑顔。

それが嬉しい、それと同時に嫉妬も生まれた。
この笑顔は蘭さんのものなの……。

「ありがとう、気持ち伝えたかったの」

なんか泣きそう……。

「でも、俺お前のこと好きだった頃もあった。お世辞じゃねえからな」

「え？」

そう言って、少し照れる彼。

「そう、嬉しいわ」

笑顔で返す。

そうよ。

いいじゃない、彼が私のことを好きじゃなくても。
工藤君に悪気はないのだし。

「用も済んだし、私は帰るわね」

「おう、お前はいつまでも俺の相棒だからな」

「ありがとう」

私は彼の家を出た。

それから、すぐに私は自分の家に駆け込み、地下室に籠った。
ベッド寝転がり、枕に顔を埋める。

涙を流したくない。

だから、私は耐えた。

工藤君との思い出を振り返らないようにした。

泣きたくないの、涙を流すと、弱くなりそうだから。

「ありがとう、工藤君」

この気持ちを伝えたい No. 2 (快志) (後書き)

新志を期待してた方、すいません。
まだ続きます。

次はこの日の夜の出来事です。
最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

この気持ちを伝えたい No. 3 (快志) (前書き)

『この気持ちを伝えたい』の完結編です。

キ志ですね。

志保視点。

この気持ちを伝えたい No. 3 (快志)

深夜、私は眠れなくてベランダに行った。

1人になると思い出してしまいそう。

工藤君のことを……。

好き、好き、大好き。

だけど、貴方には好きな人がいる。

もう、気持ちは伝えたのだから、吹っ切らないと。

そして、今日も白い鳥がベランダに降り立った。

「こんばんは、お嬢さん」

「こんばんは、怪盗さん」

何を話せばいいのかしら？

工藤君にふられたって言うの？

そんなこと言ったら私、確実に泣くわね……。

「……その様子からすると、駄目だったんですね」

「ええ。意外とズバッと言うのね」

「あ、すみません」

「大丈夫よ」

少し傷ついたけどね。

「大丈夫なわけありませんよね？」

「どうして？」

「どうしてって、好きな人にその、ふられてしまったんですよ…」

少し遠慮気味に言う彼。

「私だったら、耐えられませんね、その悲しみや悔しさには……」

「……っ」

ええ、耐えられないわよ。

でも、泣きたくないの、だからあまり考えたくない……。

「貴女も辛いはずですよ。 どうして、そうやって我慢するんですか？ 泣いていいんですよ、泣きたい時は」

どうして優しくするの？

「っ私は泣きたくないの」

泣きたくないのに……。

泣きたくないのに、涙目になってくる。

「そんな辛い顔を私は見たくないんです」

私がそう言う優しい言葉に弱いことを彼は知っているのかしら？

私の涙を止めていた涙腺が壊れた。

「っ、私は泣きたくないのよおおお！！！！」

言葉とは裏腹に涙が流れて来た。

止まらない、止めたいのに……。

泣いてしまふ、泣きたくないのに……。

「泣けんじゃん」

彼の言葉使いが普通の高校生になった。

これが彼の素なのね。

「泣、きたく、ないっのに……」

「いいと思うけど？ 涙は嫌なことはなんでも流してくれるからな」

なんでも？

私の苦しみも、辛さも、悲しみも、全て？

「っ……、うっうっ」

私は顔を手で覆った。

と、彼が私に近づいて来た。

彼は私を抱き締めた。

私の顔は彼の胸に埋まった。

一瞬の出来事だったので、私には拒否する暇もなかった。

「ちよっ」

「何も考えなくていい、泣けばいい」

……、温かい。

今日だけは私の全てを彼に預けて、甘えてもいいわよね？
悲しみの後くらいには……。

「っう、好きなのに、……工藤君のこと、なんで、どうして……」

涙が止まらない。

さっきまで堪えていた分、今涙が流れ流れ止まらない。

今、全部流してしまおう。

苦しみ、辛さ、悲しみ、全て。

彼は私の頭をポンポンと優しく叩く。

安心する。

工藤君に抱き締められたらこんな感じなのかしら？

それから何分経っただろう？

私は全てを流して落ち着きを取り戻した。

彼はずっと抱き締めていてくれた。

「ありがとう、もう大丈夫よ」

そう言っても彼は私を離そうとしない。

「ねえ？　もう大丈夫なんだけど……」

離そうとするどころかもっと強く抱き締めてくる。

「……実はさ、俺、志保がふられたって知ったとき、嬉しかった」

「え？」

「酷い男だろ。でも、俺は志保が好きだから」

「今、なんて？」

私の耳がおかしいの？

「俺は志保のことが好きなんだ」

彼は私のことを好きと言った。
どうして？

「なんで？」

「好きになるのに理由はない。好きなんだよ、どうしようもないくらい」

「私は工藤君のことが、」

「わかってる、でも、俺は志保が苦しんでる姿を見たくないんだ」

そう言って彼は私を見つめる。
顔が近くてドキドキする。

「1週間チャンスをくれ。1週間で俺は志保を落としてやる」

その言葉にドキツとする。

「ええ、いいわよ。受けてたつわ」

ニコツと笑う。

「っ、その笑顔は反則だろ。俺がもっと落ちてくよ」

赤い顔をして言う彼。

私、もう落ちかかってるかも。

「そう言えば、私まだ貴方の名前聞いてないわよ」

私がそう言うと彼は笑った。

「俺の名前は、黒羽快斗。よろしくな」

この気持ちを伝えたい No. 3 (快志) (後書き)

たまには新志じゃないのもいいかな? と思って考えた小説です。
快斗はやっぱりかっこいい!

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

相愛性理論（コ哀）（前書き）

中学生コ哀、2人は付き合っています。

d e c o * 27さんの曲です。

曲が本当にいいですね。

コナン視点で。

相愛性理論（コ哀）

「おはよう、灰原」

「おはよう」

2人で並んで歩いて学校へ向かう。
それは毎日当たり前、それが嬉しい。

「今日はいい天気だな」

「そうね」

そのたわいもない会話が楽しいと思えるのは俺だけなのかな？

「なあ、灰原。 例えばさ、どちらかが好きになったとして、それを終わ리と言うなら、始まりはどこなんだろうな？」

「何よ、急に」

俺は灰原の答えを聞く前に次の質問をする。

「んじゃさ、どちらかが好きを辞めたとして、それが終わリと言うなら、始まりはどこなんだろうな？」

「知らないわよ、それは人によって考え方が違うんじゃない？」

「灰原はどう思う？」

「え？ そうね、始まりがないなら、終わりもないんじゃない？」

そう言う彼女の笑顔は可愛かった。

「だよな、俺も同じ考え」

「そう」

「だから、俺らの愛に終わりはねえよ」

「あら、まだ始まったわけでもないんじゃない？」

「にやろ。 本当、素直じゃねえよな」

「あら、ありがとう」

「褒めてねえよ」

灰原は全然素直になってくれないから、こいつの素直な気持ちを
知るのには一苦労。

だから、たまに俺の好きの気持ちを伝える。

「好きだよ、灰原」

「へえ、そう」

灰原はポーカーフフェイスを保つ。

「なんか反応しろよな」

「だって、毎日それ言われてるからね」

毎日か、確かにそうかもな。

「人の想いは誰にも見えないだろ？　だから、言葉にしてんだよ」

「だからってねえ……、毎日言う必要ないと思うわよ」

「俺は言いたい」

だって、“好きだよ”という度に“好き”って気持ちが増える気がするから。

それがなんかいいんだよな。

きつと、この気持ちは俺が死ぬまで伝えきれないから。

「それ以上言われると幸せすぎて死んじゃうじゃない……」

そう、たまに言うこの本音が俺は好き。

少し顔が赤く染まっついていて可愛いんだよな。

「大丈夫、死なせねえから」

そう笑いかける。

学校が終わり、灰原と一緒に帰る帰り道。

「今日も授業疲れたな」

「貴方ずっと寝てたじゃない」

「あ、ばれた？」

「バレバレよ」

ジト目で俺を見る。

最近はこんな灰原も可愛く見えてくる。

「始まりとか終わりねえ」

「何よ？」

「朝の続き、でも例えは止めるわ」

「なんで？」

「いや、てかなんつーか難しい言い方は止めにするわ」

「そう」

そう難しい言い方なんてしなくても、俺の好きの気持ちが灰原に届けばいいだけなんだ。

お互いを想い合う。

その片思いが競り合って、両想いになるんだ。

“好きだよ”と言う前に灰原の気持ちに触れる。

「やっぱり、幸せだ」

「え？」

「なんかお前に好きって言う前にお前の気持ちが見える気がする」

「意味がわからないわ」

「わからなくてもいいさ」

それを聞くと灰原は惚けた顔をしていた。

なんか、アホ面。

って言ったら殴られるな……。

「灰原、好きだよ」

「はいはい」

“好きだよ”と言う度に増える“好き”の気持ちはきつと俺が死

ぬまで……。

「俺は死んでもお前に好きの気持ち届けるから、残さず全て」
クスッと笑う灰原。

「良いわよ」

「……本当に良いのか？ 俺なんかで」

俺がそう言っていると、誰よりも綺麗な笑顔で灰原は笑って言う。

「いいの。もっと好きになって」

——俺らに終わりなんてないよな。

相愛性理論（コ哀）（後書き）

歌詞に合わせて物語を作るのはきつい……

でも、でこさんの曲はホント好きなので、書いて大満足です＜＜＊
最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

愛 t i n k s o, (新志) (前書き)

新志、新一の独白。

悲しい感じですね……。

またd e c o＊27さんの曲です。

愛 t i n k s o, (新志)

寂しい夜と淋しい俺で気が付けば世界は2人きり。

――

それは一週間前のことだった。

いつものように俺は博士の家へ宮野に会うために行った。

が、会えなかった。

と言うより、もう一生会えないのかも。

宮野のいるはずの地下室にはもう何もなかった。

あったのは、机とベッドとか。

それと、“工藤君へ”と書かれた手紙だけだった。

その内容は、

工藤君と蘭さんが一緒にいるのを見ていけないの、だとか。

探偵頑張ってね、だとか。

蘭さんとお幸せに、だとか。

後は謝罪、謝罪、感謝、謝罪、謝罪……。

どれだけ謝りたいのか。

俺は謝って欲しくなんかないのに……。

その手紙には宮野の行き先だとかは全く書かれていなかった。

手紙は所々濡れていた、きつと泣きながら書いたんだろう。

なんで、そうやって無理すんだよ……。

そして最後に小さく、

“ 工藤君、好きだった”

と書いてあった。

外は雨が沢山降っていた。

空は何が悲しくて泣いてるのかね？

せっかくだから、仲良くしようか？

どっちが多く泣けるか、勝負しようぜ。

ねえ、思うんだ。

君なんていなくても、俺は生きていけるかもしれない。

ねえ、思うんだ。

俺なんていなくても、君は生きて、生きて、生きて……。

愛 t h i n k s o ,

あと3時間ほどで夜が終わる。

最後までよろしくな。

朝日とやらが俺を映し出す時まで。

今頃、宮野は何してるかな？

どこにいるかな？

ちゃんと飯喰ってるかな？

ちゃんと、生きてるかな？

会いてえよ……。

声を聞きてえよ……。

触れてえよ……。

どうして出て行ってしまったんだよ？

ねえ、怖いんだ。

君が消えてしまうのが、俺が生きていけるわけじゃないか。

ねえ、怖いけど。

俺なんかを側に置いて……。

君は撫でて愛でてくれる？

好きで、好きで、大好きで……。

でも、この想いを伝える前に宮野は俺の側から消えてしまった。

何度このことに後悔したことか……。

何度自分の弱さに苛立ったことか……。

好きで、好きで、大好きなのに……。。

宮野は自分の気持ちだけ伝えて、俺の側から消えてしまった。

なんで俺の答えを聞かなかったんだ？

もし聞いてたら、もっと違う結末になったはずなのに……。。

ねえ、思うんだ。

君が生きているから、俺も生きて笑っているんだろうな。

ねえ、思うんだ。

俺なんていなくても、君は生きていけるんだろうな。

愛 t h i n k s o ,

もう一度でいいから、会えたらな。

――

寂しい夜と淋しい俺で気が付けば世界は2人きり……、

愛 t i n k s o, (新志) (後書き)

今回はホントになんか悲しい話でしたね。

みなさんはこんな悲しい結末にならないように、好きな人がいたら、
気持ちは伝えておくべきですよ。↑なんか上から目線w
最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

エイプリルフール(新志) (前書き)

今日はエイプリルフールですね！
新志、新一がなんか子供っぽいw
志保視点です。

エイプリルフル（新志）

今日はなんの日かわかりますか？
そう、今日はエイプリルフル。
今日だけは嘘をついても許される日……。

――

朝、目が覚める。
今日は4月1日、エイプリルフルね。
嘘をついてもいいのよね。
だから、今日なら工藤君に“好き”って伝えてもいいかも。
だって、今日はエイプリルフルよって言えるから。

地下室から1階に上がる。

そこに博士はいなくて、代わりにいたのは、

「おう、宮野おはよう」

私の好きな人。

「工藤君、何してるの？」

「お前にしては起きるの遅いな、もう11時すぎだぜ？」

彼が私の質問を聞き取れなかったのか、わざと無視しているのか
わからないが、私の質問には答えず、勝手に話し出す。

「今日俺起きるの早かったんだぜ？　でも朝ごはん食べてなくて
さ、だから速く作ってくれ」

「どうして私が工藤君の分まで作らなきゃいけないの？」

「なんでも」

そう言ってニコツと笑う彼に私はいつも負ける。

結局私は朝ごはんを彼の分まで作った。

「さすが宮野、料理うまいよな」

「これくらい普通だと思うけど？」

「お前いい嫁さんになれるよ」

よくそんなこと平気で言えるわよね。
こっちが照れるわよ。

「それで、なんで貴方ここにいるのよ？」

「え？ ああ、博士に今日出かけるから宮野のことよろしくって
言われたからさ」

「そう」

そう言えば、昨日そんなこと言われたかも。

その後はたわいもない話をだらだらとして、いつの間にか12時
を過ぎていた。

今日は昼ごはんはなしね。

朝ごはんを食べてからは工藤君はさっきと同じ場所ですごすものよ
うに推理小説を読み、私はソファで雑誌を読んでいた。

まあ、私は読んでいるふりなんだけだね。
さっきから考えているのは工藤君のこと。
告白するか、しないか。

今日なら嘘だって言えるしね。

今日を過ぎたらもう一生言えない気もするし。
よし……、言おう。

「なあ、宮野」

私が言うより前に彼が私に話かけてきた。
そして彼はいきなり立って、私の隣に座った。

「何よ？」

「あ、あのさ」

彼はなぜか頬を赤く染めて、私にも聞こえるくらいな音で唾をのんだ。

それから、彼は私のほうを見て言った。

「好きだ」

「え？」

それは何よりも簡単に表せる気持ちで。

飾りなんて何もなくて。

私は嬉しかった。

でも、一度落ち着いて考えてみた。

そうだ、今日はエイプリルフル、彼はきつと嘘をついてるだけなんだ。

「……嘘でしょ？」

「なんで嘘つかなきゃいけねえんだよ？」

彼の目は真剣だった。

じゃあ、本当のこと？

いや、きつと私を騙すための作戦だ。

「今日は何月何日？」

「えーと、4月……2日？」

本気で言ってるのかしら？

「今日は4月1日よ」

「あ、そう。 ってそれがどうした？」

「貴方、それ本気で言ってるの？」

「うん」

思わずため息が出る。

「今日はエイプリルフルよ」

「……マジで？」

「まじよ」

本当に知らなかったらしい。

じゃあ、さっきの告白は本気なの？

「だから、宮野は嘘だと思ったのか……。 ああ！ なんでこんなに日に告白したんだよ！ 俺は馬鹿か？」

彼は1人であーだこーだ言っている。

「宮野、ごめん。俺エイプリルフルって知らなかったから……。でも、本気だからな！ その、好きって、いうのは……」

最初のはっきりしていたけど、最後のほうはモゴモゴしていた。

「本当に？」

「ああ」

嘘をつけない少年のような瞳をしていた。

嘘じゃ、ないのね……。

私も素直にならないとね。

精一杯の笑顔で彼のほうを見て言った。

「好きよ、私も」

その後なぜか沈黙。

「えっと、今日はエイプリルフルだから、嘘ついてる感じ……？」

彼は何かぶつぶつ言って悩んでいた。

「貴方のいいほうにとれば？」

「じゃあ、好きってことで！」

無邪気に彼は笑い、私をギュッと抱き締めた。

「私、貴方のこと大嫌い」

わざとそう言ってみる。

「俺も、大嫌い」

2人で笑いあう。

大嫌いという最悪な言葉が今日だけは最高の言葉に変わる。

エイプリルフールという不思議な魔法をありがとう。

エイプリルフール（新志）（後書き）

何か普通な感じ？

でも、少年っぽい新一は好きです。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

T i m e a f t e r t i m e 〵花舞う街で〵 (コ哀) (前書き)

麻衣ちゃんの曲。 大好きです！

好きすぎて小説書いてしまった！

私の小説で麻衣ちゃんの曲を汚さないように気をつけます。

コ哀、中学生かな？

いつもより長めです。

――桜が舞い散る中に少年が1人いた。

T i m e a f t e r t i m e 〵花舞う街で〵（コ哀）

〵旅立ち〵

――もしも君に巡り逢えたら二度と君の手を離さない。

桜が咲き終わり、散り始める春の終わり。

毎年のように俺はこの場所に来る。

今日で、5年目か……。

花卉が1枚ひらひらと俺の前に落ちてきた。

蘇るあの日の記憶。

この胸に今も強く焼き付いている。

それは5年前の出来事。

あの日も今日のように花卉が綺麗に、そして儚く散っていた。

――

「工藤君、私行くべき所があるの」

そう、それは突然だった。

組織を潰してから数ヶ月経ったある日、灰原が言った。

「どこに？」

「組織の本部……」

俺は驚きを隠せなかった。

「何馬鹿なこと行ってるんだよ！ まだ組織の残党が残ってるかもしれないんだぞ？ そしたら、お前っ、」

“殺されるかもしれない”

と頭によぎった。

「いいの。もう、決めたから」

彼女の瞳に迷いはなかった。

「やっぱり、ちゃんと自分が犯した罪と向き合いたいの」

「そう、か。じゃあ、俺も行く」

「大丈夫。私1人で行く。いや、1人で行かせて」

灰原は一回決めたら引き下がらないやつだとわかっていた。

「……わかった」

だから、そう言いざるを得なかった。

本当は行かせたくなかった。

灰原がもう二度と戻って来ない気がしたから。

だから俺は、

「じゃあ、約束しよう」

そう言った。

約束したからといって必ず灰原が帰って来るわけではないが。

――
過ぎ去ってしまった時を、俺は何度も何度も君を思い出す。

俺と灰原が出会えたのは本当に奇跡だった。

緩やかな風が吹く。

そっと手を繋ぎ歩いたこの坂道。

今も忘れない“約束”がある……。

～1人～

桜は相変わらずひらひらと散り続ける。

『工藤君』

「!?!? 灰原っ!」

後ろを振り向くが、誰もいなかった。

……気のせい、か。

きっと風が運んで来たのだろう。

少しずつ光、色鮮やかになってくる遠い日の記憶。

“戻ってこられない”

もしかしたら、そうなってしまいかもしれない。
でも、その傷付く恐さを知らず誓った。

2人で。

――

「じゃあ、約束しよう」

桜の花弁がひらひらと儚く散る。
俺の恋は散らせたくない……。

「いつかまた、この場所で、巡り逢おう、薄紅色の季節が来る日に、笑顔で」

「ええ」

灰原は笑顔で旅立った。

――

独り、花舞う街で。

「今年も綺麗だな」

あの日々はもう戻らないけれど。

あの日と同じ、変わらない景色。

だけど、一つだけ違う。

——隣に灰原がない。

「……っ」

……？

あれ？

なんで？

灰原がいないだけで、こんなに……、

涙が溢れるんだ？

君が悲しむのが、俺は悲しい。

君が辛そうなのが、俺は辛い。

君が消えてしまいそうなのが、俺は恐い。

君が笑っているのが、俺は嬉しい。

君が隣にいるのが、俺は幸せ。

俺の全ては、君なんだ。

灰原、好きだ、大好きだ。

風に舞う花弁が水面を撫でるように。
大切に思うほど、切ない……。

（再会）

人は皆孤独という。

だからきつと、誰かを探さずにはいられないんだ。

儚く、壊れやすいものばかり追い求めてしまう……。

「灰、原……。 帰って来てくれ」

冷たい雫が俺の瞳から零れ落ちる。

「工藤君」

その時、あの懐かしい、俺が一番求めていた、愛しい声が後ろか

ら聞こえた。

振り向くとそこには――、

「灰原っ！」

笑顔で彼女はそこに立っていた。

あの日から随分大人になっていた。

もう自分の感情を抑えていられず、彼女をきつく抱き締める。

涙が溢れて止まらない。

俺、かっこ悪いな。

「灰原、灰原っ、良かった……」

安心、喜び、嬉しさ。

心の中はそれで満たされていた。

この5年間はなかったようだ。

「貴方、言ったじゃない。“いつかまたこの場所で巡り逢おう、薄紅色の季節が来る日に笑顔で”って。だから、笑って」

俺の耳元で彼女がそう呟く。

俺は涙を拭い、灰原を見て優しく笑った。

「おかえり」

「ただいま」

彼女も笑っていた。

君と色付く街で出逢えたらもう約束はいらない。

誰よりもずっと傷付きやすい君の側にいたい。

今度は、きっと……。

く花舞う街でく

灰原が帰って来た。

俺たちはいつも歩いていた緩やかな坂道を並んで歩く。
春風がこんなにも気持ちいい。

灰原が隣にいる。
嬉しい、嬉しい、本当に嬉しい。

でもそれと同時に、またどこかへ行ってしまうのではないかと不安になる。

怖い、もう1人になりたくない。

怖い、もう1人にさせたくない。

怖い、もう離したくない。

「1人に、しないで」

灰原が今にも消えてしまいそうな声でポツリと言った。
俺は灰原が消えてしまいそうで恐かった。

だから、そっと手を繋いだ。

「私、恐かった。 恐かったの……。 また1人になりそうで……。
私、自分が消えてほしいそうで恐いの」

声が震えていた。

きっと、組織にいた頃のことを思い出してしまったんだろう。

守りたい。

こんな弱い君を……。

守りたい。

いつも強がりな君を……。

「俺も、お前が消えてしまうんじゃないかねえかって不安になる。もう、灰原がいらない辛さには耐えられないから。だから、もう、二度と離さねえから。お前が不安な時はいつでも手、握ってやるから。だから、お願いだから、」

俺は笑顔で言う。

「俺の隣で笑っていて欲しい」

花卉が一気に空に舞う。

まるで、桜の雨が降っているみたいだ……。

「好きだ、灰原」

「私も、工藤君が好きよ」

「知ってた」

「調子いいわね」

桜の花弁が綺麗に舞う。

俺らを幸せへと導いてくれるかのように……。

――

「来年も、再来年も、10年後も、ここに来ような」

「また約束？」

「バーロー、これは命令だよ」

ニコツと笑って言う。

「はいはい」

この先ずっと灰原といられるといいな。

俺は何度も何度も君を想うだろう。

花舞う街で……。

T i m e a f t e r t i m e 　く花舞う街でく　（コ哀）　（後書き）

やりきりましたっ！

この歌は本当にいい歌です＞＜＊

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

Rubik's Cube (新志) (前書き)

何週間ぶりかの更新！ だからといって完成度が高いわけじゃない。
ナナホシ管弦楽団 feat. 初音ミクの曲から。

新志、20才くらいでいつもよりちよいラブラブかも。

同居中、だけど恋人でも夫婦でもない曖昧な関係。

そんな2人が私は大好きだあ！

新一が女々しいw

志保目線で。

Rubik's Cube (新志)

——私たちはいつまでも絵柄が揃わないルービックキューブのような関係。

夜の10時頃、私はお風呂から上がりソファで雑誌を読んで休んでいた。

玄関のほうからガチャツと音がした。
帰って来たのね。

「ただいま、志保」

「お帰りなさい、工藤君」

彼は私の隣に座る。

私たちは元に戻ってから1年後、彼の誘いで彼の家で同居している。

だから同居してから3年が経つ。
でも私たちは恋人関係という訳でもない、勿論夫婦でもない。

私たちの関係を一言で現せる言葉なんてそう無いだろう。

「志保お」

彼は私に抱きついてきた。

はあ、ダルい。

「やってらんないって言ってるでしょ？」

「うん」

「どうしていつもそうなるの？」

「良いじゃん」

子供のように彼は言う。

「ああ、もう嫌って言ってるでしょ」

「嫌じゃない癖に」

彼は抱き締める力を強めた。

まだ乾ききってない私の髪の毛を触り、耳にかけるとふーっと息を吹きかけてきた。

身体がピクリと震えた。

「ほら」

自信満々の声で言う。

「あんまり甘えてこないでくれる？」

そう言い放つても彼は離れない。

「志保、珈琲入れて」

「じゃあ離してくれるかしら？」

彼は人に物を頼んでいるのに一向に私から離れようとしなない。

「えー。　じゃあいいや」

無邪気に笑い、私の頬にキスをする。
そんな女々しい言い方に少々苛立つ。

「どうしてそんなに女々しいのよ？」

「そーでもないけど」

「私から見ればそう見えるのよ」

一体何回言わせるのよ？

「あんまりでれつとししないで、しゃんとしててよね？」

「はいはい」

ヘラヘラと彼は笑いいつものように私の話を聞かない。

「しーほーちゃん！」

「何よ？　ちゃん付けは止めてもらえる？　甘ったるいのよ」

「はーい」

お願いだから普通にしてくれ。

私がむすつとすると彼は私の瞳を見た。

その碧色の綺麗な瞳に思わず惹かれてしまう。

「笑ってよ」

そう言われたので小さく笑う。

——私はいつもの貴方がいいの。

「ねえ、前出掛けたときのことだけど」

私は勝手に話を反らした。

「何？　また行きたいのか？」

「そうは言っていないでしょ」

はあ、と溜め息をつく。

「人前では抱きつかないでくれる？」

あの買い物に出掛けた日、彼は人がいるにも関わらず私を抱き締め
めた。

「ああ、しゃーねーだろ。　好きなんだから」

「好きなのはわかるけど」

そう、私たちは相思相愛。

それはお互いにわかっている、でも恋人ではない。
付き合って、なんて言われたことないし。

「2人きりの時はいつでも抱き締めていいから」

「わかったよ」

拗ねる彼の理由がよくわからない。

「じゃあ、今はいいんだよね？」

「そういうことになるわね」

いつまで経っても絵柄が揃わないのは私と貴方のルービックキューブ。

当たり前だ、どちらも付き合おうなんて口にしないのだから。

回しても、回しても、回しても、回しても、回しても、回しても、回しても、

——揃わない。

どこまで行っても言ってもイっても解けないままの2人のルービックキューブ。

愛かどうか確かめたいのは何故？

——教えてよ。

「朝まで一緒に布団で温め合おうぜ？」

「何その笑い話。寒気がするわ」

そう言ってクスッと笑って見せる。

「意地悪」

そんな言葉を言い、彼は私の唇に自分のそれを重ねる。
不器用な私たちは言葉では表せないから。

回しても、回しても、回しても、回しても、回しても、
回しても、

——まだ気付かない？

私たちの関係に。

いつまで経っても絵柄が揃わないのは私と貴方のルービックキューブ。

当たり前だ、どちらも付き合おうなんて口にしないのだから。

回しても、回しても、回しても、回しても、回しても、
回しても、

——揃わない。

どこまで行っても言ってもいっても解けないままの2人のルービックキューブ。

愛かどうか確かめたいのは何故？

愛とは何か、私にはまだわからないこと。
でもこれを愛と言わないで何を愛と言うのか。

彼は小さく笑み、また私の唇にキスをする。

息ができないほどの苦しみで、だけど満足感で満たされる。

その後はもっと彼が欲しくなり、求める。

これが愛なのか。

彼にもわからないだろう。

「志保、結婚しようか？」

初めて聞いたその言葉。

彼は私の瞳を見つめてそう言った。

「何よ、いきなり。まずは付き合って下さい、じゃないの？」

「いや、だってもう結婚していい年だろ？　な、良いだろ？」

「そうね、考えておくわ」

少し微笑む。

「考えることなんてあるのかよ？」

「無いわね」

「じゃあ返事は今でもいいじゃねえか」

「あら、それじゃつまらないじゃない？」

ルービックキューブは絵柄が簡単には揃わないからこそ面白いのだ。

愛も同じだろう。

工藤君はガクッと肩を落とす。

「お前なあ」

そんな彼が可愛く思える。

愛かどうか確かめたいのはただ、

——好きだから。

R u b i k ' s C u b e (新志) (後書き)

本当に微妙なでき……

まあいいか。

愛を語るには年齢が若すぎたw

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

君に愛を捧げます。(コ哀)(前書き)

今日はコ哀の日！ということでした。
だから完成度低いですが悪しからず。
コ哀で組織が潰れてからのお話。
コナン視点。

君に愛を捧げます。(コ哀)

やっと気付いたこの想い。

伝えるのは、今。

——君に愛を捧げます。

『解毒剤が作れないの』

そう告げられたのは一週間ほど前のこと。

彼女は泣きながら俺に謝罪してきた。

別に怒ってなどないのに。

それでも彼女は必死に謝り続け、最近やっと落ち着いてきた。

俺は蘭に別れを告げた。

もう戻れない、と。

悲しくないと言ったら嘘になる。

だけど悲しい顔なんてできない。

灰原が傷付いてしまうから。

何故だろうか。

いつからだろうか。

こんなにも灰原を気にかけるようになったのは。

それが最大の謎。

「工藤君？」

隣を見れば灰原。

今は学校の帰り道だったことを思い出す。

「考え事？」

「あ、ああ」

心配そうに俺の顔を覗き込む。

「何考えてたのよ？」

「なんでもねえよ」

お前のこと、なんて口が裂けても言えない。

「……蘭さんの事でしょ」

「え？」

灰原は足を止めた。
俺も止める。

「なんで蘭なんだよ？」

「いいの？ 貴方の気持ちを伝えなくて」

そう言った灰原があまりにも切なくて。

「いいんだ」

「どうして？」

理由……？

どうしてだろうな。

昔はあんなに蘭の所に帰りたがっていたのに。

今は灰原の隣にいたいと強く願っている自分がいた。

「わからねえ」

気がつけば隣にいるのは蘭ではなく灰原になっていて。

あんなに好きだった蘭の所に帰れないとわかっててもそこまで悲しいとは思わなくて。

灰原がいればいい、なんてことを思い始めて。

灰原はいつの間にか俺のかけがいのない存在になっていた。

それに俺は気付かなかった。

蘭が好きだと思いついていたから。

……、そうか。

なんて簡単なことだろうか。

ただ俺は気付こうとしてなかったんだ。

「……謎が解けたぜ」

思わず頬が緩む。

「なんの？」

「俺が灰原を気にかけるようになった理由」

「はあ？」

灰原は惚けたような声で言う。

「俺って本当に鈍感だったんだな。初めて自覚したよ」

「何が？」

よくわからない、そう言いたそうな瞳で灰原は俺を見る。

「やっと気付けたよ、自分の想いに」

「蘭さんに告る気になったの？」

「違いよ」

「じゃあ何に気付いたのよ？」

「俺が好きな人は誰なのか」

「意味わからないわ」

呆れた顔で彼女は言う。

「お前も結構鈍感なんだな」

「何だよ？」

まだ気付かないのか。

「今から大事な話するからな。 ランドセル置け」

俺はそう灰原に命令する。

「はいはい」

彼女は納得しない様子だったがゆっくりとランドセルを地面に置いた。

俺もランドセルを地面に置く。

2、3歩彼女のほうに歩みよる。

「な、何よ？」

「解毒剤が作れなくなり、俺は工藤新一に戻れなくなりました。もちろん蘭の所に帰るのは不可能になりました。しかし思ったより悲しくありません。それは何故でしょうか？」

「知らないわよ」

俺はニコツと笑って言う。

「それは俺が灰原哀のことが好きだからです」

「――え？」

彼女の綺麗な瞳が揺れた。

「気付くのが遅かった。それだけだ。本当はずっと前から好きだった」

彼女はまだ驚いていた。

「なんなのよ、なんかの冗談？ そんなこと言っても解毒剤は出てこないわよ」

なんて彼女は言う。
素直じゃねえよな。
そこが好きなんだけど。

「冗談じゃねえ。俺は本気だぜ?」

そっと彼女をこちらに抱き寄せる。

「工藤、君?」

「好きだ、灰原」

彼女の耳元で愛を囁く。

「……夢、かしらね?」

「夢じゃねえぜ」

そう言ってから俺は小さく優しいキスをする。

「灰原、返事は?」

彼女は俺の耳元で囁いた。

「私も好きよ」

これからもっともっと色々なことが起きる。

何があっても2人で乗り越えて行こうな。

これから先、ずっとずっと、

――君に愛を捧げます。

君に愛を捧げます。(コ哀)(後書き)

平凡なコ哀。

やっぱりコ哀最高!と改めて思いました。

コ哀ファンが少しでも増えるように頑張りたいです。
最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

HAPPY BIRTHDAY (新志) (前書き)

新一誕生日おめでとう！

ってことで新一の誕生日記念☆

新志、2人は付き合ってる設定。
志保視点。

HAPPY BIRTHDAY (新志)

『好きだ、宮野。俺と付き合ってくれ』

それは2年前の記憶。
突然彼に告白された。
なんの前触れもなく、本当に突然。

私は断った。

彼のことは好きだったけれど。
蘭さんと付き合ってたから。
でも蘭さんは違う彼氏を連れてきて、私に言った。

『私は今すごく幸せよ。志保さん、素直になりなよ』

その言葉に後押しされ、私は工藤君に素直な気持ちを伝えて、私

たちはめでたく恋人どうしになった。

あれからもう2年、はやいわね。

そして今日は工藤君の誕生日。

だから何かプレゼントをあげようと思ってるけど……――。

『プレゼント？ 志保さんからならなんでも喜ぶと思うけど』

昨日私は蘭さんと園子さんに何をプレゼントしたらいいか聞いた。

『なんでもって……』

蘭さんの薬指に光るものがはめられていて、私の視界にチラチラと入ってくる。

『蘭、あんたは今の旦那に何あげたの？』

『え？ 手作りの物とかかな？ 例えば手編みのマフラーとか。手作りって愛情がこもってて良いってあの人が言ってたから』

照れくさそうに旦那さんの話しをする蘭さんはとても幸せそうに見えた。

『じゃあさ、キスとかどう？』

園子さんはまた馬鹿げたことを言い出す。

『志保さんからキスしたことないでしょ？』

『ええ』

私からキスするだなんて負けた気分がして嫌だったから。

『だったらいいじゃない！ お金もかからないし』

名案だ、と言わんばかりの表情だ。

『そうね、考えておくわ』

それから他のことについても少し話した……――。

はぁ、とため息が漏れる。

どうしたらいいのかしら？

結局プレゼントは買ってないから……。

「ただいまぁ」

まだプレゼントを考えている最中なのに彼が帰って来てしまった。

「お帰りなさい。今日は随分早かったわね」

いつもなら10時を過ぎるのが当たり前なのに今はまだ7時だ。

「ああ、今日は事情聴取を任せて来たから。今日は特別な日だからな」

あら、意外。

彼、誕生日覚えていたのね。

「……そうね」

プレゼントはまだ決まっていなかったがしょうがないだろう。とりあえず1つ目のプレゼントを彼にあげる。

「今日はいつもとより手作り料理頑張ったから」

「おっ！ 本当か!？」

彼への1つ目のプレゼントは手作り料理。

蘭さんのアドバイスを参考にした。

作って置いた料理たちをテーブルに並べる。

「うお！ 旨そう！」

子供のように彼は無邪気に笑う。

「どうぞ、召し上がれ」

「いただきます！」

事件で疲れてさうとうお腹が空いていたのだろうかガツガツと私の手料理を食べていく。

「旨え！」

何度もそう言って私の料理を誉めてくれる。

「ありがとう」

今日くらいは素直にお礼を言う。

それから私たちはソファーに座り珈琲を飲みながらくつろいでいた。

たまに隣に座っている彼の横顔を見る。

なんだよ、と言われるが、なんでもない、と適当に受け流す。プレゼントはキスにしようか、他に何も買ってないわけだし。彼女なのに何もあげないってのは可哀想だし。

「ね、ねえ、工藤君」

私は少し彼の方に近付く。

「ん？」

そう言ってこちらを彼は向き、バチツと瞳が合う。

ドキッと心臓が弾む。

彼は恥ずかしいのか視線をどこか違う場所にずらす。

「な、なんだよ？」

私は彼の背中に腕を回し、顔を近付ける。

彼は思考が停止した状態で顔が真っ赤になっていた。

「私からの、プレゼントよ」

ゆっくりと瞳を閉じ、彼の唇に自分のそれを重ねる。

数秒間の甘い時間が過ぎ、私は唇を離し、彼の背中に回した腕をほどく。

「――っ！」

彼はいきなりの私の行動に戸惑ったのか顔はもう真っ赤で彼の心臓の鼓動が聞こえるんじゃないかと思った。

当の私も人のことを言えたものじゃない。

心臓はバクバクと唸っていて、顔も赤いだろう。

「何？ プレゼントがこれじゃ不満？」

ちょっと彼をからかってみる。

「……予想以上すぎて言葉もでねえよ」

彼はどれだけ照れているのか私のことを直視できずにいてそっぽ

を向く。

「そう、喜んでもらえて嬉しいわ」

そう言うのと彼はいきなり立った。

「どうしたの、工藤君？」

彼は私の大好きな力強い瞳で私を見る。
そして持ってた鞆から小包を出す。

「……プレゼントだ、受け取ってくれ」

何故彼が私にプレゼントを渡すのかわからないが私は彼から小包を受け取る。

「ありがとう」

ニコツと笑ってみせる。

「心臓持たねえよ……」

そう言っってまだ顔の赤い彼が可愛い。

「今開けていいのかしら？」

「ああ」

小包の綺麗な包装を開けていくと箱が出てきた。

箱を開けるとそこには、

——キラキラと眩しい程に光る指輪があった。

「……これって」

彼の顔を見上げる。

「俺と、結婚して下さい」

迷いの見えない瞳で彼はそう言う。
言葉では表せない感情が私の心の中をグルグルと回る。
その言葉が何よりも幸せで。
思わず涙が零れる。

「な、なんで泣くんだよ？」

「ご、ごめんなさい。　すごく嬉しすぎて」

そんな私の頭を優しく撫でてくれる。
そして彼はしゃがみこみ、私と目線を合わせる。

「イエスカノー、どっちだ？」

こんな幸せなことがあるだなんてあの頃は知らなかった。
私にそれを教えてくれたのは工藤君。
ありがとう、本当に嬉しいわ。

「はい、喜んで」

涙が止めどなく流れる。

「泣くなよ」

彼は優しくそう言って私を抱き締めてくれる。

「笑って、志保」

彼がそう言うから、私は涙を拭い、精一杯の笑顔を見せた。

「ところで、どうして今日にしたの？　やっぱり誕生日だから？」

そう聞くと彼はハテナマークを頭に浮かべる。

「誰の？」

「貴方の」

「……」

「……」

「え？　今日5月4日？」

「そうよ」

「ええええええ！？」

なんだ、やっぱり気付いてなかったのか。

……でも彼は特別な日だって。

「じゃあ、今日はなんの日よ？」

「今日は俺らが付き合ってから調度2年目」

あ、そうか、忘れていた。

「志保、忘れてたの？」

「ええ」

「普通なら許さないところだが、誕生日覚えててくれたから許すよ」

「あら、ありがとう」

だから彼はプロポーズを今日にしたのね。

「これからもよろしくな」

「こちらこそ」

改まる自分たちが面白くて笑えてきた。

「工藤君、」

そう言うとき彼はこちらを見る。

——一度掴んだこの幸せは二度と手放したりはしないから。——

「ハッピーバースデー」

H A P P Y B I R T H D A Y (新志) (後書き)

いやはや、新一と志保が幸せになれて良かった。

原作でもこうなればいいのですが……。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

f r o m S t o S (新志) (前書き)

お久しぶり更新。瞳のラストを迎える前に息抜き更新。

新↓↑志、志保が遠くに行ってしまう、その時の彼らの気持ち。

セリフなんてないよ。

視点がコロコロ変わります、新一視点から、＊があるたびに変わります。読めばわかるはずですよ！

新一と志保の心情を書きました。

from S to S (新志)

朝の心地好い風が俺の頬に触れ、彼女の綺麗な髪を揺らす。
前に立つ彼女は遠くを見る。旅行に行くかのような大きなバック
を持っている。そんな彼女を見ると、本当に彼女がこの街を出てい
くという現実を押しつけられ、胸が苦しくなる。

そんな俺の顔を見たからか、彼女は一瞬ふっ、と笑顔を見せた。

そして、背中を向けて君は歩き出した。

それは何度も見た背中。どんどんと俺から遠ざかって行く。

今止めないと、一生離れ離れになるかもしれない。しかし、足が
動こうとしない。いや、動かしたくないんだ。

彼女が決めたことだ。温かく送ってやろうじゃないか。アイツは
言ってた、サヨナラは残酷な言葉だと。だから、俺は何も言わず、
彼女を見送ってやらなきゃいけない。

でも、行って欲しくない。
だけど、止めてはいけない。

そうやってガタガタと揺れる心の中、俺は子供のように叫んだ。

——行かないで、行かないで、ねえ……。

＊

爽やかと言うべきなのか、朝の風が私の髪を揺らす。私からしてみれば、この風は気持ちいいとは言えない。

苛立たしい。

まるで、私に早く出て行け、と言っているようで。

前に立つ彼の先にあるこの街をゆっくりと眺める。色々なことがあった。勿論、楽しかった。できればずっとここにいたいと思えた。でも、いづらかったことも事実。ここは私にとって温かすぎる場所だった。ここにずっといると甘えてしまう。私は罪を償わなければいけない存在なのに。だから、遠く離れた場所へ行つて人の役に立つ葉を作ろうと思っている。

そのためには切り捨てなければならぬモノがあった。

それは、目の前に立つ彼。

私は恋してしまったのだ。多分、彼も。私たちは素直じゃないから、お互いの想いも伝えられない。でも、それが好都合。伝えてしまったら、ここから出れなくなってしまうだろうから。

彼を見ると、複雑そうな、悲しい顔をしていた。

だから、一瞬だけ笑ってみせた。

そして、背中を向けて私は歩き出した。

私は何も言わない。勿論、彼も何も言わない。わかってるから、何か言葉を交わしてはいけないことくらい。

涙が落ちる前に行かなきゃ。彼が心配する。そして私は弱くなり、ここにまた居座ってしまう。はやく、はやくここから出ていかなければ。

“ 幸せすぎるのは嫌いだ ”

そう偽った。本当は幸せでいたかったのかもしれないに……。いや、かもじゃない、幸せでいたかった。

私は強がって理想の未来を手放した。私が強がりでなかったら、もつと素直な人間だったら、彼の隣にずっと居れたのかもしれない。でもそれはもう取り戻せぬ願い。

後ろなんて振り返らない。前を見て進まなければ。

私は電車で2時間ほど行った所にあるマンションに着いた。ここが私の新しい家。ほとんど何も置いていない。必要最低限の物しかないから。

とりあえず持ってきた物を整理する。持ってきた物は少なかった。ので、全て整理するのに30分とかからなかった。

珈琲を淹れて、ソファーに座り、ゆっくりとくつろぐ。でも、心は満たされない。

少し広く感じるこの狭いワンルーム。私の心の隙間を広げるように。彼が隣にいないだけで、こんなにも変わるのか。

少し長く感じるほんの一分一秒。嫌だ、この時間が。彼を考える暇などないくらい忙しくなりたい。彼は今何してるのかしら？

会いたい。

君と過ごせたら、と。

そう願うことさえ許されない世界なのかしら？ たった一つの嘘でさえも貴方の涙を生んでしまう。そんな気がする。

私は数え切れないほどの罪を重ねてきた。多くの人を悲しめ、苦しめ、殺してきた。そんな私は“ 幸せになる ” という罪さえ重ねてしまった。彼の優しいその手に触れて、彼の隣でそっと生きようとしていた。それは許されない罪。

だから私はあそこから逃げ出してきた。

＊

今を一つ拾うたびに、過去を一つ捨てるような。そんな有限の記憶と時間の中。そこにただ居座っただけの俺の存在など、きっと彼女の記憶から、

——消える。

もう二度と戻れない？

あの頃の俺たちには……。互いを信頼し合い、相棒と呼んだ頃の。俺は彼女の大きな闇を光に変えきれなかった。そんな弱い存在の俺だから、彼女は旅立ってしまったのかもしれない。

ここは始まりか？それとも終わりか？

広いベッドで眠る夜はまだ明けない。彼女がいなくてこんなにも心細くなるのか。こんなにも変わってしまうのか。あの頃の彼女の温もりが恋しい。

また1人で夢を見る。君の記憶を辿る夢を。いつからか信頼し合うようになり、隣にいるのが当たり前になっていた。そんな関係が俺は好きだった。だけど、俺はそれ以上を求めた。彼女はそんなことを求めていなかったと思う。俺だけ先走っていた。嫌われて当然の結末、だな。

数え切れないほどの罪を重ねてしまった。君の手に触れたこと、君の隣でそっと生きようとしたこと。

*

今までの全ての罪をこの孤独な痛みで償うから。
隣で笑いたい、貴方と共に生きたい、幸せになりたい、そんな贅
沢は言わない。だから、せめて、貴方の記憶に居させて。

＊

離れ離れになっても変わらない気持ちでまた出会えたらいいな。
そして、手を繋ごう。次会う時は離さないからな。

その時まで、またね。

f r o m S t o S (新志) (後書き)

どうも、雛花です。

最後まで読んでいただき、ありがとうございますm () m
これはジミーサムさんのf r o m Y t o Yという曲を元に書
きました。Yの意味はイニシャルということなので、新一と志保の
Sをとりました。

この曲すごい新志だなあ、って思いました！一度聞いてみて下さい。
いい曲ですよ！

私は「数え切れないほどの罪を重ねてきた」とか「孤独の痛みで償
うから 君の記憶にそっと居させて」などの歌詞がすごく志保っぽ
くて好きです。

書けて良かった。↑自己満足(笑

さよならのかわりに、花束を（新志）（前書き）

新志、というより新↑志。

付き合ってるか付き合っていないかは皆様のご想像にお任せします。

さよならのかわりに、花束を（新志）

上を見上げれば青く綺麗な空が広がっている。少し眩しくて私は目を細める。この空を彼もどこかで見ていたのかしら？　どれだけ離れていようとこの広い空の下に私たちはいる。だから悲しいことなんてない？

庭一面が彼と育てた花畑。色とりどりで、華やかで、私とは大違い。

あの日から、私の心は曇り空。晴れる日が来るとは思えない。どうして彼は私を置いて行ってしまったの？　こんな悲しい思いをするのなら我儘を行ってついていけば良かった。今更後悔してもどうしようもないことだけだ。

あれは、丁度3年前。昨日のことかのように鮮明に覚えている。あの日も今日のような晴天だった――。

「今、なんて？」

聞き間違えだろうか。彼は私にとってとても残酷な言葉を口にした気がする。

「俺、世界一の探偵になりたい。だからホームズの生地、ロンドンに行ってちゃんと探偵について勉強しようと思う、そう言った」

それは良いことだ。彼が夢を追いかけてくれる、嬉しいこと。だけれど……。

「……私は？」

置いて行くつもりなの？

「悪いけど、連れては行けない。お前といると甘えちゃうし……。世界一を目指すには誰にも頼らずに自分の力でやるべきだと思うから」

嫌よ、そう言ったら貴方はここに残ったのだろうか。でも私には言えなかった。彼の夢を私の我儘で壊すわけにはいかない。

だから、私は笑顔で見送ることに決めた。

「行ってらっしゃい」

行って欲しくない。離れたくない。それは私の我儘。彼だって人間なの。やりたいことがあって当然。

「宮野、ごめんな」

彼はそう謝った。謝らなくていいのに。彼は何も悪くないのに。

「これ、プレゼント」

そう言って、彼は私に綺麗な花束を渡してきた。

「え？」

「俺の思いがたくさん詰まった花束。なくすなよ？ 絶対に世界一の探偵になるから」

この時の彼以上に眩しい物を見たことがない。希望に満ちた瞳。今ここで彼を引き止めることは彼の夢を潰すことに繋がってしまう。私は彼から花束を受け取った。赤、青、黄……様々な色の花。その中で私が一番気に入ったのは白い花。私の目指している色。

「宮野、」

その言葉とほぼ同時に彼は私を抱き締める。花束がパサリと落ちる。

彼の身体は少し震えていた。理由はわからないけど。やっぱり知らない地へ行くのは怖いのだろうか？ それとも私と離れるのが嫌なの？ それは、ない、か。

「早く、行きなさい」

そう言うことしかできなかった。私は醜い人間だから。

「……愛してるから」

彼は小さく、でもはっきりとその言葉を私の耳元で囁いた。気が付けば私の唇は彼のそれによって塞がれていた。

「行ってくる」

彼はそれだけ言って旅立った。

その彼の背中は大きく見えた。

「私も、愛してるわよ……」

その小さな声は彼に届いたとは思えない。届かなくて良かったのかしら？ 本当は届いて欲しかったの？ わからない。

この時わかっていたことはこの先には悲しみしか待っていないこと。

今でも彼に貰った花束はある。枯れないように花瓶に入れている。いつまでも悲しんでいても何も始まらない。前へ進めない。だから私は決めたの。

貴方に貰った花束を胸に抱き、ここからまた始めようと。いつか、どこかで巡り会えたその時、笑っていられるように。

私が今でも大切にしている花がある。それは2人で始めて育てた花。どれを育てようかとてもワクワクしたわよね。

その花は今も何の変わりもないように凜と咲いている。そんな花を1人で見つめていると工藤君との思い出が蘇ってきて悲しくなる。

気晴らしにテレビをつけてみると丁度お昼のニュースをやっ

た。

『名探偵工藤新一君がまたもやロンドンでの大事件を解決しました！
まさに世界の救世主ですね』

テレビのアナウンサーがそう言う。彼はしっかりとやっているんだ。私はあれから何も変わっていないじゃないか。

『ええ、日本の誇りですよ。まさに平成のホームズですね』

その言葉を聞き、少し頬が緩んだ。良かったわね、貴方がなりたがっていた平成のホームズになれてるわよ？

貴方が置いていった私は寂しくて枯れてしまいそうなの。じょうろが空っぽで水をあげることもできない。

それでもほんの少し残っている力で旅立つことを決めた。彼のいるロンドンへ。

止まった時計が動き出す――。

貴方は私の水だった、光輝く太陽だった。貴方が私に全てをくれた。私の全ては貴方だった。

“優しくしてくれてありがとう”

この声は届くことはないけれど。

貴方と咲かせたこの私の心は決して色褪せないわよ。

私が歩くこの大地。大きく蒼く広がる海。優しく木々たちを揺らす風。輝くもの全てが貴方の形をとって……。――

こんな醜い私を優しく、真っ白なシーツのように包んでいてくれたの。

一歩、一歩、前へゆつくりと歩き出す。彼に追いつけるかなんてわからない。彼は本当に大きな存在になっていた。

「早く、追いつかないと」

＊

「……宮野？」

目の前にはずっと会いたかった彼。3年も会ってなかったから随分と大人びて見えた。会えたこと、それだけが嬉しくて。彼の迷惑になるかもしれない、なんていうことは考えもしなかった。

ただ、ただ会えて嬉しくて……。

「貴方に置いていかれるのが嫌だったの。貴方とずっと並んでいたかった」

何年も溜め込んでいた思いが口に出る。貴方が遠くに行ってしまうのがすごく怖かった。今ならまだ間に合う？

「そう、か」

彼は何を思うの？ 私にあって嬉しい？ それとも来て欲しくなかった？

「ごめんな、宮野。もっとお前の気持ちを考えてやれば良かったのにな」

俯く彼の顔が妙に悲しく見えた。悲しまないで。いつも自信满满的な貴方が好きなの。

「貴方が謝ることはないわ。私が我儘なだけ……」

そう、彼は何も悪くない。ただ夢を叶えるために頑張っただけ。

「もっと、我儘になって良かったのに」

彼は悔しそうに唇を噛み締めた。彼は何を悔やんでいるのか。悔やむことなんてない筈なのに。

「……悔しい」

「何が？」

「お前のこと、考えてやれなかったことが」

そんなことはない、十分彼は私のことを考えてくれていた。

「お前に、悲しい思いさせちゃったんだな。守ってやるって言ったのに……」

彼は私のことをいつも守ってくれていた。なのに、どうしてそんなに自分を攻めるの？

「俺がさ、ロンドンに来たのはさ、世界一の探偵になって、お前をちゃんと守れる人間になろうと思ったからなんだ」

彼から告げられた考えもなかった意外な言葉。私のために？
じゃあ、あの時引き止めれば行かなかった？ 今更考えてもどうしようもないが。

「俺に夢を与えてくれるのはいつも宮野だった。だから、お前を守るためにはもっと俺がしっかりしないと思って……」

私の生きる理由は貴方よ。素直にお互い気持ちを伝え合っていたら、この空白の3年間はなかったのかもしれない。

「……でも、俺、宮野のことを信じてなかった」

「え？」

「ロンドンで修行をしていくうちに、どんどん時間が流れていった。気がつけば1年経っていた。その時日本に、宮野の元へ帰ろうと思った。でも、怖かった。宮野、び、美人だし……、俺よりいい人を見つけているかもしれないって思った。家に帰って、もし宮野がいなかったら……、その時の悲しみに俺は耐えきれないと思った。探偵なのに、真実を見るのが怖かったんだ。そう考えると帰るのが怖くなってきて。気がつけば3年経ってた」

彼も私と同じように、色々な不安を抱えていたんだ。なのに、私は自分だけ悲しんでるなんて思ってた。馬鹿みたい。もっと私が彼

を支えたい。

だから、私は彼を抱き締めた。どこにも行って欲しくない。彼も私を抱き締め返す。

「……でも、お前はこうして俺に会いに来てくれた。本当に嬉しい。ありがとう」

「……私も、会えて嬉しい」

「また、俺の側にいてくれるか？」

「もちろん」

彼に向けて笑う。笑ったのなんて何年ぶりかしら？
彼も笑う。彼の笑顔を見るのなんて何年ぶりかしら？

いつかまたすれ違ってそれぞれ違う花を手にして育てていくとしても、私の胸のこの花だけは確かに輝いてるから。

でも、そんなのは嫌だ。いつまでも2人で同じ花を育てていきたい。

『平成のホームズ、工藤新一君がまたもや難事件を解決しました！
今回の事件は1人の女性も捜査に協力したようです。次は平成の
ワトソンの登場なのでしょうか？』

さよならのかわりに、花束を（新志）（後書き）

どうも、雛花です。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

連載一つ終わったけど私は休まない（笑）

今回は花束Pさんの曲から。本当は失恋ソングなんですけど無理矢理変えました（笑）

前作に少し似ているような気もしますが……気にしないで下さい。

途中から歌詞とあまり合わなくなってきた……私何書いてるんだ？
ってなりました。

では、また。

あの日の約束、桜の思い出（新志）（前書き）

新志、新一が20歳です。

あの日の約束、桜の思い出（新志）

約束。

それは決して色褪せない大切な思い出。胸の奥まで刻まれているもの。

＊あの日の約束、桜の思い出＊

家の窓から外を眺めれば桜の花弁がたくさん舞っていた。幻想的で鮮やかで。見れば見るほど綺麗で見とれてしまう。

そしてこの桜を見ると必ず思い出すことがある。昔の思い出。だけれど忘れたりなんかしない。あの日にした約束。今日がその約束の日。

あの人は今頃、どこで何をしているのかしら？ 約束なんて、覚えてるのかしらね？

ヒラリ、と窓の外から一枚の花弁が家の中に入って来た。音もたえずに床に落ちる。私はしゃがみこんでその花弁を拾う。

私に生きる希望をくれた彼。私に生きる意味をくれた彼。

ありがとう、この言葉を早く伝えたい。今の私がいるのは彼のお陰なのだから。

「桜、か。思い出してんだろ？」

急に後ろから声がしたので驚いた。振り向くとそこには工藤君が立っていた。

「工藤君……。いつから居たの？」

「さっき」

さっきていつよ。居るなら声でもかけてくれれば良かったのに。

「なあ、詳しく教えてくれねえか？ その約束について」

彼がどんな興味でそんなことを聞いてきたのかはわからない。でも、人に話すのも、悪くはないわね。

「いいわよ」

そう、あれは何年も前の話。私がまだ7歳でアメリカへ留学させられる少し前――。

＊

月が輝いている時間帯にこの町で一番綺麗な桜の樹の下で私は泣いていた。理由はアメリカに留学させられることになり、お姉ちゃんと離れ離れになるから。怖くて怖くてたまらなかった。

『どうしたの？』

顔を上げると同じ年くらいの少年が私を心配そうに見ていた。蒼くて汚れが見えない綺麗な瞳だった。

『……お姉ちゃんと離れ離れになっちゃうの』

この少年が何かわかるわけでもない。こんなこと言って何か変わるわけでもない。でもこの時の私は何かを求めて彼に話した。

『そっか。君、お父さんとお母さんは？』

『いないの。お星様になったの』

この時の私は“死”を理解していなかった。

『じゃあ、あの一瞬輝いてる星が君の両親だね』

彼はそう言って笑った。久しぶりに人の笑顔を見た気がする。

『だからさ、もう泣かないで？』

人の優しさに触れるのが懐かしい。組織に優しさなんてないから。

『俺が君の力になるからさ』

こんな小さい子が私の力になる？ 無理に決まってるじゃない、そう思った。

『そんな小さい身体でどうやって私の力になるの？』

『え、あ……。そうだね』

どうしよう、そう言いながら本気で彼は悩んでいた。

『……よし！ 俺が大人になったら助けにくるから』

『え?』

『俺、今6歳なんだ。だから、俺が20歳になった時……14年後の今日、またこの場所に来て。その時は必ず立派になって君を守るから』

そう言って彼は笑った。純粹な笑顔で。

『約束だよ?』

『うん』

彼はポケットから小さなお守りを取り出した。

『はい。これ、約束の証』

2つ持っていてそのうち一個を私に渡した。

『中にね、桜の押し花が入ってるんだよ。母さんに貰ったんだ』

楽しそうに彼はそう話す。

『ありがとう』

それを受け取って、久しぶりに笑ってみた。そしたら彼は頬を赤くしながら言った。

『君は、笑ってた方が、可愛いよ』

家族以外にそんなことを言われたのは始めてで少し照れたけど、

嬉しかった。

『——ちゃん。置いてっちゃうわよ』

遠くの方から彼のお母さんだろうか、彼を呼んでいた。

『じゃあ、俺はもう行くから。約束ちゃんと覚えといてね。死んじや、ダメだよ?』

不安そうに彼は私に言う。

『わかった』

だから、私は死なないと彼に誓った。

『あ、そういえば、君の名前聞いてなかったね。なんて名前?』

『私は、宮野志保』

『しほちゃん、か。可愛い名前だね! また、14年後会おうね! 約束だよ!』

そう言っ彼は走って行ってしまった。

ヒラヒラ舞う桜がさつきよりも綺麗に見えた。いつの間にか涙は枯れていた。

それから少し後に彼の名前を聞きそびれたことを思い出した。

＊

「……これがあの約束の話」

全て話し終えほっと一息つく。そしてさっき掴んだ花卉を見る。

「私はね、こんなちっぽけな約束に今日まですがってきたの。これだけが組織にいる頃の私の支えだった」

本当に感謝している。だから、早く彼に会いたい。でも……。

「だけど、怖いの」

「何が？」

「彼はこんな約束なんて覚えてないかもしれない。だから、今日の桜の樹の下に行って、誰もいなかったら……」

私はありもしないただの子供のちっぽけな約束を信じていたことになり、悲しくなる。それと同時に彼に裏切られた気がしてしまう。考えるだけで胸が張り裂けそうになる。

「でも、俺はそいつが気に入くわねえ」

「どうして？」

「だって、そいつがいるから俺らは付き合えない。そうだろ？」

確かにそうだ。私は工藤君に言ったのだ。彼に会うまでは付き合えない、と。あの日のままの純粋な彼だったら、間違いなく私は彼を好きになるだろうから。

「そうね。……それも今日で全て終わる」

今日で私と彼がした約束は終わる。私を支えてきた唯一のものがなくなる。少し不安もある。

窓から桜を見て、私はふっと笑った。

不安だけど、やっぱり早く会いたい。

＊

「見えた……」

あの約束の桜の樹はあの時と変わらずに、いや、より綺麗になっ
ていた。

もうすぐ辿り着く。

もうすぐで終わるのね、何もかも。

星が輝いていた。

月が綺麗だった。

桜が咲いていた。

貴方はいなかった――。

私の瞳から雫が一粒こぼれ落ちた。私はあの時と同じように泣いた。桜の樹の下でしゃがみこみ、顔を伏せて。ポタポタと止まることを知らない私の涙は流れ続ける。

もう、いいのよ。

本当は最初からわかっていた。こんな子供がした約束なんて約束のうちに入らないと。

こんな約束にすがってきた私が馬鹿みたいだ。

私が俯いていると、

「どうしたの？」

あの時より、ずいぶん低い声が上から聞こえてきた。それも聞き慣れた声が。

「……工藤君？」

そこに居るのはあの約束をしたの彼ではなく、いつの間にか私の側に居てくれた工藤君だった。

「どうして、ここに居るの？」

彼にはこの場所は教えてない筈。もしかして私を追ってきたの？
そんな気配はしなかった。

「どうしてもこうしてもねえよ、」

そう言っ　て彼は服のポケットから何かを取り出した。
それを私に見せて、こう言った。

「約束、だろ？」

あの時の笑顔がそこにあった。

彼が取り出したのは私とお揃いのお守り。

「……う、そ」

約束の彼が工藤君だったの？ 急すぎて上手く理解できないわよ。

「嘘じゃねえ」

私もお守りを出す。彼のと見比べると私のと同じだった。

「……本当、なの？」

彼が私を悲しませないために都合のいい嘘を言っているだけかもしれない。

「証拠は——、」

彼はそう言って、私の持っていたお守りの中身を開ける。私は一度も開けなかったけれど。そこにはあの時彼が言っていたように桜の

押し花が入っていた。それと小さな紙切れも。

「ほら、見てみるよ」

その紙切れには“工藤新一”と彼の名前が書いてあった。

「……」

「母さんが入れたんだ、俺の名前をな」

昔を思い出すように彼は言う。

「私を騙してたの？」

「いや、騙してたわけじゃねえぜ？　ただ、お前の夢を壊せなくて……、言いづらかったんだよな。約束の人が俺なんかでいいのかって思い始めたりしてさ……」

前にいるのは約束の彼。私に生きる希望をくれた人。私を支えてくれた人。嬉しさしかなかった。

気がつけばまた涙がボロボロと流れ落ちてきた。止まらない。

「お、おい。なんで泣くんだよ？　やっぱり嫌だったのか？　俺が約束の人だったのが……」

「馬鹿、ね、そんなわけ、ない、じゃない」

涙声になって言葉があまり続かない。

「嬉しい、のよ。貴方が、こんな、ちっぽけ、な、約束を覚えていて、くれて……」

泣き止まない私に彼は優しく笑いかけてくれた。

「バーロー。忘れるわけねえだろ。大切な思い出なんだから」

私にとっても本当に大切な思い出。

「初恋の、思い出なんだからよお」

彼はそっぽを向き、少し照れながらそう言った。

「え？」

「俺の初恋はお前、なんだぜ？」

また涙が溢れ出す。彼は私をどれだけ悲しめれば気が済むのか……。

「バーロー、泣くんじゃねえよ」

そう言っただけで彼は私を抱き締めてくれた。あつという間に私の顔は彼の胸に埋まる。その温もりが本当に嬉しくて。やっと会えた約束の彼に言いたいことはたくさんあるのに上手く言葉にできない。

「俺、嬉しいぜ。俺があの時した約束がお前を支えになれて」

「ありがとう、工藤君。本当にありがとう」

彼には感謝の気持ちでいっぱいだ。一生を尽くしてもこの恩は返せないだろう。

『死んじゃ、ダメだよ?』

あの日の記憶が蘇り、涙はたくさん流れてくる。貴方のその言葉が、その笑顔が、その約束が、今の私が生きている理由。

「もう泣くなよ。悲しいことなんてないだろう?」

優しく私の頭を撫でる。

「馬鹿ね、嬉し泣きよ」

「俺はさあ、お前の笑顔が見たいんだけどな?」

彼は微笑みながら私にそう言った。恩人の言葉は絶対。

だから私は笑って見せた。

そしたら、あの時と同じように彼は頬を赤くした。

「やっぱりお前は笑ってた方が可愛い……」

あの時よりも嬉しい。何故だろう？

「ちゃんと、守るからな。約束は忘れてねえよ？」

もう、十分守ってくれたのに、まだ守ってくれるね。

「だけど、お前が近くにいないと守れない、だから――、」

「志保、俺と付き合って」

桜はヒラヒラと舞っていて。月明かりに照らされていて。とても綺麗だ。

「ええ」

約束。

それはした時期やした内容、そんなものは関係無い。約束は約束

なんだ。

いつかは、必ず、約束が果たされる日が来る。

「お前はもう今日で終わりだって言ってたけど。今日が始まりなんだぜ？」

「そうね」

ありがとうね、工藤君。

約束を信じて生きてきて良かったわ。貴方を信じて良かった。

桜は綺麗に舞う。

来年もまたこの桜を見たら思い出すだろう。あの日のことを。そして、

今日のこと。

桜の花弁が一枚、フワリと私の前に落ちてきた。

あの日の約束、桜の思い出（新志）（後書き）

どうも、雛花です。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

今回はほえほえPさんの『サクラノ前夜』という曲を少し真似しました。この曲おすすめです、泣きました。

こういうのいいよね、実は幼い頃新一と志保は会っていて、新一の初恋は志保ってパターン。

幼い頃の志保、可愛かったんだろうな。

最近気付いた。新志ばかり書いてる（笑　コ哀あんまし書いてないよね。

次も新志の予定！　書きたいのは2、3作ある。だけど時間がない。今も勉強時間を削って小説書いてる。↑それはただ勉強したくないだけだろーが（笑

では、また（＊、▽、＊）　感想待ってますよ☆

自己嫌悪（中学コ哀）（前書き）

コ↓哀、中学生。

自己嫌悪（中学コ哀）

「毎日学校、学校……。だるいよなあ」

帰り道、隣を歩く灰原に愚痴を言う。毎日毎日同じ生活の繰返し。いい加減飽きてきた。

「あつそ。じゃあ学校来なければいいじゃない？」

「そーいうわけにはいかねえだろ？」

軽々しいこと言うよな、灰原は。そんなこといけないに決まってるのにな。

それにしても、まだこいつは気付かないのかね？ 俺がかつたるい学校を毎日行く理由が。サボれるのならばサボってしまいたい。だけど、灰原が学校へ行くと言うのなら話は別だ。一分一秒でも多く、灰原の隣にいたい。

いつからだろうか、いつの間にかこんな感情が俺の中で生まれた。解毒剤ができなくなった、と灰原に告げられた時、それほど悲しくなかった。何故なのか、考えたら自ずと答えは出てきた。

灰原が好きだから。

だから、元には戻らないで彼女と居たいと思う。普通だろう？

ただ、そのことに灰原は全くと言っていいほど気付いていない。それもその筈、俺が彼女に何も伝えてないから。“好き”と伝えようとは思う。でもそのたった一言、たった二文字が伝えられなくて毎日のように悩み、苦しんでいる。

「なあ、灰原……」

「何？」

今日こそ言ってやろう。“好き”だと俺の気持ちを伝えよう。

「す、す……」

「す？」

「す、すげえ綺麗な空だな」

「……？　そうね」

言えねえ。なんだよ、すげえ綺麗な空だな、って。馬鹿じゃねえの、俺？

「どうしたの、江戸川君。顔が真っ赤よ？」

げ、マジかよ。

「ば、バーロー。夕日のせいだよ」

あやふやに誤魔化してみる。

「クスッ。まだお昼よ？」

でも、誤魔化せなくなってくる。だって、灰原が笑う、それっぽ
うちで身体が熱くなっていくから。
自分でもわからなくなるくらい、灰原が好きになっていく。

「ほら、帰るわよ？」

その笑顔が俺は大好き。

*

帰ってきてゴロリとソファーに寝転がる。フカフカで気持ち良く
て、目を閉じたらこのまま寝てしまいそうだ。

「江戸川君、今日の夜ご飯は何がいい？」

俺を見下ろして彼女は聞いてきた。これは日常茶飯のこと。小学校3年生くらいからは灰原と一緒に俺の家に住んでいる。

「今日は……、オムライスがいい」

「わかったわ」

彼女はまた笑う。口で言えないのならばこのままソファに押し倒して“愛”を伝えようか、そんな衝動さえ沸き上がる。

でも、曖昧な関係は嫌なんだ。中途半端は探偵にとって許されないことだから。そう、そんなことはわかってるけれど、“好き”の一言がいつまでも出てこないんだ。

「なんか手伝うことあるか？」

考えることは止め、灰原にそう聞く。

「そうね、何もないわ」

そう言って彼女は買い物に行ってしまった。待つて、の一言も俺は言えない。

絶対に灰原が俺を好きになる、そんな確信なんて何処にもない。灰原から言わせてみれば俺はただの同居人にしかすぎない。それ以上も以下もない。早く気持ちを伝えなければいつかどこぞの男に取られてしまうかもしれない。そんなことはわかっている。でも、俺は動けない。

そんな俺が嫌いでしょうがない。

＊

「江戸川君、お風呂入ったら？」

夕食を食べ終わると彼女はそう一言言う。

「んー、ああ。そうする」

それだけ返事をして俺は風呂場へ向かう。

シャワーから大量に水が流れてきて、俺の全身を洗い流してくれる。だけど、俺の心の中だけは、このシャワーも綺麗に洗い流せない。

湯船に浸かると今日1日の疲れを吹き飛ばしてくれる。だけど、俺の心のモヤモヤはなくなるらない。

たった1人、灰原に嫌われることを怖がって、俺は随分と弱くな
ってしまった。俺は探偵だから良く人に恨まれる。そんなことには
少し慣れていたが、彼女に嫌われるのだけはごめんだ、そう思うよ
うになった。それほど好きになってしまった。
ただ、この感情を伝えてしまって、今の関係が崩れてしまうのが
どうしようもなく怖い。

本当、何処まで弱くなってしまうんだろうな、俺は。

＊

「はい、珈琲」

「おう、サンキュ」

俺が風呂から上がると、次は彼女が風呂に入っていった。そして
風呂から上がってきた彼女は珈琲を淹れてくれた。彼女は俺の隣に
腰を下ろした。

横を見ると彼女の横顔。何よりも綺麗だと心から思える。まだ乾
ききっていない彼女の髪の毛が妙に色っぽさを出す。

「何ジロジロ見てるのよ？」

ジト目で彼女は俺を見る。

「な、何でもねえよ」

「そう」

彼女は興味なさそうな声を漏らして、珈琲を飲みながら雑誌を見始める。

こっちを見て欲しいのに。

「あ、」

何かを思い出したように彼女は呟く。

「明日の朝ごはん、何も用意してないわ。買いに行かないと」

そう言って彼女は立ち上がり、買い物に出掛けようとした。
行くな、口より先に身体が動いた。俺は彼女の細い腕を掴む。

「……何よ？」

「……、な」

「え？」

「行くな」

彼女の瞳をしっかりと見てそう呟いた。

強く凛々しくかつこよく、そんな風に見せていても、灰原がなくなる、それだけで壊れてしまいそうなんだ。

「どうしたの、江戸川君？ 熱でもあるのかしら？」

そう言って俺のおで手を当ててきた。ドクン、心臓が大きな音をたてた。これは、やべえな。

「大丈夫、熱は無いみたいね」

やばい、本当に。わからない、自分の感情が全然まとまらねえ。焦ったってどうしようもない、そんなことはわかってる。でも、このままだと本気でやばい気がする。

俺の心臓はバクバクと大きな音をたてて鳴り続け、鳴り止まない。

「……やべえよ」

「何が？」

惚けた顔で彼女は俺に問いかける。灰原の一つ一つの動作がどうしようもなく愛おしい。

「わからねえのかよ、おめえは」

「わからないわよ？ 貴方は何を言ってるの？」

本当に鈍感だな、こいつは。

後少し、もう少しで本音が吐き出せそう。その後一歩が中々出な

いのだ。

「買い物行くから、手、離してくれる？」

「嫌だ」

「本当、貴方たまにわけのわからない行動を起こすわよね」

わけわからなくねえよ？ 俺が灰原を好きなのだから、何も可笑しくはない。

「わかったわよ。買い物は後で行くわ。だから離して？」

彼女は降参して買い物に行くことを断念した。それが嬉しくて頬が緩む。彼女は再び俺の隣に腰を下ろした。

彼女の隣にいと冷静じゃ居られなくなり、俺が俺ではなくなる。ただ俺は灰原のココロが知りたいだけなんだ。でも聞くのが怖い。

知りたい。

聞きたくない。

そんな戸惑いのはざまで、夜が終わってしまいそう。

＊

「おやすみ、江戸川君」

そう言つて灰原は自室に向かう。その背中が妙に切なく見えて。

「おい、灰原、」

彼女を引き止めてみる。そうすると予想もしなかった言葉が返ってきた。

「何？ 一緒に寝たいの？ 探偵さん？」

その一言で俺の全身は熱を持った。その一言一言が俺の耳に心地好く残る。

幻想なんていらなしいし、真っ赤な嘘も望んでいない。そんなもの、意味なんて無いし。

それでも喜んでしまう俺が許せない。

「ば、バーロー。なんでもねえよ」

「クスッ。何本気にしてるのよ？」

自分だけ照れていてなんだか恥ずかしい。彼女は俺の気持ちを知

りながら弄んでいるのだろうか。それはないか、そんなにあいつは器用なやつじゃないしな。

＊

もう0時を回ってしまった頃、ようやく俺の眠気はやってくる。

自室に向かう前に少し灰原の部屋を覗いて行こうと思った。

彼女を起こさないようにゆっくりと部屋に入る。

スウスウと気持ち良さそうに眠る彼女がとても愛らしい。そんな彼女を見るときもうどうなっても構わないから灰原が欲しい、そう思ってしまう。

「江戸川、くん……」

急に俺の名前を呼ぶから驚いた。でも彼女は目を閉じたまま。寝言？ 俺の夢を見てるのか？

「哀……」

彼女の名前を言う。

“好き”、いつかはこの気持ちを伝えるからな？

俺は静かに唇を重ねた。

許してくれるのならば、このまま眠りたい。

そう考える俺が嫌いで仕方ない。

＊

強く凛々しく麗しく そんな風に見せてても

キミがいなくなる それっぽっちで 壊れてしまいそう

感情がまとまらない 焦ったって どうしようもない

そんなこと分かってるけれど

もう少しのところで 本音が吐き出せない

冷静じゃ居られない 心臓が鳴り止まない

キミのココロが知りたい

戸惑いのはざまで 夜が終わってしまいそう

自己嫌悪（中学コ哀）（後書き）

どうも、今日は二回目の雛花です。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

銀サクさんの曲から。

哀のことが好きだけど、気持ちを伝えられない自分が嫌いなコナン君。いいね。もっと上手く書けるようになりたい。

哀のことが大好きで仕方ないコナンがいいと思います。

書きたい短編いっぱいあるのに時間がない……。誰か私に時間を分けて下さい！（笑）

では、また！

二息歩行（新志）（前書き）

新志、元に戻って3ヶ月。

ちなみにタイトルは間違いではありません。

二息歩行（新志）

足がある。

立って歩ける。

当たり前のことであり、とても幸せなことだ。足があれば何処にでも行けるし、自分のしたいことが出来、とても便利だ。

そして、私達は前足を浮かせたことによって、両手ができた。これも便利で素晴らしいことだ。

しかし、その反面、その浮かせた前足で他人や自分を傷付け始めた。

人間とは、愚かな生き物だ。

何故人間は二足歩行を始めたのか。

そっちの方が便利だから？ 勿論、それもある。

そっちの方がかっこいいから？ 勿論、それもある。

他の動物と差をつけたかったから？ それもあるだろう。

でも、その他にも理由がある。

それは――。

＊

口がある。

言葉を話せる。

当たり前のことであり、とても幸せなことだ。口があれば言いたいことを言えるし、何かを食べることも出来、とても便利だ。

しかし、その反面、口から出た言葉で他人や自分を傷付け始めた。人間とは、本当に愚かな生き物だ。

何故人間に口があるのか。

言葉を話すため？ 勿論、それもある。

食べ物を食べるため？ 勿論、それもある。

でも、その他にも理由がある。

それは――。

＊二息歩行＊

俺が工藤新一に戻ってから3ヶ月が過ぎていった。本当に長い時間だった。でも、振り替えてみればそうでもない。そんな気がする。

アイツに会ってないのも今日で3ヶ月。アイツは元に戻ったらすぐにこの街を出て行ってしまった。

そして俺はまだ気持ちを伝えられずにいる。この気持ちを伝えた相手は勿論、

——宮野志保。

気が付けば側にいて、気が付けば信頼していて、気が付けば好きになっていて、気が付けば……、

いなくなってしまった。

どうしてだ？　　そう何度も自分に問いかけたが正しい答えは出てこない。

どうしてだ？　　その答えは宮野にしか分からない。
どうしてだ？　　……意味のない自問自答は止めよう。

1人じゃ寂しいから、君と息をしたい。

会いてえ。

心からそう思う。

会いてえ。

好きだから。

会いてえ。

今すぐにでも……。

待っていれば宮野が帰って来る、そんな保証はない。待ってても何も始まらない。俺が動けばいいんだ。

探そう、宮野を。

俺には、立って歩ける足がある。

＊

探偵というものは凄いな。改めてそう思った。
宮野を探すことなんて簡単なことだった。周囲に聞き込みをして、

宮野の住む街を見つけた。特に男に聞き込みをすると当たりが多かった。やっぱりハーフの美人は目立つんだな。

その街の海岸に宮野はいた。

「よお、宮野」

相変わらずの綺麗な顔立ちだ。これほど人を愛おしく思ったことはない。

「どうして……、」

なんでここにいるの？、そう言いたいような顔で宮野は俺を見る。

「探した、お前のこと」

こんなに誰かを懸命に探したのは始めてだった。

「なんで？」

「会いたかったから」

「馬鹿じゃないの？」

「馬鹿じゃねえよ」

久しぶりの会話もこんなもの。寂しい？ 俺は何を求めてるんだ？ 久しぶり会ったからって何か前と変わるわけでもない。

「帰ってくれる？」

「どうして？」

「私は貴方に迷惑かけたくないから」

迷惑？ 迷惑なんてかけられた覚えがない。こいつは何を言ってるんだ？

「バーロー、誰も迷惑だなんて思ってねえよ。むしろ、戻ってきて欲しい」

なあ、頼むよ。

「戻ってきてくれ、宮野」

このままだといつか俺が壊れてしまいそうなんだよ。お前不足なんだ。

「足りないんだ」

「馬鹿ね、私なんかじゃなくて蘭さんを求めなさい」

蘭なんてもう幼馴染みにしか見えねえ。好きになりすぎたんだ、お前のこと。

「なあ、クイズ出していいか？」

「いきなり何なの？」

「なんで人間は二足歩行を始めたと思う？」

「便利だから、じゃないのかしら？」

そう宮野が言ったから少し笑った。

「確かに、そうだよな。でも、俺は違うと思う」

「じゃあ、何だっていうの？」

俺はすっと彼女の背中に腕を回す。そしてきつく抱き締める。

「ちょ、」

「人を抱き締めるため」

触れたくて。

宮野の温もりがこんなにも気持ち良い。

「工藤君、何の冗談？　こんなことしても私はあそこには戻らないわよ」

どうしてそうやって自分を傷付けようとするんだ？　もうお前は十分傷付いた。これからはもっと幸せになっていいんだぜ？

「そう、戻れないの。私は犯罪者だから。あんな温かい場所にいるはいけないの。犯罪者は暗い闇にいないと……」

そう言って宮野は自分を傷付ける。

「だから、優しくしないで。もっと、もっと犯罪者である私を責めて？　そうじゃないと私のせいで亡くなった方に申し訳ないわ」

自分をとことん傷付ける宮野を見ていられなかった。

「犯罪者の私は死ぬべき人間なの」

「もう喋るな！」

聞きたくねえ。

「もう一つクイズ。人間にはどうして口があると思う？」

「喋るため、それ以外に何もないわ」

呆れた顔で宮野は言う。

「言葉は凶器なんだ。そうやって宮野みたいに他人ではなく自分を傷付けるやつもいる。だから、人間に口があるのは……」

俺は人差し指を彼女の口に当てる。

「その口を、」

そして次にその指を自分の口に当てる。

「いの口で、」

「……塞ぐため」

そのまま俺を彼女の口を塞いだ――。

強く。

深く。

お前はこれから俺の息を吸って生きていくんだ。

そっと口を離す。

宮野の可憐な瞳が大きく揺れる。

「好きを通り越して、愛してる。……宮野」

「……止めて、」

返ってきた言葉は想像もしなかった言葉。

「止めて、そんな冗談。本気にしちゃうから……」

宮野は悲しくそう言う。

「だから、冗談じゃねえよ」

「本当に？」

「本当に」

クスッ、と彼女は笑った。

「馬鹿じゃないの？ あんなに優しい蘭さんを捨てて、私を選んだの？」

「馬鹿じゃねえぜ？ 好きだからお前を選んだんだ」

好きでたまらないから。

「後悔しない？」

「しねえな」

ニコツと笑って見せた。

「大好きよ」

そして俺は再び彼女の口を塞ぐ。

「大好き」ならもういつそ、ボンベのように俺の息を吸って生きていけよ？

二息歩行（新志）（後書き）

どうも、雛花です。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

今回はDECO＊27さんの『二息歩行』という曲から。大好きです、この歌。特にサビの「相對のチュー」ってとことか！

新志いいねえ。もっとうまく書けるようになりたいです。特に、もっとラブラブな新志を書けるようになりたい！

では、また（^▽^）

「ありがとう」 (新志) (前書き)

新志、付き合ってから数ヶ月経ってます。

『ありがとう』を書き直しました。

大切な人を撃たなければならなくなった時、貴方はどうしますか？

「ありがとう」(新志)

薄暗い闇に包まれた部屋。外から本当に細い光が差し込む。それを見るとホコリが舞っているのが分かる。

切ない顔をする彼が目の前にいて。胸が酷く締め付けられる。

その顔を見ていられなくて私は視線を下に下ろす。そして、自分の右手に握られてる物を見て寒気が走る。

拳銃――。

握っているそれを信じたくなかった。

でも、現実からは逃げられない。

「早く撃て」

「無理に決まってるでしょ？」

撃て、撃てない、そのやり取りがさっきから続いている。

『貴様が工藤新一を撃って殺せ』

冷酷な、光のない瞳をした男の言葉。

『たくさんの人が集まるショッピングモールに爆弾を仕掛けた。あれが爆発すれば死者は1000人は越えるだろうな』

何故そんなことをしたのか、そんなことを犯罪者に聞いても良い返答なんて返ってこないだろう。

『その爆弾を止める方法はただ1つ。宮野志保、この拳銃で工藤新一を殺せ』

理解するのに時間がかかった。

いいシナリオだろ？、と男は薄気味悪い笑みを浮かべた。

『制限時間は30分。長すぎても短すぎてもつまらないからな。もしそれが出来なかったら……。どうなるか分かるよな？』

その残酷すぎる瞳はかつての私と少しばかりか、似ていた。愚かな人間を嘲笑っているようだった。

あの男は私にも工藤君にも恨みがあると言っていた。だから、こんなに最悪のシナリオを選んだのだろう。

別に自分が汚れるのは構わない。でも、恩人の彼を私に殺せる筈がない。

きつとあの男は楽しんでるんだ。人間とはどれだけ愚かであるか確かめようとしているのかもしれない。

「志保、撃て。もう時間がねえ」

気付けばあれから15分ほど経っていた。

「……そんなこと、わかってるわよ」

撃たれる方だったらもう少し楽だったかしら？ そんな馬鹿な考えさえ浮かんでくる。

「撃てるわけ、ないじゃない」

ガタガタと足は震えてばかりで。何が怖いのか、良く分からなくなってくる。

「……？ あの男は俺らを恨んでと言っていた」

彼は何やら考え出した。こんな危機的状況にあってもまだ推理をするのか。

「俺を殺したい、そう思うのは自然だが、何故志保に撃たせる？」

探偵の彼には何かが突っ掛かったのだろう。私には何も分からない

いが。

「それは私にも恨みがあるからでしょ？」

「いや、でも本当に俺らだけが狙いならばショッピングモールに爆弾を置く必要なんてない……と思わないか？」

「それは、そうね」

「それに志保が俺を撃てない可能性だってある。だから、ショッピングモールも狙ってわけじゃねえか？」

彼の推理には必ず筋が通っている。そんな彼の推理を隣で聞いているのがとても楽しかった。

「なるほどね。ただ単にあのショッピングモールを選んで爆弾を仕掛けたのではなく、そっちにも恨みがある……ってことかしら？」

「多分な」

それがどうしたのか。それが分かったからといって今の状況が変わるわけではない。

「だから、お前が俺を撃てば、犯人の野望は1つしか果たされないってことだ」

「でも、私が撃っても犯人は爆弾を解除しない可能性だってあるのよ？　むしろ、その可能性の方が高いわ」

「解除する可能性だってある」

揺るがないその強い瞳は私にそう訴える。

「探偵はな、1%でも確率があるのなら、それに賭けるんだ」

彼は肩を竦めて、醜いだろ、なんて言って鼻で笑った。

そんな悲しい顔、して欲しくないのに。

「たくさんの人の命と俺1人の命、どっちが大事か考えてみろ？」

そんなの、即答できた。

「……工藤君の方が、大事」

彼とは色々な思い出がありすぎる。組織にいたことなんて忘れてしまうくらい、私は幸せだった。幸せすぎたのかもしれない。

「無理、よ。私には、撃てない……」

昔の私ならこんなこともできたのかもしれない。あの冷酷なシェリーなら。

でも、今の幸せな宮野志保には撃てない。私に幸せを教えてくれた、彼を。

怖い。

辛い。

嫌だ。

私が彼を撃つの？

無理に決まってるじゃない。

本当、弱くなったわね、私。

全身が震え始める。ガタガタと。

床を見るとポタポタと雫が落ちてきてる。雨漏り？ 違う。本当はもう分かった。

私は泣いているのだと。

ふ、と温もりを感じた。気が付けば私の顔は彼の胸に埋まっていた。

それは温かくてとても安心する。この温もりがなくなってしまったら、私はどう生きていけばいいのか、分からない。そんなことを考えたこともなかった。

私の右手から拳銃が落ち、ガシャンと無音だった世界に音を生み出す。

「……、俺だって嫌だ。お前を置いて死にたくねえよ。もうお前に大切な人を失う悲しさは味わせたくない。できることなら、志保とずっと一緒に居たかった。幸せをもっともつと教えてやりたかった」

一文一文彼はゆっくりと話す。全て私の心に響く。

「ごめんな、探偵なんかやらなければ良かった。なんて、今更思ってもしょうがないけど」

「馬鹿言わないで。貴方が探偵をやったから私たちは出会えて、今があるのよ？」

「ああ、そうだな」

彼は今まで私が見た中で一番悲しそうな顔をしていた。

「やっぱり、志保と生きていけないのは、辛い。でも、」

彼は私を見る。

「もう、逝かなきゃ」

「っそんなの、嫌よ！ 私は、私は、貴方がいないと生きていけない……」

それほど大きな存在なんだ、彼は。いつの間にか私の心を全て支配した。それでも嫌ではなかった。

「何弱気になってんだ？ 志保らしくねえな」

彼は儂く笑った。それが私は嫌だった。どうして無理に笑おうとするの？

「……っいや。ずっと、一緒にいた、……い」

私の涙の雨はさっきよりも強くなる。泣きたくなんかないのに、私の瞳からは涙が溢れ出る。

そんな私を彼は強く、強く、抱き締めてくれた。

「……。なあ、俺さ、志保のこと大好きなんだ」

耳元で囁く彼の声がどうしようもないくらい愛おしくて……。

“私も好きよ。” そう言おうとしたが言えなかった。

塞がれていたから、私の唇が、彼の唇に。

優しいキスだった。彼の想いがたくさん伝わってきた。

「俺、志保と出会えて幸せだった」

彼は笑った。

馬鹿ね、余計撃てなくなるじゃない。

でも、彼はもう決心していた。

「最後までいいは、笑って。志保」

私も覚悟しないと。彼の死が何百人もの命を救う。探偵としては、いい最後だと思う。

だから、私も笑って見せた。精一杯の笑顔で。お姉ちゃんの笑顔を思い出しながら。

「私も、貴方のこと、大好きよ」

「……志保っ」

彼の目から何か光るものが落ちたように見えたのは気のせいだろうか。

「工藤君？」

「っごめん。最後くらい笑おうって言ったのは俺なのにな」

彼は涙を拭い、笑った。

それからゆっくりと私を離れた。

「そろそろ時間だ」

「……ええ」

私はしゃがみ込んで拳銃を拾う。何度持っても拳銃を持つのには慣れない。

ゆっくりと彼に銃口を向ける。

「じゃあ、撃つわね」

また足はガタガタと震えだし、涙が止めどなく流れてくる。

彼も辛いよ、私だけじゃないの。

「最後に一言いいか？」

「私も言うことあるわ」

「そんじゃ、せーので言おうぜ」

「ええ」

人差し指にグッと力を入れる。

彼との思い出が溢れるほど脳裏に蘇ってくる。
本当に、楽しくて、幸せだった。
貴方がいなくてもしつかりと生きるわね。

さよなら、工藤君。

恋することは、辛いけど、良いものね。

「……せーの」

「「ありがとう」」

それと同時に銃声は鳴り響く。

鮮血が舞った。

目の前にいた彼は床に倒れた。それから二度と息をすることはなかった。

力をなくした私はその場に崩れ落ち、涙が枯れるまで泣き続けた――。

その後犯人に、良くやった、爆弾は解除した、そう言われたが私の耳には届かなかった。

「ありがとう」 (新志) (後書き)

どうも、雛花です。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

今回は前に書いた『ありがとう』のリメイク(?) バージョンです。
(『ありがとう』は消させていただきました)

ただ悲しいだけですよね。志保……貴女は強いですよ。

次はリクエストをいただいたので、2人の立場が逆だったら……を書きます。

今日更新出来るかは不明です↑おい

「愛してる」【前編】（新志）（前書き）

新志、リクエスト小説。

長くなったので2つに分けました。

ただ悲しいだけです。

この手で愛する人を消さなくてはならなくなった時、貴方はどうしますか？

「愛してる」【前編】（新志）

その部屋には2人の青年がいた。

1人は世間で名探偵と騒がれている男。

1人は茶髪でウェーブのかかった髪をした女。

男は泣きながらごめん、と言う。

女は優しい笑顔で謝らないで、と言う。

男は女に銃口を向けた――。

――

事の始まりは3日前のある日。博士の家に届いた一通の招待状。

「静岡に二泊三日の旅行に行く？」

「ああ、そうじゃよ」

博士の家でいつものように寛いでいたら、静岡に旅行に行くと言われたので思わず聞き返してしまった。

「誰と？」

「ワシと子供たち3人と蘭君と園子君じゃよ」

そのメンバーにしては珍しい名前が出てきたから俺は聞いた。

「蘭と園子も？」

「そうじゃよ。毛利君宛に招待状が来ていたそうじゃ」

まあ、毛利君は都合が合わなくていけなくなっただんじゃがな、と笑っていた。

博士宛に届いた招待状を見せてもらった。差出人の名前は静岡に旅館を経営してる人らしい。

『新しく出来た旅館です。富士山が綺麗に見えますよ。どうぞ来て

ください』

そう書いてあった。

「なんかちょっと怪しくねえか？」

「そうかのお？」

まず何故博士とおっちゃんのに招待状が届いたのか分からない。おっちゃんの方は事件関係で知り合った人からのお礼とかかもしれない。ねえが博士に届くのはおかしい。

「で、なんで子供たちも連れていくんだ？」

「招待状には他に何人か呼んでいいって書いてあったからのお。コナン君と哀君がいなくなっただけからはキャンプなども行ってないから」

博士は少し悲しそうな顔をしていた。確かにあいつらは俺らがいなくなっただけから元気がない。旅行に行ったら元気になってくれるならそれがいい。

「そうだな。博士も楽しんでこいよ」

この旅行に行かせてしまったことが最悪なことを生み出すだなん

て、この時は誰にも分からなかった。

――

それから3日後。旅行当日、俺と志保は駅まで見送りに行った。

博士と子供たちは何やら楽しそうに話していた。園子は相変わらずで男をゲットするのよ、と言いながら髪の毛をいじっていた。蘭は園子には京極さんがいるでしょ、と言いながら楽しそうに話していた。

「楽しみだね、富士山見るの！」

「そうですね！」

「うな重食えるかな？」

3人共本当に楽しそうだった。久しぶりにこいつらの笑顔が見れてほっとした。横を見ると志保も俺と同じ気持ちなんだろう、穏やかな表情をしていた。

「楽しんでこいよ、おめえら」

「」「はい！」

楽しみでしょうがない、という顔で3人は元気に返事をした。

一方志保は、

「博士、私がいなくて油っぽい物ばかり食べたら駄目よ？」

「たまにはいいじゃろ？」

「たまでも駄目」

と博士の体調ばかり気にしていた。気遣いはいいだろうがいくらなんでもやりすぎじゃねえか？ 昔から良く思ってたけど。

「トホホ……」

博士はとぼとぼと子供たちの後を追いつけて行った。

「やりすぎじゃねえか？」

「何か言った？」

「いえ、何も……」

相変わらず怖いですね宮野サン、と言えば彼女はこちらを睨んできた。

だからそれが怖いんだって。

そんな些細な会話が平和で笑えてきた。

「じゃあ、行ってくるね」

蘭がこっちに笑いかける。

蘭は始め俺と志保が付き合うことを認めてくれずにいた。でも園子の支えもあり今では俺と志保を応援してくれている。俺は志保との馴れ初め話をしたり、蘭の恋愛相談なども聞いて蘭とはいい幼馴染み関係にある。

「気をつけろよ。なんか怪しい気がすんだよな」

まだ俺の中ではモヤモヤがあった。

「大丈夫よ。子供たちのことは任せて。それに、いざとなったら新一が助けてくれるでしょ？」

昔と変わらない笑顔で蘭が俺に問い掛ける。

「もちろん」

「大丈夫よ、蘭さん。事件を呼び寄せる探偵さんはこっちに残るんだもの」

「それもそうだね」

志保と蘭は2人で目を合わせて笑いあっていた。なんで俺が疫病神扱いされねえといけないんだよ。

「まあ、新一君に頼らずとも何か起こったらこの推理クイーンの園子様がパパッと事件を解決するわよ」

さっきまで髪の毛の寝癖やらを気にしていた園子が話に割り込んできた。こいつに推理をさせたことは今でも悔やんでいたりする。

「新一、」

そう言っただけで蘭は俺に近づいてきて耳元で私たちがいないからって志保さんに変なことしちゃダメだよ、と囁いた。

「ば、バーロー。何もしねえよ」

「そうよね。もし何かしたら胴回し回転蹴りが待ってるわよ」

それだけ言ったら蘭と園子は去って行った。

「蘭さんになんて言われたの？」

「な、なんでもねえよ。帰るぞ」

「はいはい」

2人並んで家へ帰る。そっと右手を伸ばし、彼女の左手と繋ぐ。

彼女を見ると少しクスツと笑っていた。だから俺も笑った。

この幸せがずっと続く。それが当たり前だと思っていた。この幸せが一生続く保証なんて何処にも無いのに……。

夕食を食べてから推理小説を読むことに夢中になっていて気が付けば夜の9時を過ぎていた。

「やば。もうこんな時間かよ。なんで声かけてくれなかったんだ？」

隣で珈琲を飲みながらファッション雑誌を読んでいる志保に言う。

「あら、頼まれた覚えはないけど？」

「あのなあ……」

嫌な性格だな、なんて思いながらもそんな志保が好きな俺が笑えてくる。

「ちよつと家帰って着替えとかとって来るわ」

「何、貴方ここに泊まる気？」

「そうだけど？」

悪いか？、と聞くと志保は呆れた顔をした。

「どうせ嫌って言うっても来るんでしょ？」

「そりゃもちろん」

私は地下室にいるから、と言って志保は地下室へ向かって歩いて行った。その背中に向けておう、と返事をしてから俺は隣にある自分の家へ向かった。

——この時、もうすでに終わりへの歯車は廻り始めていた。

ガチャ、という音と共に家のドアを開ける。

いつもの俺の家の筈。だけど何か違う。多分、誰かいる。始めは母さんかと思ったが、雰囲気がそんなものじゃなかった。この威圧感、あの組織が放つものと同じだった。

何故今頃になって？ 組織が壊滅してから1年は経つだろう。この威圧感の主が組織の人間でないことを願いながら俺は家の中へ入って行った。

2階に上がると本が山ほど並んでいるいつもと変わらないリビング。電気はつけずに月明かりと感覚だけを頼りに前へ進む。

「!？」

その時、後ろに気配を感じた。その瞬間首筋に冷たい物が当てられる。体温的に冷たいものではなく、オーラの的に。

「……工藤新一、だな？」

拳銃を俺に向ける人影。気配だけで身震いする。あれからこんな感情に陥ったことはなかったから。

俺は静かに両手を挙げる。横目でそいつを見る。長身で上から下まで全身カラスのような黒服に包まれた男。そしてこの忌々しい雰囲気――、

「組織の残党だな？」

男はご明察、と言い鼻で笑った。

「何の用だ？」

FBIから組織を全員捕まえることは出来なかったと聞かされていたが、まさか今頃になってこんなことになるとは思ひもしなかった。

「シェリー、」

その名前に俺の耳は瞬時に反応した。あいつは今1人だ、もしかして……？

「志保を、殺す気か？」

「ああ」

当たり前だろ、と言わんばかりの言い方だった。

「今仲間が志保を殺しに行った。……なんてことはねえよな？」

志保がまだ殺されていないことを願って、男に俺はそう聞いた。

「安心しろ。仲間がいるがシェリーの所には誰も行ってない」

その言葉を聞いて安心した。

「他の所に仲間はある」

「何処に？」

俺の脳裏にちらつくのは蘭や園子、博士と子供たちの顔。それだけ
は止めて欲しい。

「静岡だ。この意味が分かるかな？」

全身に寒気が走った。やっぱり旅行なんて行かせるべきじゃなかったんだ。

「ほらよ、」

男から携帯電話を渡された。静岡の仲間と繋がっているのだろうか？

恐る恐る携帯に向かって声をかける。

「もしもし……?」

『新っ!?!?』

携帯から聞こえてきた声は紛れもなく蘭の声だった。

「蘭っ」

『助けて、新一……。助けてよ!』

震えた蘭の声が耳から離れない。

「どうした? 何があった?」

『旅館の住所に来たらね、旅館なんかなくて……。あったのは空き倉庫だけ。帰ろうとしたら黒い服を来た3人の男たちが来て。拳銃を、持ってたの。そしたら爆弾の仕掛けてあるその倉庫にみんな入れられて……。今仲間の1人に携帯電話を渡されて新一と話せるの。みんなもいるよ?』

蘭は簡潔に分かりやすく今の状況を話してくれた。その後、携帯からみんなの声が聞こえてきた。

『新一お兄さん、歩美怖いよ……。』

『僕たち死んでしまうのでしょうか……。?』

『俺、もっとやりたいことあったのによお……』

震える歩美と光彦と元太の声が俺の胸に突き刺さる。全部俺のせいじゃねえかよ。俺が不甲斐ないから……。こんな幼い子供たちにまで怖い思いをさせてしまった。

『新一君。わしはどうなってもいいんじゃない。子供たちだけでも、せめて子供だけでも助けてくれんか』

懸命に訴える博士。博士は悪くない。何も悪くねえのに……。死ぬ必要なんてない。

『早く助けに来なさいよ、新一君！ みんな頼りにしてるのよ！？』

泣きながら叫ぶように園子は言う。みんなに迷惑しかかけていない俺を頼りにしてる？

『……私、助けられなかった、みんなを。何のために空手で鍛えてるのか分からなくなってきたよ』

蘭は一番良くやってる。きっとみんなをずっと励ましてきていたのだろう。

『だから、お願い。新一しか頼りがいないの。助けてよ……』

どうしてそんなに俺を頼る？ 俺なんだぞ、全ての元凶は……。俺が探偵をやっていたせいなのに。

『信じてるからね、新一』

蘭のその強い声が俺の胸に響く。

全て俺のせいなら俺がどうにかして助けるしかない。答えはもう出てるじゃないか。

「ああ。必ず、助ける」

そこで電話は途絶えた。

——待ってろ、みんな。必ず助けるからな。

バツと後ろを向き、黒ずくめの男と向き合う。拳銃はこちらを向いたまま。男の口は曲げ、ニヤリと笑う。

「随分と威勢のいい探偵ボウズだな」

「良く言われるさ」

携帯電話を投げ返して、男を睨み付ける。絶対に許さない。

「ところで、おめえの要件はなんだ？」

男は静かに話始めた。

「俺はな、組織で毒薬を作る総まとめ役だったんだ。ある日シェリーが組織を逃げ出したせいで薬の研究は続行不可能になったんだ。……あの方のために早く完成させたかったのにも関わらずシェリーは逃げ出したんだ。そのせいで俺はあの方に見捨てられた。他の3人も俺と同じような奴等だ。だからシェリーのことが嫌いなんだよ、殺したいほどになあ」

男の冷たい瞳に恐怖を覚えた。相当志保のことを恨んでいるのだろう。でも話を聞く限りでは志保は特に悪くない。

「でもな、ただシェリーをこの手で殺すのは面白くない。ゲームなんだよ、これは」

男は腰に付けているホルスターから拳銃を取りだし、俺に放り投げる。反射的にそれをキャッチする。

男は平然と一番残酷な命令を俺に下す。

「工藤新一、お前がその拳銃でシェリーを撃ち殺せ」

「……、え？」

自分の手に握られている拳銃を見て身体の体温が一気に下がるのが分かる。

「愛する人に殺された方がシェリーも本望だろうしな」

……。

俺が殺す？

この手で、志保を？

出来るわけないじゃないか。

「馬鹿言ってるじゃねえよ!? 殺せるわけねえだろ? おめえらのことだから俺と志保の関係も知ってるだろ? 知ってて言ってるのか!?!」

心の奥底まで闇に浸されたこいつに何を言っても何ともならないことは分かっている。だけど、心の中の感情を留めておけなかった。

「言った筈だろ? ただ殺すのではつまらないと。これはゲームだと」

この時のこいつの笑み以上に不気味な物は見たことがなかった。

「できないと言うならばお前の仲間がいる倉庫の爆弾を爆発させるだけだ」

「てめえ……」

なんだよ、それ。どっちも助かるって方法はねえのかよ。

神様って残酷だな。こんな二択どっちも選べねえよ。俺にどうしろと？

「爆弾は遠隔操作もできて時限式なんだ。爆破時間は0時。後3時間ある。じっくり考えろ。但し逃げるなんて馬鹿なことは考えるなよ。いつでも俺の監視下にあることを忘れるな。逃げた瞬間、爆破するぞ？」

もう何かを言い返す気力さえ無かった。

「名探偵と言われているお前が愛する人1人を選ぶか、たくさんの仲間を選ぶか……。楽しみだな」

ククク、と笑いながら男は何処かへ消えて行った。

薄暗い月明かりだけが差し込みリビングに1人俺は取り残された。

目を開けても閉じても全て闇。

夢であって欲しかった。

信じたくなかった、こんな現実。

「本当、残酷すぎるぜ……」

力が抜け、その場に倒れ込む。

手に握られている拳銃を見て再び寒気がした。拳銃を握りたくなくて俺は掴む力を弱めた。それは俺の手から滑り落ち、ガシャンと音をたてて床に落ちた。

「どうすりゃいいんだよっ!？」

1人で怒鳴り叫ぶ。わけが分からなく、自分が狂ってしまいそうだ。いや、もう狂ってると思う。

「何をどうしろってんだ? 志保を殺すのか? この俺が、この手で?」

感情を言葉にして自問を繰り返す。でも答えは返って来ない。

——信じてるからね、新一。

——ああ。必ず、助ける。

数分ほど前に蘭と話した会話がふと蘇ってきた。

必ず助ける？ 確信のないことを何故言った？ だからいつも口だけだと言われるんだよな。

そして元気な子供たちの笑顔を思い出す。あんなに輝いている彼らを闇に突き落としたのは俺だ。未来ある子供たちを殺してしまっているのか？ ……いい筈がない。

人数的に考えてもあつちは6人。やっぱり志保を殺すべきなのか？

いや、考えただけでも胸が張り裂けそうなのに……。

それから志保の笑顔が浮かんできた。優しく笑う志保の顔が本当に大好きだ。

でも。

——新一お兄さん、歩美怖いよ……。

——僕たち死んでしまうのでしょうか……？

——俺、もっとやりたいことあったのによお……。

志保を撃つ？

——子供たちだけでも、せめて子供だけでも助けてくれんか。

そうすればみんなは助かる。

——早く助けに来なさいよ、新一君！

助けないと。

——信じてるからね、新一。

みんなを。

決めた。

仲間を助ける。

愛する人を、

この手で消す――。

拳銃を胸ポケットに入れ、グツと足に力を入れて立ち上がるが上手く前へ足を踏み出せない。震えてばかりいる。

心臓は良く分からない痛みがして苦しい。息をするのもやっとだった。いつの間にか汗を掻いていた。腕の袖でおでこの汗を拭き取る。気を確かに持ち、一步一步歩く。

神経が麻痺しているかのような感覚に囚われた。でもここで負けてはいけないんだ。どちらかを選ばないといけないんだ。

俺は今決めただろ？ みんなを助ける方を。

この選択が正しいかどうかなんて誰にも分からないこと。探偵としたい選択をしたと信じて俺は最大限の力を振り絞り志保のいる隣の家の地下室に向かった。

「……やるしか、ねえだろ」

そう自分に言い聞かせながら。

「愛してる」 【前編】 (新志) (後書き)

後編もどうぞ↓

「愛してる」 【後編】 (新志) (前書き)

続き。

「愛してる」【後編】（新志）

地下室のドアの前に立つ。ドアノブを掴む手が震える。ドアの向こうからはキーボードを打つ音がカタカタと聞こえてくる。

ドアノブを回し、中へ入る。

「あら、工藤君」

いつもと変わらない顔で志保は俺に話しかけてきた。

「今ね、やっと試作品が完成したのよ」

彼女は回転式の椅子を回して、俺の方を向いて小さな薬の粒を見せてくれた。

「……人の役に立つ薬を作ろうと思ってね。これは、癌を治す薬なのよ」

彼女の笑顔はしっかりと未来を見据えていた。俺には未来なんて、見えない。

「どうしたの、工藤君？」

さすがにここまで黙っていて真っ青な顔をしていたら志保も心配してきた。

話そうにもどう話したらいいのか分からず声を出す勇気がなかった。

「何があったのかは知らないけど、落ち着きなさい」

彼女は俺をベッドに座らせるように手招きした。ゆっくりベッドに腰を下ろす。その隣に志保が座る。

志保は何も言わずに俺の手にそっと触れる。その温もりが心地よくて。俺は志保と居ればどんな病気でも治ってしまいそうだ。さっきまで震えていた手が落ち着きを取り戻した。

「大丈夫？」

「……ああ」

大丈夫なわけじゃないか。でも彼女に心配させたくなかった。

「何があったの？」

「蘭たちが捕まったんだ」

「、え？」

志保の瞳が揺れた。

「やっぱりあの招待状は偽物で、その場所に行ったら拳銃を持った男が3人いたんだ。それで爆弾を仕掛けられた倉庫に今閉じ込められている状態らしい……。爆弾は時限式になっていて、0時に爆発する」

時計を見ると夜の10時。家に来るまでに相当時間がかかったらしい。

「そん、な」

信じたくない、きつとそう言いたいのだろう。俺だってそうだ。でもこれが現実。

「貴方、誰からそれを聞いたの？」

「今家に帰ったら男が1人いてな。そいつらの仲間なんだ。それで携帯電話を渡されて、蘭と話したんだ……。他のみんなの声も聞こえた」

思い返すだけで気持ちを支えてられなくなる。

俺がずっと黙り込んでいたら、志保は俺に向かって怒鳴った。

「貴方、探偵でしょ！？ みんなを守るんじゃないの？ 早く助け

に行かないと!」

「俺だって……、俺だって早く助けてえよ!」

早くあいつらを恐怖から解放してやりたい。

「なら、」

だけど。

「でもそんな簡単なことじゃねえんだよ!？」

また俺の手が震え始める。

志保は俺がいきなり大声を出したから少し驚いてこちらを見る。

「あいつが出した、条件があるんだ。この条件をクリアしないと爆弾は解除してくれない」

——工藤新一、お前がその拳銃でシェリーを撃ち殺せ。

あの男の冷たい言葉が蘇ってきた。

「どんな条件よ？」

胸ポケットに手をつ込みさっきあの男から渡されたそれを取り出す。右手で強く握んだ。

志保の瞳はそれを見た瞬間、大きく揺れた。

「……それ、」

「その男に拳銃を渡されて、言われたんだ……、」

声が、震える。わけの分からない感覚に囚われる。

「お前の手でシェリーを、撃ち殺せ、って」

しんとした部屋に俺の言葉が響く。

その言葉聞いた志保の手は少し震えていた。やっぱり怖いよな？

「その男は薬を作るまとめ役だったらしい。志保が組織から抜け出したせいで研究が進まず、あの方に見捨てられた……。だから志保に恨みを持つてるって言ってた」

俺がそう言い終えると志保はこちらを見た。あまり動揺しておらず、覚悟したような表情だった。

「じゃあ、早く撃ちなさい」

「撃てるわけねえだろ！」

自分が情けないとさえ思う。6人の命を助けるために1人の命を奪うことさえできないのか。このままではどちらも失うという最悪な結末になってしまいそうだ。

「だって、だって全て私のせいじゃない！」

志保はそう叫ぶ。

「私がいるから。私が死んでいればこんなことにはならなかった。そうでしょ？」

彼女は拳を強く握る。

「……私の命はあのガス室でなくなるものだった筈なの。ここまで生きてこれたのも奇跡なのよ。だから、後悔なんてないわ」

「違う……。お前だけのせいじゃない。俺にも責任がある」

そつと志保の手を握る。

「……言っただろ？俺がお前に告白した時、1人で抱え込むなつて」

俺は笑顔の志保が好きだから。

「そうね」

長い沈黙が続く。

早く覚悟を決めないと。今頃みんな俺の助けを信じて待っているんだ。裏切るわけにはいかない。

でも、そのためには目の前にいる彼女を、この手で殺さなければいけない。

「工藤君、考えないで。今だけは私をただの犯罪者のシェリーだと思いなさい。貴方は探偵。罪人を許してはいけないのよ?」

今だけは犯罪者と思え? 無理に決まってる。

俺の隣にいるのは、俺がこの世で一番愛している宮野志保。それ

以外の何物でもない。

「それが無理だと言うなら、私が自分で撃つわ」

彼女はゆっくりと呟く。

「……それは、無理なんだ。あの男はいつでもお前たちは俺の監視下にある、そう言ってたから。もし志保が自殺したとバレれば条件を果たしてないとらえられて爆弾を解除してくれないかもしれない。どちらも助けられないのが一番嫌なんだ。それに、」

もし犯人が見ていたとしたら、その可能性も低くはない。そうしたら、一度に7人を失うことになる。無理だ、俺には。

「お前に、人殺しはして欲しくないから」

「……自分の命を絶つだけじゃない？」

「殺すのに自分も他人もねえよ。自殺だって立派な人殺しだ」

志保は悪いやつじゃないんだ。人殺しなんてしたことない、優しいやつなんだ。ただ、奴等のせいで少し闇に染まってしまっただけ。

志保は、綺麗なんだ。

顔も、性格も、身体も、心も、全て。

綺麗なんだ。

汚すわけには、いかない。

「そう」

と言って彼女は続ける。

「……私、本当に幸せよ？ 貴方が隣にいてくれて。ただそれだけが本当に嬉しいことだった。神様に感謝しないとね。奇跡を起こしてくれたんだから」

少しばかり遠くを見て今までのことを思い出すようにして彼女は今の気持ちを俺に伝えてくれた。

志保が隣にいる。

本当にそれが俺の幸せだ。これ以上なんて望まない。だけど、どうして神様は俺の幸せを奪おうとする？ 俺は神様に感謝なんて出来やしない。

「貴方に殺されるのなら悪くもないって思えるわ」

彼女は無理に笑おうとしていたが、瞳は笑っていなかった。

「……でも、やっぱり辛いわ。工藤君と一緒にいられないだなんて」

俺の手に触れる彼女の手は震えていた。

ぽた、とその手に雫が落ちてきた。

隣にいる志保を見れば声を出さずに泣いていた。ぽたぽたとその涙の雨の量はだんだんと多くなってきた。

「志保……？」

彼女はギュッと俺の手を握る。

「……貴方と、生きたかった、もっと、ずっと、一緒にいた、かった……。幸せに、なりたかった」

震えた声で彼女は本音を呟く。

「死にたく、ないわ」

志保の震えた声が俺の胸をきつく縛り付ける。愛する彼女が苦しむこと、それは俺の苦しみでもある。

言葉よりも先に身体は動く。彼女を自分の方に強く抱き寄せる。彼女の顔を自分の胸に埋め、頭の後ろと背中に腕を回す。拳銃は自然と手から落ちる。

「……逃げようぜ」

感情に任せることしか出来ずにその言葉が口に出た。わかってい
る、みんなを裏切る選択だと。だけど俺は志保を失いたくないんだ。

「何言ってるのよ、貴方、それでも探偵？」

「嫌なんだよ、志保が苦しむのが。志保のためなら俺はなんでもで
きる。信じてる人達を裏切ることだって……できるかもしれねえ」

本当、最悪な探偵だよな。こんなのは探偵って言わないよな？

「それじゃあ、私のお願い、聞いてくれる？」

「ああ」

なんだって聞いてやる。望むのならばお前とここから逃げてもい
い。

彼女の願いは――。

「私を、殺しなさい」

「……え？　な、なんだよ、それ！？　お前、死にたくないんじゃないのかよ？」

思わず強く抱き締める。志保は嫌なことを望むのか？　今くらい我儘になってもいいのに。

「死にたくはないわよ。……でもね、私は何よりみんなに恩返しをしたいの。今の私がいるのはみんなのお陰だから、助けてたいの」

だから、彼女はそう言って、

「私を殺して」

彼女は抱き締め返してくれた。

それは数分の時間だった。この温もりが無くなるのか？

そっと身体を離すと彼女は笑っていた。この状況で笑顔を作れる彼女はすごいと思う。俺は、笑えない。

「……わかつ、た」

決めなければいけない時がいつか来るんだ。もう、迷わない。志保があいつらを助けたいと言うのならば。

「工藤君、」

俺が下を向いていたならそう呼ばれたので顔を上げた。

その瞬間、唇に温かい感触を感じた。それは志保の唇だった。

突然過ぎて頭が真っ白になった。ただ嬉しい、それだけだった。

「大好きよ、工藤君」

唇を離して彼女は俺に言った。

やっぱり好きだ。たまにしか本音を見せない彼女だからこそ好き

なんだ。その本音がすごく嬉しい。

だから俺も奪ってやった、彼女の薄紅色の綺麗な唇を。

もうキスすることもできない、そう思うと唇だけでは俺の感情は収まらなかった。

次は彼女の口に自分の舌を忍び込ませ、彼女の舌と絡める。深く、大人のキスをする。

志保は苦しそうに、んつと唸るが俺は構いもしなかった。

最後くらいは俺のしたいようにしていいよな？ 欲が満たされるまでに。

「俺は、愛してる」

俺がそう言えば彼女はありがとう、と言って笑った。いつの間にか彼女の目から涙は消えていた。

でも、少し俺は彼女も“愛してる”と言ってくれると思ったが考
えは甘かったようだ。最後までその言葉を聞きたかった。でもそ
れを聞いたら撃てなくなったかもしれないから、聞かなくて良かつ
たのかもしれない。

ゆっくり拳銃を拾い上げる。軽いもののなにとても重く感じる。

ガタガタ震える拳銃を握る手に彼女は優しく触れる。

「ただ、心残りなのは貴方に人殺しをさせてしまうことね……」

人殺し、そうだな。

「でも、勘違いしちゃう駄目よ？ 貴方は正義なの。悪じゃない。み
んなを助けるために私を殺すの。だから、あんまり自分を責めない
で。私も嬉しいのよ、人を助けるために死ぬのだから」

俺は責めるよ、自分を。後悔もするだろうな。

そう考えると俺の瞳から涙が溢れてきた。泣きたくなんかないの

に、止まらない。

「……ごめん、」

「謝らないで」

彼女は優しい笑顔でそう言ってくれた。

銃口を彼女に向ける。

「……じゃあな、志保っ。明美さんに、会えると、いいな」

涙が頬を伝う。自分でも情けないと思う。でも、止められねえんだ。

「そうね。……工藤君、ちゃんと生きるのよ？ 私の後を追おうだなんて馬鹿な考えは絶対にダメよ」

それも少し考えていたりした。でも嫌だろうな、志保は。

「ああ。わかった」

人差し指に力を入れる。

怖い、でも彼女の方が怖いんだ。

それに俺を頼りにしているみんなが待っているんだ。

もう、後戻りはしない。

「……本当に、本当に、幸せだった。楽しい日々をありがとな、志保」

「ええ、私も幸せだったわよ」

彼女は最後にとびきりの笑顔を見せてきた。俺の心に強く刻まれる。

「さよなら、志保」

銃声――。

彼女はベッドにぱたりと倒れ込んだ。志保から流れ出す鮮血が真っ白なベッドを赤く染める。

そんな中で彼女は僅かな力を振り絞り、一言俺に残した。

小さな声だったが、しっかりと俺の耳に届いた。

「
」

その言葉を聞いた瞬間、俺の目からは溢れるほどの大粒の涙が終
わることをしらずに流れ出す。

力を無くした手から拳銃が落ち、音をたてる。だけど、俺の耳には届かなかった。

「志保っ！」

彼女を抱き上げる。

「……志保。おい、志保、聞いてんのか？ 聞こえてるんだろ？」

志保？ 無視かよ。なあ、返事しろよ、返事してくれよ。いつもみたいに笑顔でなーんてね、って笑ってくれよ！ 志保、目を開けろ、息をしろよ！！」

何を言っても無反応で、ただこの狭い地下室に俺の泣き叫ぶような声が響くだけ。

目の前で血を流し、倒れている志保は息をしてくれない。

「お願いだから、生きてくれよ、志保おおおおお！！！！」

今更後悔したって無駄なことなのに。

「嘘だろ？ 志保が死んだなんて。誰か、教えてくれよ？ 誰だよ、志保を殺したのは？」

志保を抱えた両手を見ると赤く染まっていた。
それを見て、俺の手は尋常じゃないほどに震え出す。

「……俺、か？」

そのまま床に崩れ落ちた。

「俺が、殺したのか？」

信じられなくて頭を両手で強く押さえつけ、髪の毛をぐじやぐじやに混ぜた。

「うゝわあああああああ！！！！」

愛する人を失った悲しさと人殺しをした苦しきで俺は自分を見失った。

その俺の目に入ってきたのは、さっき志保を撃った拳銃。

何も考えずとも手がそれを掴んだ。

数分前に志保に言われた言葉なんて頭になかった。

銃口を自分の心臓に向け、その引き金を、

引いた――。

弾切れだった。

「つ何でだよ？ 志保のところに俺も連れて行けよ！？ 死ぬことも許されねえのかよ！」

訳が分からなくなってきた。

未来が見えなくなり、恐怖が俺に襲いかかってきた。

俺に見えたのは、息をしない志保。

それだけ――。

――

爆弾は無事に解除されて、蘭たちは特に外傷無く助かった。

組織の残党の4人組は証拠を残しすぎたため、その後逮捕された。

FBIの助けもあり、俺は刑務所行きにはならなかった。

蘭たちが帰ってきて、子供たち以外には事情を話した。そしたらみんながみんな、自分を責めていた。

あれから1ヶ月経った今。

子供たちにはまだ事情を話していない。

博士は人の役に立つような発明を熱心に考えている。

園子はお金があるので、それを使ってもっと安全な世の中にしようとして頑張っている。

蘭はもっと強くなろうと決意し、空手に励んでいる。

俺はと言うと、志保が研究をしていた癌を治す薬を作っている。薬について一から学び直した。

探偵は止めた。血を見るとあの時を思い出してしまい、辛いから。

志保のことを振りきれた、ということはない。

今でもたまに自殺を考える。でもあの時とは違い、冷静な自分がいるので志保の生きてという言葉を思いだし思い止まる。

俺は彼女の最後の言葉を胸にしっかりと刻み込んでいる。

「愛してる」

という言葉を。

「愛してる」【後編】（新志）（後書き）

どうも、雛花です。

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

今回は執筆にすぐく時間がかかりました。

雛花のできる限りを尽くしました。

ただ、悲しいですね……。書いてて辛かったけど、志保を狂おしくらい愛している新一が好きだから書けて良かった。

ただもっと文章表現もっと上手になりたい！

……えっと、内緒さん、こんなになりましたが。悲しすぎましたよね？ 少しでも気に入っていただけたら幸いです。

では、また（^▽^）

アイスクリームシンドローム(新志) (前書き)

新↓志。 私は新志シンドロームだ！

アイスクリームシンドローム（新志）

ギラギラと太陽は輝いている。

「あちい……」

今の日本の気候について一つ文句を言ってみた。まだ6月だというのにジメジメして蒸し暑い。

Tシャツが汗ばんでいて気持ち悪い。ジメツとした俺みたいにいっまでも乾かない。

太陽は容赦無く暑い日差しを俺に注ぐ。いい加減にして欲しい。脱水症状を起こして倒れそうだ。

フラフラ歩いているとコンビニを見つけた。ゼロに等しい力を最大限に振り絞り、走ってコンビニに駆け込んだ。

中に入るとクーラーの涼しい風が吹いてきて、生き返った気分だった。

「はぁ……」

思わず声が漏れた。

取り敢えず店内をプラプラする。中に入って何も買って行かない

なんて悪い。

ふと一冊のコミックが目に入った。仮面ヤイバーの漫画……。無意識にそれに手が伸びる。

「懐かしいな」

良くあいつらと遊んだっけ、仮面ヤイバーごっこ的なことをして。

その時、宮野の顔が頭を過った。

宮野と居たら懐かしいな、なんて言いながら一緒に笑えたかな？

昨日のことを思い出す……。。

＊

とある喫茶店で俺は1人、珈琲を飲みながら本を読んである人を待っていた。

ゆったりな音楽が店の中で流れる。いい雰囲気だな、と1人納得していた。

本には目を向けているが、早く彼女に会いたくて、それしか考えられないから内容は入ってこなかった。

「お待たせ」

聞き慣れた俺の大好きな声が聞こえてきた。

「宮野、元気にしてたか？」

彼女は俺の前に座りながら答える。

「元気よ。……と言うより1週間前に会ったじゃない」

「1週間って長えから」

なんて笑ってみた。そしたら彼女はいつもの呆れ顔。

「それにしても、工藤君が選ぶにしては中々いいムードのお店ね。蘭さんに告白する練習？」

貴方らしくないわね、なんて言ってクスツと笑った。せっかく用意したムードだっていつもちゃかられて終わってしまう。

「んなんじゃねえよ」

何も打ち明けられないまま――。

かっこ悪いよな、俺。

「最近どうなんだ？ 仕事とか」

「そうね、普通って感じかしら？」

宮野は三年前、組織を潰してから、解毒剤を作ってくれた。その後、博士の家を出てここから少し離れた所で独り暮らしをしている。仕事は薬剤師をやっている。本当、宮野らしいよな。

「貴方の方は？」

宮野は珈琲のカップを持ちながらあまり興味なさそうに聞く。

「んー、まあ、ボチボチかな？」

俺の仕事は勿論私立探偵。

「小さくなる前と違ってテレビとか新聞に出ないようになったから貴方がどれほど頑張ってるか分からないのよね」

「それは、有名になることが名探偵になるってことじゃねえって気付いたからだぜ。コナンになって色々なことを学んだから」

真面目なことを言ってみると彼女は綺麗に微笑んだ。

「貴方も成長しているのね」

「当たり前だろ」

宮野とは何でも話せる。付き合いが長いからな。コナンの姿で一年。新一に戻ってからは三年、か。

“親友”というキャスティングを俺は何年演じていればいいんだろうか？ 距離感はいいけど、本音を言う辛い。

「……それであの人ね、凄いのよ。私の知らないようなことを知ってるの」

ほら、来た。また“あの人”の話だ。会うと必ず恋愛トークをされる。

「昨日ね、あの人に告白されたの。どうしたらいいかしらね？」

「どうも何も、付き合えば？」

正直なことを話さなくていつもこんなことを言ってしまう。嫌な

のに。

宮野は話しやすいつて言うけど……。俺の微妙な心の中がバレないようにしようとか大変なんだぜ？

今にも絶対に付き合うな、そう言ってしまいたいくらいだ。

「そうね、考えてみるわ」

綺麗に笑う。本当に見とれてしまうくらいに。いつ見ても、何度見ても飽きない。

この眼の奥に映るこの笑顔を俺だけの物にしたいんだ。
どうにか焼き付けられないかな？

＊

なんて昨日のことを思い出しながらコンビニを出た。

「切ねえ……」

そっとファインダーを覗いたら、想像よりずっと、ずっと遠くに君がいる気がした。昔はもう少し近かったそんな気がするんだけどな……。

いつかは誰かと何処か遠くへ消えて行ってしまう。俺はただそれを見守るだけで時間が過ぎていくのを待つことしかできないのか。

空を見上げれば青い空を真っ二つに割っていくジェット機が遙か空の彼方へ飛んでいった。

季節がどんどん過ぎていく。

そんな風に、宮野も俺の側から消えて行ってしまうと考えると余計切なくなる。

陽炎のようなぼやけている世界でも彼女だけは絶対に歪まない。眼の奥にいつもいる彼女は俺の心を全て支配する。

“友情”という名のシンドローム。

出口の見えない永久迷路のようで。今、動いて友情が壊れるのが怖い。だからいつもあと一步を踏み出せないでいる。

好きなのに――。

「あゝ」

変な声が出た。

さっき食べようと思ってコンビニで買ったアイスクリームがベタベタに溶けていた。

「やっちゃまった……」

これは悔しい。宮野のせいだ。お前のことを考えてたせいでアイスが溶けちゃったんだからな。……なんて馬鹿なことを考えたり。

こんな風にして運命ってものは待ってくれないんだな。だから、いつか時が来れば宮野だって何処かへ行ってしまうかもしれない。

そんなことを考えたら怖くなった。もう告白を受け入れたのかな、なんて縁起でも無いことを考えてしまう。

今、会いたい。

そう考えたらすぐに身体は動いた。さっきまでの猛暑での疲れなんてすぐに吹き飛んでいった。

ただ、宮野に会いたい一心で彼女の住む家へ走った。

＊

どれだけ走っただろうか。息はゼーゼーいってて上手く呼吸を整えられない。こんなに懸命に走ったのは久しぶりだ。

でも宮野に会えると思うと疲れなんて感じなかった。

ポケットから携帯を取り出し、宮野の携帯に電話をかける。インターホンだと少し恥ずかしいから。

数回コール音が鳴り、それがぷつと切れたのと同時に宮野の声が聞こえてきた。

『もしもし。何か用？』

ちよつとめんどくさそうに宮野は言う。

「今、お前の家の前」

『なんで？』

不思議だと言わんばかりの声が聞こえてきた。

「……あ、会いたかったから」

1人でそう言って、1人で照れて、馬鹿みたいに思えた。

「話があるんだ、出てきてくれ」

いつになく真面目な声で誘ってみた。

そしたら、電話を切られた。

正直、ショックすぎて死んでしまうかと思った。せめて、無理の一言くらい欲しかった。無視は、キツイ……。

「ふられた、か。まだ何も伝えてねえのによお」

後ろを振り返り、元来た道を戻ろうとした瞬間、後ろから声がした。

「何の用よ？」

少し不機嫌そうにそこに立っている宮野がいた。

「……みや、の」

「何驚いてるの？ 呼んだのは貴方でしょ？」

彼女が見れた。それだけで嬉しくて上手く言葉が出なくなった。

「お、おう」

宮野の方へ歩いて近付く。

目の前に立つと妙にいつもより心臓がバクバク唸った。何故かと理由を考えてみた。1つはこいつの服の露出度。暑いからか今日はやけに露出度が高かった。

それともう一つ。

告ろうと思ってるから。

「あ、あのよ、」

キョトンとした顔で彼女はこちらを見つめる。彼女の顔をまともに見れない。だから視線を違う場所へ移した。

「何よ？」

ああ、このまま連れ去ってしまえたなら、勢いで抱え込んだ想いも伝えられるかもしれない。

そう、ファインダーを覗いたら、手が届きそうなほど傍に君が見えたらいいな。

「告白、受け入れたのか？」

……結局言えねえ。本当、かつこ悪い。

「そのこと？ ふったわよ」

「え？」

「あの人はいい人だけど。……私には、好きな人が、他に居るし」
宮野の頬が少し赤く染まったのが分かった。

「だっ、誰だよ、それ!？」

少しの期待を持って聞いたら、

「推理しなさい。名探偵さん？」

いつものことだが、そんな曖昧な答えで返された。

「んだよ、それ」

思わず笑った。そしたら彼女も微笑んだ。

幸せは増えたって減るものじゃないから。宮野とならどんな一瞬だって煌めいて見える。

いつか、伝えるから。この胸の奥の気持ちを。ファインダーを覗いて、もっともっと近くに君が見えた頃に。

その時は“恋愛”と言う名のシンдрームに変わるかな？

アイスクリームシンドローム（新志）（後書き）

どうも、雛花です。

気付けば1週間くらい更新してなかった（笑

今回はスキマスイッチのアイスクリームシンドロームから。（去年のポケモン映画の主題歌） 久しぶりに聞いたらすごい新↓志だと感じた。 でも、途中、快↓新志じゃね？、とか思ったり（笑
まあ、新↓志ですがお分かりの人も居るかと思いますが、実は新↑志だったりします。 無理して新一を嫌いになろうと恋愛トークを始めるという可愛い志保ちゃん。

アイスクリーム食べたくなって冷蔵庫あさったら、パルムがあった。今食べながら打ってる感じです。↑いや、知らねえよ

では、最後まで読んでいただき、ありがとうございましたm（

m

D o n ' t W a n n a L i e (高校コ哀) (前書き)

コ哀、高校生。

Don't Wanna Lie (高校コ哀)

放課後、灰原と一緒に家へ帰ろうと彼女の教室へ行ったが彼女はいなかった。クラスが違うというのは本当に不便なものだ。

「歩美、灰原どこにいるか知ってるか？」

彼女は灰原と同じクラス。何度羨ましく思ったことか。

「哀ならさっきクラスの山田君に呼ばれてたよ。告白かな？」

ふふふ、なんて笑いながら縁起でもないことを言う。

「っ、どこ行っただ？」

「分からないよ、そんな」

何焦ってたんだ、俺？ 告白と決まった訳じゃねえし。灰原がオーケーするとは思えないのに。

「山田君かつこ良かったからなあ。哀、良く山田君と話してたし。オーケーしちゃうかもね」

歩美が本気でそんなことを言ってるのかは知らないが。落ち着け。

灰原が10歳も年下の奴を好きになる訳ないだろ。

「哀のこと好きなのにいつまで経っても告白しないコナン君がいけないんだよ？」

「うゝ」

言葉を返せなかった。告白する勇気がなかったんだ。

「早く告白した方が良いよ。哀はモテモテだからさ」

「分かってる」

何だろうな。恋愛事になると自信が無くなってくる。

「それと、早く哀を追いかけて良いの？ 告白されてるかもよ」

楽しそうに歩美は俺に言う。こっちは本当に焦ってんだよ。

「俺は誰にも渡さねえよ」

走って教室を飛び出した。

人にはそれぞれ様々譲れぬモノがある。それを守るために戦うのが本能なんだろうな。

＊

クラスの山田君に今日いきなり呼び出され、屋上まで連れてこられた。

「ねえ、何か用なの？」

やっと帰れると思った矢先にこんな所に呼び出されて私は気分が悪い。

「……その、灰原さん、」

彼はゆっくりと口を開けて話し始める。おどおどしていてこっちがイラッとしてくる。面倒なのは嫌いなものよね。

そう言えば、江戸川君と一緒に帰る約束をしていたんだった。もし私が居なかったら、帰っちゃってるかしら？ そしたら、この人のせいね。

……って、まただわ。気が付けば考えているのは彼のこと。好きになりすぎて辛いわ。

「俺、灰原さんのことが好きだ！」

「え？」

急に言われて正直驚いた。

「灰原さんの性格も顔も全部俺のタイプなんだよ。絶対に誰よりも愛すから！」

高校生が“愛”なんて言葉を軽々しく使って良いのかしらね？
愛は何よりも重い言葉。簡単に使ってはいけないのよ。

この言葉を江戸川君に言われたい。そんな馬鹿なことを考える私がここに居る。そんな叶いもしない夢なんて見てはいけないのに。

「俺と付き合わない？」

答えは考えなかった。考えなくても口がすぐに動いたから。

「ごめんなさい」

浮かんでくるのは彼の笑顔。

「……私にはずっと好きな人がいるの。決して届かないけどね」

可笑しいわね。なんでこんなにもペラペラと話しているのかしら？

「だから、付き合えないわ」

そう言ったら彼は暗い顔をした。

「何だよ、」

一歩、一歩、彼は後退りして私から離れ、フェンスの方へ向かっていった。

「付き合わないって言うのなら、俺はここから飛び降りる」

彼の目は本気だった。

「馬鹿なことは止めなさい！」

「俺はこれくらい覚悟して言ってんだよ。それくらい灰原さんのことを愛してるんだよ！」

そう良い放って、彼はフェンスを飛び越えようとした。

私のせいでもう人が死ぬのは嫌だった。自然と身体は動き、彼の腕を掴む。

「止めなさいって言うてるでしょ!？」

彼はにっこり笑って私を見る。でもその笑顔に身震いした。獲物を手にいれた、そんな目をしていた。

「ほら、灰原さんは助けてくれる。俺はそんな優しい灰原さんに惚れたんだ」

彼は私の腕を引っ張る。抵抗する暇もなく、私は彼の腕の中に収まった。グッと力を入れて突き放そうとするが、男の力に敵う筈がない。

「俺と付き合えよ」

彼の瞳は笑っていなかった。男がこんなにも怖いと思ったのはこれが始めてだったかもしれない。

彼は私の顎をクイツと上げて、顔を近付けてきた。

「……知ってるか？　ここで口付けを交わしたら永遠に結ばれるんだぜ」

彼の唇と私の唇の距離はほんのわずか。私は覚悟を決め、目を瞑る。その瞬間、

鈍い音が鳴った。

目を開けるとそこには頬を抑えて倒れている山田君と――。

「てめえ何しやがるんだよ？」

拳を強く握る江戸川君が居た。

「江戸川、君」

彼は倒れている山田君に向かって言った。

「さっさとここから居なくなれ。俺の拳がもう一度お前を殴る前に」

彼は必ず私のピンチの時に現れる。誰かが仕組んでいるのかしら？
だから私が彼を好きになってしまったことは仕方がないことなのよ。

「……くそっ」

山田君はそう呟いてその場を離れた。

＊

死ぬかと思った。

学校中を走り回って、やっと灰原を見つけたと思ったら知らない男に抱き締められてキスされそうになっていたから。

俺の拳は光の早さでその男に向かっていった。許せなかった、本当に。俺がこんなことを思う権利なんて無いけど、苛立たしかったんだ。

「危なかった……」

ポロツと出た本音は彼女には届かなかったらしい。

「どうして助けたの？」

好きだからに決まってんだろ。

そう言えたら良いのにな。だけど勇気が出ないんだよ。

俺はそうやって誤魔化し続けてきた。もう何年経つんだろうな？

この心にムチを打ってみようか？
今が明日を変える正念場なのかもしれない。

ゴクリと唾を飲み込む。

「……好きだから、」

身体が熱くなっていく。

「じゃねえよ。相棒だから助けたんだ。当たり前だろ？」

「あら、ありがとう」

穴があつたら、入りたいと思った。俺はどれだけ素直じゃねえんだよ。

意味分かんねえよ。何が相棒だからだよ？ 結局相棒止まりでいるのかよ？ 自分に腹が立って仕方なかった。

「さ、帰りましょう」

俺の心とは裏腹に彼女はいつも通り。何か思ったりしないのか？ まあ、しょうがないか。俺を恋愛対象として見てるわけないしな。

「帰るか」

何を犠牲に出来るか、そんなことも決められない俺にどれほどの知恵と勇気があるんだろうな？ だけど。

伝えなくてはいけないことを忘れてはねえよ？

「あ、江戸川君。あんまりムチャしないでよね。下手したら退学よ？」

別に俺はムチャをしてる訳ではない。ただ灰原を守ってるただそれだけ。

「へいへい」

少しでも変わってみせようと例えば“YES”と言ってみる。そんなことからでもチャレンジしていかねえと。

勇気と言う名の扉を開ける正念場が今なのかもしれない。

＊

「はあ？ 今日もあいつ屋上行ったのかよ」

次の日も灰原と帰ろうと思い、教室へ向かうが居なかった。歩美に聞いたら、屋上に行ったと言われた。

「また告白？」

「違うよ。今日は夕日が綺麗だから見に行くって言ってた」

ホッと一息吐いた。良かった。

「あ、そう言えば今日ね、哀が元気なかったよ」

「え？ 何で？」

「聞いても答えてくれなかった。歩美の勘だとね、誰か好きな人にふられたんだと思うよ」

歩美の勘が意外と当たることはよく知っている。でも昨日は山田とか言う奴をあいつがふっただけで、ふられてはないよな？

——好きだから、じゃねえよ。

昨日言った俺の言葉が蘇ってきた。もしかして……？ 期待していいのか？ 灰原が俺を好きかもしれないって。

「チャンスだよ、コナン君！ 告白してきな！」

歩美はニコツと笑った。

「おう！」

教室から出て行った。屋上へと向かう足は軽く感じた。

＊

灰原が見たいと思った通り、夕日は本当に綺麗だった。それよりも夕日を見て小さく微笑んでいる彼女が綺麗だと思う俺は重症なのだろうか？

「あら、江戸川君」

俺に気付いて彼女はこちらを見る。

「あのよ、灰原に話があって」

ややこしいのは世の中じゃなくて、この頭ん中。

「……何？」

失うまで気付かない、それこそが得がたいもの。

「……」

流れゆく沈黙の時。誰も教えてくれないタイミング。

俺の想いを全部ぶつけてやる。

この数年間抱き続けてきた想いを。

もう、嘘はつかない。

「俺は、灰原のことが好きだっ！」

飾りなんていらない。かっこなんてつけなくて良い。素直な気持ち
をぶつけるだけ。

「生きてると感じたいんだ」

灰原という時が俺が生きてると感じる瞬間。灰原を助けた時に俺は生きてるんだって感じるんだ。

「お前と共に歩いて行きたい」

一緒に喜んで、怒って、哀しんで、楽しみたいんだ。ずっと一緒に居たいんだ。

人生を決める正念場。

それが今かもね。

「好きだ、灰原。俺と付き合って欲しい」

告白なんて始めてだから緊張した。どんな答えが返ってくるのか。聞くのが怖かった。

……が、彼女はクスッと笑った。

「な、何が可笑しいんだよ？」

「1人で熱くなりすぎよ」

またクスッと笑われた。恥ずかしかった。

「へ、返事は？」

彼女は今まで見た中で一番綺麗な笑顔で笑った。

「もちろん、オーケーよ」

その言葉を聞いた瞬間、全身の力が一気に抜け落ちたのと同時に、俺を抑えていたストッパーも外れたようだ。

俺は彼女をギュッと抱き締めた。

「……ずっと、こうしたかったんだよな。灰原に触れたかった」

そう言ったら、意外な言葉が返ってきた。

「私もよ」

彼女は抱き締め返してくれた。

「嬉しい」

「ええ」

2人で見つめ合い、口付けを交わす。

彼女の顔が赤くなっていたが、それが夕日のせいか、俺のせいかは分からなかった。

Don't Wanna Lie (高校コ哀) (後書き)

「ねえ、江戸川君。この屋上で口付けを交わしたら永遠に結ばれるらしいわよ」

「本当か!？」

「あら、私なんかで良いの？」

「バーロー、お前が良いんだよ」

こんばんは、雛花です。最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

今日は気持ちがお休みで、1週間ぶりに更新しました！

どんわならい大好きです。正にコナンって感じで(^▽^) 歌詞

は新蘭っぽいけど、コ哀でもあります、はい。自己解釈です(笑

そして山田君の名前はきっと太郎でしょうね。↑在り来たりな 山

田君調子乗りましたよね。なんか哀ちゃんに抱きついてキスしよう

として……。許さねえ(笑 いえ、皆さん許してあげて下さい。き

っと山田君は悪い子じゃありませんから。(しかし私は許さない)

今年の映画コ哀すぎて半端なかった(*'▽'*)

どんわならいを聞くとあの時の記憶が蘇りまた見たくなる！ 早く

DVD見たいなあ。

それではまた(^▽^)

chloe (新↑志) (前書き)

新志↓新蘭っぽい。

取り敢えず今までで一番残酷描写。

無理な方は回れ右ですぐさま戻ってください！

苦しくて。切なくて。

願いはただ一つ。いつまでも信じた。

後悔はしたくない。一度きりの命を今も。

大切に抱きしめて。私の微かな吐息交じりのキスだけ。

届けたい、届かない。いつかは君と歩きたくて。

＊

気が付けば、また1人になっていた。隣に居た筈の彼の温もりがなくなつた。

繰り返し続けてる思いは、貴方への愛しさだけで。何故こんなにも苦しいのか。

ただひたすらにもがき続けても報われない悲しき願い。何故こんなにも悲しいのか。

――彼と生きたい。

何度、どれほど願ったことか？ 所詮、私は罪人な訳で、幸せになっではいけないということなのかしら？

私は幸せに慣れすぎてしまった。決して忘れてはいけない罪さえ忘れそうになってしまった。私は罪人なんかではなく、普通の人間だった。そんなことさえ思い始めた。罪を感じなくなった。

そして、全てから逃げてしまった。

そんな私を誰も見てくれない。助けてくれない。彼さえも。

私は何処へ行けばいいか。私は何を目指して生きていけばいいのか。1人さ迷い続けてた。

*

『志保、今日はどこ行きたい？』

それは日常茶飯事のことだった。彼が私の家に来て、何処かへ行こうと誘う。

『今日は家でゆっくりしたい気分なのよ。だから、1人にしてくれない？』

『え？ 俺と家で遊びたいって？ 勿論良いぜ』

わざとにも程があるだろう。こんな感じで毎日のように彼と一緒にいる気がする。

急に彼に抱き寄せられる。気が付けば私は彼の胸の中。何処よりも何よりも心地好い場所。

『今日はずっとこうしてるか？』

『それも良いわね』

クスツと笑って冗談を言ってみた。

『んじゃ、そうするか』

彼は冗談だなんて分かってないらしく、そんなことを言ってきた。でも、悪くはないかもね？

『うわ、めっちゃサラサラ』

彼は私の髪の毛を触ってそんなことを呟いた。

『これ、全部俺の物にして良いんだよな？』

『誰も良いなんて言ってないけど？』

彼の独占欲は思った以上に強くて大変だ。ただそれが私は嬉しかったりする。

『俺が良いって思ったらいいんだよ』

そんなことを彼が言い出すから、私も言ってやった。

『じゃあ、私も貴方を貰って良いの？』

我ながら馬鹿らしい。

しかし彼は、

『ああ。全部くれてやる』

そう言った。

その彼が私の元から離れてしまうなんて考えなかった。考えなかった私が悪い。

彼はずっと私の隣に居ると思いがっていた私が悪い。

*

彼の隣に居れないことが苦しくて。
彼が隣に居ないことが悲しくて。

願いはただ一つ。

彼と幸せになりたいだけ。

その願いをいつまでも信じていた。

後悔はしたくないの。

命は一度きりしかないから。

だから、何を犠牲にしても彼が欲しいと思える。

大切に私を抱き締めて欲しい。

この思いを届けたい。

でも届かない。

いつかは貴方と歩きたくて。

悪魔の悪戯のように流れていく空白の時間を隠しきれなくて。
私は膝を抱えて涙を流した。
時へは逆らえないの。

でもその時間さえねじ曲げて彼と居たい。
彼に触れていたい。

私の思いは狂い咲き乱れる。

『ごめん。別れて欲しい』

『やっぱり俺、蘭が好きだ』

抱き合ってキスをした。お互いに求め合った時間が偽りなの？

泣いてるの？
いや、泣いてなんかない……？

＊

「志保……？」

私は無意識に彼の家に来てしまった。不思議そうな瞳で彼は私を見つめる。

「蘭さんとは上手くいってるの？」

「あ、ああ」

彼は恐怖心からか、少し身体をすぼめる。

「大丈夫よ。また付き合って、なんてこと言わないから」

届かない愛を求め続けても虚しさが募っていくだけだから。

「ただね、」

暗闇をひたすらに歩き続けても何も変わらないこの感情があるの。
そんな感情が溶けて流れ落ちていく。

何を求めて、何を感じて、何を支えに生きていけばいいの？

分からない。

だから――。

「ぐあっ！」

彼の激しく苦しむ声と共に鮮血が流れる。そして私を真っ赤に染める。彼はバタリと倒れ込んだ。

「貴方を自分だけのモノにしたいの」

彼に突き刺したナイフからポタポタと鮮血が流れ落ちる。
その血が愛しさを今、鮮やかに彩っていく。

力のない無い悲しい瞳をする彼。

貴方のその目も貴方の血も全てが私の宝物。

「どういう、つもり……だ？」

彼の声は今までで一番弱々しい声。

それが愛おしい。

「振り向いてくれない貴方が悪いだけ」

私だけを見つめて。

「これからはずっと一緒ね」

さっき彼に突き刺したナイフを自分の方へ向ける。

「や、止め……ろ。志保！」

もう息絶えてしまう頃なのにも関わらず、彼は私にそう叫ぶ。

でもね、もう決めたことなの。貴方のいないここでは生きられない。向こうの世界で幸せに暮らしましょう？

誰にも邪魔はさせないから。

「――っ！」

銀の刃を突き刺した瞬間、私の身体中に激しい痛みが走った。
そして真っ赤に染まる。

苦しい。

息が出来ない。

でもこれで貴方と共に幸せになれるのよね？

「何、これ」

不意に女性の声がした。

「ら、ん」

彼は彼女の名を呼ぶ。

彼女は私を見つめている。私の手に握られているナイフを見てこの状況を把握したらしい。

「貴女が、新一を刺したの？」

「そうよ」

今更偽ることは必要ない。

「違う。志保は、何もして、ねえ……」

何のつもりかは知らないけど彼は私を庇う。

「らん、救急車を、頼む。話は、それからだ……」

馬鹿ね。もう助かる訳ないのにね。無駄に足掻くのは良くないわよ？

「うん」

蘭さんは外へ出ていった。この現場を見ているのが辛かったのだろう。

2人の人間が血を流して倒れているのだから当然のことだろう。

ああ、もう駄目。思考が働かない。終わりの時間ね。それとも、

始まりかしら？

貴方はもう私だけのモノ。

「今でも愛してる……？」

chloe (新↑志) (後書き)

あの、まず謝罪。こんなの書いてすみません m () m 今回は本当に自己満足すぎました。反省してます。

どうも、雛花です。最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

今回は seleep 様 (feat. リリイ) の曲から。

この曲が好きすぎて思わず書いてしまいました。申し訳ない。

何故新一がまた蘭のところへ戻ったかは不明。↑おい でも新一は志保ちゃんのことを好きだったはず。

今回は志保ちゃんというよりシェリー様でしたね！

本当すみません。次は幸せな結婚話でも書こうかと思っているのでお許し下さい m () m

(ちなみに、『chloe』はギリシャの牧歌的恋物語中の純真な恋人同士の女の方の名前だそうです)

s p e c i a l d a y (新↓志↑快) (前書き)

黒羽快斗の誕生日記念。

新↓志↑快、ほのぼのが無駄に長い。三人は仲良く工藤邸で同居中。

s p e c i a l d a y (新↓志↑快)

「ああ、憂鬱な天気……」

俺の口から漏れたのはそんな言葉だった。
外は雨が降っていてジメジメした空気だ。梅雨の時期は憂鬱で仕方がない。

そして、もう一つ憂鬱なのが――、

「うわっ。俺の誕生日に雨降るとかマジ最悪！ 神様許さねえ」

さっきからこんなことしか言ってない黒羽。
正直、こいつの誕生日なんてどうでも良かった。

「酷いと思わねえ？ 新ちゃん」

俺にそんなこと振るなよ。

「黒羽の日頃の行いが悪いからじゃね？」

「いや、そんなことはないっ！　だって俺怪盗止めたし」

いやいや、でもその前は怪盗やってただろ。そう言ってやりたかったが、言わなかった。どうせ変な言い訳で言い返されるだろうから。

「あーあ。せっかく志保ちゃんとデートしようと思ったのに」

“志保ちゃん”という言葉に俺の耳はすぐさま反応した。

「は？　志保とデートの約束なんてしたのかよ？」

「そりゃもちろん！」

ニカッと歯を出して笑う黒羽に少々イラツときた。まだ俺だってデートしたことねえのに。

「黒羽君、嘘付くのは止めなさい」

声をする方を向くと志保が立っていた。

蒸し暑くてジメジメした気候だからか、最近の服装は露出度が高い。胸元を出しすぎだ。すごく嬉しいことだが、あまり他の奴に見せたくないんだよな。特に黒羽には……。

てか、黒羽嘘付いたのかよ。信じたじゃねえか。

「あ、志保ちゃん！　おはよう」

「はよ、志保」

「おはよう」

軽く挨拶を交わして志保はソファに座る。隣に黒羽が強引に座る。その向かい側に俺。この座る配置には文句を言いたい。

「志保ちゃん、今日も美人だね」

「あら、ありがとう」

毎日こんな台詞。俺はもう聞き飽きた。

「志保、今日もすげえ美人だぜ？」

だから俺も負けじとそう言う。こんなことが日常茶飯事。志保も飽きただろう。

「ねえ、志保ちゃん。今日何の日か知ってる？」

「スナックの日、だったかしら？」

「へ？」

志保って変な所で天然だよな。これは黒羽、傷付くぜ。

「志保ちゃん、本気で言ってるの？」

「ええ」

ああ、残酷だぜ、志保。

「新ちゃん、俺死にたい」

「バーロー。そんなんでいじけんなよ」

でもその気持ちは分からなくない。確か三日前くらいに黒羽が教えてたし。

「嘘よ」

クスッと志保は笑った。俺の頬は赤く染まる。何照れてんだよ、俺。

「今日は黒羽君の誕生日、でしょ？」

志保がその言葉を言った瞬間、黒羽の顔は一気に明るく晴れ渡った。

「志保ちゃん！ 愛してるう！」

バツと黒羽は志保に抱きつこうとしてたが、志保はすんなりとかわした。

「さすがに、昨日言われたことは忘れないわよ」

昨日も言われたのか。しつこいんだよな、黒羽は。

「俺、本当に幸せだわ」

「そう」

好きな奴に誕生日を覚えて貰えただけで幸せになれるなんて、本当に幸せな奴だよな。

と言うか、こいつ絶対に俺のこと忘れてるよな。志保のことしか見えてねえから。

「ねえ、プレゼントは？」

「何が欲しいの？」

黒羽は即答した。

「志保ちゃんが欲しい」

だから、俺も即答してやった。

「死んでもあげねえ」

黒羽は凄い形相で睨み付けてきた。

「なんでだよ。新ちゃんのケチ！」

ケチで結構。絶対に誰にも志保は渡さねえ。死んでも手離さねえ。

「工藤君、その口ぶりはまるで私が貴方の物みたいじゃない。いつから私は貴方の物になったのかしら？」

「あ、いや……。まあ、良いじゃねえか！」

「良くないわよ」

そう言うズバッてくる言葉は俺の心をすげえ痛めるんだよな。

「だよね！　だから、志保ちゃん。俺の物になって？」

ニコニコ笑って志保に言い寄る黒羽が苛立たしくて仕方なかった。

「そうね、考えておくわ。誕生日プレゼントが私だなんてお金を使わずに済むし」

おい。何を考えてんだ、志保は。そんなにお金が恋しいのか？

「誕生日プレゼントが志保ちゃんだったらもう一生何もいらない！」

本当、幸せな奴だな。欲が無さすぎる。志保がいれば良い、か。
俺も同じようなもんだよな。

「で、新ちゃんは何かくれるの？」

「あゝ？」

「怖い。新ちゃん」

いや、だって俺がお前にあげる義理なんてねえし。だいたい、俺の誕生日はレーズンパンしか貰ってねえぜ？

「そうだな。魚で良いか？」

「ノーセンキュー！　新ちゃん、俺を殺す気！？」

「いや、魚を見て怯えるお前を見たい」

「なんか言い方が変態っ」

変態はお前だろうが。

「あ、じゃあ、今日の夕食は魚料理ね」

「えゝ!？」

志保がフフツと笑った。小悪魔ってこういうのを言うんだよね？

「ちなみに、私と付き合うことになったら毎日魚料理よ？ それでも良いの？」

うーん、と黒羽は本気で悩んでいた。大好き物と大嫌いな物が一緒に付いてくるから悩んでるんだろうな。

黒羽、心配すんな。志保がお前と付き合うことはねえから。

「それでも俺は志保ちゃんと付き合う！」

やっぱり愛の力が勝ったようだ。俺だって志保と付き合えるなら毎日レーズンパンでも構わない。

改めて愛の力の凄さを感じた。

いつものようにたわいもない話を永遠に話しているといつの間にかお昼過ぎ。

そして、外を見ると、

「あ、晴れた！」

さっきの曇り空が嘘だったかのように青空が空一面に広がっていた。

「神様！　ありがとう！」

神様許さないんじゃないのかよ？

「本当、綺麗な青空ね」

「志保ちゃんほどじゃないよ」

暇さえあれば黒羽は志保を口説いている。効果は残念ながらゼロに等しい。

「晴れてるからピクニック行かねえか？」

黒羽が急にそんなことを言い出した。

「たまにはそういうのも悪くはないわね」

お弁当作らなくちゃ、志保は楽しそうにそう言って台所へ向かった。

「あいつ、良く笑うようになったよな」

あの頃の闇が全て消えたわけではない。でも彼女は今の人生を楽しんでいる、そう思える。

「新ちゃんのお陰かな？」

「……だったら良いな」

俺はふっと微笑んだ。

＊

俺らは志保の作った弁当を持って良く来る景色の良い丘に来た。

雲一つない青空が広がっていて、とても気持ち良い。

「あー、気持ち良い！」

黒羽は両腕を上にはばさず。

「そうね」

志保は持ってきたレジャーシートを広げ、その上に座る。

「弁当食べようぜ！」

三人仲良くレジャーシートに座り、弁当を出して食べ始めた。

「青空の下で食べると、いつもよりもっと美味しく感じるな」

唐揚げを頬張りながら黒羽が喋ると、食べながら喋らないで、と志保から注意されていた。

「ああ、そうだな」

つい最近までは幸せなんて全然感じていなかった。だから、今の時間が本当に幸せでいつまでもこのままであって欲しい。

「ね、志保ちゃん。あーんってやって？ 俺が食べさせてあげる」

「おい、黒羽。調子乗んな！」

こいつはほんとくと何を仕出かすか分からないから怖い。

「嫌よ」

志保はそう言った。そうだな、良いよなんて言うわけないものな。

「でも、逆なら良いわよ？」

志保はとんでもないことを言い出した。何を考えてるんだか。

「本当に!？」

「絶対ダメだ！」

「新ちゃんは黙ってて」

黙ってられるかよ？ 絶対に許さねえし。

「黒羽君には特別に焼き魚を作ってきたの」

「え？」

なるほど、そう言うことか。

「好き嫌いはダメよ、黒羽君？」

「……は、はい」

そして黒羽は魚を食べる決意をしたらしい。

「はい、あーん」

本当、小悪魔だよな。いや、むしろ悪魔だ。何となくこいつらのやりあいが面白く見えてきた。

志保は箸で掴んだ魚を黒羽の口まで運ぶ。もちろんその箸は今まで黒羽が使ってたものだ。

それを黒羽は少し苦しみながらも飲み込んだ。

「良くできました」

志保はニコツと笑った。

やれば出来んじゃない、とすごく思った。

「志保ちゃんの味がする」

なんて黒羽が馬鹿なことを言い出した。志保の味ってなんだよ？

「あら、ありがとう」

ああ、本当に幸せってこれと言うんだよな。

みんなが笑って生きる。

俺がずっと願っていた世界。

*

青空を眺めながら三人で話していたらいつの間にか時間が過ぎていった。今はもう青空ではなく、綺麗な夕焼け空。

志保ちゃんと2人きり。

工藤には飲み物を買って来いと命令したからここにはいない。

「……で？ わざわざ2人で話すようなことがあるの？」

「もちろん、大有り！」

ずっと言いたかったことがあるんだ。

「俺、志保ちゃんのこと好きだぜ」

「何回も聞いたわよ」

「だけど、志保ちゃんには幸せになって欲しい」

それが俺の一番の願い。

「……工藤と付き合うなんて俺は認めたくねえよ？ でも、志保ちゃんの幸せを願うから。だから、俺のことなんてほっといて、工藤と付き合って良いんだぜ？」

別に間違ったことだなんて思っていない。工藤に志保ちゃんを取られるのはすごい悔しい。でも、これが正しい答えなんだ。

「その言い方だと私が工藤君を好きみたいに聞こえるわよ」

「実際そうだろ？」

「気のせいよ」

「俺にくらい、素直になってくれよ」

工藤には嘘を付いてばっか。嘘ばかりだと辛いだろう？ だから俺には嘘付くなよな？

「本当、優しすぎよ、貴方……」

「ありがとう」

優しすぎるのは志保ちゃんだぜ？　だって、俺に気使ってんだろ？　だから工藤と付き合えない、そうだよな。

「だから、な？　もうちょっと素直になれよ。空回りしてる工藤が見てて可哀想だぜ」

そう言ったら彼女微笑んだ。

「そうね」

綺麗だぜ。何よりも。

「買ってきたぜ！」

前の方を見ると工藤がこっちに向かって叫んでいた。

「志保ちゃん、素直になりなよ」

小声でそっと耳打ちした。

そして工藤が来た方向に向く。

「ほらよっ」

工藤は500ミリリットルのペットボトルをこちらに投げてきた。

俺の大好きなレモンティーだった。

「サンキュー」

あ、それと、と工藤は言って志保ちゃんを手招きしていた。そして2人で並んで俺を見た。

「な、何だよ？」

「俺と志保からの誕生日プレゼントだ」

急すぎてすごく嬉しかった。

手渡されたのは“K”の字が彫ってある小さなハート型の青色のキーホルダーだった。

「俺と志保とお前とお揃いのキーホルダーだぜ？」

そう言っ^て工藤と志保ちゃんはポッケから俺と色違いのキーホルダーを取り出して、俺に見せてきた。

工藤のは赤色の“S”と彫ってあるキーホルダー。

志保ちゃんのは黄色の“S”と彫ってあるキーホルダー。

「お前のKは快斗のK。志保のSは志保のS。俺のSは新一のS」

工藤の説明を聞きながら手渡されたキーホルダーを眺めた。

「これはね、繋ぎ合わせると三つ葉のクローバーになるのよ？」

「三つ葉？」

四つ葉の方が良いに決まってるじゃないか。なのに、どうして？

「なんで四つ葉じゃないのかって思っただろ？」

「あ、ああ」

そしたら工藤はもう一つキーホルダーを渡してきた。お揃いで何も彫ってないピンク色の物。

「お前にいつか恋人が出来たら、それにイニシャルを入れて渡してやれ。お前が恋人見つけるまで、俺らの四つ葉のクローバーは咲かないぜ？」

恋人、か。妙にプレッシャーかかるだろ、その言葉。

「一緒に幸せを咲かせましょう？」

志保ちゃんが綺麗に笑う。

俺はなんて良い友達を持ったんだ。
必ず、この恩は返すから。

「ああ」

会えるかな。志保ちゃんよりも好きになれる人に。会えたら、二度と離さない。

この仲間の証のキーホルダーを渡してやる。

「黒羽、」
「黒羽君、」

2人で微笑んで俺に言う。

「誕生日おめでとう」

俺も微笑んだ。

「ありがとう」

キーホルダーが綺麗に輝いていた。

俺の心も――。

誕生日、それは1年に一度だけのspecial day。

special day(新↓志↑快) (後書き)

快斗「恋人作れって言われても今の俺には志保ちゃんしか見えてないから辛いなあ」

新一「もっと周りを見渡せよ。可愛い子は他にもいるぜ？」

快斗「じゃあ俺に志保ちゃん頂戴」

新一「だから嫌だっつってんだろ！」

志保「……呆れた」

どうも、雛花です。最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

というわけで快斗の誕生日話。書きたかったんですよ(^▽^)
やっぱりほのぼの好きです。快↓志とか新+志+快とか好きです！
ほのぼのになると無駄に長くなる傾向が私にはあります(笑 本当、
内容薄いですよ。でも、まあ気にしない！ 書ければ良いんです、はい。

そしてそして同時にコナンという物語りを生み出した、青山剛昌先生の誕生日でもあります！

本当にありがとうございます。コナンがなかったら今の私はいなかったと思います。

一生コナンファンでいたいです！

それでは、次回はきつと前に予告していた新志の結婚話書きます！
きつと長編？になると思いますが、よろしくお願いします。
では、また！

七夕（コ哀）（前書き）

コ哀。率直に書いたからストーリー酷いわ文章酷いわで悲惨です。

七夕（コ哀）

「綺麗ね」

隣で星空を眺める彼女はそう呟いた。

「ああ」

俺は小さく相づちを打った。

“綺麗”だけでは収めきれない綺麗さだ。……でも俺は隣にいる彼女の方が綺麗だと思う。

「人の顔、じろじろ見ないでくれる？」

「なっ、じろじろなんて見てねえしっ」

そう言いながらも照れる俺がいた。

彼女を意識し始めたのは結構前のこと。だけど多分意識する前も好きだった。素直じゃなくて可愛くねえこいつが好きだった。

「お星様、綺麗だね！」

俺のところへ駆け寄ってきて、そう言ったのは歩美ちゃんだった。

「なあ、星っておいしいのか？」

「元太君、星は食べられませんよ」

その後から元太と光彦がついてきた。元太は「そうなのか？」と残念そうに言っていた。

今日は七夕。だから博士は星がよく見えるキャンプ場に連れてきてくれた。

だけど、灰原といるとみんなで来たことなんて忘れてしまう。勝手に自分で灰原と2人の世界を作る。

「ねえ、コナン君、」

歩美ちゃんが俺に話しかけてきた。

「織姫さんと彦星さんって1年に一度しか会えないんだよね？」

「ああ」

「なんかすごく可哀想」

と星空を見上げながら歩美ちゃんは悲しそうな顔をした。

「でも、それは2人がいけなかったんじゃないかしら？」

隣で平然と灰原は言った。

「おい、灰原……」

相手は小学一年生なんだからもっと増しなことを言って欲しいよな。

「でも、」

そう言って星空を眺め、口元を少し緩めた。そんな彼女があまりにも綺麗で。

「1年に一度しか会えないからこそ、会った時の喜びは大きいんじゃない？」

「そっか。そうだね」

ニコツと歩美ちゃんは灰原に笑いかけた。

「相変わらず灰原さんはミステリアスですね」

光彦の頬は紅色に染まっていた。きっと灰原の横顔に見とれてるんだろう。俺も小学生と同レベルってことか。

「なあ、みんなで短冊に願い事書こうぜ！」

元太がそう言うのと歩美ちゃんと光彦は書こう書こうと盛り上がっていた。

たまにはそういうのも良いかな、と俺は賛成した。しかし、1人だけ乗り気じゃない奴がいた。それはもちろん――。

「私はパス」

たったの六文字で可愛い小学生の誘いを断った。

「何だよ、灰原。たまには良いだろう？」

俺がそう言うとういっと顔をそらされた。

「そーだよ、哀ちゃん！」

だけど、歩美ちゃんがそう言うとう効果は絶大。一瞬にして灰原が折れた。

「しょうがないわね」

「やった！」

灰原は昔、歩美のことを妹みたい、と言っていた。だからやっぱり笑っていて欲しいんだと思う。

＊

「ほれ、これに願い事を書くんじやよ」

博士がみんなに細長い紙を配っていた。子供たちは大騒ぎ。

「ねえ、みんな何書く？」

「俺は、“うな重たらふく食べられますように”って書くぜ」

相変わらず元太は食べ物のことばかりだな。

「僕は、“もっと頭が良くなりますように”と書きます」

勉強熱心な光彦。小学一年生には見えないよな。

「私はね、“お姫様になれますように”って書こうかな？」

お姫様……歩美ちゃんには良く合うと思うな。笑顔が無邪気だし。

「博士は何て書くの？」

「わしは……、そうじゃのお。“長生きできますように”かのお？」

ハハハと笑ってそう言った。そんなこと言うなよな。博士なら長生きできるさ。

「コナン君は？」

といきなり俺にふってきた。

「うーん、まだ決まってねえよ」

実はもう決まってるけど、言うことはできなかった。

「哀ちゃんは？」

「私？ 私は、“織姫と彦星が会えますように”」

意外だった。灰原は何も書かない奴だと思ってたけど。

「ここに笹を置いておくからみんなつけたい場所につけるんじゃないぞ」
「「はい」」

＊

何だか寝つけなくて俺は外に行き、散歩をした。夜の空気がとても気持ち良かった。

歩いていくと、丘になるところのベンチに少女が座っていた。

俺はその背中に向けて声をかけた。

「灰原」

そしたら彼女はビクツと肩を震わせてこちらを見た。

「……工藤君。威かさないでよね」

「悪い、悪い」

そっちへ歩いていき、隣に腰を下ろした。

「お前も寝れねえのか？」

「貴方と一緒にしないでくれる？」

こちらを睨みつけてきた。

「空を見にきたの。ちゃんと、2人が会えるか、ね」

「ロマンチックでしょ？」とこちらを見て灰原は微笑んだ。

その笑顔が可愛すぎて一瞬硬直する。何度見てもいつ見ても見とれてしまう。

それほどに、俺は灰原のことを――。

「……ねえ、やっぱり、解毒薬飲んでくれない？」

ああ、またその話か。俺はもう飲む気なんて全くない。

「何回も言うけどよお。俺は灰原の隣にいたいんだ。だから、解毒薬は飲まねえ」

俺がそう言うのと呆れた顔をされた。

「……子供じゃないんだから、ただこねないでくれる？」

「子供だし」

そう言い返すとギロリと睨まれた。

「私はね、貴方のために寝る時間まで裂いて必死に作ったのよ？
なのに、“ いらない ” の一言で片付けられて……。私の努力は何だ
ったって言うの？」

それには、言い返せなかった。

「ごめん、本当に悪かった。でも、灰原の隣にいたいからっ」

自分は本当に我儘だと思う。別に元に戻っても、灰原の隣にいる
ことはできる。だけど、すぐ近くにいられるわけではないから。

「じゃあ、私も戻るから。だから、貴方も戻って」

「それは、駄目だ」

「どうして？」

「嫌なんだよ、俺を元に戻すためにだけにお前も元に戻るってのは」

灰原は絶対に今の方が幸せだ。少年探偵団という仲間がいて。友達もいて。帰る場所があつて。

でも、宮野志保にはない。だから、元に戻って欲しくないんだ。

「だったら戻りなさいよ」

だけど、それは無理で。

「なあ、俺が何て短冊に書いたか知ってるか？」

「知らないわよ。事件がもっと起こりますように？」

「何だよそれ」

ハハ、と乾いた笑いをする。

「“いつまでも灰原の一番近くにいますように”」

馬鹿らしい、という顔をしながら彼女は俺に言い放った。

「馬鹿な考えは止めなさい。取り敢えず、さっさと元に戻ることを考えなさい」

それだけ言い残して灰原はそこから立ち去った。その背中に向けて、「嫌だね」と呟いた。

＊

それから少しして、灰原が書いた短冊には本当に灰原が言っていた“織姫と彦星が会えますように”なのかが気になったから短冊を見に行ってみた。

一個一個探していった。途中で自分のを見て、何だか恥ずかしくなった。灰原のを見つけて、書いてある文字を見た。

“私の彦星がどこにも行きませんように”

「……素直じゃねえ奴」

空を見れば天の川は綺麗に輝いていた。きっと織姫と彦星は会えただろう。

七夕（コ哀）（後書き）

どうも、雛花です。最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

今日は七夕なので、七夕の話書きました！

素直じゃない哀ちゃんに萌え（＊´▽´＊）

眠くて仕方がない。帰りが遅かった。

早く共に幸せを書きてえ。明日文化祭。

black joke (新志) (前書き)

新志、元に戻って5年。

black joke (新志)

恋なんかじゃない。恋愛関係じゃもったいないヤツ。今さら愛情なんて言えやしない。世界中でたったひとりっぺの相棒。

＊

「最近どうよ？」

「それなりに」

目の前にはかつて相棒と呼んだ存在の彼女。一年ぶりに会った。家の外を眺めていたら嫌に目立つ茶髪が見えた。だから俺は声をかけてみた。“ちょっと寄らない？”と。昔みたいな軽いノリで。

「仕事は上手くいってる？」

「貴方に心配されたくないわ」

何だか全てが懐かしい。

もう、宮野がこの町を去ってから5年。時が経つのは早いものだ。

「貴方、蘭さんとは上手くいってるの？」

その言葉に戸惑った。目を泳がせると彼女は分かったように俺に言う。

「上手くいってないのね」

「ああ。半年くらい前に別れた」

そう言ったら彼女は驚いたような、呆れたような、上手く表現できな表情をした。

「貴方、馬鹿？」

「分かってんじゃない」

蘭の後姿をあっけなく、手を振って見ていた。あの時の蘭の後ろ姿は忘れたことがない。

こんな切ない気持ちはお前に笑い飛ばして欲しいんだよ。

「なんで別れたの？」

「一緒にいても新一が心ここに在らずって感じだから嫌だって言われた」

確かに俺は良く蘭といっても他のことを考えていた。宮野はどうしてるかな、とか。宮野と会いたいな、とか。宮野といたあの頃は楽しかったな、とか。

気が付けば心の中は“宮野”で満たされていた。しかし、決してそれが嫌ではなかった。

「それは、貴方が悪いわ」

「その言葉、失恋した俺の心にグサツとくるよ」

だけどそんな辛口のお前が良いと思う。素直じゃなくて、憎たらしいお前が。

「まあ、私の友情だと思って受け取りなさい」

そう言って冗談ぽく笑う。お前の笑顔がいつもよりもグツとキタのはどうしてだろう？

いつでも俺ら、すれ違ってたよな。お互いに素直にならなくて。

2人はズレて恋をしていた。

「なあ、お前さ、彼氏さんと別れたんだろ？」

自分の話題だけしているのがつまらなかったから俺は話題を宮野に振った。

宮野はこの町を出ていってから向こうで彼氏が出来たって園子に

聞いた。だけどそれからすぐに別れたと聞いた。その時は正直嬉しく思えた。やっぱり宮野は俺のものなんだって感じた。

「ええ。やっぱり私に恋愛なんて向いてないらしいわ」

「ふうん」

だけど俺は知ってるぜ？ そいつと別れたのはお前が強がったからだって。

俺がお前と一緒にいるなら、俺は自分を見失わないだろう。お前の愛を失ったとしたら……。

俺はどうなるんだろう？

「なあ、俺はどうよ？」

「は？」

「ほら、経験豊富だし。顔だってそこそ良いし。だけど、彼女無し。お手頃だと思わねえ？」

半分冗談、半分本気。こういう関係だからこそ言える言葉なのか？

「面白い冗談ね。だけど残念ながらお断り」

クスツと宮野は無邪気に笑う。そんな笑顔みたらホレるに決まってるんだろ。

だけど全然恋愛対象外のニクらしい軽口。いつまでこんな関係が続くのかね？

そんなこと言っても、本当は俺と居たいんだよね？ 分かっているぜ。素直じゃないもんな。

ほだされそうな心を隠して1人になった彼女は潤んで見えた。

俺とお前が付き合う。

ワルイ冗談か。それとも運命か。

2人で1人ぼっちさ。

そろそろいい頃かい。

恋をしようか？

「俺、本当はお前のことずっと愛してた」

そう言ったら宮野の瞳は揺れた。

笑えよ。そんな瞳するなよ。いつも通りに吹き出して、腹かかえてくれ。

そんな顔されたら、冗談だ、なんて言えなくなるだろう？

不覚な感情が見透かされそうで、笑い飛ばそうとした。だけど、止めた。そしたらいつも通りの俺になるから。

だから俺は抱き締めた。

今までそう出来なかった分、思いきり力を込めて。愛を伝えようと。

そしたら彼女は無言でそれに答え、抱き締め返してくれた。

「さっき言ったの、軽いジョークだから」

「あら、そんなこと分かってたわよ？」

だって今さら愛情なんて言えやしない。だけどお前を抱き締め
離さない。

「やっぱり、お前は俺のこと愛してた？」

そう聞いたらいつも通りのポーカーフェイスで答えた。

「さあ？　どうかしら？」

「可愛くねえな。そういう時は“ずっと愛してたよ、新一っ”みた
いに可愛く言うのが普通だろ？　可愛い子ぶらないと男は落とせね
えぜ？」

なんて言ってみるけど、こいつなら普通の男はコロツと落ちるこ
とが目に見えている。じゃあ、俺も普通の男なのか？

「貴方に心配されたくないわ。それに、」

意味深に彼女は笑った。

「1人の男が落とせばそれで良いの」

ははは。やっぱりお前、俺のこと愛してんだろ？

「俺も1人の女が落とせばそれで良いんだよな」

ニコツと笑ったら、彼女もニコツと笑った。

「応援しておくわ」

それってオーケーってことで良いんだよね？

そうと分かったら歯止めは効かねえぜ？　今まで我慢してたんだからな。

お前が喉の奥から手が出るほど欲しかった――。

彼女の頬に触れるだけのキスをした。

「恋をしようか？」

それから彼女の唇に自分のそれを重ね、舌を絡め合う。思うがままのキスをする。

意識なんて、理性なんて保てなくなる。そして、もう戻れなくなる。それから先は俺の本能と欲望のなすがまま。どうなるかなんて彼女にも、俺にも分からない。

もう戻れない恋をしよう。

もう戻れない恋を……。

black joke (新志) (後書き)

どうも、雛花です。最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

今回はKinKiの「black joke」という曲から。あるサイトさんでこれが新志ソングだと聞き、早速見てみたら……。

新志すぎて驚いた＼（＾Ｏ＾）／

やばいです、もう。そのサイトさんでも小説は書いてあったんですが、私も書きたい衝動を押さえきれず書いてみたら、良くわからないオワタ＼（＾Ｏ＾）／

申し訳ない、新志ソングを汚してしまった。一生の不覚。しかし雛花が満足したから良いんだっ。私の小説なんて自己満足のかたまりだっ。そんな小説を読んで下さってる皆さん、ありがとうございますますm（　　）m

これからも頑張るゾー（＾▽＾）

リスキーゲーム（新志）（前書き）

新志、冬です。無駄に長い、微妙に新一がエロい。

リスクゲーム（新志）

無事に組織を倒し、彼女が解毒薬を作り終えたのはそれから数ヶ月後のこと。俺と灰原はそれを飲み、元の身体を取り戻した。

だけど、俺は蘭に告白をしたりはしなかった。理由は分かっている。ただ、認めたくないだけだ。

そんな、ある日のことだった――。

蘭と一緒に学校の帰り道を歩いていた。今日は蘭が俺の夕食を作ってくれる、と言い出したので俺の家に2人で向かう。いつもは宮野が作ってくれるけれど、今日は作らないと言われたので丁度良いと思った。

「ハンバーグで良いよね？」

「おう」

蘭は台所に向かい、テキパキと料理を作り始める。

俺は窓から外の様子……というより、隣の家を眺める。宮野は今日、何してるのかな、と。

そしたらその家から人影が出てきた。目立つ茶髪が目に入り、すぐに彼女だと分かった。何やらたくさん荷物を持っている。

彼女が何をしたいのか、分かってしまった。

意味分かんねえよ——。

「蘭、ちょっと外行ってくる！」

「え、あ。うん」

蘭の曖昧な返事を耳に入れ、俺は外へ駆け出した。

彼女が一步一步歩く足取りは重く見えた。俺は彼女の背中に声をかける。

「おい、宮野……」

彼女は肩をびくっと震わせ、こちらを向いた。

「工藤、君」

俺の名前をポツリと呟いた。その顔は何処か悲しそうで。

「どういうつもりだよ？」

「見て分らない？」

そりゃ分かるさ。この家を、この町を出ていくんだろ？

「博士には言ったのか？」

「ええ。もちろん」

博士が止められないくらい彼女の決意は固いのか。

「どうして俺に相談してくれなかったんだ？」

「別に。ただ相談する意味が無いからよ」

彼女は冷たく俺を突き放す。

「……俺ら、相棒じゃねえのか？」

「それは貴方が勝手に言っただけでしょ？ 私たちは所詮赤の他人なのよ」

そんな言い方、酷いだろ。平然とそう言える宮野にがっかりした。

「何が、何が不満なんだ？ 何がいけなかったんだ？ お前、こ

の町が嫌いなのか？」

「不満なんてないわ。この町が嫌いなわけでもない」

「じゃあ、どうして？」

「貴方が私を苦しめるの」

宮野の口から出た言葉はとんでもないことだった。俺というと辛い？

「……俺のせい、なのか？」

彼女は首を縦に振るわけでもなく、うんと頷くわけでもなく、ただ黙っていた。

「じゃあ、俺がこの町出て行く。だから、ここからいなくならないでくれよ」

「何でそうなるのよ？ 貴方はそんなことしないで良い。私のことはほっといて。大丈夫、どうしても言うのなら、週に一度くらいは戻ってくるわよ」

行かないでくれ——。

いくら心の中で叫んでもその声は届かない。

どうせお前は、会いたいという気持ちで俺を苦しませたいんだろう？

お前のことはだいたい把握してるから。

もしかしたらいつかは宮野が帰ってくる。

もしかしたらこれは宮野のイタズラかもしれない。

もしかしたら――。

いや、こんな思惑は排除しないと。未来なんて何が起こるか分からないから。

それなら、もう、いっそ。

最低なキスをしよう――。

気が付けば、勢いで俺は彼女の唇を自分のそれで塞いでいた。

それが本当に最低なことだと気付いた時には、もう遅かった。

「さようなら」

それだけ彼女は呟き、俺から遠ざかって行った。

彼女の最後の言葉が嫌に頭の中で響いた。喉の奥から今にも出そうな「行くな」という言葉を俺は飲み込んでしまった。

言えるわけがなかった。

*

「行くなああああ！」

そう叫んだ自分の声に驚いて俺は起きた。

……夢だったのか。いや、昔の記憶がそのまま夢に現れたと言ったほうが早いな。

冬だというのに、シャツは汗でぐちゃぐちゃで気持ちが悪い。取り敢えず起きるか。

冷蔵庫から水を取りだし、コップに一杯注ぐ。それを一気に飲み干し、潤した。過去の記憶を取り払うようにして。

一度だけ、あれは本当にあったのか分からない。夢だったのかも知らない。

一度だけ、宮野と夜を共に過ごしたことがある。互いに愛を囁き合い、情欲の波に溺れていった。

その彼女が俺の側から消えてしまった。会いたい気持ちで俺は囚われた感覚。そして宮野への想いに俺の心は侵食されていく。

＊

日曜日の午前中、俺はテレビのニュースを見ながらゴロゴロと過ごしていた。

そこへ鳴り響くインターホンの音。それに俺の心臓はどくん、と音を立てる。

でも平常心をしっかりと保って玄関へ向かい、ドアを開ける。

「おはよう」

茶髪の美人な女性が俺にそう声をかける。ああ、やっぱりいつも

の宮野だ。

「はよ。ま、入れよ」

「お邪魔します」

クスッと彼女は笑った。それに俺の心臓はどくん、と反応する。こんなだといつまで持つか分からねえ。

＊

約束通り、宮野は毎週こっちに帰ってくる。それだけと俺と宮野の距離は微妙に歪みだした。

「仕事は、上手くいってるのか？」

「ええ」

「寂しくないか？」

「……ええ」

馬鹿野郎。目が寂しいって訴えてるよ。こっちが悲しくなるだろ？

「帰って来ないのか？」

「だから、なんで？」

ありきたりな言葉で踏み込む。そして毎回この答え。

「別に私がこの町に残る理由なんてないの。この町に恩なんてない。私の嫌な組織との思い出が残っているの。それに、被害者である貴方の隣にすることが苦しくて仕方がない」

宮野の説得力はすごい。本当に感心する。俺が説得しないといけないって解ってはいるけど。

「例えば、貴方の推理で捕まった犯人の恋人とかが貴方の隣にいたとしたら、貴方はその辛さに耐えられる？」

考えてみた。

『貴方のせいで彼は捕まったのよ？ 私は貴方を恨み続けます。一生許しません』

ああ、無理だ。寒気がする。

「耐えられません」

「私もその気持ちなの」

宮野の例え話は極端すぎる。それに自分は納得して手懷けられた

気にもなる。

＊

時はあっという間に過ぎ、気が付けば宮野が帰る時間になっていた。

「それじゃあ、帰るわね」

ハンガーにかかっているコートを着て、彼女は帰ろうとした。

「あ、駅まで送ってくよ。夜遅いし」

俺もコートを着込み、彼女にそう言った。

「ありがとう」

彼女は小さく微笑んだ。

＊

外は寒かった。吐く息が白くて、雪が降るんじゃないかと思ったくらいだ。

2人並んで駅に向かう。限界まで近付いてみる。だけど、越えられない。

今日もまた、彼女は右手を伸ばしてきて、俺の左手を握った。彼女のこの意味深な態度に何度考えさせられたことか。眠れなかった時もある。

きっと寒いからだろう。

あつという間に駅に着いてしまった。俺は改札の中まで入り、ホームまで行く。終電だからだろう、人は2、3人しか居なかった。

後、5分だ――。

言葉を交わすことが無くなった。やっぱり寂しいな、こういう別れ時は。いや、いつも俺は悲しんでばかりだ。彼女がいなくて。

『一番線に電車が参ります』

そうアナウンスが流れた。彼女はこちらを向き、一言。

「来週またね」

彼女は多分笑っていた。

寒く感じたのは繋いだ手が離されてしまったからか。雪がはらはらと少しだけ降ってきたからか。

電車が来た。

また彼女の居ない1週間が始まろうとしている。俺に背を向ける彼女の背中が妙に切なくて。

俺の瞳から一粒、涙が溢れ落ちた。

やっぱりダメだよ、俺。お前がいないとダメなんだ。今更気付いたら遅いのかな？ 今なら、まだ間に合うかな？

彼女が電車に乗り込もうとする。ゆれる彼女のコートへと手を伸ばした――。

そのまま彼女を抱き寄せ、離さない。

電車は宮野を待つこともなく、発車した。

流れる沈黙は嫌なものではなかった。それを破ったのは彼女。

「どういうつもり？」

「やっぱり、お前、俺の隣にいろ」

我儘だな、俺って。

「なんで？」

「理由なんて簡単。俺がお前がいないとダメになるから」

「それって貴方のためってことじゃない」

「そうだけど？」

お前なんて俺のために生きてるもんだろ？ 俺のために、居てくれよ。隣に。

「本当、訳分らない。なんで私がいないと貴方がダメになるの？」

もう、会いたい気持ちで俺を苦しませないでくれ。

「……愛してるから。愛しすぎて、お前のこと考えすぎてどうにかなるから」

狂おしいくらい愛してる。我を忘れるくらい。愛してる、宮野を。

「やっとね」

「へ?」

「やっと言ってくれた」

抱き締めてるから顔は見えないけど、きっと嬉しい顔をしているのだろう。

「貴方、帰ってきてしか言わなくて、その言葉を言って欲しかった

の」

「そうだったのか、ごめん。気付かなくて」

そう言ったら彼女は腕を俺の背中に回し、抱き締め返してくれた。

「良いのよ。私も意地張ってたし。それに貴方がそんなに器用な人じゃないって分かってるしね」

クスツと笑い声が聞こえた。結局俺のこともお前が把握しているんだな。

もう2人の間には何もない。

じゃあ。

最高のキスをしよう――。

あの別れた日と同じように彼女に口付けをした。あの日よりも欲深く。

互いを見つめ合って笑った。

「……それより、終電行っちゃったじゃない。どうやって帰れば良いのかしら？」

「帰る必要なんてねえだろ？」

「え？」

「俺ん家来いよ」

「あら、何？　誘ってるの？」

「なっ。そ、そういう訳じゃ、なくもないかな・・・」

冬なのに俺の身体は熱くなった。何照れてんだよ、俺。

「ふふ、分かったわよ」

「一緒に寝てくれんの？」

ちよつとからかいを込めて冗談混じりで言ってみた。

「ええ、良いわよ」

笑顔で彼女は微笑んだ。あ、やばい。俺、倒れるかもしれない。今は冬な筈なのに、熱すぎる。

彼女の右手を握る。

「か、帰るぜ」

照れ隠しでそうした。彼女はさっきからクスクスと笑いすぎだ。

帰りの道のりは行きとは正反対でとても幸せなものだった。だってもう離れることはないのだから。それに今夜は――。

「工藤君、何考えてるの？」

「へ？ あ、いや、今日の夜のことなんてこれっぽっちも考えてねえぜ？」

思わず口が滑ってしまった。気付いた時にはもう遅かった。

「そんな貴方に嬉しいお知らせ」

「何？」

彼女は繋がれていない方の左手でお腹をゆっくりとさすった。

「私と貴方の血の繋がった家族よ」

それを聞いた瞬間、動けなくなった。いや、ちょっと待て。こいつは何を言っている？ 頭の回転は速い方なのに理解に随分と時間がかかった。

血の繋がった家族。宮野と俺の。

「つまり、子供が出来た、と？」

「そ」

たった一言でそう返してきた。ああ、子供ね。……………って。

「マジ!？」

「ええ」

なんで彼女がそんなに簡単に言うのか疑問だが。

「嬉しくないの？」

「んなわけあるか。夢みたいで信じられねえよ。嬉しすぎる」

ニコツと笑ったら、彼女も嬉しそうに微笑んだ。

— リスキーゲーム —
F I N

リスキーゲーム（新志）（後書き）

どうも、雛花です。最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

10日ぶりくらいの更新でしょうか。待っている方がいたのなら待たせて申し訳ないです。どうにも連載が多くて。

今回は黒うささんの曲から。PV可愛い。とっても良い曲だから聞いてみて下さい。結構歌詞に忠実ですから、歌詞を見ながら小説読むのも面白いかもしれませんね。

冬。夏に冬の描写はキツイです（汗）ですから冬を感じなくてもその辺はスルーして下さい。冬にした理由はなんとなく冬っぽかったからと、『ゆれるコートへと手を伸ばした』という歌詞があるのでコートを着せたかった。それにしても今年の映画の下敷きの哀ちゃん可愛すぎたな。

今回は何か無駄に長かったですよね。のわりには内容が薄いw子供出来てたよおちは始めてだ。赤ちゃんがいる大きくなったお腹を優しく撫でる志保ちゃんを想像すると鼻血が止まらない↑その隣で微笑む新一がいるともう最高＼（＾Ｏ＾）／早く結婚しろ（笑）そしてなんか新一エロい。いや、実際彼はエロいと思いますけど↑ベットのの中の2人とかまぢやばい。2人にはアダルトな雰囲気似合う。

そして久しぶりだから後書きも長い雛花（笑）何故かテンションが高い＼（＾Ｏ＾）／

では、次回もよろしくお願いします。リクエストあったらどうぞ。書けたら書きます。後、新志ソング見つけたら教えて下さいね。

ライトラグ（新志）（前書き）

新志、花火大会。DEC*27さんの曲から。

ライトラグ（新志）

「なあ、明日花火大会行こうぜ！」

「はあ？」

この年になってまだそんなものが好きなの？、という顔で俺を見た。

「だってまだ付き合ってからデートしてねえじゃん・・・」

「付き合う前に何度か出掛けたでしょ？」

「それとこれとは別」

念願叶って宮野と付き合えるようになったのにまだデートもしてないなんて悲しすぎる。

「私、人混みが嫌いなよね。それに誰かに会ったら嫌じゃない」

「俺は高校の友達にお前を見せつけたいの」

我ながら随分我儘だと思う。

「本当に我儘ね」

「知ってただろ？」

「ええ」

クスッと彼女は笑った。

「それで、デートは？」

「しょうがないわね。行くわよ」

やっぱり宮野は優しい。俺の願いは聞いてくれるし、嫌だと言いながらも結局は付き合ってくれる。

「ありがとう」

だから、笑顔で答えてやった。

＊

それは夜空に色濃く咲いた。大きく、力強く。本当に綺麗だ。

音は肩をすくめ、遅刻してきた。

時計を見ると8時10分。待ち合わせからもう10分も過ぎていた。遅いな。

「ごめんなさい。ちょっと着替えに長引いて」

振り向くとそこにはピンク色の浴衣を着た宮野が息を切らしながら立っていた。

花火の音と共に俺の心臓はどくんと音を立てた。宮野だぞ、毎日見てんじゃねえか。なのに、今更なんで。浴衣だからか？ ……色っぽく見える。

「有希子さんに言われたのよ。初めてのデートが花火大会なんだから浴衣着ないと駄目ですよって。私は断ったんだけど、有希子さんの押しに負けてね」

今回ばかりは母さんに感謝だ。こんなに美人な宮野を見れたのだから。

「そっか」

彼女の手を握った。そしてまた空を見上げる。

綺麗に夜空に大きく花開いたらその後遅れて音が聞こえてきた。

「デートの時のさ、お前と俺みたいだ」

「え？」

「ほら、俺とお前って待ち合わせしてもどっちかが遅れて来るだろう？ 哀しいほど揃わないよな・・・」

だけど、宮野は。

「綺麗ね」

そうたった一言言った。

宮野の横顔を染める花光に俺の心臓が脈打つ。何でこんなに綺麗なんだよ。

「私たちも花火みたいじゃない」

並び笑う。

「そうだな」

つられ笑う。

そしてそっと宮野を抱き締める。宮野の白い肌に反射する虹色の

光。同時に鳴るのは俺の鼓動。

いつの間にか心は宮野に持っていかれた。

＊

彼女の左手を握り、人だかりを歩く。

「やっぱり人混みって苦手」

「大丈夫だって。俺がいるからはぐれたりはしないぜ？」

ウィンクして見せた。迷子になるから嫌だとかいうことじゃない、と否定されたけど。

（残念だけど、俺はすげえ嬉しい。）

行き交う人々がこっちを見るから。何だか良い気分になれる。宮野は美人だからみんなの注目の的になっている。本人は気付いていないようだが。

勝ち誇った気分だ。

「あ、工藤じゃねえか！」

「よっ、工藤！」

「おう、杉本に永井じゃん」

声がした方を見ると同じクラスのサッカー仲間がいた。よし、これは宮野を自慢するチャンスだ。

「あれ、そっちのお姉さんは？」

よくぞ聞いてくれた！

「こいつは、俺のか」

「工藤探偵の依頼人です」

俺の彼女、と俺が全て言い終える前に宮野がわけの分からないことを言い出した。

「あっ、やっぱりそうですよね。彼女なわけないですよ。手を繋いでたから疑っちゃいましたよ」

「これは、一応はぐれないようにです。私、方向音痴なんで」

とかなんとか言って宮野は2人に笑いかける。何だ、このもやもや。嫉妬……？ いや、そんな訳ない。

「浴衣、似合ってますよ」

「大人っぽくて素敵です」

「あら、ありがとう。工藤君、何も言ってくれないから」

そういえば、見とれすぎて何も言っていなかったかもしれない。やつぱり言ってい欲しかったのかな？ 宮野も女だし。綺麗って言われたら嬉しいのかな？

「工藤酷いなあ」

「女の気持ちを何も分かってない」

「そうなのよ」

「大変ですね、あなたも」

「工藤、推理以外は本当に鈍感だからな」

「そうですね」

みんなして俺をけなしにかかる。別に杉本と永井に言われるのはどうってことないが、宮野に言われると傷付くぜ。

「黙って聞いてれば俺の悪口を楽しそうに話してんなあ」

今の俺はちょっと怖い雰囲気かもしれない。

「ゲッ！？」 工藤がキレた」

「落ち着けよ」

「宮野にちょっかいだすな！」

楽しそうに話しているこいつらに俺はヤキモチをやいているみたいだ。子供だな。自分が笑えてきた。

「あなた、宮野さんって言うんですね。今度夕食でもどうです？」

杉本は少しばかり、いや、随分とふざけたことを口にする。俺の怒りは頂点へ登った。

「行くぞ、宮野っ」

強引に彼女の腕を引っ張ってあまり人のいない所へと走って移動した。

*

遠くまで逃げてきて、河原にたどり着いた。2人並んで歩いた。宮野の左手を握って。水面に移る花火もやっぱり綺麗だった。

8月の生ぬるい風に乗って虫たちが踊る。

そのまま無言で歩いた。たまに宮野が俺の顔をちらちらと覗き込む。

「……工藤君。怒ってる？」

「……」

「ちょっと、聞いてるの？」

「……」

「何か言ったら？」

ちょっと口調が強くなった彼女の方をくると向いて、繋いでない方の腕をがっしり掴んだ。その勢いに任せて彼女の唇を自分のそれで塞いだ。

「ん・・・」

唇の隙間から彼女のか細い声が聞こえてきた。それが何だか幸せだ。

言葉より、こっちの方が伝わるよな。

唇を離し、彼女に悪戯っぽく微笑んだら呆れた顔をされた。

「宮野、綺麗だぜ。浴衣姿・・・」

やっぱり聞きたかったんだよな、この言葉。彼女は少し頬を赤く

染めた。

「あ、」

彼女の手には蚊が止まっていた。俺と宮野の空間に入ってくんなよ。そんな意味も込めて睨みつけてやった。だからといって、上がった心拍数は下がっちゃくれない。

そしてまた大玉が夜空を綺麗に染め上げていく。その度に可愛くなる彼女の顔と、その度に赤くなる俺の顔。

彼女に気付かれていないか心配だった。照れてると知られたらかわれるに決まっている。

だからその照れを隠すために彼女をこちらに抱き寄せた。背中に腕を回し、ぎゅっと抱き締めた。そしたら彼女もそれに答えて俺を抱き締める。

耳には花火の打ち上げられる音。そして横目に花火が見える。

綺麗だ。

花火も、花火を見て微笑む彼女も。

俺の心臓と彼女の心臓とが重なる。

光と音が、お前と俺が。

愛を唄うカルテットのよう。

2人の間に隙間はない。

「工藤君、顔が赤いわよ?」

「この花火のせいだよ」

いつもなら夕陽と答えるところだが、今は夕陽なんてないし、まさか宮野に照れてるなんて言えない。

だからこんな綺麗な花火のせいにしてみる。

「ふふっ。調子良いんだから」

彼女の笑顔に波打ったのは今日だけでも何十回もあった。

帰り道、俺は彼女に聞こえないように小声で、

「ありがとう。赤く赤く染まった頬を隠してくれて」

と、花火にお礼をした。

ライトラグ（新志）（後書き）

どうも、雛花です。最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

DECOさんの歌詞が素晴らしい☆ 恋人を花火の光と音に例えて、揃わない・・・って本当にセンスすぎる。だから、DECOさんの曲好きなんです（＊、▽、＊）

短編書きたい曲たくさんあるんでたくさん書きたいです！ 短編快
哀書きたいな、なんて（笑 更新頑張ります！ 感想で応援メッセ
ージとか書いてくださるとヤル気上がりますんで（＾Ｏ＾）／

ラフ・メイカー（快哀）（前書き）

快哀、短編初。

ラフ・メイカー（快哀）

——貴方のことが、好きなの。

——ごめん。お前のことは大事だけど、俺には蘭がいるから。

儂く散った私の初恋。

期待なんてしてなかった筈なのに。
ふられるって覚悟していたのに。

どうして、この涙は流れるの？

どうして、この涙は止まらないの？

*

コンコン、とノックの音が涙で濡れたこの部屋に転がってきた。

誰にも会えない顔なのに。もう、何よ。

「……どちら様？」

窓の外に広がる闇からうつすら見えたのは白い影。そこに居るのが誰かなんて簡単に予想がついた。

「怪盗、キッド？」

夜中にやって来る白い影なんてこの怪盗しか居ないだろう。一体なんの用なのかしら？

「いつもなら怪盗と名乗りますが、今日ばかりは、違う名前で名乗らせていただけますか？」

窓の外から響いてくる声はどこか工藤君に似ている。だからもしかしたら工藤君が私を元気づけるために来てくれたのかも、なんて……。あるわけないのにね。

「ラフ・メイカー。そう呼んでください」

窓越しに見える怪盗さんの笑顔。

「貴女に笑顔を持ってきました。寒いから入れてくれませんか？」

彼がふざけてるわけではないことは分かっていた。だけど、余計なことはして欲しくなかった。1人に、して欲しかった。

ああ、駄目。このままだと自分を抑えられない。貴方を責めてしまおう。

「ラフ・メイカー？ 冗談じゃないわよ！ そんなもの、呼んだ覚えはないわ・・・」

お願いだから、そこに居ないで。

「……私に構わないで、消えて頂戴。そこに居られたら、泣けないでしょ」

今日だけは、泣かせて。お願いだから、泣かせて。長いこと涙が溜まってるから。全部、流してしまいたい。

「……1人に、して」

白い影は見えなくなった。

悲しい筈なのに。私が消えてって言ったのに。どうして、こう

やって胸が締め付けられるの？

＊

コンコン、とノックの音が大洪水のこの部屋に飛び込んできた。

窓の外を見ると、また白い影。

あの人、まだ居たのね。

「まだ居たの？ 消えてって言ったでしょ？」

そしたら、ラフ・メイカーは窓の外で座り込んでしまった。

「そんな、悲しい言葉言わなくても良いだろ？」

「は？」

「そんな言葉言われたのは生まれてこの方初めてですよ。哀しくな

ってきました」

ラフ・メイカーは今にも泣きそうな声で言ってきた。私を笑わせに来たんじゃないの？

「……ど、どうしよう？ 泣きそうなんだけど」

急に素の自分に戻り、そう呟いた。ああ、この人について行けない。笑わせに来たんじゃないのかしら？

「貴方が泣いてたら仕様がなしでしょ？ 泣きたいのは、私の方よ」

貴方の相手をしているのも疲れるわ。貴方なんて、呼んだ覚えはないのに。

工藤君に来て欲しい、なんて馬鹿なことを考えている私が腹立たしい。

2人分の泣き声遠く。

*

ドアを挟んで背中合わせ。怪盗さんの存在を感じつつも、抑えられない感情が溢れ、しゃっくり混じりの泣き声になる。

膝を抱えて背中合わせ。泣き疲れた私と彼。

それでも、止まらない。ああ、私はいつの間にかこんなにも彼を好きになっていたのか。

「ねえ。まだ私を笑わせるつもり？」

背中越しだから見えないが、多分涙を拭っていた。それから喋る。

「勿論。それだけが生き甲斐なんだよ。笑わせないと、帰れねえ」

本当にそうなのだろうか？ 怪盗なんだから怪盗をやっているならば生き甲斐を感じられる筈なのに。何だか分からない。

分からなくて、当然だけど。

＊

今では貴方を部屋に入れても良いと思えた。随分時間が経って、

涙も枯れてきたし。寂しいからかもしれない。この数時間の間に貴方を知りたくなった。それよりも、工藤君に良く似た顔で、声で、慰めて欲しい。

ドアを開けようとした。

こっちは開かないみたい。溜まった涙の水圧かしら？

「ねえ、そっちからドアを開けてくれない？ 鍵ならもう開けたから」

さっきと変わらぬ態勢でそう言った。

「ちょっと、怪盗さん？」

そう呼び掛けても、返事がない。

「何か返事してくれない？」

無言で、何も帰ってこない。沈黙の時間だけが淡々と流れていく。

どうしたのかしら？ まさか・・・。

後ろを振り返るとそこにいる筈の怪盗さんは、

居なかった――……。

「……所詮、そんなものよね」

私を助けてくれる人なんていない。みんな助けようとはするけど、私の冷たい態度を嫌って私の周りから居なくなってしまう。隣にいて欲しいとどんなに願ったって叶わない願いなの。

悲しい？ そんな感情、当の昔に捨てたのに。

一人で生きていくの。仲間なんて、友達なんて、居なくても……。

……居なくても？

いつの間にか私の目に熱いものが込み上げてきた。さっきたくさん流したばかりなのに。

今更、ラフ・メイカーは私を1人置いて消えてしまった。信じた
私がいけなかったの？

バリントー！

窓ガラスの割れた音がしたのはさっき怪盗さんがいた窓とは逆の
方向。

——やっぱり、信じることって悪くない。

「おめえに笑顔、持ってきた！」

涙で顔がぐちゃぐちゃで、だけど笑顔なラフ・メイカーが鉄パイプを持ってそこに立っていた。

ポケットから彼は小さな鏡を突き付けてきて、一言。

「おめえの泣き顔、笑えるぜ？」

そこに映っているのは目の前にいる彼と同じように涙でぐちゃぐちゃの顔の私。

呆れた……。だけど、なるほどね。

「ふふっ」

笑えた――。

＊

ポンッ！

彼が指をパチンと鳴らすと、薔薇の花が現れた。彼お得意のマジックだ。

「哀ちゃんに涙なんて似合わないぜ？ 笑顔でいらないとな」

そのためには人の力が必要なのよ？ 私を笑わせてくれる。いや、工藤君を思い出さなくらい私を幸せにしてくれる人の力が必要なの。

「じゃあ、貴方は私の隣にいて、私を幸せにしてくれるの？」

図々しいのなんて百も承知だ。だけど、人付き合いが苦手な私にはそうすることしか出来なかった。

だけど、彼は笑顔で……、

「それが俺の本望だ」

そう言った。

工藤君と同じで貴方も優しいのね。

私の手の甲に彼は軽く口付けをした。これが始まり。

「これからよろしくね、怪盗さん？」

ラフ・メイカー（快哀）（後書き）

どうも、雛花です。最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

今回はBUMP OF CHICKENの曲です。ニコ動でコ+快のやつがあって、あれ見て泣きました（笑　そして曲に惚れて書いた。

キッド祭りすごいなあ。スタッフ力入れてるよねえ。

何となく今回気に入ってないので、ちょっといつか修正するかもです。

ラジカル男女の唄(新志) (前書き)

新志、20代前半。※バッドエンド。エロ表現あるので苦手な方は戻って下さい。

ラジカル男女の唄（新志）

『此処に今崩れそうなラジカル男女の唄』

そこはヘンテコな形をした家の隣にあるいかにもお金持ちの家。
表札に書いてあるのは、“工藤”の文字。

しかし今、この家の中にいるのは若い男女の2人。そして時は夜。
この時点で彼らが好ましい関係ではないことが分かる。

「どうした、宮野？」

20代前半くらいの男が、これまた20代前半くらいの女に話しかける。

女は決まって男の元を訪れる。

「言わなくても、分かるでしょ？」

毎晩のように女は男の元を訪れる。ただ一つの目的のためだけに。

「・・・ああ。どうせ、やりに来たんだろ？」

そう言っている男は何処か嬉しそうだった。

「仕方がないことじゃない」

そう、彼らにとっての行為は、仕方がないことなのだ――……。

＊

始めに彼らが身体を重ねたのは、あの日。解毒薬が完成してから数日経った後。

「俺さ、やっぱり蘭と付き合うのは止めにするわ」

元の身体に戻ってから久しぶりに男がやってきたかと思えば、急にそんなことを言い出したので、女は驚きの表情を見せた。

「は・・・？ 貴方、馬鹿なんじゃないの？ 可笑しいわね、薬に

脳を壊す作用なんてなかった筈なのに」

「おいおい」

男は乾いた笑いをする。

「本当にそれで良いの？」

「良いも何も、俺が決めたんだ」

「理由は？」

ぴくりと男の眉が動く。言いたくない理由でもあるのか。

「それは・・・」

「言えないの？」

「ああ」

正確に言うと言いたくないのだ。この男は蘭という女性とは別に、愛してしまった女がいたから――

「そうだわ。貴方に一つ、言っておかないといけないことがあるわ。薬の、副作用について」

男の顔はいつもより真剣になる。今日ここに来たのはそれを聞くため。前々から副作用は何かしらで現れると言われていたから。

次の女の言葉で男は硬直することになる。

「性欲が異常に強くなるみたい」

「・・・へ？」

こんなこと言われて平常心を保てる人の方が少ないだろう。

「その、急に言われても、」

男は動揺で目を泳がせる。

「言わないといけないことでしょ？」

「そりゃ・・・」

その副作用は勿論、女にもいえることだ。それでも何くわぬ顔をしていられる女は随分と肝が据わっているようだ。

「多分、そろそろ作用が現れる頃よ。まあ、蘭さんにでも頼みなさい。解毒薬の副作用だからって言って」

「んな。言えるわけねえだろっ」

一気に顔を赤める男。それにしても、女はさっきの男の話を聞い

ていなかったのか。男は確かに、“蘭とは付き合わない”そう言っていた筈だ。どうやらこの女は男に蘭という女性の元へ行っ欲しようだ。

「てか、蘭とは付き合わねえって言ったろ？　もう俺は決めたんだって」

そう男がいうと、女は呆れた顔をした。

「じゃあ、副作用の性欲はどう処理するつもりなのかしら？」

「うゝ」

痛い所を付かれた。そうだ、副作用はどうするのか。この男は顔も良いし、その辺の女性に話しかければ、すぐに相手は見つかるだろう。だけど、彼には好きでもない女性を抱けるような技術は持ち合わせていない。

好きな女しか抱けない――

どうやら男は意地悪な性格らしい。口元を斜めに釣り上げて、微笑んだ。

「居るじゃねえか、いい相手が」

「何処に？」

「此処に」

男が指差したのは、目の前にいるその女。女の綺麗な瞳は揺れる。予想もしていなかった言葉だった。

「お前だって性欲の作用は現れるんだろ？ 丁度良いじゃねえか。俺も相手を探している。お前だったら男を捕まえることなんて雑作も無いだろうが、好きでもない男を抱けるわけないよな？」

この男の話は辻褄が合っている。これが良い案だろう。相棒として過ごしてきたから他人を抱くよりは、ましだ。

まあ、男は本当に抱きたかったのだろう。事実、女もきつとそう
だ。

「名案だろ？」

男は女の返事なんて待たなかった。

偶然、いや、多分運命の悪戯だろうか。ベッドはすぐそばにあった。女が言葉を発する前に、男は女を押し倒す。

「・・・ちょ、」

もう男は副作用に蝕まれていた。速くなる男の鼓動。

男は女の薄紅色の唇に自分の唇を強く押し当てた。

「くど、くん・・・」

途切れ途切れに、甘い吐息で女は男の名前を呼ぶ。

男同様、女も副作用に蝕まれていたのだ。女の目はとろけ始める。

瞳は互いに互いしか映さなくなる。

男も女も、本当の胸の内は話そうとしないで隠し続ける。

この男女は2人の間に“愛”なんて存在しないと思っている。しかし、そういうわけでもないのだ。

お互いに何も言わないだけで、

2人は愛し合っていた――

この日からだ。度々身体を重ねるようになったのは。

そこに愛なんて存在しないと思いながら。

＊

「・・・ん、あっ」

狭くて暗いこの部屋に響く女の吐息混じりのイヤらしい声。

「みや、の・・・」

白いシーツに身をくるめた生まれたままの姿の男女。男は女の首

筋に舌を這わせる。

『人恋しいの』

女は言う。甘いユメを秘めて。

『此方へ御出で』

男は言う。色欲隠し。

例えるなら、まるでひらひら舞い落ちていく降り積もる雪のよう
に。

同じ色に染められていく。同じ気持ちを携えながら――

「宮野、愛してる」

「面白い冗談ね・・・」

愛の唄を呟いてみたって、乾いた男女には響くこともない。

「私たちは副作用のせいで仕方なくこうしてるんだもの」

「そうだな」

物寂しさを持て成すように、何かと理由を付けて抱き合うのでした。

『物足りないの』

女は言う。愛の無き声で。

『大丈夫』

男は言う。まことしやかに。

「なあ、やっぱりこれって運命だよな？」

「ふふ、変なこと言い出すのね」

女を抱き締めながら男は囁く。それから唇を塞ぎ、舌を絡め合う。

「俺らが巡りあったのも運命。俺らが共に戦うことになったのも運命。……こうして身体を重ね合うことになったのも、運命」

“運命”なんて。

そう名付けて良いのだろうか？

愛想無き、2人の行為は寂しさ掃き出して、重ね合わせて――

「愛なんて、私の間には無いのにね」

「まあ、そうだな」

2人は欲しかったのだ、愛が。

しかし、願うだけで咲いて萎れて。

心の哀しさを埋めるために、身体を求めた。本当に欲しかったのは、身体ではなく。自身の心を満たしてくれる本当の愛だった。

しかし、互いに何も気付かず。いや、気付いていたのかもしれない。

素直ではない男女は何も言わず、ただ自分だけが哀しいのだと、そう感じていた。

向こうはただ、異常なほどの性欲を処理するだけなのだ。・・・。

そして男女は、哀しさを埋めるため。毎晩のように、身体を求め合う。

欲しい。自分だけのモノにしたい。

行き過ぎた男女のカタチだけの“愛”は最悪な結末を迎えることになる――

本当の副作用は、“哀しさ”だったのかもしれない。

＊

その姿はまるでラジカルな原子のように男女は、

「・・・愛してる」

不安定で――

「・・・私も、愛してる」

不完全で――

「俺だけの、モノにしたい」

欲張りで――

「じゃあ、私と心中する・・・？」

哀れな――

「・・・するか」

行きずりの“恋”をする——……。

＊

『此処に今崩れ落ちてく』

男女は毒薬を飲んだ——

男女は相変わらず、抱き合っていて。そのまま沈んでいく。

いつの日も身体を満たすだけの関係。満たされないのは自身の心。
互いの心の虚しさは気付かれぬまま。

男女が、目を覚ますことはなかった。・・

ラジカル男女の唄（新志）（後書き）

おはようございます、雛花です（＊・ω・）ノ 最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

・・・ エロい。どうしてこうなったのか。いや、歌詞がエロいからか？ いや、アダルトって言ったほうが正しい。

すこっぴ様の曲。PVが素晴らしい。なんか、素直にならない感じの歌詞が新志っぽいな。なんて思ったり。最後の歌詞がなんとなく心中したように感じたので、こうなりました。

2人は副作用に蝕まれていたんです。だから、心中したのもきつとそのせい。

やっぱり、アダルト新志好きだわ。私は全然上手く書けないけどねW 皆さんはどんな新志（コ哀）が好きです？ 答えていただけると、幸いです。

では、次回も頑張りますっ☆

今が幸せで（中学コ哀）（前書き）

中学コ哀。コナン君甘えん坊。哀ちゃん結構素直。

今日はなんの日？

今が幸せで（中学コ哀）

「俺と付き合ってください」

真剣な瞳で私にそう言った彼に思わず引き込まれた。突然のこと
すぎて、私は戸惑った。

有り得ない。

彼が私を好きになるなんて、有り得ないことだった。

“ 工藤新一を殺したのは私 ”

これが事実。

解毒薬を作ることは出来た。だけど、彼の身体は解毒薬の耐性がついてしまい、もう戻れないことが分かった。

始めは私を責めたが、彼は優しい人。こうなったのは自分のせいで全てを受け入れた。

工藤新一は死んだ、そういうことにした。そこに立ちただかるのは蘭さんという存在。待っていた人が、好きだった人が、いなくなってしまった悲しみから、蘭さんは自分を見失い、自殺をしようとした。それを止めたのは勿論、江戸川君。

その日、初めて私は彼の涙を見た。

苦しかった。自分が憎かった。死にたかった。……そんなことで私の罪は許されることはないけれど。

だから、死を選んだりはしなかった。

それから私と江戸川君の第2の人生が始まった。私は薬に耐性がないから、戻ろうとすれば、戻れた。でも、彼の隣にすることにした。罪滅ぼしのつもりで。

私たちが小学3年生になった頃、蘭さんは新しい恋人を見つけた。

江戸川君は蘭さんの幸せな姿を見て嬉しそうにしていた。

『本当は貴方が蘭さんの隣にいた筈なのにね。私のせいで・・・』

そう私が言ったら、彼は優しく微笑んで、

『俺が悪いんだ。おめえは何も悪くねえ』

そう言ってくれた。多分、この時だ。本当に彼のことが好きだと
気付いたのは。だけど、叶わぬ――許されない恋だ。

私は、その想いを閉ざした。

それから2年後、蘭さんはその彼と結婚をした。心から祝いたかったけど、私はその結婚式に行けなかった。江戸川君の顔を見るのが怖かった。好きな人が他の人と結婚するんだ。辛いに、決まってる。その時彼は言った。

『蘭が幸せになるならそれで良い』

どこまでもこの人は強い。一生、敵わない人だ。

そして中学になり、今に至る。

「・・・なんか、言えよ」

彼は恥ずかしそうに彼を赤めた。どうして、そんな顔してるの？

「なんで。何かの罰ゲーム？ からかうのは止めてくれる？」

「俺は、本気だ・・・」

瞳を見れば分かった。嘘ではないと。だけど、分からない。なんで、私を？ 工藤新一を殺した私を？

「貴方、蘭さんのことが、」

「ああ、好きだった。もう過去形だ。もう昔の話だろ」

彼は静かに話し出した。

「俺が本当にお前のことが好きだと気付いたのは、小学3年生の時。蘭に恋人が出来たって聞いても、そこまで悲しくなかった。どうしてか考えた。答えはすぐ側に合った。灰原がいたから。それに気付

いたんだ。いつまで経っても自分を責めて、俺に謝り続けるお前を守りたいと思った」

黙って私は話を聞いていた。

「だけど、灰原は俺なんかという幸せになれるのかって思った。もしたら、考えが止まらなくて。もっと辛い思いをさせてしまうんじゃないかって。……だから自分の気持ちを必死に抑えた。でも、時が経つにつれて、灰原すげえ、か……可愛くなって。中学生になると、積極的な奴もいるから、お前が告白される度に誰かに取られるって不安が大きくなって」

私と同じだ。彼のことばかり考えてしまい、自分の気持ちを伝えられずにいた。

「……だから、もっかい言う」

初めて見る彼の表情だった。顔を真っ赤にして、でも微笑んでいた。

「好きだ、灰原。俺と付き合ってくれ」

——神様、良いですか。これくらいの幸せ。犯罪者にでも、好きな人というっていう幸せくらい、貰っても良いですよね？

「……はい」

——罪は償います。彼を幸せにします。それも一つの償いですよね？

*

それから3ヶ月が経った。彼とはそれなりに仲良くやっている。

「灰原あ。お腹空いた」

「はいはい」

彼は思ったより甘えん坊で。というより、独占欲が強い。

私が告白を受け入れた次の日の学校は大騒ぎ。彼は私の側から離れないし。私が他の男子と喋っていると凄い形相でその男子を睨み付ける。それでも私と喋っていると、「こいつ俺のだから手え出すな」と一言。

そんなことだから私たちが付き合ってるという噂は一気に知れ渡った。

それから彼は一緒に住みたいと言い出した。博士は嫌がっていたが、彼は無理矢理に首を縦に振らせた。正直、私は嬉しかった。

「今日は何にしようかしら？」

「灰原の手料理ならなんでも良い」

とか笑って言う。だから、いじめてやりたくなった。

「レーズンパンでも？」

「おう・・・」

「大丈夫よ。今日はオムライスにするから」

「やった」

エプロンを着て、台所に向かう。

てきぱきと調理を進めていく。台所に来てから10分くらい経った時、急に抱き締められた。

「・・・ちよつと、料理が進まないんだけど？」

勿論、江戸川君に。

「別に良いや。こうしてたい」

暇さえあれば、彼は私に抱きついてくる。それが嬉しいのが事実だけど。

多分、彼はずっと我慢してたんだと思う。身体は子供でも、心は大人だ。女の人の温もりが欲しい年頃なのに。

私が悲しい思いをするかもしれないからって彼は気持ちを抑えたんだ。

だから、我慢した分、今は彼のしたいようにさせてあげよう。

「やっぱ灰原、料理うめえな」

「ありがとう」

「いつ習ったんだ？」

「組織でね。……なんて、嘘。お姉ちゃんに教えて貰ったの」

懐かしいわね。初めの頃は本当に下手でお姉ちゃんも呆れてたっけ。こうして江戸川君に料理を作ってあげられるのも、お姉ちゃんのお陰。

お姉ちゃん……

あれ、可笑しいわね。なんで、今、こんなに……

ポタポタと私の瞳から涙が溢れだした。それは止まらなくて。お姉ちゃんのことを考えれば考えるほど……

「……お姉、ちゃん」

突然泣き出してしまった私に江戸川君は少し戸惑っていた。

「・・・はい、ばら。ご、ごめんな。お姉さんのこと思い出すようなこと聞いちゃって」

そう言って彼は私を抱き締めてくれた。

人の温もりを求めていたのは、彼ではなくて、私だったんだと思う。

「・・・ねえ、私の側から消えないでね」

我儘かもしれないけど。私には貴方が必要なの。同じくらい、私のことを必要としてくれてる？

「ああ、約束だ」

彼の力強い言葉に私は安心した。

「そうだ、灰原」

思い出したかのように彼は言った。

「今日、お前の誕生日な」

「・・・え？」

誕生日？ 私は自分の誕生日を知らない。前に彼に言った筈だけど。

「だって、誕生日がないなんて嫌だろ？」

「別に・・・」

「俺は嫌なの」

「どうして今日なの？」

「8月18日。分かんねえ？」

「・・・語呂合わせ？」

「そ」

「親父くさいわね」

「んな・・・」

「ありがとう」

いつもの彼の優しい笑顔を思い浮かべながら、私も笑ってみた。

そしたら、彼はあの日以上に顔を真っ赤にした。「どういたしまして」と小さく言った。

「じゃあ、早速祝ってくれるかしら。名探偵さん？」

「おう」

「誕生日プレゼントは？」

ちよつとだけ期待して聞いてみた。

「あるぜ。お前が前に欲しがってたフサエブランドのウォレットだ」

どこに隠していたのか、彼はそれを私に差し出した。

「ありがとう」

プレゼントなんていつ以来だろう。本当に彼の優しさが身に滲み
てきた。

「それと、」

ニコツと彼が笑ったかと思うと、その顔が近付いてきた。自然と
私は目を閉じる。

「もう一つのプレゼント．．．」

唇が重なった。

私のファーストキスだった。彼のキスは優しく、温かい。

「今日までずっとキスしたいの我慢してたんだぜ？」

「あら、意外と我慢強いのね」

「いや、もう限界。明日から覚悟しとけよ」

「毎日キスするつもり？」

「うーん。一時間ごとにでも」

「馬鹿・・・」

こんなたわいもない会話をする日が来るなんて、組織にいる頃とは思ってもいなかった。

今が幸せで。

それだけでもう十分・・・

今が幸せで（中学コ哀）（後書き）

「もっかいキスしたい。今度はもっと深いの」

「来年の誕生日にね」

「それまで俺の我慢が持たねえよ．．．」

灰原の日＼（＾Ｏ＾）／

どうも、雛花です。最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

灰原の日とか素晴らしいわ。作った人に感謝。文才は相変わらずでストーリーも相変わらずで．．．

それにしても哀ちゃん可愛い。ちよつと最近哀ちゃん不足w

明日戦慄じゃん！　楽しみじゃん！

漆黒の銃弾【前編】（新シェリ）（前書き）

新シェリ。違う形で新一と志保ちゃんが出会ったら．．．
パラレル的なの。

漆黒の銃弾【前編】（新シェリ）

地面は真っ白。

はらはらと雪が降っている。凍えるように寒い夜。君の温もりが欲しいなんて思った。

ジンに渡された実弾入りの拳銃を目の前に立つ貴方に向けた。

さよなら、愛しい人――

「もしやり直せるのなら、また2人で何処かに出掛けたいわね」

「そうだな。でも、無理だよ」

「ええ・・・」

ごめんなさい。そんなこともう無理だと分かっているのに。

最初から、私と貴方は違いすぎた――

＊

季節は春だった。久しぶりにジンから外出許可が出て、1人で桜を見に行った。

「綺麗・・・」

桜は好きだった。お姉ちゃんが好きって言ってたから・・・
ガサツと後ろから人の気配がした。

「誰っ!?!」

振り返るとそこに居たのは、

「あ、ごめんなさい。怪しいものじゃないですよ」

黒髪で少し癖っ毛のある男の人だった。身長は私より少し高く、スラッとした体格だ。見た目からして高校生だろうか。瞳は私と違

って、綺麗な色をしていた。

これが、私と工藤君の出会い――

「桜、綺麗ですよね・・・」

「そうね」

組織以外の人と話したのなんて何年ぶりかしら？ 少し不思議な気分。

ずっと話していたかったけど、彼を組織に巻き込むわけにはいかないから、その感情を押し殺し、彼に言い放つ。

「私、貴方みたいな子供と話してる暇はないの。はやくここから立ち去ってくれる？」

普通の人ならここまで言えば立ち去るのに、彼は止まった。

「・・・貴女みたいな人、初めて会いました。ほって置けない感じがするんです。これってなんでしょうか？」

彼はわけの分らないことを言い出す。

「私は忙しいの。貴方の良く分からない言葉に付き合ってる暇はないのよ」

一步、一步。彼は私に近付いてくる。

「僕の勘違いでしょうか？　どうも貴女は無理にそう言ってる気がするんですけど」

「気のせいよ」

彼は驚くほど私の心を見透かしてくる。このまま一緒にいると、私の心を全て見透かしてきそうで怖かった。

「じゃあ、私は行くから」

彼が立ち去らないのなら、私が帰れば良いんだ。もうちょっとここに居たかったけど、しょうがない。

そしたら、彼に左腕を掴まれた。

「その、えっと、僕、探偵やってるんです。何て言うか、相談とかあったら僕に言ってくださいね」

探偵、ね。

「・・・じゃあ、私と関わらない方が良いわよ。死にたくないのね」

「・・・・・・・・え？」

彼の瞳が揺れた。私はクスツと笑って、少し走ってその場を離れた。

『悪』であった私は、『正義』である貴方に出会った。それが幸だったのか、不幸だったのか。

＊

不思議な女性に出会った。

俺があんなにも初対面の女性に惹かれたのは初めてだった。誰も寄せ付けないオーラを放っていて、だけど多分本当は1人で寂しい人なんだ。

この日まで幼馴染みを好きだと思い込んでいた。だけど、それは恋じゃない。

何で彼女を助けなくなったのかは分からないけど、身体が勝手に動き、彼女を引き止めた。

一目惚れだったんだ――

今日も桜の木の下に行ってみた。

「こんにちは」

彼女はそこに居た。

「また貴方？」

「もっと貴女のこと知りたいんです」

「知らない方が良いわよ。どうせ、私のことを知ったら貴方の方から遠ざかるもの」

まだ言ってもないのにどうして。遠ざかるわけない。俺は多分好きだから、彼女が。

「僕は絶対に遠ざかりません」

「……例えば、私が殺人者だとしても？」

「え。
。
。
？」

極端すぎる例え話だ。俺は探偵だし、殺人者は許せない。だけど

「……例えば、貴女が殺人者でも、僕は貴女を見捨てません」

そう言ったら、彼女は目を丸くして驚いた。まさか、探偵が殺人者を許すとは思わなかったんだろう。

「・・・面白い人ね。良いわよ、聞きたいことは？」

ふふっと彼女は楽しそうに笑った。

「名前は？」

「シェリー・・・」

この時は深く考えなかった。外人にも見えたし。

「歳は？」

「18」

驚いた。俺と一つしか変わらないのに、こんなにも大人っぽいのか。

「家族は？」

「お姉ちゃんがいるわ。両親はもういない」

あ、まずいこと聞いたかな・・・？

ちょっと俺が苦い顔をすると、彼女は言った。

「大丈夫よ、そんな神経質にならなくて」

彼女は本当に強い人なんだと思う。

「好きな食べ物？」

「ブルーベリージャムとピーナッツバターのサンドイッチ」

「分かった。今度作ってみる」

「また会う気？」という彼女の問いはスルーし、次の質問をする。

「嫌いなものとかあるの？」

「ハ虫類・・・」

ちよつと可愛いなと思った。

ほとんど聞きたいことは聞いたと思ったから、一番聞きたくて、でも聞きづらいことを聞くことにした。

「・・・じゃあ、君は一体何者？」

彼女は悲しく笑った――

「殺人者・・・」

ああ、彼女と会ってしまったことが間違いだったんだ。俺は殺人者に恋をしてしまった。

――許されぬ恋――

「どう？　それでも私を見捨てない？」

彼女の瞳は今までで見てきた中で一番悲しい色をしていた。きっと、彼女は大きな何かを抱えているんだ。辛い過去があるんだ。

支えてあげるのは、俺――

「見捨てるなんて、有り得ない」

彼女の身体をこちらに引き寄せ、ぎゅっと力強く抱き締めた。

「支える、俺が。お前のこと、まだ全然知らない。でも、これから知っていきたい。お前に、光を差し伸べる。俺が力になる」

こんなに人を助けたいと思ったのは初めてだ。自分が黒に染まっ
たとしても・・・

「好きだ」

たった三文字。それは想像以上の重みがある。この言葉が新しい
歯車を回した。

「・・・私、意地悪よ」

「ふうん」

「それに素直じゃない、冷酷な女よ」

「そう」

「そんな女なのよ・・・」

「お前、本当は優しい奴だろ。分かるぜ、俺、探偵だからさ」

「・・・後悔しても、知らないからね」

「後悔なんてしない。そうだ、最後の質問」

ちよつと悪戯っぽく、彼女を見て言った。

「俺のこと、好き？」

「さあ、どうかしら・・・？」

不適に彼女は笑った。彼女の心を開くにはまだまだ時間がかかるか。

「いつか、絶対好きって言わせるからな！」

「はいはい。頑張りなさい」

いつか、君の本当の顔を見れると良いな。

＊

春が過ぎ、夏が訪れた。

この数ヵ月で彼女をたくさん知った。ある大きな組織の一員で両親がやっていた薬の研究をしている。シェリーというのはコードネームだということ。（本名は教えてくれない。）姉が人質状態で逆らったり逃げ出したりすれば姉を殺すと言われていたらしい。

外出許可が出た時、彼女は必ず俺に会ってくれる。でもそれも命懸けだ。もし見つかったら、俺は殺されてしまう。

そんな危険な状態でも彼女に会いたいと思うのは、俺が本当に彼女を愛してるからだろう――

「シェリーさん」

「何？」

「そろそろさ、俺のこと下の名前で呼んでくれない？ 新一って」

「い・や」

「うわ、ぐさっときた」

「あっそ」

彼女は素直じゃない。言葉は冷たいけど、それはただ素直になれないだけ。

俺はたまに言う素直な言葉が好き。

「なあ、花火やろうぜ」

「え？」

「やったことねえだろ？」

「・・・ええ」

「実は持ってきたんだ」

歯を見せてニカッと笑えば、シェリーさんはどう反応していいのか分からないようで、戸惑っていた。

「ありがとう」

少しぎこちない笑顔でそう言った。シェリーさんは俺に会ってから、笑おうと努力するようになった。

それは俺のお陰かな、なんて考え、自意識過剰なのか？

線香花火の火花がパチパチと鳴り、シェリーさんの顔を明るく照らす。

「綺麗・・・」

その時、シェリーさんと初めて会った時のことを思い出した。あの時も桜を見て、綺麗と呟いていた。

「綺麗なものの、好きなのか？」

「ええ。自分の心も綺麗になっていくような気がしてね。まあ、気がするだけなんだけど」

と、シェリーさんは苦笑いした。使い終わった線香花火をバケツの中に入れた。

（やっぱり俺じゃ力不足、か。）

「大丈夫。俺が絶対シェリーさんのこと助ける。だから、そんな悲

しいすんな」

ポンポンと頭を叩くとシェリーさんは俺を見て聞いてきた。

「こういう時ってどんな反応すれば良いのかしら？」

シェリーさんが俺にこういうことを質問してくるのは初めてだ。
ちよっとは進歩したのかね？

「照れれば良いんだ！」

「・・・照れ、る？」

シェリーさんが照れてるところなんて見たことがないから見てみたかった。

「そ、照れるんだ。顔を真っ赤にして、照れるけど嬉しい顔をする！」

「・・・顔を赤くって。無理よ」

「無理じゃない」

「だって、非化学的じゃない」

夢のない言葉をシェリーさんは言う。

「じゃあ、これならどうだ・・・？」

意地でもシェリーさんを照れさせたかった。後は自分の欲望に任

せ．．．

背中と頭の後ろに腕を回し、彼女の唇に口付けた。初めてのキスだったけど、彼女に照れて欲しかったことと自分の欲望を満たしたかったことで、それは甘く深く、大人のキスになった。

唇を離すと、目の前には――

顔を真っ赤にして俺を見上げるシェリーさんの顔があった。

予想以上に照れた。そして俺の妄想よりもシェリーさんは可愛かった。

（つーか、それに俺が照れる）

「出来んじゃないかねえか」

照れ隠しにそう言ってみる。

「組織では、薬の研究ばっかだから、キスなんて初めて．．．」

そう嬉しそうな顔で言ってくれた。

「シェリーさん、俺のこと好き？」

「シェリーじゃないわ。宮野志保。これが本名よ．．．」

彼女は初めて俺に本名を覚えてくれた。“宮野志保”良い名前だ。

「じゃあ、志保……。俺のこと好き？」

彼女の名前を初めて呼んだ。それが何故か緊張して。

「……。好き、なのかしら？」

ちょっと戸惑いながらいう志保の言葉に俺はドキッとする。

（てか、疑問系……。）

組織ではただ薬を研究しているだけだから、人と関わることが全然ないらしい。だから、多分志保はこういう感情とか初めてで戸惑ってるんだよな。

「俺も、好き……」

*

蒸し暑い夏が過ぎ、過ごしやすい秋がやってきた。志保と会う回数がだんだんと多くなった。嬉しいけど、ばれる危険性はその分高い。

志保との付き合いはかれこれ半年経った。危険と分かりながら、会いたいと思うのはやっぱり志保が好きだから・・・いや、それ以上――

俺は、志保を求めるようになった。

何度も、何度も、彼女を連れ出してしまおうと思った。だけど、そんなことしたら彼女の姉が殺されてしまう・・・

複雑な心境で・・・

最近俺の家に来てもらうことが多くなってきた。それでも組織にバレないからと高をくくっていた。だけど、魔の手は――

ベッドの上で互いの温もりを感じながら、囁く言葉は．．

「志保、俺、お前のこと、愛してる．．．」

積もっていくのは志保への愛の気持ちだけ。いつまでも隣にいたい、その思いばかり。

「．．．私も、愛してる」

多分、彼女も同じ気持ちなのかなって。

この日の夜、一つになった――

闇がそこまで近付いて来ているのを、知らなかったのは、俺だけだった。

そして、冬が訪れる――。

＊

コツコツと足音がこちらに近付く。その足音だけで誰だか分かってしまう自分に腹が立った。ギー、という錆び付いた音と共に、この研究室のドアが開いた。

「よお、シェリー」

「ジン．．．」

銀髪で長身の男が前に立つ。見るたびに震えが止まらない。

「そろそろ頃合いだ。十分いい夢を見ただろ。奴を、殺せ」

拳銃を渡された。

「・・・お姉ちゃんは？」

「シェリーが工藤新一を殺れば、殺すことはない。今日の夜までだ、分かったな？」

コクリと私が頷いたのを確認した後、ジンは不気味な笑みを浮かべ部屋を出ていった。

工藤君に隠してることがあった。もう、すでにジンに気付かれていた。私と工藤君が会ってることを。

それを知ったジンは私にとっても、工藤君にとっても、残酷なことを言った。

『今年の冬までだ。お前にも工藤新一とかいう探偵にもいい夢を見せてやろう』

十分愛し合ってからの方の別れの方が残酷で面白いだろ、そう言っただけで笑った。もし出来ないのなら、お姉ちゃんを殺すと。

私は、諦めた。

殺人者の私に、幸せなんて結局訪れないのだと。だから、ジンが

くれた時間を大切にしようと思った。

そしてやってきてしまった。その時が。

雪が降る日だった――

漆黒の銃弾【前編】（新シェリ）（後書き）

どうも、雛花です。最後まで読んでいただきありがとうございます。
シェリーちゃんのキャラが定まらない（汗 人間関係が苦手で新一
の行動とか新一への態度とかに戸惑うけど、だんだん惹かれていく
・・そんなような。

新シェリ初。ジンシェリは苦手だけど。

あ、一応言いますが、これで終わりじゃないんでw 今日一緒に更
新しようと思ったけど力尽きた。いつもと違う感じになるんで、お
楽しみに！↑そんなでもないがw

なんで私の学校、夏休み28日までなの？↑二学期せいだからだよ
宿題やってねえし！！！！

漆黒の銃弾【後編 B・E】（新シエリ）（前書き）

やってきました、後編。

新シエリ、B・E。（バッドエンド）バージョンです。

漆黒の銃弾【後編 B・E】（新シェリ）

その夜に、私は彼と初めて会った桜の木の下に彼を呼んだ。

「・・・志保。どういふつもりだ？」

「見て分からない？」

彼に向けた拳銃が震えていることがバレないように平常心を保つ。

「・・・志保に殺されるのか？」

「そういうこと」

彼の顔はもう悲しさが現れていた。そんな顔しないでよ。私に笑顔を見せてくれたのは貴方なのに。

笑って、なんて。

彼を悲しませてるのは私なのにね。

「なんで、」

「貴方には言っていなかったけど、もうすでに組織にバレていたのよ、私と貴方が会っていたことがね」

ひんやりと冷たい風が頬に触れる。

「でも、いい夢を見せてやろうって言われた。冬までは許してやる、と。でも今日、貴方を殺せって言われたわ。そうじゃないと、お姉ちゃんが殺されるの・・・」

こんなに寒いのは、冬の冷たい空気のせいだろうか。それとも貴方の体温を感じられないからだろうか。

「本当に、ごめんなさい」

謝っても、どうにもならないこと。

「・・・ごめ、んなさ、い」

何年か振りに涙が流れた。それは頬を伝い、地面に降り積もる雪の上に落ちる。

「・・・志保は、辛かったんだよな。ごめん、気付いてやれなくて」
謝るのは私の方なのに、彼は申し訳なさそうに私に謝ってきた。
どこまでも彼は優しい人。

「幸せだった、工藤君に恋が出来て。初めてなことがたくさんあって、たくさん知れて」

私の初めての幸せだった。

「でも、それと同時に、貴方に会わなければこんな辛い思いをしないですんだって思ったの」

こんなに胸が張り裂けそうで。今までにたくさんの人を私は殺してきた。なんの感情もないまま、お姉ちゃんを殺されたくない一心で。

それが間違いだなんて思ったこともないし、それが間違いだって感じたこともなかった。

お姉ちゃんが生きていれば、誰が死んだって構わないし、自分が殺人者になっても構わなかった。

でも、今の私は少し、違う――

目の前にいる、自分が拳銃を向けている彼に死んで欲しくない、そう思った。

私の中で、彼は大切な、かけがえのない存在に変わっていた。

失いたくない・・・

涙なんて最近流したことがなくて、だから止め方を私は知らなかった。

「泣くなよ・・・」

「私だって、泣きたくないけど、止まらないのよ。止め方を、知らないの」

「バーロー。そんな簡単だよ」

それだけ言うと、彼は私を抱き寄せた。いつも以上に強く。

時間が止まった気がした――

冬の寒さなんて感じなくて、ただ彼の温もりを感じた。

驚くことに、涙は止まった。

工藤君は何でも私に教えてくれた。もしかしたら、お姉ちゃんよりも、彼の方が大事ななのかもしれない。

「・・・志保、良く聞いてくれ」

耳元で響く愛しい彼の声。

「大好きだ、愛してるよ．．．志保」

そう言ってから私の唇に触れるだけのキスをした。

それから彼は数歩下がった。

「私も、工藤君のこと．．．愛してる」

そう言葉にして改めて彼への想いに気付いた。本当は、殺したくない。そんなの当たり前。だけど、お姉ちゃんのためだから。

そんなことと思うけど、結局は．．．

———この時、正直に「逃げたい」と言えば、何か変わっていたかもしれない———

私の口から出た言葉は、

「ごめん、なさい」

——バァン

漆黒の銃弾は彼の心臓を、貫いた。

貴方は最後に——

幸せそうな笑みを浮かべた。

「馬鹿・・・」

死に顔があまりにも幸せそうで。やっぱり彼はすごいと思う。ずっと、最後の時まで、私に笑いかけてくれた。

「・・・大丈夫、すぐに会えるわよ」

私は拳銃を自分のこめかみに突きつける。

ずっと一緒に居ようって言うてくれたから。離れるわけにはいかないの。

こんなことしたら、工藤君は怒るかしら？
怒られても、構わないわね。貴方と居られるのなら。

お姉ちゃん、元気で――

――バアン

次の日、桜の木の下で2人の死体が発見された。

向こうの世界で2人は会えたのだろうか。それは、誰にも分からない。

2人がもっと素直になれば、きっと未来は変わっていた筈・・・

漆黒の銃弾【後編 B・E】（新シエリ）（後書き）

どうも、雛花です。最後まで読んでいただきありがとうございます。
なんだかスランプで、更新が遅れてしまい、すみませんでしたm（
――）m そのわりには内容が薄い。納得してませんが、これ以上
は無理だと判断しましたw
ちなみにこの話は悪ノP様の最後のリボルバーという曲から少しき
ています。

漆黒の銃弾【後編 H・E】（新シェリ）（前書き）

いつもと違う感じになるというのは、2つのバージョンがあることです。

新シェリ、H・E（ハッピーエンド）バージョンです。

漆黒の銃弾【後編 H・E】（新シェリ）

ある夜、急に志保に初めて会った桜の木の下に彼女に呼ばれた。

「・・・志保。どういうつもりだ？」

「見て分からない？」

そう言われても。分かる、だけど信じたくない。彼女が俺に拳銃を向けているだなんて・・・

「・・・志保に殺されるのか？」

「そういうこと」

それは本当に残酷で。神様を心から恨んだ。

「なんで、」

「貴方には言っていなかったけど、もうすでに組織にバレていたのよ、私と貴方が会っていたことがね」

知らなかった。

俺は彼女のことを知っているようで、本当は何も知らなかった。
その真実が悔しくて……。

「でも、いい夢を見せてやろうって言われた。冬までは許してやる、と。でも今日、貴方を殺せって言われたわ。そうじゃないと、お姉ちゃんが殺されるの……」

志保はずっと1人で抱え込んでいたんだ。それに気付かないで。
俺は何をやってるんだ？ 探偵、失格だな。

「本当に、ごめんなさい」

謝らないといけないのは、俺の方なのに。

「……ごめ、んなさ、い」

初めて見た、志保の涙だった――

それは俺の胸に酷く突き刺さる。

笑って、なんて。

無理に決まってるのに。

「・・・志保は、辛かったんだよな。ごめん、気付いてやれなくて謝ったって、どうにもならないけど。謝ることしか出来ないから。」

「幸せだった、工藤君に恋が出来て。初めてなことがたくさんあって、たくさん知れて」

俺の方こそ、幸せだった。

「でも、それと同時に、貴方に会わなければこんな辛い思いをしないですんだって思ったの」

それは、俺も同じ。会わなければ、そう思った自分がいた。

誰かを助けられるなら自分の命なんてくれてやる、そう思っていた。だけど、今は違う。

彼女を幸せに出来るのは自分だけだと思っている。だから、死にたくない。彼女をこの手で幸せにしたい。

生きたい・・・

俺の中で、彼女は大切な、かけがえのない存在だった。

だけど、俺を彼女が殺さないとお姉さんが殺されてしまう。

「泣くなよ．．．」

彼女の涙なんて見たくない。

「私だって、泣きたくないけど、止まらないのよ。止め方を、知らないの」

やっぱり彼女が大好きだって。そう思う。

「バーロー。そんなん簡単だよ」

俺はそう言って、彼女を抱き締めた。いつもよりも、強く。

時間が止まった気がした――

冬の寒さは感じなくて、ただ彼女の温もりを感じた。

「．．．志保、良く聞いてくれ」

最後だからこそ、伝えたい言葉があるんだ。

「大好きだ、愛してるよ．．．志保」

もう、この言葉が伝えられないだなんて。

俺は彼女の唇に触れるだけのキスをした。

それから数歩下がる。

彼女は俺の瞳をしっかりと見た。

「私も、工藤君のこと・・・愛してる」

この言葉がもう聞けないんだ。もう終わりなんだ。俺の恋も、俺の人生も――

銃口がこちらを向く。

「ごめん、なさい」

――バァン

漆黒の銃弾は、俺には当たらず、横をすり抜けて桜の木に当たる。

何が起こったか理解出来ないうちに、志保は拳銃を捨て、俺に勢い良く抱き着き、また泣いた。

「逃げたいの」

彼女の本心を初めて聞いた気がした。何もかも1人で抱えていた志保が初めて俺を頼った。

「お姉ちゃんを裏切ることになるのは分かってる。でも、お姉ちゃんには私の幸せを願ってるし、生きたい」

彼女の声は少し震えていた。

「・・・いいえ。これは都合のいい言い訳」

彼女は俺を見た。

それは俺の大好きな素直な瞳。

「貴方といたい、ただそれだけよ」

全てを捨てて、俺だけにすがってくれた。俺はそれに答えるだけ。

「・・・早くそう言えよ。俺はお前の言うことならなんだって聞く」

お前が望むなら、なんだってする。

「逃げようぜ」

志保を強く抱き締め返した。

＊

それから半年後だった。志保がいた組織が潰れたのは。

「お姉ちゃん、裏切ってごめんなさい」

「良いのよ、志保。貴方がそうまでして一緒にいたいと思った人が出来たんだから。それに、今こうしてられるしね」

志保がお姉さんに会うのも半年ぶりだ。

「そっちが彼氏さん？」

俺の方を見て、そう聞いてきた。

「はい。工藤新一です」

「そう、志保をよろしくね」

明美さんは笑ってくれた。

「明美、早くしろ」

遠くから男の声が聞こえてきた。

「あ、うん。今行く、大君」

「その名前で呼ぶな」

仲良く寄り添い合う2人を見ると、幸せが訪れたことを改めて感じた。

本当の幸せは今から始まる――

漆黒の銃弾【後編H・E】（新シエリ）（後書き）

どうも、雛花です。最後まで読んでいただきありがとうございます。ところで、こちらは素直になった2人の未来です。こう考えると、バッドエンドバージョンは本当にバッドでしたよね・・・

大君出したのは、今赤井秀一にはまってるから。明美さん可哀想。「言わなきゃわかんない？」ってところが好き。でも、ジョディ先生も好きだしな・・・赤井さんはいけない男だ。ロリコンじゃないよ、哀ちゃん。

素直にならないと後悔することがあります。だから正直に言うべきです。だから、雛花も素直になります。

愛してるよ、黒羽。

だって今日は黒羽の日だもんね。小説書けなかったからこれくらい言わないとうちの快斗は拗ねるんですw

快斗「拗ねないしっ!!」

向きになるなよ・・・てことで皆さん黒羽の日ですから祝ってくださいm（　）m そしてもうすぐ工藤の日。

快斗「なんか工藤の日の方が知名度高いよな」

あ、そういえば、白馬君誕生日おめでとう!!!!↑遅いわw

次の更新はいつになるやら・・・テがつくものの6日前の雛花でした。勉強してない、誰か教えてください（・ω・）

からくりピエロ（コ哀）（前書き）

コ哀、まだ会ってから間もない時期。40mP様の曲から。

からくりピエロ（コ哀）

「14時・・・」

腕時計を見て、ポツリと呟く。周りを歩く人のざわつきでその声は消えていく。

たくさん人が通る駅前。こんなにたくさん人が通るのに、彼は一向に現れない。

（ここで待ち合わせて言ったのは工藤君じゃない。）

待ち合わせ時間からもう二時間も経っている。別に待ってるぎりなんてないから帰っても良いのに。まだ待とうとするなんて、私らしくない。

*

『明日の12時に米花駅前集合なっ』

突然彼はそんなことを言い出した。正直、私には彼が言ってることを理解出来なかった。

『訳分らないわ。なんでそうなるの？』

『お前と仲良くなりたい』

『はあ・・・？』

“仲良くなりたい”だなんて。言われたのは初めてかもしれない。嬉しかったけど、お礼なんて言えなかった。

『だーかーらー！ お前に色々教えてやるよ。ほら、米花町のこととかさっ』

ニカッと歯を見せながら笑う彼に不覚にもドキッとしてしまった。

『別に。余計なお世話よ』

『んなこと言うなよ。俺だってお前のこと考えて・・・』

『私のこと、嫌いな癖に？』

『嫌いなんて言ってねえだろ？』

『じゃあ好きなの？』

彼の口が止まる。ちょっと焦った彼が面白い。

『・・・馬鹿ね。知ってるわよ、貴方は探偵事務所にいる彼女が好きってことくらい』

『ば、バーロー』

頬を染めて照れる彼。

『あら、違うの?』

『・・・ら、蘭のことは今置いといて、問題はお前なんだよ!』

照れ隠しか私の方に話を戻す。

『なあ、明日一緒に出掛けようぜ?』

明日は予定なんてないし、言っても良いかしら。

——そう考えてる私に驚いた。随分変わったわね。彼といるか
ら? 彼といたらもっと変われる?

『・・・しょうがないわね』

ふっと小さく笑った。そしたら、彼の顔もぱあっと明るくなった。

『よっしゃ! んじゃ12時に米花駅前だからなっ』

＊

簡単に信じた私が馬鹿みたいじゃない。こんな組織の一員の私にも優しくしてる人がいる、なんて思い上がって。そんな人、いるわけがないのに。

此処に1人。それが答えなんでしょ？

街ゆく人、流れる雲、周りにあるものが全て私を嘲笑っていた。

私に味方なんていない。お姉ちゃんがいなくなったから、他に私の味方なんかいない。私に優しくしてくれる人なんていない。

そう、もう彼は来ないんだから、待たなくて良いのに。帰って良いのに。

それは簡単で、そしてとても困難で。『彼は来る筈がない。私はこれから一生1人。』そう認めることで前に進めるのに。

信じられなくて。

信じたくなくて。

貴方の中で、きっと私は、道化師なんですよ？

から回って、回り続けて、私はもう回り疲れた。組織の中は息苦しくて、息が切れたの。

此処に1人。

そう、これが悲しい私の末路。輝いている貴方になんて追いつけないままで。

＊

『お姉さんを、助けてやれなくて、ごめん』

それは初めて見た彼の悲しい顔だった。

『・・・良いわよ。もう誰がなんと言おうと、お姉ちゃんは帰って来ないんだからっ!!』

なんで彼にあたってのの？

『工藤君のせいで・・・。貴方がもっと早くお姉ちゃんに気付いていればっ』

工藤君は何も悪くないのに。

『早く救急車を呼べば、もしかしたら助かったかもしれないじゃないっ!!』

彼はお姉ちゃんを助けようとしてくれたのに。

流れ出した涙を止めることが出来なくて。泣いたって、どうしたってお姉ちゃんは帰ってこない。

そんな私を彼は優しく抱き締めてくれた。何処までも優しい人なのね。

『ごめん・・・』

『謝らないで!! 貴方が謝ったって、お姉ちゃんはもう、もう・・・』

彼の背中に思いきり爪を立てる。悲しみが怒りに変わり、自分を

止められなくなった。

『はい、ばら』

『返して、お姉ちゃんを。返してよおおおお!!』

声にならない声で私は泣き叫んだ。こんな姿を見たらきつとお姉ちゃんは悲しむわよね。

『灰原・・・』

何度も彼は私の名前を呼んだ。

＊

私を乗せて、地球は回る。私が犯罪者だということも知らずにただ回る。

一秒だけ、呼吸を止めて。だけど何も言えずに立ちすくむ私。

工藤君に会ったことは偶然で。そして運命で。

人の温もりなんて、知らない方が良いと知ってたのに。触れてしまったの、貴方の温もりに。温もりなんていなかった。
こうなるのなら、やっぱり知らない方が良かったのかしら？

その笑顔で――

その仕草で――

私が壊れてしまうから。

『お前と仲良くなりたい』

そんな優しさいらないのに。その優しさのせいで私は息が止まりそう。

変わってゆくのが、ただ怖いだけなのかもしれない。優しさに包

まれて、幸せを知って……。きっと組織にいた頃の私を忘れてしまっ
まいそう。

「・・・16時。もう4時間、ね」

もう、止めた。

ここで君を待つのは。

私が壊れてしまうだけだ――

「灰原っ！」

帰ろうとした時だった。遠くから私の名前を呼ぶ声が聞こえた。

全力で走ってこちらに向かってきた。少し涙腺が緩んだ。馬鹿……

「はい、ばらっ」

私の前に立ち、もう一度名前を呼ぶ。相当走ったのだろうか、まともに呼吸出来ていない。

「本当、ごめん、遅れて、」

「良いわよ。来ると思ってなかったし」

「・・・嘘だ。だってもう4時間も経ってんだぜ。俺が来るって信じてくれたんだよね？」

そうやって彼は笑う。良く笑う人ね。本当、眩しい。

「・・・来る途中、誰かに撃たれて倒れてる女性がいたんだ」

「・・・・・・・・え？」

「まだ息があったんだ。何か俺、お前のお姉さんと重なってさ。絶対助けないとして必死になっちまって・・・」

「それで遅れたって訳ね」

「本当、ごめんっ」

彼は両手を合わせて、申し訳なさそうに頭を下げる。

「ねえ、その人、助かったの？」

突拍子もない質問だったのだろうか、彼はちよつと惚けた顔を見せた。

「ああ」

「・・・良かった」

小さく私が笑うと彼は、

「怒ってないのか？」

「怒ってないわよ。だって、知ってるもの。貴方が探偵で、人を殺したくないってことくらい」

ふふ、とまた笑った。なんで私はこんなに彼のことが分かるのかしらね？ 本当、不思議ね。

「・・・灰原、」

「何よ？」

「本当は、良いやつなんだな」

「え・・・？」

急に言われたから驚いた。私が良い人？ 彼の目は節穴なのかしら？ どう見たって、私は犯罪者なのに。

「・・・お前って本当不思議。初めて会った時から。瞳の奥には、悲しい色が見えるんだ。何か、俺にも分かんねえや」

私にしたら貴方の方が分からないわよ。いきなり何なの、本当に。やっぱり待たなきゃ良かったわ。

「なあ、俺……」

彼が一步私に近付いてきたと思ったら、すぐに身体の内自由は奪われ、彼に抱き締められた。

「……工藤君」

抵抗しない私もどうかしてる。この温もりを知ってしまったから。

「守るよ、お前のこと。なんか、ほっとけねえんだ」

そう、私は貴方が望むピエロ。

貴方が思うままに、

操ってよ

慣れてしまったみたい。優しさに、温もりに。

良いじゃない、変わったって。良いじゃない、壊れたって。

「・・・ありがとう」

「どういたしまして。そうじゃ、出掛けるとするか」

今度は私の手を握った。

これからもよろしくね、私のピエロさん。

からくりピエロ（コ哀）（後書き）

一週間ぶりくらいw あ、雛花です。最後まで読んでいただきありがとうございます。

漆黒の銃弾【後編】の執筆があまりにも進まず、息抜きに書きました。続き待ってるの方はごめんなさい。待ってる人いるのかな？

今回は最近ハマってる、40mP様の曲からです。まだ書きたいのあるんですね（＊'▽、＊） この歌詞が好きです。「此処に1人 それが答えでしょ」って歌詞が哀ちゃんっぽい。ここでのピエロは表情が変わらない的なことをいってます。最後に哀ちゃんが言ったピエロは笑わせて欲しい——コナン君に向けた言葉ですね。解説しちゃったよw

それにしてもm i s t y m y s t e r yは神曲だよなあ。今日初めてニコ生でフル聞いて、鳥肌たった。まぢガネクロ＼（＾o＾）／ C D借りようっと。

無邪気な子供とラブラブ先生（新志）（前書き）

新志、幼稚園のお話。新快平探哀が幼稚園生（哀嬢受け）。新志蘭園が先生。

結局私は新志でらぶらぶさせたかっただけ。私にしては結構ネタ小説。

無邪気な子供とラブラブ先生（新志）

ここは帝丹幼稚園。桃組には女の子が1人、男の子が4人、毎日仲良く遊んでいました。

女の子を男の子4人を囲んで自由気ままに好きなことをはなしていました。

「でな、ホームズはこう言ったんだ、」

さっきからホームズのことばかり話しているこのメガネの少年は江戸川コナン。

「オレ剣道はじめたんやで！」

自分の自慢話ばかりする色黒で関西弁の少年は服部平次。

「あの、こんど僕のいえにあそびに来ませんか？」

紳士のようなこの少年は白馬探。

「ねえ、哀ちゃん！ 哀ちゃん、きいてる、哀ちゃん？」

さつきから少女の名前を呼んだり、簡単なマジックを披露して振り向かせようとしているこの少年は黒羽快斗。

「……………」

それを欠伸をしながら無言で聞いている（ふりをしている）少女は灰原哀。

全然振り向いてくれないので男の子たちは諦め、作戦会議をし出す。

「そうそう、俺きのう母さんにきいたんだけど、『結婚して』って言うと、その人はずっといっしょにいられるんだって！」

快斗がそんなことを言う。

「じゃあ、俺は哀に言う！」

「姉ちゃんに言うのはオレや！」

「いえ、僕です」

「この黒羽快斗さまに決まってんだろ！」

だとか何とか。本当に結婚の意味を分かっているのか。否、分かっていないだろう。

「じゃあ、みんなで言うてだれがおーけーもらえるかしょーぶしよーぜー！」

快斗の提案にみんな賛成して、また哀を取り囲む。

初めに哀に話しかけたのは、探だった。

「哀さん、僕と結婚して下さい！」

顔をほんのり赤く染めて、照れながらもそう言葉にする。

「えんりよしとくわ」

探の努力も虚しく、一瞬にして断られた。探はしょぼーんとして俯く。

次のチャレンジャーは平次。

「姉ちゃん、オレと結婚してくれへん？」

本当にそう思っているのか分からない表情でそう言う。

「ごめんなさい」

哀はそれを丁寧に断る。

いつも元気な平次もこればかりは悔しくて悲しい顔をしていた。

「ダメだな、みんなー」

ふふん、と快斗は鼻で笑う。ポンツと音を立て薔薇を出して、彼女に差し出す。

「哀ちゃん、俺とけっこ」

「イヤよ」

刹那。快斗は可哀想なことに全て言い終える前に断られてしまった。自信満々だったからこそ、ふられたショックは大きい。もうすでに瞳には涙が溜まっていた。

「あら、なに？ えどがわ君もこの人たちと同じなの？」

と、最後に残ったコナンに哀は問う。

「あ、いや、俺はちげーよ」

そう否定した。コナンにはそれすらも（それすらという言い方は可笑しいか）言うことが出来ないのだ。

それを聞いて、哀が悲しい表情を浮かべたのは勘違いではない筈だ。

その時、ガラッとドアの開く音がした。そちらを5人が一斉に向く。

「あら、みんなどうしたの？」

明るい声が教室に響き渡る。黒髪のロングの女性は明るい笑みを浮かべた。彼女はこの幼稚園の先生、毛利蘭。

「「らんせんせーい」」

泣きながら探、平次、快斗は蘭に抱き着く（と言っても足だが）。

「何があつたの？」

「あのね、哀ちゃんにふられたの・・・」

「そっか」

蘭は3人の頭を優しく撫でると、目線を合わせるようにしゃがんだ。

「でもね、あなたたちはまだ幼稚園生なの。まだまだこれからチャンスはあるのよ。だからふられても諦めない！ めそめそしたら哀ちゃんに嫌われるわよ？」

彼らはその言葉を聞いて、涙を拭った。

「「うん」」

「よろしいっ」

蘭も笑った。

その時、コナンと哀は楽しそうにおもちゃで遊んでいた。それを見た男の子3人は2人きりにはさせないぞ、という勢いで2人の間に滑り込む。

「コナンっ！ ぬけがけはゆるさねえ」

と、今日もまた子供たちの（というより男の子たちの）熱いバトルが始まる。

＊

その頃、教室の外の廊下も違う意味で熱いことをしている男と女がいた。

男は壁に手をつき、女を逃げられないようにして、愛を確かめ合いつつ、熱い口付けを交わしていた。

キスすることは彼らの自由だが、時と場所を考えて欲しいものだ。

「……しほ、」

物足りないように男は女の名前を呼ぶ。男が女の服の中に手を入れようとした瞬間――

「……え……！」

第3者の手によってそれは阻止された。

男の髪の毛を引っ張っている。見た目は天然でお嬢様には到底見えないこの女性は鈴木園子。この幼稚園の先生。

「まったく、仕事までイチャイチャしないでくれる？ 子供たちが見てたらどうするのよ？ イチャイチャするなら家でしなさい」

「言われなくてもしてますよお」

「・・・ 志保さんに嫌われても知らないわよ」

園子のその言葉は男に響いたらしい。男は余程彼女のことを好きなのだろう。

「志保さんも嫌なら嫌って言って良いのよ！」

さっき男にキスされていた女の方を向いて園子は言う。

この女は宮野志保。この幼稚園の先生。何でも昔から子供が好きで、幼稚園の先生になりたかったとか。

「・・・ 嫌」

「っ・・・！ ごめん・・・」

そしてこの男は工藤新一という。一応、この幼稚園の先生だ。何故一応なのかというと、彼が幼稚園の先生になった理由が「大好きな志保がやるから、少しでも隣にいたい」、これだ。だから仕事なんてほとんどせず、志保とイチャイチャしに来ているだけ。

「ほら、分かったら仕事するっ」

「・・・へいへい」

志保に嫌がられ、テンションが落ちの新一。少し可哀想だ。同情の一つでもしてあげたい。

（チツ、園子め。もう少しだったのに。）

……前言撤回。新一は首になれば良いんだ。

＊

新一は仕事をする気になったのか、子供たちのいれ教室へと入って行った。

「オッス」

「あ、しんいち先生！」

初めに反応したのは哀。そして男の子たちは新一をすごい形相で見る。

パタパタと哀は新一の方へ駆け寄り、足に抱き着く。

「おう、哀。どうした？」

「なんでもない・・・」

新一は哀の頭を撫でる。哀は何か言いたそうな顔をしているが、何も言わない。

哀はあまり人懐っこくないが、新一にだけはこうして可愛いところを見せる。見ている限りではどうやら哀は新一のことが好きらしい。

一つ言っておこう。新一だけは止めておけ。同年代の子を好きになりなさい。

新一はと言うと、「志保に似てるよな。髪質とか性格とか。志保の隠し子か？」そんな訳の分からないことを言っている。

哀はお気に入りだとか。

そしてその新一に対抗心を燃やしている人が4人。

「しんいち先生、哀ちゃんをひとりじめしないでよ！」

快斗がそう言うのと、3人も頷く。

「別に、独り占めしてるわけじゃねえし。哀が俺のどこに来てるだけじゃん」

と、得意気に言う。そして4人を敵に回すことになる。

そして、4人は新一の背中を叩いたりと攻撃を始める。全く効いていないが。

「痛くもかゆくもねえな」

新一が余裕をこいてると、

「いってえ・・・！」

後ろから右耳を引っ張られた。新一は後ろを振り向く。

「子供にはもっと優しくしなさい」

新一の愛しの彼女が現れた。その瞬間、新一の顔は晴れ渡る。

「全然痛くないっ」

そう言うと、彼女の頬にキスを落とした。子供たちはそれをぽけーとしながら眺めている。

「・・・新しい薬の実験台になりたいのかしら？」

「うわっ、ごめん。それだけは勘弁して」

新一には一度彼女に実験台にされ、1週間身体が縮んでしまった経験がある。それ以来“薬”だとか“実験台”といった脅しに敏感になってしまったそう。

……自業自得だ。

今までのやり取りをずっと蘭は黙って見ていた。

（やる気ないなら来なくていいのに。）

同感だ。

＊

夕暮れになり、それぞれの親が子供たちを迎えに来る。「また明日」そう言ってそれぞれの家へ帰る。

「みんなかえっちゃったなー」

「ええ」

しかし、コナンと哀は帰らない。彼らは親がいなくて、蘭の家に居候している。

無言の時間が続く。いつもならコナンが話し出すのだが、今日は何か考えているようだ。

「なあ、哀」

コナンはいつもより真剣な瞳で哀を見つめる。．．．おっとこれは。

「．．．俺となら、け、結婚してくれるか？」

勇気を出して、コナンはそう言う。哀はそれを聞いて一気に顔を赤く染める。

「何よ、きゆうに．．．」

「好きなんだよ、哀のことが！」

純粋な幼稚園生の恋。それがいつまで続くかなんて分からないが、この2人ならずっと仲良くやっていけそうだ。

それを影で見守る大人が数名．．．

「コナン君良く頑張ったわ！」

「やるわね、ガキンちょ」

蘭と園子がコナンを褒める。

「良い雰囲気じゃない、2人」

「俺らには負けるけどな」

新一は相変わらずお調子者。

「てか、新一君いつからいた？」

「始めから」

「ちよつと2人共静かにして。哀ちゃんの返事が聞こえないでしょ」

蘭の言葉に2人は口を閉ざし、再び2人の方を見る。

「哀。お前は俺のこと、その、好きか？」

コナンは恥ずかしいからか、哀の顔をまともに見れず、視線を泳がす。

「・・・好き、よ」

その言葉を哀が言った瞬間、コナンは哀にぎゅっと抱き着いた。それと同時に見ていた大人たち（志保を除く）は小さく声をあげる。

「ちょっと」

「俺、すげえうれしい」

コナンは本当に満面の笑みを浮かべた。心から嬉しいのだろう。

「もっと大人になって、お前を守るようなつよい男になるから。ずっと、これからいっしょう、俺のこと好きでいてくれるか？」

コナンの心からの声だった。

「・・・ええ」

その願いに哀は素直に答える。

「「可愛いー」」

蘭と園子が同時にそう言う。本当同感だ。そんな哀を抱き締めたと思うのは私だけではないだろう。

「んじゃ、俺ら帰るな」

2人が上手く言ったのを見届け、新一は志保の腕を掴みそう言った。

「俺らって、私も含まれてるのかしら？」

「当たり前」

志保の返事も聞かず、腕を引っ張る。いやいやながらも志保は新一についていく。

それを見た園子は何やら考え込む。

「どうしたの、園子？」

「・・・ガキンちよにでも対抗心燃やしたのかしら？ あの時囲気、新一君今日言うつもりなのね」

「ああ、告白するの？」

「告白はしたでしょ？ 結婚よ、結婚の話を使うの」

しばしの沈黙。

「何、蘭？ 何か可笑しい？」

「ねえ園子。まだあの2人、付き合っていないけど・・・」

……。

……………。

「はあああああ!?!?」

声が大きすぎる。コナンと哀にも聞こえただろう。

園子は慌てて口を塞ぎ、次は小声で話始める。

「付き合っていないって本当?」

「うん。知らなかったの?」

「知らないわよ! だってあんなにラブラブじゃないっ」

「まあ、新一が一方的なんだけどね。志保さんはどうなんだろうな？」

「・・・尚更気になるわね。明日が楽しみだわ」

ふふんと楽しそうに鼻歌を歌いながら、まだ残っている仕事を片付けに職員室に向かう。蘭もその後を追いかけた。

一方、コナンと哀は・・・

「俺、哀はしんいち先生が好きなんだとおもってた」

「ばかね、それは・・・」

「それは？」

「・・・しんいち先生がえどがわ君と似てたからよ。かさねてたの？」

それを聞くと言った方の哀よりも聞いていたコナンの方が顔を赤くする。

「・・・お、おう。サンキュー。何か、て、てれるな」

「そう？」

コナンは何を思ったのか、哀の唇にキスをした。新一の影響だ、絶対に。

「あいしてる」

どこでこんな言葉を覚えたんだろう？ . . . 新一だ、新一しかないだろう、こんなこと吹き込む奴は。

そして、新一と志保はというと. . .

半ば強引に新一が志保と手を繋ぎ、家へ帰っていた。まだそこま
で遅い時間でもないが、新一は志保を家まで送る。

「じゃあ、また明日」

志保の家の前まで来て、そう言う。いつもならここでお別れのキ
スをして新一も家に帰るのだが（それもそれで良いのか分からない
が）、今日は違った。

新一は志保にぐいっと近付く。

「何？」

近付いて来ると同時に志保も一歩後ろへ下がる。志保は冷静さを
保つ。

とんっ

志保の背中が壁にぶつかり、もう下がれなくなった。新一の顔が
目の前に来る。新一は壁に左手をつく。

見慣れてる筈の新一の顔なのに、志保は心臓が高鳴る。いつもよ
り新一は凜々しい表情だ。

「なあ、志保。俺のこと好き？」

新一の吐息が志保の頬に触れる。

「・・・嫌いって言ったら？」

「嫌いなわけねえよな？」

いつも以上に新一は本気だ。

「俺は、志保のこと、大好きだぜ」

「そう」

「お前は？」

「さあ・・・？」

「さあって・・・。じゃあ、俺と付き合ってくれんの？」

右手で彼女の顎をくいっとあげ、不適に微笑む。

「……」

志保は無言で答えない。新一から視線を反らす。

「・・・俺のこと、嫌い？」

「嫌いじゃないわ」

「んじゃ、好き？」

「好きでも、ないわ・・・」

と、志保が言うと、新一はいつものように彼女に口付けをし、舌

を絡め合う。それが新一の精一杯の愛情表現。

「・・・んっ。くる、し、」

途切れ途切れに志保は言葉を紡ぐ。

新一が唇を離すと、呼吸を整えた。

「・・・嬉しい？」

志保は小さく頷く。

「・・・幸せ？」

また頷く。

「不快？」

今度は首を横に振る。

「・・・じゃあ、志保は俺が好きなんだよ。うーん、愛してるって方が正しいかな？」

自信満々に新一は言う。

「私は貴方を愛してる、の・・・？」

「そう」

志保は、笑った――

（・・・っ！ 可愛いじゃねえか。）

「・・・お、お前、そんなに可愛く笑えんのかよ。全然知らなかった」

新一は今までのことを振り返った。良く考えれば、志保が笑ったことなんてなかった気がする。

いつも自分のやりたい放題で、自分が満足するだけ。志保のことを考えていなかった。嫌われたくなくて、志保の本当の気持ちを聞くのが怖くて、から回っていた。

「・・・お前、いつも不快な顔してたよな。ごめん、気付かなかった・・・というより気付いてないふりしてた」

「・・・嫌だった訳じゃない。ただ、工藤君は私のこと好きでもないのにキスとかしてるんだって思っただけ。それが不安だったの」

「俺たち、とんだ勘違いしてたんだな」

2人はそれが可笑しくて笑い出した。

「もっかい聞くけど、俺と付き合ってくれる？」

「ええ」

「じゃあ、結婚して」

「嫌よ」

「何でっ？」

「まだ早いわよ」

「そんな・・・」

「一年後。まだ私たちの関係が続いてたら結婚しても良いわよ？」

新一はニカッと笑った。

「言ったな？　よし、もう結婚決まり同然だな」

「自信満々ね」

「俺が志保を嫌うわけないし、志保が俺を嫌うわけない。だろ？」

「どうだか？」

また新一は志保にキスをする。そして微笑みかけると、志保も笑む。

「じゃあ、ベッド直行で良いよな？」

「・・・はあ。馬鹿じゃないの？」

「正常だっつーの」

新一はひょいッと志保を持ち上げ、お姫様だっこをして志保の家の中に入って行った。

次の日、園子や蘭から冷やかしを受けたのは言うまでもない。それから、快斗、平次、探の初恋が儚く散ったことも言うまでもない。

無邪気な子供とラブラブ先生（新志）（後書き）

どうも、雛花です（^ω^） 最後まで読んでいただきありがとうございます。
ございます。

こんな長いのをテスト期間中に2日で書き上げたんだよ！ ねえ、
誉めて誉めて（＊'▽'＊）↑止めろw

活動報告で言ってたやつです。楽しかったー！ 筆が進みすぎてや
ばかったー！ ネタ小説だとやりたい放題ツスねw

新志良いね、新志。らぶらぶだとまぢ萌える↑ キュン死にする↑
幼稚園コ哀とかw 幼稚園生に見えないけどね。そんなコナン君
が小学生に見えないのと同じこと。もっと快斗出したかったな。

てか、最後のところか幼稚園じゃなくても良かったしね。細かいと
こを突っ込まないで下さいw

仕事中でもキスしたがる新ちゃんを書きたかった。最近S新ちゃん
多いから、そろそろヘタレ新ちゃん書こうかしら？

あー小説書きたいけど、テスト4日前なんだ（・ω・） ノー
勉強なのに焦ってない私が怖い。やばい、勉強しなきゃ。

だから、更新は出来ませんかもしれないです。だから、連載とか
はしばしお待ちを。今やってるので進めて欲しいほしい連載があり
ましたら、言ってくださいね！ 工藤の日に何かしたいよね。

書きたい歌がありすぎて困る今日この頃。

さて、……………寝ますか（――）zzz

消さないで、消えないで（新哀）（前書き）

新哀、コ哀もあり。パラレルです。最近パラレルはまってやばい。

消さないで、消えないで（新哀）

もうあれは過去のこと。

忘れた筈なのに、忘れようとしたのに。

あの笑顔が私の脳に貼り付いて離れない。

——消さないで——

外ではカァカァと鳥が意味もなく鳴く。それを横耳に私は本を読む。あの人が好きだった本を。

夕焼けの光がこの図書室の中まで入ってきた。時計を見ると、もう5時だ。本を借りに来る人もいなさそうだし、もう帰ってもいい頃だ。

帰ろうと思い、本を元の場所に戻した時だった。

「よお、灰原」

ビクツと私は肩を震わす。後ろから私の名前を呼ぶ声がした。振り返るとそこに居たのは……

「……工藤先生。脅かさないで下さいよ」

私の担任の工藤新一先生だった。

先生は「悪い」と謝る気もない感じでそう言った。

「偉いな、灰原は。熱心に委員会活動か」

私は図書委員で今日は当番の日。当番でも仕事をしない人がいるが、私はやっている。

「まあ、これだけ優秀なら東都大は入れるだろうな」

「委員やるだけで入れるなら、簡単ですよ」

と苦笑いした。

私は絶対に東都大に入りたい。この辺じゃ一番頭の良い大学だし、行けば自分の力になる。

「先生は何しに来たんですか？ 本を借りに？」

ふと疑問に思ったことを口にした。

「先生は本は借りないよ。ここに來た理由は、」

先生の目が光を無くしたように見えた。背筋がぞつとする。

右手でサラッと私の髪の毛を触る。

「・・・先生・・・？」

「灰原と2人きりになるためさ」

「え？」

2人きりになって何がしたいのか。今の私に分かる筈がなく、進路のことについての話し合いかと思った。

「進路のことですか？」

「・・・なあ、知ってるか？」

私の質問には答えず、先生が話し出す。

「この時間帯は部活動の真っ最中。部活のない生徒は4時30分までに帰宅しないといけないからいない。よって、この図書室には誰も来ないんだよ。図書委員のお前を除いて」

淡々と言葉を並べる。

「おっしゃっている意味が分かりません」

「簡単なことだ。今ここで俺とお前を邪魔する奴は来ないってことだ」

そう言い切ると、私は壁に押し当てられた。

「きゃっ」

先生の顔が間近に見える。

先生は笑った。その笑顔は残酷なほどに、あの人に似ていた――

『灰原、俺らが高校生になったら付き合ってくれるよな?』

幼馴染みの彼の口癖だった。彼の名前は江戸川コナンという。一生忘れられない存在だった。

彼は毎日楽しそうに笑っていた。一度、どうしていつも笑ってい

られるのか聞いたことがあった。

『ねえ、どうしていつも笑えるの?』

『ん?』

『悲しいこととかあるでしょ?』

『んー、確かにあるけど。でも俺はさ、生きていられて、灰原が隣にいるだけで幸せなんだ。だから笑える――』

その笑顔は本当に眩しかった。

3年前。中学3年生のある日の帰り道のことだった。
飲酒運転をしていたトラックが歩道に乗り込んできた。ぶつかり
そうになった私を庇って彼はそれにひかれた。

最後も彼は笑っていた。

『灰原も笑えよ』

それが最後の言葉だった。

救急車のサイレンが嫌に耳に残った。

私は笑える筈がなく、涙を流して、彼の名前をただただ繰り返した。

全て、江戸川君がくれた。

生きる理由も。生きる希望も。生きる強さも。生きる目標も。何もかも、全て。

東都大に行く理由もそう。彼が行きたいと言っていたから。

でも、私が一番彼に貰ったのは、

『愛』だった――

家族のいない私は知らなかった、『愛』なんてものを。『愛』してくれる人はいなくて。愛そうと思う人もいない。

そこに彼は現れて、私の辞書に『愛』という言葉をつけ足したんだ。

最後に『ありがとう』の言葉すら言えなかった。そんな自分が憎くて。彼がいない世界になんかいたくなくて。

死のう、と思った。

そんな時に会ったのが、江戸川君に瓜二つの男性。名前は工藤新一。教師をやってるとか。

江戸川君みたいにメガネはかけていないが、本当に似ていた。性格も。

彼は私が死のうとするのを必死に止めた。私はそのお陰で今生きている。

彼は笑った。

江戸川君みたいに。あまりにも似ていたから、この人も消えてしまうのではないかと思った。怖かったんだ。

だから、私はそうなる前に自分から離れた。でも、運命の悪戯で、彼は私のクラスの担任となった。

なるべくさけて、さけて。何とか今日までやってきた。なのに、どうして、今更。

「何のつもりですか？」

「ふうん。この状況でも分からないわけ？ 灰原ってそんなに頭悪かったっけ」

クスクスと彼は楽しそうに笑う。私は何も楽しくない。

「襲われるんですか？ 私」

「・・・良く分かってんじゃない」

「工藤先生、変な冗談は止めてください。笑えませんよ。先生がそんなことして良いんですか？」

「今は、ただの男だ」

声も江戸川君にそっくり。

心臓が高鳴った。その自分に苛立ちを感じた。私が好きな人はずっと江戸川君なのに。似てるからって、この男を好きになるの？

馬鹿みたい・・・

「とにかく、離れて下さい。誰かに見られたら首ですよ？」

「だからさっき言っただろ？ 誰も来ない」

さっきよりも先生は近付いてきて、お互いの吐息が混ざり合う。

「そんな、怖がるなよ」

「怖がってなんか、ないです」

「震えてるぞ」

そう言われて気付いた。

全身が震えていることに。

怖がることなんてないのに。何が怖いのか？

——江戸川君への『愛』と江戸川君からの『愛』が消えるのが
怖い——

彼から『愛』を貰ってしまったら、江戸川君からの『愛』なんて
儚く消えてしまう。

彼から『愛』を貰ってしまったら、私の江戸川君への『愛』は消
え、彼に向いてしまう。

嫌だ。

消さないで、

江戸川君を――

「・・・嫌だ。消さないで。江戸川君を、消さないでっ!!」

溢れ出したのは、その言葉と涙だった。

先生は戸惑った表情を浮かべた。

「・・・やっぱり、その『江戸川君』には勝てないんだな」

彼は私から離れた。それが何故か嫌だった。矛盾ね。

「諦めるしか、ねえのかな」

工藤先生は儂く笑った。江戸川君はこんな笑い方しなかった。いつでも楽しそうに笑っていた。

そんな悲しい表情、しないで。

「・・・ください」

「え？」

「貸してください」

「何、を？」

「泣く場所が、・・・欲しいから。貸してください、貴方のその広い胸」

彼を見上げてそう言うと、彼は瞳を揺らがせた。それから小さく笑った。

「・・・しゃーねーな」

パタリと私は床にしゃがみこみ、彼も私に背を合わせた。それから彼は私を引き寄せて、私はその広い胸に顔を埋めた。

それから泣き続けた。

あの事故の日と同じように彼の名前をただただ繰り返した。

あの時と違うのは、私の泣き場所があること。

消さないで、消えないで（新哀）（後書き）

どうも、雛花です（^ω^） 最後まで読んでいただきありがとうございます。
ございます。

一応続きます。こんな長くするつもりなかったんですよ。こんな暗くするつもりなかったんですよ。

本当は意地悪な工藤先生が哀ちゃんに無理やりキスして、訴えますよって哀ちゃんは言うけど、成績下げるって脅されて、抵抗できずに、工藤先生のなすがままになるって話だったんです。（大分工藤先生酷いけどねw）

全然違う。けど、これお気に入り。やっぱりパラレル新哀って私のツボですw

誰か書いてくださいっ m（――） m

1日遅れですけど、工藤の日記念ということで……。これからパラレル率高くなりそうですw

消えないで、消さないで（新哀）（前書き）

お待たせしました。新哀、前の続きです。

消えないで、消さないで（新哀）

その少女に会ったのは、彼女が中学3年生の秋。近くの公園だった。

——消えないで——

誰もいない、早朝の公園。

俺はいつものように散歩をしに来た。ブランコに人影を見た。まだ朝の4時前。日も昇ってなく、暗い。こんな時間に中学生くらいの子がどうして・・・？

疑問に思ったが、話しかけるのも何だったから、そのまま前を通ろうとした。

少し気になってちらりと横目で彼女を見る。

視線に入っただのは鈍く光る銀色の、

ナイフ——……。

一瞬硬直したが、すぐに我に返り、彼女の方へ走りよった。

「何やって……」

「来ないでっ!!」

怒鳴られた。ナイフを此方に向けてきた。俺の真上にあるチカチカと上手く点かない蛍光灯が嫌になった。

「死ぬのか……?」

「死にたい」

「どうして?」

「あの人がいないから。あの人がいない世界なんて、……有り得ない。もう、こんな世界いたくない。消えたい」

こんなに未来に希望をなくした少女は初めてみた。何年か教師を

やってたけど、こんな子は、初めて。

「まだそんなに若いのに、死んじゃ駄目だ。希望を捨てるな」

説教じみたことを言ってみる。それで彼女の気持ちが変わくとは思えない。

「……もう、良いの。あの人が、呼んでるの。早く、逝かなきゃ・・」

『あの人』とは誰なのか？

話からするともう死んでしまった人。そこまで大切だった人なのか。

人は、そんなにすぐに死にたがるのか。

俺はそんな人を助けることさえ出来ないちっぽけな存在なのか。

俺の側にあった古びた蛍光灯が直ったらしく、パツと急に俺の近くは明るくなった。

その瞬間、彼女の手からナイフが落ちた。そのチャンスを逃すまいと走って駆け寄り、ナイフを拾い、遠くへ投げた。

「えどが、くん」

「・・・え？」

聞いたことのない名前。だけど、彼女は確かに俺に向かって言った。

「江戸川君！」

そう言っ、俺を抱き締めた。
突然のことすぎて、驚いた。

「・・・俺は、江戸川君じゃない」

「そん、な・・・」

抱き締めたその腕の力は弱り、彼女はそのまま崩れ落ちた。

「……大丈夫か？」

何と声をかけたら良いか分からなかった。

「俺で良かったら話聞くけど。いや、聞かせてくれないか」

多分、もうすでにこの少女に惹かれていた。年が離れすぎてるから、そんなことを理由にして、その気持ちを信じなかった。

「3日前、私を庇って、幼馴染みの江戸川君が、車に引かれて、死んだの」

ポツポツと彼女は言葉を並べる。そんな彼女の頭を優しく撫でる。

「好きだった、彼のことが。大好きだった。最後まで彼は、笑った。だから、頑張って生きようと思った・・・」

震える彼女はあまりにも切なく見えた。助けたいって、思った。

「でも、無理だった。無理なの。彼は私の世界の光だったから。彼のいない世界にいても、詰まらない。だから、死のうと思った・・・なのに、」

彼女は俺に抱き着いてきた。ドキッとして、心臓が高鳴った。

「貴方が、あまりにも江戸川君に似てるから――」

そうか。彼女は俺と『江戸川君』を重ねて見ているんだ。

「なあ、江戸川君はお前が死んで喜ぶと思うか？」

「……、」

「江戸川君はお前のことを守ったんだ。それなのに、お前は死ぬのか？ お前が大好きだった江戸川君が守りたいと思った命を簡単に捨てるのか・・・？」

彼女は言葉に詰まっていた。

「生きろよ、江戸川君のためにも」

生きて欲しい、俺がもっとお前のことを知りたいから。

彼女は泣き始めた。ずっと一人で抱えてたんだと思う。この時以上
に人を守りたいと思ったことはない。

「……ありがとう。えっと……名前は？」

まだ目に涙が溜まっていた。純粹に可愛いと思った俺はロリコン
なのか？

「工藤新一」

「私は灰原哀。本当にありがとう、工藤君」

少しだけ、笑ってくれた。

それから彼女は帰っていった。一度もこちらを振り向かず。人を1人助けられた。誇りに思えた。

嬉しい筈なのに、心は満たされなかった。この時は気付いていなかった、いや、気付こうとしてなかったが、俺は彼女に惚れていた。

最後の小さな笑顔は俺の脳から離れなかった。また会えるかな、と願った。

今度会った時は、俺のものにするから。

助けるから、灰原のこと――

＊

昔を思い出した。

灰原が俺のいる学校に来た時は本当に嬉しかった。でも、生徒と

先生の恋愛は良く思われていない。

近いのに、遠い。

何とか2年はやり過ぎた。だけど、やっぱり好きだった。ずっと。向こうは覚えていないかもしれないけど。

彼女が3年生になり、大人っぽくなってきた。このままだと誰かに取られてしまう、そう思った。自分のものじゃない、江戸川のものなのに。

だから、2人きりになれる図書館に行った。怖がらせるつもりも、泣かせるつもりもなかった。

ただ、キスがしたかった・・・
触れたかった、成長した灰原に・・・

「嫌われたのかな、俺・・・」

次の日の早朝、何故か早く目覚めたから散歩に出掛けた。途中、大きな交差点を通った。朝だから車も通ってなく、静かで気持ち良かった。

「・・・あれ？」

小さくうずくまって手を合わせている女性がいた。見たことあるような……

「灰原……？」

昨日と同じように彼女は肩をビクッと震わせ、こちらを向いた。

「工藤先生」

彼女の足元には花束が置かれていた。

「……もしかして、」

「そうです。江戸川君が死んだ場所です」

悲しい顔を一切しなかった。

「毎日来てるのか？」

「はい」

当たり前じゃないですか、そんな風に灰原は言った。だって、好きだったんだもん。……『だった』じゃないか、今も、か。

「なあ、俺のこと、覚えてるよな？」

「……私の自殺を止めたお節介な教師」

「おいおい」

「嘘ですよ。私の、人生を変えた人」

と、あの時より綺麗に笑って言うから心臓はバクバクと音を立てる。

「覚えててくれたのか」

「……忘れたくても忘れられません。だって、江戸川君に似てますから」

ちょっと堅苦しい敬語が気になった。

「普通に話して良いんだけど……」

「そう？」

それだけ言うと、また花束が置いてある方を見て手を合わせた。

沈黙の時間が流れる。

「なあ、江戸川と話したいんだけど、良いか？」

「死人は喋らないわよ」

「そういう問題じゃなくて、」

灰原と場所を交代して、花束が置いてある方を見て話しかけた。

「初めまして、灰原のクラスの担任の工藤新一です。まず、言いたいことがある。何で、灰原を置いてった？」

お前が逝かなければ、灰原が涙を流すことはなかった。

「……灰原は、お前がない世界を嫌った。お前のせいで灰原は自殺しようとしたんだ。責任は全て江戸川にある」

責めた。俺は一番江戸川が悪いと思うから。

「ちょっと、工藤君」

「灰原は黙って聞いてろ」

全て吐き出したいんだ。

「灰原を助けたことには感謝してる。だけど、急すぎだよ。灰原が死んだら、俺が後を追いかけちまうだろ」

「……え？」

「俺が江戸川に言いたいことは一つ……」

ただ、これだけ。

「哀を、俺にくれ」

そう言って、後ろを向く。灰原は驚いた顔をこちらに向けてきた。

「そういうことだ」

「どういふこと？」

「哀が欲しい。哀に触れたい。ずっと死人を想ってるなんて辛すぎる」

「……工藤君」

年の差なんて関係無い。好きになってしまったんだから。

「お前が高校を卒業したら、俺と付き合おう」

彼女の表情が固まった。

「・・・嫌」

グサリと胸に刺さった。息苦しかった。嫌だなんて言わないで欲しい。

「何で……？ まだ江戸川が好きなのか？」

「違うは、ない。やっぱり江戸川君のことは好き。だけど、違う理由」

「何？」

「江戸川君とも同じような約束してたの。中学卒業したら付き合おうって。だから、約束したら、工藤君も消えてしまいうので、怖い・・・」

消えそうな声で呟いた。優しい一言だった。

「消えな、いで・・・」

そう言って俺を抱き締めた。

「付き合って、今この瞬間から！ 私、工藤君が好き。江戸川君と重ねてじゃなくて。工藤新一として」

「……良いのか？」

「良いの。頼んでるの」

必死に彼女は言った。

それに答えてやろうと、抱き締め返した。強く、力強く、でも優しく。

「大好きだ、哀」

初めて会った日から心に秘めていた言葉。やっと言えた。

そのまま唇を塞いだ。深く口付けを交わした。唇だけではたりな

くて、自分の舌を彼女のそれと絡め合う。

「・・・んっ。くど、」

彼女が言葉を出そうとしたからもっと深く塞いだ。

ねえ、俺だけを感じて。

他のことなんて考えないで。

今この瞬間だけでも。

俺は消えないからさ。哀も消えないで。もう、哀を失ったら、俺は生きれない――

いつの間にか太陽が昇り、この町に光が差し込んだ。

消えないで、消さないで（新哀）（後書き）

どうも、雛花です（^ω^） 最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

待ってくださっていた方、長々と待たせてすみません。忙しくて、
・ 何日ぶりだろうな。

でもやっぱパラレルは楽しいです（＊´▽´＊） 新哀でいちゃい
ちゃラブラブもっとさせたい。最近、アニメも漫画もコ哀不足すぎ
てやる気でない。私の毎日のエネルギー源は他ユーザー様のコ哀新
志小説！！ てことで皆さん私に力をー！！！！

感想は気軽に、かつじゃんじゃんどうぞー！！（みなみちゃん風に）
待ってますw 小説頑張ります。

RAIN(コ哀) (前書き)

何日ぶりだろう。コ哀、組織がつぶれる前。

RAIN(コ哀)

その日も、雨が降っていた――

「灰原あ」

博士の家の前に立ち、そう呼んだ。ここに来てからもう数分経っている。

俺が何故ここに来てるかというど．．

今日の学校で帰る時。

『今日博士出掛けてるのよ』

『ふうん』

『夜まで帰ってこないの』

『へえ。それで?』

『家に来て』

『は……?』

まさか灰原からそんなことを言われるとは思ってなかった。

『なんで?』

『私を正体不明の人が住んでいる隣の家で1人で居させる気?』

『あ、ああ。昴さんなら大丈夫だよ』

『……もういいわ。貴方に頼んだ私が馬鹿だった』

彼女は呆れた顔で俺にそう言った。それからランドセルを背負い、帰って行ってしまった。

『守ってくれるって、信じてたのに』

そう小さく呟いたのが、聞こえた。

それを聞いて、悪かったと感じた。

彼女は何も言わないが、いつも俺を信じてくれた。頼りになるのは、俺なんだ。

だからこうして来てやったのに……。

「……いない、のか？」

俺が来るの遅かったのか。悪いことしちまったな。明日謝らねえと。

ぽつり、空の涙が零れ落ちてきた。

「雨かよ……」

天気予報では今日は晴天と言ってたのに。生憎傘を持っていない。しかし、運が良いことに傘立てに一本、傘が置いてあった。

「これ、灰原のだ」

何か嫌な感じがした。何だか、大事な何かを忘れているような。助けなくてはいけない何かがあるような・・・

「アイツ、傘持ってねえかも」

さっきよりも強く雨が降ってきた。傘立ての傘を持ってその雨の中へ飛び込んだ。

＊

裏切られるって、悲しいのね。

信じてたのに、工藤君は私を守ってくれと。自惚れだったのかしら？ やっぱり彼には蘭さんしか見えてないのね。

家に居たくなって買い物に出かけた。しかしあまり良い食材もなかったから、何も買わず、帰ることにした。

その時、雨が降りだした。

その辺で雨宿りをしようかと考えたが、すぐに晴れそうにもなかった。だから本降りにならないうちに帰ろうと歩き出した。

雨は次第に強さを増していく。

雨は、嫌いだ。

あの日も雨だった。止まない雨。私が灰原哀になった日。ただひたすらに工藤新一を探した。そこにいて自分が助かるかも分からない。だけど、そこを目指した。

終わりなんて見えなかった。小さな身体で雨の中を歩き続けることは本当に辛かった。地獄だった。

寒い。

怖い。

疲れた。

最悪の感情が私の中で溢れる。

死にたいとさえ、思った。

初めは死ぬつもりで毒薬を飲んだ。なのに、身体が縮んだだけで、死ねなかった。

雨の中。前も見えなければ、後ろも見えない。未来なんて、全く見えなかった。

ただ、唯一の頼りは工藤新一だった。

それだけを目指した。

「結局、裏切り者には味方なんていないのね」

あのガス室を抜け出したときから私の人生は決められていたんだ。

さらに雨の強さは増す。

一歩がだんだん重く感じる。私は何処を目指している？　そこは私がいていい場所なの？　分からない。

踏み出す一歩が、止まった。

「・・・1人だったのね。あの日から」

その場にしゃがみこんだ。

私はお姉ちゃんが逝ってしまった日から1人だったんだ。仲間なんて、味方なんて、結局いなかった。

寒い。

怖い。

疲れた。

死にたい・・・。

あの時と同じ。違うのは、希望がないこと。ただそれだけ。

頬に雫が伝った。

弱い私に雨は容赦無く降り注ぐ。

ざあざあと音を立てて。

しかし、ふと気が付くと冷たいそれは私には当たらなくなっていった。

—— 止んだ？

雨が私に当たらない。だけど、雨の音はまだ鳴り続けていて。

ふと上を見上げると。

「…………え？」

傘だ。傘が雨から私を守ってくれた。

「まったく、こんなところで何してんだよ？　風邪引くぞ？」

上から雨ではなく声が降ってきた。傘の位置がずれ、優しい表情がこちらを向く。

「工藤、君……?」

「……お前の家行ったら誰もいなくてさ。急な雨だったからお前傘持ってねえかもなって思って探してたんだよ」

「……ありが、とう。貴方濡れてるじゃない?」

彼は傘を持っていた筈なのにびしょ濡れだ。

「ん、ああ。灰原もそうだろうなって思って。1人だけ濡れるなんて可哀想だし」

「何よそれ」

そう言いながらも、心では『ありがとう』と言ってみた。

「帰ろう」と口にしようとした時、彼は小さく呟いた。

「雨……」

「え?」

「お前の時も、俺の時も、雨が降ってた」

「……」

彼は悲しい瞳をしていた。

「辛い思い出だよな。俺は雨が降る度に蘇るさ、あの時の気持ちが絶望だよな」

ハハッと彼は軽く笑った。無理に笑っているのは見え見えだ。

「……私が悪いのよね。私があんな薬さえ作らなければ、そんな悲しい記憶……」

「そういうことを言ってんじゃねえ」

いつもより低い声に驚いた。

彼はしゃがみこんでいる私に背丈を合わせ、頭を引き寄せられた。彼の肩に頭を預ける形になった。

「え、？」

「ごめん。辛いよな」

彼の口から漏れた言葉は謝罪だった。

「別に、」

「強がるなよ。涙の後くらい俺は分かるから」

彼には驚かされた。雨で濡れているのに、泣いていると分かっただなんて。

「やっぱり俺って力不足？」

コクリと頷く。

彼は何も悪くないけど。私が不安だから。もっと安心させて。

「・・・だよな。お前のこと一番分かってるつもりだけど、全然分かってないんだよな」

分かってないでしょ、何も。私の貴方への気持ちも。

「信頼してくれてんだよな？」

コクリとまた頷く。そしたら彼は優しく包み込むように私の頭を撫でてくれた。

「辛い時は辛いって言え。助けが欲しい時は助けてって言え。そし

たら絶対に俺は灰原をほっとかないから」

もう一度、頷いた。

本当に信頼してるんだからね。

「ほら、行くぞ」

彼は手を差し伸べてくれた。この瞳に映るものは全て信じてもいいのよね。この手は貴方の優しさだって。

無言で彼のその手に自分の手を伸ばした。

彼は私の瞳を見て笑って言った。

「止めない雨はないから」

それを聞いたら何だか安心できた。

雨はいつか止むのだから、私の悲しみも苦しみもいつか消えるんだって。

多分、彼はそう言いたかったんだ。

「本当にありがとう。工藤君・・・」

雨の音でその声は消えた。それで良い。私の気持ちは届かなくて
も。

「帰りましょ」

「おう」

彼の持ってきた私の傘に2人で入る。

「ねえ、何で傘が一つしかないの？」

「・・・良いじゃねえか」

「まあ良いわ」

彼の肩が私の肩に触れる。そしたら2人で見合って笑った。

素直で真面目だけど恋愛に対しては不器用なそんな貴方を私は好きだから

RAIN(コ哀) (後書き)

どうも、お久しぶりの雛花です(へωへ) 最後まで読んでいただきありがとうございます。

本当に更新出来なくてごめんなさい。忙しいんですよ。勉強一応してるんで(とかいってたまにしかやってない)。後、ブログ始めました。プロフィールのところにURLあるんでどうぞおねがいします！

とまあ、私情は置いて・・・

今回は組織つぶれる前のコ哀。2人とも小さくなったのって雨降ってた日だよな。という妄想から始まりましたw 久しぶりだから文章めっちゃめっちゃ↑いつもだろ でも楽しかった。哀ちゃん抱き締めるコナン君好きだわ。やっぱりコ哀だわ。

アニメイトでコナンの新商品が続々登場するようで・・・ポスターの哀ちゃんが本当に可愛い。ピンしてるんだよ、ピン！

最近コ哀不足です(´・ω・｀)

p u n i s h m e n t (コ志) (前書き)

初めてのコ志に挑戦。たまに快志。
すぺしやるさんくす.. 赤い彗星さん

p u n i s h m e n t (コ志)

解毒剤が出来たのは組織が潰れてから数ヵ月後の日だった。何度も研究を重ねたから効果は絶対だろう。自信作だ。

その日のうちに工藤君を家に呼んだ。博士は学会で家にはいなかった。

「灰原、何の用だ？」

「出来たのよ、やっと。解毒剤が」

「そうか、良かったな」

その言い方が少々他人事のように聞こえた。だけど特に気にしなかった。

「はい、あげるから飲んできなさい」

「うーん。本当に大丈夫なのか？」

「安心しなさい。自信作だから」

工藤君は浮かない顔だった。

「お前、先飲めよ」

「え？」

「不完全品だったら嫌だからさ」

工藤君には一刻も早く戻って欲しいのに。私は戻らなくても良い。だけど、工藤君がそう言うのなら。

「分かったわよ」

私は宮野志保に戻ることを決心した。

全ては工藤君のため。

薬を飲んだ。

身体が熱くなり、激痛が走る。

目を冷ますと、無事に私は宮野志保に戻っていた。痛いところも特にない。これなら工藤君も飲んでくれる筈。

そして蘭さんと寄りを戻して――

それで、良いのよね？

私は間違ってる。間違っているのは私の心。彼のことが好きだなんて、間違えてる。

馬鹿みたい。こんなに悩んで。

私が何を考えたって工藤君は蘭さんのところに戻る、それが答えなのに。

「初めまして、ね」

宮野志保の姿で彼の前に立つ。彼の頬が赤く染まったのは嘘だと信じたい。

「お、おう。綺麗じゃねえか・・・」

彼はぎこちない口調で私を褒める。

「お世辞を言っても何も出てこないわよ」

彼を見下げてそう言った。何だか新鮮だった。さっきまではこんなにも私は小さかったのね。

「……これで完全な解毒剤ってことは分かったでしょ？ さ、早く飲んできなさい」

小さな粒の解毒剤を彼に手渡した。

——でも。

「……え、」

彼はそれを床に落とし、

踏み潰した。

「ちょっと工藤君!! 解毒剤は2つしか作ってないのよ! ?
やっ」 何

「分かってる」

うつ向いて、彼は顔をあげない。

「ごめん、俺決めたんだ。元には戻らないって。勝手にごめん」

彼のその言葉は私にとって残酷すぎた。

イマナンテイツタノ？

ワカラナイ、ワカラナイ。

機械のように頭の中で言葉が流れた。

訳が分からない。どうして。ずっと解毒剤を欲しがっていたのに、何で？ 私の努力は何だったの？

「どうして、？」

私の疑問に彼は迷いのない瞳で私の瞳を見て答えた。小さな彼なのにどうしてこんなに力強い瞳をするの？

「自分への、罰だ」

そう吐き捨てた。

「俺の勝手な行動で何人もの人に迷惑をかけてきた。許せないんだ、そんな自分が。軽い気持ちで動いて何も考えないでいる自分が。コナンになってたくさん学んだ。テレビに出てみんなに誉められて名探偵じゃない。難事件を解決した、その時点で名探偵なんだって。俺は色々勘違いしてたよ。それに、俺が死んだら悲しむ人はたくさんいるって分かったんだ。低い視点から見ると世界が全然違った。だから俺は、これからも『江戸川コナン』として生きる。生きたいんだ」

揺るがないその瞳は綺麗に見えた。

でも、可笑しいわよ。一番罰せられるべき私が元に戻って、一番報われなければいけない彼が元に戻れないだなんて。

そんなの、理不尽よ。

「・・・灰原は優しい奴だから、そんなの可笑しいって思うだろう。じゃあ何で自分は元に戻るのかって」

「そうよ、可笑しいわ。貴方が戻らないのに私は戻るなんて、本当に可笑的い」

涙が溢れてきそうなのを必死に耐える。

「宮野志保に戻って欲しかった。俺がそう願ったんだ。宮野志保は幸せじゃなかった。だから、今からでも、幸せになって欲しい。我儘で、ごめん」

俯いたままで彼はこちらを見ない。

幸せ？ もうとっくに幸せなのよ。知らないでしょ。貴方の隣にいるから私は幸せなんだって。

「蘭さんは・・・？ 彼女はdoingするの？ ずっと工藤新一の帰りを待ってるのよ？」

「……ああ。蘭を裏切ることになる。悪いと思ってるさ」

「じゃあ、どうして」

「それ以上にさ、大切にしたい奴が出来たんだよ」

工藤君はこちらに顔を向けた。切なくて悲しい瞳の色。初めて見た。

「灰原、お前のことが、好きだ」

衝撃の言葉だった。

何で、こんなにすれ違ってしまったのか？ 今からではもう遅い。灰原哀のままだったら、彼の隣にいたのに。

「遅いわよ、もう」

「……え？」

「分からない？ 私はずっと貴方だけを見てきた。貴方に会ったときから惹かれていたの」

彼は本当に恋愛に対して鈍感だ。私もだけど。目を見開いて驚きを隠せないようだ。

お互い、自分の気持ちは表に出さず、閉じ込めてきた。だからすれ違った。

「好きだった、貴方が」

昔から貴方のことばかり見ていた。工藤君しかもう好きになれない。だけど、

「私、小学生には興味ないの。……もっと大人になってからお互い気持ちが変わらなかったら」

無理よ、貴方の幸せを奪った私が貴方と付き合うだなんて。罪を重ねてしまうだけじゃない。

「分かった。待ってろよ、俺のこと」

ニコツと彼は笑った。

まるで「泣くな」と言っているようだった。大丈夫。泣かないわ、貴方が泣かないなら。

――1ヶ月後――

灰原、元気かな？

ふと彼女のことを思い出した。そしたら無性に会いたくなって、博士の家を訪ねた。

「おう、博士。久しぶり」

「久しぶりじゃのお。どうじゃ、最近は？」

「うーん、普通だぜ。みんな元気だ」

俺を除いてだけど。

俺はいつも通り探偵事務所に居候をしている。蘭には電話をして「もう帰れない」と伝えた。「コナンⅡ新一」だということはまだ話していない。まあ、バレるのは時間の問題だろう。

あの日から灰原に一度も会っていない。大人になるまで、せめて高校生になるまでは会わないでいようと思った。だけど、そんなに待てるわけがなかった。

「なあ、いきなりで悪いんだけど、灰原はどこいんだ？」

「志保君か？　どこって新一君聞いてないのか？」

「え？　何を？」

＊

工藤は元に戻らないことを決意した。志保ちゃんは元に戻った。こんな未来は誰もが予想しなかっただろう。俺だって分からなかった。

志保ちゃんとは組織を潰す数日前に出会った。その時、自分は工藤のためにだけ生きている、そう言っていた。彼が元に戻ったとしても、自分はこのままできると。

工藤にはそれより前に会っていた。工藤は敵である俺を受け入れてくれないと思った。だけど、工藤は協力してくれるなら、と俺を許してくれた。

工藤は俺に志保ちゃんへの思いを話してくれた。『好きだ』って。決意に満ちた揺るぎない瞳だった。

そんな彼らはすれ違っていた――

2人共頑固で素直じゃなくて、本当の気持ちを表に出さない。だから綺麗にすれ違った。

敵であつた組織は潰れた。

それから志保ちゃんと俺は一緒に住むことになった。理由は色々ある。一番の理由は組織の残党から志保ちゃんを守るため、と志保ちゃんには言っている。だけど、本当の理由は、俺が志保ちゃんと居たいから。工藤には悪いけど。

でも、思ったより幸せではなかった。

いや、言い方が可笑しいか。ただ、辛かった。志保ちゃんと一緒に居ると工藤への気持ちがいほど分かった。だから簡単には志保ちゃんに触れられなくて。家だから当たり前だが、志保ちゃんは無防備で何度も襲ってしまおうかと思うことがあった。だけど、ずっと我慢してきた。何度も何度も我慢した。

でも、1ヶ月が限界だった。

ポカポカと温かい午後。ソファーに座り、2人で有意義な時間を過ごしていた。志保ちゃんはすぐ隣に座っていて、時々肩が触れる。その度に俺の性欲が沸き上がってくる。

必死に唇を噛みしめ、理性を保つ。

「・・・江戸川君、元気かしら？」

志保ちゃんから工藤の話をするのは珍しいなと思った。

「元気なんじゃない？」

「そうね。・・・忘れたいのに忘れられないのよね、彼のこと」

うん、知ってる。志保ちゃんはいつも工藤のことを思ってるって。表情を見ただけで分かる。

「忘れない？」

「出来ることなら、ね」

分かってるよ。そう言ってたって本当は忘れたくないってことくらい。

嫉妬が俺の中で渦巻く。

だけど、俺だって限界だ。

「じゃあ、俺が忘れさせてやる」

いつもより、低い声が出た。

「・・・え？」

彼女をソファ―に押し倒した。多分、俺の瞳はいつもと違う。強
がったふりをして本当は悲しい瞳。

理性を完全に失い、歯止めが効かなくなる。

「くろ、」

「黙れ」

彼女の言葉を遮るようにして唇を塞いだ。

「・・・ずっと、愛してたんだから」

心の奥にしまい込んでいた感情が表に出てくる。もう周りが見えなくなった。俺の瞳に映るのはただ1人、彼女だけ。

その時、遠くで志保ちゃんの昔の名を呼ぶ声がした。タイミングが悪すぎる。工藤だ。俺が分かったんだから彼女も分かっただろう。

だけど、無視した。

今、この瞬間だけでも、俺を見て欲しいから――

もう一度彼女にキスをする。

＊

ここ、か。

博士の家からから歩いて30分程度のところにある新しい一軒家。「志保君は引っ越したんじゃよ、元に戻ってすぐにお。聞いたお。聞いたんじゃが」博士のその言葉が俺をこの家まで導いた。

呼び鈴を押そうとしたら、表札がちらりと見えた。目を疑った。

……まさか、な。

『ピンポーン』

……、返事がない。

いない筈はないのに。

好奇心でドアを引いてみた。カギがかかっていなくて、ドアは開いた。無用心すぎるだろ。

「灰原？」

恐る恐る家へ入る。不法侵入ってか。まあ、出ない灰原が悪いんだよな。と、自己解決をした。

玄関を入り、廊下を歩くと、すぐ右にドアがあった。リビングだろう。

ドアを開けた。

——このタイミングでドアを開けてしまったこと俺はとても後悔した。

「・・・っ！」

言葉にならなかった。

俺が見たのは、ソファ―に灰原を押し倒し、黒羽がキスをしている光景だった。

「おお、名探偵。久しぶり」

いつものノリで彼は話しかけてきた。こっちはどれだけ怒り、嫉妬してるか分からねえのか？

「黒羽、この世に残す言葉は？」

「……へ？」

「玄関から靴取ってくる。灰原、何か蹴るものくれねえか？」

怒りと嫉妬は頂点まで達した。

「ちょ、待てって！ 悪かったよ！ ……つい、出来心で」

「絶対許さねえ！！」

本気で殴りかかりそうになった。

「落ち着きなさい、2人共」

その間に灰原が割って入ってきた。

「……」

俺は納得いくわけがなかった。質問したいことは山ほどある。

取り敢えずソファに座り、落ち着いた。向かい側に灰原と黒羽が座る。それにも突っ込みたいところだ。

「……で、まずは、あの表札は何だ？」

「何ってそのままの意味」

「『宮野志保』、『黒羽快斗』ってどういうことだよ!？」

「私が答えるわ」

灰原がそう言った。

「私は引越すことを決めたんだけど、黒羽君が組織の残党がいたらどうするって心配してくれて、一緒に住むことになったの」

いや、可笑しい。引越すことも可笑しいし、一緒に住むことも可笑しい。灰原が黒羽君と言ったのに嫉妬した俺はそうとうアホみたいだ。

「まあ、俺と一緒に住みたかったの」

結局それか。俺だって一緒に住みたいのに。

「……分かった。じゃあ、何でキスしてたんだ？」

「それは俺がしたかったから」

「したかったらしていいのか？」

「良いんじゃないね？」

フフンと黒羽は楽しそうに言った。

「灰原絶対嫌がってたろ？」

「ええ」

と灰原が肯定した。

「んなこと言われても・・・。我慢の限界だったんだよ」

どうやら少しは反省しているらしい。だからって許すわけがない。
俺だってまだキスしたことないのに。

嫉妬だよな、これ。
なんか、醜い。

「まあ、今後絶対しないと言うんなら許してやるよ」

「……ちよつと自信ないけど、約束する」

次したら許さないけどな。

「ところで江戸川君、貴方何しに来たの？」

「何しにって・・・灰原に会いに」

「灰原じゃなくて、宮野よ」

「あ、悪い」

「貴方、大人になるまでは私と会わないんじゃない？」

「……そのつもりだったけど・・・」

実際は相当辛いことだって分かった。1ヶ月でも会わないと会いたくなる。

「宮野は、平気なのかよ」

「ええ」

宮野はそう言った。だけど、その奥にある悲しい瞳を俺は見逃さなかった。

きっと彼女の優しさ。俺を不安にさせないための。

「……黒羽君もいるし。だから、貴方は安心して江戸川コナンの人生を過ごさない」

——この時の笑顔を、俺は忘れない。

「サンキュ、はいば．．．じゃなくて宮野」

「次会うときまでには呼び方直してくるのよ」

次会うときは、きっとお前を守れるくらい強くなってるから。

＊

玄関まで宮野が送ってくれた。

黒羽は多分気をきかせて来なかったんだろう。

「それじゃあ、また今度」

「会えるの、何年後だろうな？」

「そうね・・・」

「まあ、何年後でもお前を好きでいるから安心しろよ」

ニコツと笑った。

「・・・私は黒羽君に心変わりしてるかもしれないわよ」

縁起でもないこと言うなよな。

「宮野、しゃがんで」

「え？」

ゆっくりと宮野はしゃがんだ。顔が丁度俺の前に来た。一步彼女に近付いて、前髪をフワツと上にあげ、彼女のおでこに優しくキスをした。

そうしたら彼女はちよつとだけ顔を赤くして目を見開いて俺を見た。

「俺にしか惚れない魔法」

もう一度笑って見せた。
そしたら彼女も笑った。

「んじゃな」

ドアを開いたところで、後ろから彼女の声がした。

「ずっと待ってるわよ、江戸川君・・・」

振り向いてはいけないと思った。

今振り向いてしまったらきつと泣いてしまう。そして彼女を困らせて、俺の決意が緩んでしまう。

だからそのまま、家を出た。

外は綺麗な夕焼けだった。
いつか、一緒に見れる日が来れば・
・

p u n i s h m e n t (コ志) (後書き)

どうも、雛花です（^ω^） 最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

さて、今回は雛花の初のコ志、いかがだったでしょうか？ 難しかったですが、新しい発見（？）なんかもありました。

リクエストして下さった赤い彗星さんに皆さん拍手をお送りください。パチパチ。少しリク設定からそれてしまいましたがw

これまでコ志を書かなかった理由は、コナン君だと志保ちゃんを守れないからです。それとコナン君が絶対に変態になるからです。今回は出来るだけイケメンコナン君にしました。まあ、快斗君が目立ちすぎましたが。

コ志を書くにあたって、一番考えたのは何故コナンは戻らず、志保が戻ったのかです。今回はその辺をシリアスにしてみました。結構頑張ったつもりです。

後は快斗君の一方通行。Sな快斗君が好き（^ー^） 「黙れ」ってかっこいい。

コ志も書いてて楽しかったです。きっと続編書きますので楽しみに！

それでは、チャオ☆

【続編】 p u n i s h m e n t (コ志) (前書き)

あれ、気が付けば1ヶ月ぶりくらいだ。

コ志、続編です。待たせたわりには完成度が低い W W W

【続編】punishment(コ志)

——11年後——

桜の花弁が舞っていた。

俺は帝丹高校の卒業証書を持ち、校門の前で立っていた。周りには仲間たちが笑ったり、涙したり。

「コナン君！」

「コナン！」

「コナン君！」

俺の偽りであった筈の名前が呼ばれた。けどもう馴染んだ。それに、これは偽りの名前ではない。

「おうっ」

振り向くといつもの3人。歩美、元太、光彦が涙をちらりと浮かべながらも笑顔でいた。

「・・・卒業しちゃったね」

「ああ」

歩美はポロポロと涙を流した。

「みんな、バラバラになっちゃうね」

その場はシーンとなる。今日までずっと一緒にいた仲間だ。悲しいのは当然。

「・・・これが終わりじゃない。これからみんな大人になるんだ。何も悲しむことはない。それに、バラバラにはなるけど、一度繋がった絆はバラバラになんてならねえからさ」

旅立ちの良いことなんだ。だから俺はニコツと笑った。そしたら3人も明るく顔を上げ、笑った。

「そうだな！ 少年探偵団は永遠不滅だぜっ」

流石団長というべきか。俺にとっても優しい言葉だった。

「もちろん、哀ちゃんもだよね？」

「もちろんですっ」

それを聞いて小さく笑った。良かったな、宮野。お前もまだ少年探偵団だってよ。

「コナン君、笑ってるの？」

「・・・ああ。灰原、絶対喜ぶだろうなって」

そう言ったら歩美も嬉しそうな顔を見せた。

「そういえばコナン君、高校卒業したら哀ちゃんに会いに行くって言ってたけど、会うの？」

「ん？ ああ、会うさ。何か言いたいことあるか？」

「あのね」と歩美はポケットから可愛い柄の封筒を取り出した。それを俺に渡した。

「これ、哀ちゃんに渡して！」

「了解。元太と光彦は何かあるか？」

2人もポケットから封筒を出した。

「僕も手紙を書いたんです。渡して下さい」

「俺もだ、よろしくな」

「おうっ」

灰原って本当愛されてんな。

灰原がいたのは1年くらいだ。それなのにこんなに愛されてるのは魅力があるからなのだろうか。

「・・・それじゃあな」

自分の発した言葉がやけに重く感じた。別れてこんなに辛かったっけ？ もう二度と会えないわけではないのに。

「またね、コナン君」

「元気でな」

「またすぐに会いましょう」

俺が教えなければいけない。別れは悲しいことではないと。だから、笑顔でいなければ。

「またな」

ニコツと笑ったら3人共笑った。随分と大きくなった。身体も心も大きくなった。自慢の幼馴染みだ。

俺は歩き出した。行かないといけないところがあるから。この世

で一番大事な奴のところへ。

校門を出てから携帯を取り出して、彼女に電話をかけた。プルルルと数秒機械音が鳴り、それが止む。

「もしもし、俺」

返事はない。

「宮野・・・？俺だよ、分かるよな？」

長すぎる沈黙に不安を覚えた。11年も経ってしまったから忘れてしまったのだろうか？

なんて心配は無駄だった――

『・・・バカ。声聞けば貴方だって分かるわよ』

その言葉を聞いて俺の胸は高鳴った。

宮野だ。変わってない。声も、口調も、変わってない。優しい、温かい声。俺の大好きな――

「宮野、会いたい」

『そうね。いつなら空いてるの？』

「今すぐ会いたい。会いたいんだ、宮野に」

『全く。・・・良いわよ』

クスッと笑う声が聞こえたから俺も微笑んだ。

「じゃあ、米花公園な」

『ええ』

それを最後に電話は切れた。
名残惜しくはあったけれど、これから会えるんだ。11年も会っ

ていなかった、愛しい彼女に。

＊

俺が先に公園に着いた。その辺のベンチに腰を下ろす。自然が多いこの公園では木々が揺れ、桜の花弁が舞い散る。

綺麗だ、とても。

宮野に会うのは11年ぶり。人に会うのにこんなに緊張したことはない。

何て言われるだろうか？ 俺を誉めてくれるだろうか。いや、宮野のことだ、誉めてはくれないだろう。いつもの憎まれ口で俺をけなすだろう。

ちよつとばかりか笑いが込み上げてきた。こんなに楽しみなんだ、俺。

昔を懐かしく思っていたあの日々が懐かしく思える。自分は相当頑張ったと思える。自惚れだろうか。

あれこれ昔の思い出を振り返っていると――

「・・・江戸川君」

何年もの間聞くことのなかった愛しいその声。振り向くまでもなく誰かなんて分かった。

白いワンピース姿の彼女を。俺を見て微笑んでいた。

「宮、野」

何とも言えない衝動が心の中でうごめく。何と言葉を放ったら良
いか考えた。

——会えた、やっと。

——寂しかった。

——元気にやってたか？

——ちょっと太った？

——俺のこと、覚えてるよな？

——愛してるよ。

彼女は何と言われたら嬉しいのだろうか。たくさんの言葉が出て
くるが、どれも良いとは思えない。

先に動いたのは口ではなく、自分自身だった。

彼女を優しく抱き締めた。

11年前は彼女を包み込むことが出来なかった。それが悔しくて、背を伸ばそうって、大きくなろうって努力した。

言葉なんて、いらない。

だって触れてるだけで伝わるから。

ふと気がついたことがあった。

そっと宮野の身体を離し、彼女を見下げた。．．見下げたんだ。

「俺のおっきい」

ちょっとした自慢だった。

工藤新一の時よりも背が高くなった。

「そうね、おめでと」

俺を見上げて彼女はクスッと笑った。

「．．．歩こっか」

彼女の左手を握り、緑豊かなこの公園を歩き出した。

＊

長い沈黙が続く。それが心地良いとも思えたが、せっかくの11年ぶりの再開だ。話すことだってたくさんある。

「・・・ねえ、第2の学生人生、楽しい？」

沈黙を破ったのは宮野だった。

「ん？ そりゃ、楽しいぜ。元太たちとは小中高ってずっと一緒だった。あいつらの成長は見てて楽しかったな」

「そう、良かったわ。蘭さんは、元気？」

「蘭、か。蘭とも大分会ってねえな」

その答えに彼女はハテナマークを浮かべた。その表情を見てあのことをまだ宮野に話してないことに気がついた。

「・・・蘭の、というかおっちゃんの仕事所に居候してたのは小6までだ。中学からは博士の家に居たよ」

「そう」

「それと、蘭には正体がバレた」

「……え？」

宮野が歩みを止めた。

「さすがに、バレるさ。メガネだけじゃ騙せない。中学に入る前に、言われたんだ――」

＊

小学校卒業パーティーだと言って、歩美たちが盛り上り、博士の家でパーティーをした。意外と楽しかった。

帰りが遅くなり、9時を過ぎてしまった。いつもならもう閉まっている探偵事務所に明かりがついていた。

（なんだろ・・・）

ドアを開けると、そこにいたのは蘭だった。ソファに座り、1

人考え事をしていた。

「・・・ただいま、蘭姉ちゃん。遅くなってごめんなさい」

初めは遅くなったことに怒ってるのかな、と思った。だけど、も
っと遅かった時だってあったし。

蘭が立ち上がり、此方を見た。

何か決心したような目で此方を見た。

俺は、この瞳にあったことがある――

この瞳は、俺の全てを見透かしたという瞳だ。

蘭が口を開かずとも、言われることは分かった。

・・・もう、限界、なんだな。

（ごめんな、蘭）

それでも俺は彼女の口が開くのを待った。

「・・・新一、なんでしょ？」

目尻に涙を溜めながら彼女はそう言った。何て謝ろうか。……謝ってどうにかなる問題じゃないけど。

「ああ、」

江戸川コナンのトレードマークであったメガネを外し、レンズごしではなく、彼女の瞳を見つめた。

「何でっ、何で私に何も言ってくれなかったの？ 信じてたのに、戻ってくるって」

「・・・昔、電話したじゃねえか。『もう待たなくて良い』って」

「そんな言葉、信じなかったよ。ねえ、何で、何で新一はそんなに変わったの？」

「俺は、この姿になって、色々分かったんだ。色々知ったんだ。…一番守りたいやつが誰かってことも」

——もう、嘘はつけない。

「蘭は、今でも大切な幼馴染みだと思ってる。お前が俺を憎むことは、正しい。俺がどうこう言える立場じゃねえからな」

嫌われてもしようがないと思った。

だけど、やっぱり、蘭だ。俺が知ってる優しい蘭だった——

「許すよ、新一が本当のこと話してくれたから」

ニコツと彼女は笑った。

「まあ、これでしらばっくれたら3発くらい蹴りいれてたけどね」

「うお、こわっ」

「ただし、その守りたい人、今度私に会わせてね。この大馬鹿推理之助をよろしくって一言言わないと」

「多分、お前驚くよ」

「私の知ってる人なの？」

「さあね。会ってからの楽しみ」

彼女が笑ったから、俺も笑った。

＊

「——って色々あったんだ」

宮野は黙ったまま。だけど、しっかりと俺の手を握りしめていた。

そして俺の方を見て、こう言った——

「蘭さんは今、幸せなのかしら？」

俺は自信を持って言い返した。

「ああ、幸せさ」

そんな俺に「どうして？」という顔を向ける。

「あいつは、蘭は、俺なんかより強いんだ。だから、幸せなんてすぐ掴めるさ」

「・・・そう」

再び一緒に歩き出した。

「つたく、人の心配しないで自分の心配しろよな」

そう言ったら宮野は軽く笑った。

「馬鹿ね。私のことは貴方が幸せにしてくれるんでしょ？」

そんな彼女を見たら顔が赤くなった。

「何照れてるのよ？ あの時から全然変わってないんじゃない？」

きっと彼女は何となく言った言葉が俺にはカチンときた。

「男なめてると痛い目に合うぜ？」

そう言うのと彼女の肩がビクッと震えた。

「・・・俺だって、変わったんだ。宮野に認められるようになるろって。身体は高校生でも心は十分大人なんだ。子供扱いされちゃ困るね」

彼女を抱き締め、優しく頭を撫でる。

「大丈夫、絶対幸せにしてやつから安心しろ」

「……………」

無言のまま彼女は俺の背中に腕を回した。

＊

「――で、何で名探偵もここに住むんだよ!？」

それから1週間後、俺は今、宮野と黒羽の住んでいる家に来た。
嫌だと駄々をこねるのはもちろん黒羽。

「いや、宮野がここに住み慣れたから引っ越しは嫌って言ったし。

黒羽を追い出すのは可哀想って言ったから（俺は追い出したかったけど）」

「だからってこの3人で同居とか可笑しいだろ」

「何が？」

「っだから・・・」

「黒羽君は、探偵である貴方と怪盗であった自分、それと黒の組織の一員であった私が一緒に住むのは可笑しい、そう言いたいんですよ？」

と、宮野が間に入ってきた。

「うん、」

「過去は過去。もう過ぎたんだ。気にしてもどうにもならねえんだよ。誰も気にしないだろ、そんなこと」

「“そんなこと”じゃない。大きいことなの、私たちにとって。あの頃の罪は消えないから・・・」

俺には、2人の気持ちは分からない。だから『気安く大丈夫』とか言えないものだと思う。

それでも、楽になって欲しい。

「だけど、私は幸せになりたい。心からそう思う。だから、可笑しくない。この3人が一緒に住んでいたとしても。正義と悪が一緒になっても」

そう言って宮野は笑った。

「志保ちゃんがそう言うなら俺も」

「ああ」

（誰もこんな未来、想像してなかっただろうな。）

どんなことがあっても、人はいつか変われる。変わらない人間など・・・変われない人間などいない。

「じゃあ、江戸川君と黒羽君は部屋一緒ね？」

「は・・・？」

見事に声が重なった。

「え、部屋なら3つあるだろ？」

「あるわよ。1つは私の寝室。もう1つは実験室。で、貴方たちの部屋。ほら、3つじゃない」

.....。

「何か文句でも？」

「「.....いえ」」

クスツと小悪魔のような笑みを浮かべて彼女は自室へと帰っていた。

「女が強い時代になったな」

「ああ.....」

【続編】punishment（コ志）（後書き）

こんばんわ、雛花です。ご無沙汰しております（・ω・） 最後まで読んでいただきありがとうございます。

今回はコ志の続編。もうちょつとラブラブさせたかったんだけどなあ。志保ちゃんよりコナン君が大きくなったって書きたかった！

ただそれだけだw コ志良いわ。好きだわ。

もう最近哀ちゃんとコ哀不足で倒れそうなんですけど。テレビで次に哀ちゃんを拝めるのは漆黒かなあ？ まだまだやんけ。サンデーにも出てないしな・・・ 誰か私にコ哀分けて下さいっ！！

何で最近こんなに更新遅いんだろ？ 調子良いときは1日一回更新ペースだったのに。忙しいのかな？ うーん・・・ まあ頑張りますわあ。書きたいのは2つほどあるけど。多分、喋れない少女（哀ちゃん）の話し書くよ。

たまには真面目に後書き書いてみる。

今回のテーマは『変化』だと思います。

人間は変われるかって。だけど、変わらない人なんていないと思います。自分が気付いてない部分で変わってたり。誰か他人に「変わったね」とか言われて気付くこともあったり・・・

もちろん変わらない部分もあります。友情であったり愛情であったり、その他もろもろ。

変わりたくなくても変わってしまうってこともありますよね。

でもまあ、自分が目指す自分に変わるためには“努力”が必要だなんてつくづく思います。私は何度だって変わろうと思いましたが、一向に変わりません。それは努力してないから。口で「変わる」というのは簡単です、でも本当に変わることは難しい。相当努力がいると思います。

・・・ 結局何が言いたいのか、自分でも良く分かりません↑ 自分

は変わりたいです。

「変わる」にも色々あると思いますがね。

私は勉強できる人にならなりたいっ！！

ワケわからんお話にお付き合いくださりありがとうございます。次こそ早く更新します！

口を閉ざした少女【前編】（新哀）（前書き）

よし、今回は更新早いぞ！

パラレル新哀、20歳と14歳。

彼は彼女に喋って欲しかった

口を閉ざした少女【前編】（新哀）

ある秋の日、俺は出会った。その少女に。
これは運命だったのかもしれないし、神様の悪戯だったかもしれない。
ない。それでも、出会ったんだ。

その少女は、一切喋らなかった。

俺は喋って欲しかった。他人に自分の気持ちを伝える喜びを、他人と言葉を交わす楽しさを知って欲しかった。

なあ、その声を聞かせてくれ。
一度だけで良いから――

*

（うお、緊張する・・・）

こんなに緊張するのは久しぶりだった。

今日から5日間だけこの帝丹中学で先生をすることになった。言わば教育実習生だ。

今は担当するクラスの教室の前にいる。生徒たちの笑い声が聞こえてくる。

「そんなに緊張しなくて良いのよ」

と、隣に立っている年配のおばさん先生が俺に言った。名前は橋本という。この人はこのクラスの担任の先生だ。

「中学二年生は荒れるとか聞くかもしれないけど、みんな良い子よ。まあ、一つだけ問題があるんだけど・・・」

「え・・・？」

「さ、入るわよ」

「あ、はい」

彼女の最後の一言を俺は特に気にせずに教室へと入った。この後に何が待っているかも知らずに――

ガラツと勢い良く開いたドアに皆の視線が一気に集まる。俺の心臓はバクバクと音をたてる。

教室中がざわつく。

「はい、皆静かに！ 彼は今日から5日間、ここで教育実習を受けます。このクラスを担当しますから、仲良くするように」

橋本先生はそれだけ言うと「後は任せたわよ」と小声で俺に言い、教室から出ていった。

・・・いきなり1人はキツいだろ。

教卓の前に立つ。

ほとんどの人がこちらを向いている。頑張らないと。

「えー、初めまして。工藤新一と言います。よろしくお願いします。教科は数学です。・・・質問ある人いますか？」

シーンとクラスは静まった。どうやら質問は無いようだ。

「じゃあ、先生も皆のこと知りたいから自己紹介してくれるかな？
じゃあ、端の人からお願いします」

と言うと、左端の男の子が自己紹介を始めた。皆個性豊かで自己紹介の中では笑いで溢れ、楽しいクラスだと感じた。何も問題のないクラスだと。

その少女に順番が回ってくる前までは――

廊下側の席の子から始め、もう終盤で窓側まで来た。前から3番目の席の女の子の番だ。しかし、彼女は一向に立とうとしない。本を読んだそのままだ。

「次は・・・灰原哀さん、かな？　立って自己紹介してくれる？」

座席表を見て名前を確認した。珍しい名前だと感じた。『愛』ではなく、『哀』という漢字を使うだなんて。

外見は、茶髪でどこか異国から来たようなオーラだった。周りの子より遥かに大人びている。

と、その彼女が席を立てて自己紹介を始める前にその後ろの席の男の子が席を立ち、話始めた。

まるで灰原哀という少女は居ないのだ、というように。

「ちょっと待ってくれ。灰原さんはまだ自己紹介してないぜ？　勝手に始めちゃ駄目だぞ」　勝

「えー。でも先生、この人喋れないからさあ。良いじゃん！」

「・・・え？」

もしかして、病気とか？

「バーカ。『喋れない』じゃなくて『喋らない』だろ」

と、その隣にいたいかにも偉そうな男の子がそう言った。

「あ、悪い。そうでしたね。このクラスの置物だもんな」

「そうそう」

クラスには変な空気が流れる。

——まあ、一つだけ問題があるんだけど・・・。

橋本先生の言った言葉の意味がここでやっと分かった。このクラスにはイジメがあるんだ。

そう、イジメが——

＊

イジメのないクラス。

それが教師の目標でもあった。だから俺はその日の放課後、彼女を呼び止めた。

教室には誰もいなくなり、2人きりになる。

「なあ、灰原。俺は本当に喋れないのか？」

コクリと頷く。言葉はもちろんない。

「いつから？ どうして？ 喋りたいと思わないのか？」

何を質問しても俯いたまま。これでは話が進まない・・・

「先生、哀ちゃんに無理言わないで下さい。私が答えますから」

教室に入ってきたのは吉田歩美という女の子。元気で明るい印象があったから覚えていた。

こちらに来て、灰原に「帰って良いよ」と言った。灰原は頷いて教室を後にした。

「さっきの質問は私が答えます。あ、吉田歩美と言います。哀ちゃんとは小学校から一緒なんです」

彼女は軽く灰原との関係を話し、俺にも分かりやすく今までの灰原を手短かに伝えてくれた。

「哀ちゃんが喋らなくなったのは小学校3年生の時です。両親とお姉ちゃんを事故で亡くした悲しさが一番の理由ですが、他にも理由があるんです。イジメを受けたんです、彼女は。両親は悪い組織の一員だということが分かり、その子供だからって理由で。『キモい』

だとか、『学校に来るな』だとか、そんなことを沢山言われてました。終いには『声も聞きたくない』。中心人物は私のクラスにいる岡崎です。偉そうにしている奴ですよ。彼はある財閥の親戚の息子で、学校側があまり逆らえなくて、そのイジメを止められませんでした。それが今でも続いているんです」

一気に話された灰原の過去は想像を絶するものだった。吉田は今にも泣きそうな顔をしていた。それだけ灰原を思っている。

「多分、哀ちゃんは喋りたい気持ちがあると思います。ただ勇気が出ないんです。決して彼女は臆病なんかじゃありません。私は助けられなかった。こんな子供1人じゃ何も出来ないの。先生、お願い、助けて。哀ちゃんを、助けて・・・」

きっと何度も沢山の先生にお願いしたんだろう。だけど誰も助けられなかった、いや、助けようとしたが無理だったんだ。こんなところで俺は負けてられない。負けたくない。

決めた

「分かった。助けるさ、灰原を」

言葉にするだけなら、簡単だった・・・

＊

さて、どうしようか。ひとまず彼女とコミュニケーションをとって仲良くなるのが大事だよな。

吉田が灰原は朝必ずこの学校にいる猫の世話をしにきていると聞いた。だから俺は朝早く学校に来て、そこへと向かった。

「おはよう、灰原」

小さな背中にその声をかけるとピクリと肩が震えた。こちらを一度見たが、すぐに猫の方へと向き直した。

灰原の隣にしゃがみ込んだ。

「・・・昨日、吉田にお前のこと聞いた。俺、灰原のこと助けたいんだけど、助けられるかな？」

俺の方を見ずに猫を優しく撫でている。

「人に気持ちを伝える楽しさとか、教えたい。喋ることは嫌なことじゃない。楽しいんだぜ？」

「灰原にプレゼント」そう言って昨日買ってきたペンとスケッチブックを渡した。

それを受け取り、灰原は不思議そうな顔で俺を見た。

「俺とだけでも良いからさ。話そうぜ。文字は書けんだろ」

そう俺が言うと彼女はペンを持ち、スケッチブックの1ページ目を開けて、さっそく何か書き出した。
それを俺に見せる。

“ お節介な先生ね ”

「おい・・・」

敬語も無しか。始めに書いた言葉がこれだ。まあ、そんな感じの顔をしているが。

“ でも、ありがとう ”

そう書いたスケッチブックを見せてきた彼女は笑っていた。
綺麗な、笑顔だった。

きつと声も綺麗なんだろうな・・・

早く、聞きたい。君の声を――

＊

その日、学校が終わったら俺はしなければいけないこともあった
らかしにして嫌がる灰原を無理矢理連れて、とある場所に向かった。

775

木が生い茂る林を無我夢中で歩く。

「ほら、早く！」

始めは嫌な顔をしていた彼女も今はどこに向かっているのか、と
好奇心に溢れた表情をしていた。

「もうすぐだっ」

彼女の手を強く引く。

木ばかりだった視界が晴れ、空が良く見える丘についた。俺のお気に入りの場所。しかも今は季節も時間も最高。

俺の瞳には、綺麗に輝く空が映った――

夕日が綺麗に輝いていて、街全体が見渡せる。俺が来た中でも今日は特別に綺麗だった。

「綺麗だろ？」

そう言って、隣にいる彼女を見た。

(…っ!?)

——初めての、感覚だ。

どくん、と心臓が飛び跳ねた。中学生とは思えない表情。大人な
雰囲気。

この空よりも、綺麗だ。
本当にそう思った。

彼女は瞳を輝かせて、空を食い入るように見ていた。それからス
ケッチブックを取りだし、ペンで書き始めた。

“本当に綺麗ね”

嬉しそうな顔をして、俺を見た。

「なあ、その気持ち、言葉にしたいと思わないのか？」

“ 思わない ”

即答だった。

「人と話すのが、嫌いか？」

“ 分からない ”

“ 話した時の記憶はもうないから ”

「じゃあ、こうやって俺と話すのは、楽しいか？」

“ ええ ”

「・・・分かった。絶対、お前のその閉じた口、開いてみせるから。俺の力で」

助けたい、お前を。
だって、多分、俺は、お前を・・・

後、
3日。

口を閉ざした少女【前編】（新哀）（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。1週間で更新出来ただなんて！！ 最近にしては珍しい。気付いたんですよ、昔より文章長いから更新遅いんだなって。と言うわけで、一気に終わらせる予定だったのですが、分けることにしました！ 後1回か2回か続きます（へωへ）

今回は恋愛要素無しにしようかなって思ってたのですが、無理でしたw 頭の中の暴走が止まりませんでしたww ってことでロリコンな新ちゃん。出来るだけ年齢を近付けようと努力しました。では、続きも出来るだけ早く書きますね！

口を閉ざした少女【中編】（新哀）（前書き）

新哀パラレル、中編です。

口を閉ざした少女【中編】（新哀）

「なんで俺が今日、お前を残したか分かるよな？ 岡崎」

「残念ながら分かりません」

もう時計の針は午後の4時を回っていた。部活動をやっていない生徒は帰らないといけない時間だ。

俺の目の前に立つ少年は、岡崎遼という。どっか財閥の親戚だとかでこの学校は彼には逆らえないらしい。そんなこと俺は知ったことじゃない。

彼は紛れもなくイジメの主将だ。許されるはずがないじゃないか。なのにこの少年は自分のやったことに少しも罪悪感を感じていない。

「・・・分からないのなら、教えてやる。灰原のことだ」

「灰原さんがどうかしたんですか？」

惚ける彼に苛立つ。

「灰原はお前のせいで喋れなくなったんだ。お前はイジメをしたんだ。分かってんのか？」

「分かってないのは、先生の方ですよ。俺にそういう説教染みたことをするとすぐ首にされますよ．．．っと、まだ先生は教育実習生でしたね」

こいつはどういう教育を受けてきたのだろうか。

別に俺は、自分のことなんてどうでも良かった。灰原が喋ってくれば、それだけで．．．

「俺はどうなったって良い。だから、灰原に謝れ」

「かっこいいこと言っちゃって。困るのは先生ですよ。この時代、職につくのは大変ですからねえ」

「黙れ。俺のことは関係ない。灰原が幸せになってくれればそれで良いんだ」

何こんなやつに俺はむきになってるんだ？ 馬鹿らしい．．．まだ俺も子供だな。

「へえ。先生ってもしかして灰原のこと好きなの？」

「．．．そのことは関係ないだろ」

言えるわけ、ないだろ。

「そうでした。まあ、灰原さんに喋る気があるかは知りませんし。喋りたくないから喋ってないんですよ」

それに凄く、嫌悪した。

「灰原は、喋らないんじゃないよ！ お前のせい
でなっ」

喋れないんだよ・・・
あいつは、本当は喋りたいんだ。

だって昨日の帰り道――

“喋りたいわ、私”

“だけど、喋るのが怖いの”

——そう言ったんだ。

「謝れよ、謝るだけで良いんだよ！ 灰原は苦しんでるんだよ、お前の言葉にっ」

「・・・そうですか。先生は、もう先生になれませんか。俺が親に言ったら一発ですからね。覚悟しといて下さい」

「ああ」

岡崎は俺に背を向け、教室を出た。「何も、分かってないくせに・・・」そんな言葉が聞こえてきた気がした。

＊

次の日に呼び出されたのは校長室だった。ビリビリとした空気が

流れる。目の前にいるのは見た目60をすぎたおじいさん。俺をかめっ面で凝視する。

「何で今ここにいるか分かるかね、工藤先生？」

「はい・・・」

偽る必要もなかった。

「この学校は岡崎君の親戚の財閥に何度も助けられているんだ。彼に嫌な思いをさせられないんだ。だから我々もイジメについて目を瞑ってきた。何もかも、ズタズタですよ」

「はい。申し訳ないと思っています」

と、頭を下げる。

もちろん、言葉とは裏腹に心では反省の一つもしていない。だって、俺は正しいことをしていると思ってるから。

「・・・ですが、工藤先生は何も間違っていないことくらい、私も分かっている」

「え・・・？」

顔を上げると、シワの多い顔にもっとシワを増やし、笑っている校長先生がいた。

「彼も、どうやら反省しているようだからねえ」

ホッホッホッと校長先生はまた笑った。彼って、岡崎のことか？

「あの、ありがとうございます。俺、灰原のところに行ってきます
！」

「行ってらっしゃい」

＊

一步、一步、足を進めると落ち葉のシャキシヤキという音が耳に残る。それが楽しい。

もうすぐ、日が沈む。昨日の場所に行ってみようかしら。

工藤先生は突然、やって来た。

何年も言葉は話していない私に、言葉を伝える楽しさを教えてくれた。

話すことは辛くない。楽しいことなんだよ、と。

彼は私のためにつくしてくれた。だから、喋りたい、そう思うようになった。だけど、まだ過去の辛い思い出が私の中にはあるから、
・
・

弱い、私は。

喋る勇気なんて、ないの。

周りの人はいつも「無理して喋らなくて良いよ」と声をかけてくれた。彼だけが違った。話せた喋れと私を急かした。それが嬉しくもあったのは事実だ。

後一步踏み出すのは、私の力。

「っ、灰原さん」

学校から帰ろうとした私を引き止めたのは待ち望んでいた声ではなく・・・

私の、嫌いな人だった。鳥肌が立ち、足がすくむ。止めて、来ないで。

岡崎遼。私が喋れなくなったのは彼のせい。・・・いや、人に罪を擦り付けるなんて最低だ。

そんな彼は、いきなり頭を深々と下げ、一言言った。

「ごめんなさいっ」

想像もしてなかった言葉が彼の口から漏れた。

「俺、本当は、本当は灰原さんのこと、大好きなんだ！」

——秋の風が、流れた気がした。

彼の瞳は真剣そのものだった。嘘を言っているようには全く見えない。

「空回りしすぎたんだ、俺。謝って済む問題じゃないってのも分かってる。なんか、昔の俺はちょっかいを出したら振り向いてくれるって勝手に思ってた。．．．。灰原さんが喋らなくなったら取り返しがつかなくなっちゃったんだ」

涙をポロポロと溢しながら、彼は今までの思いをつらつらと並べる。

「ごめん、本当に。許してなんて言わないから。でも、俺が灰原さんのこと好きなのは今も昔も変わらず、本当のことだから」

顔を真っ赤に染めながらも、俯かないで私を見て言ってくれた。悪い人なんかじゃなかったんだ。

「俺が言うのもあれだけど……話して欲しい。灰原さんの声、聞きたいな」

鎖が外れて、軽くなった気がする。
今なら喋れるかも。

口を開けて、声帯を擦り、声を出そうとした。だけど――

無理だった。

“ やっぱりすぐには無理みたい ”

「……………。そっか」

文字を読みながらの会話なんて彼はなれてないらしく、会話にテンポがない。

ペンを動かしている時間が勿体ないことに気付く。早く伝えたい言葉があった。だから、工藤先生に貰ったこのスケッチブックに二番目紙に書いた文字を見せた。

“ でも、ありがとう ”

それを読んだ彼は、泣いて笑った。

＊

「工藤先生、見てるんですよ？　出てきて良いですよ」

木の影から事の一部始終を見ていた。灰原が帰っていったから、少し経って残っていた岡崎はそう言っ、こっちを見てきた。

だから俺は隠れたりせずに、彼の前に出た。

「・・・ごめん」

「別に。盗み聞きなんて誰でもやりますから」

「そのことじゃない。灰原のことだ。ごめん、お前の気持ちも知らないのに勝手なこと言っ」

「・・・良いんですよ。俺、嫌われるのなれてますから」

彼は悲しく笑った。

「本当に俺、馬鹿ですよ。灰原さんに、こんな辛い思いさせちゃっ」

「バーロー。昔のことはもう良いんだよ。これからのことを考えろ。俺は明日つきりでこの学校からいなくなるんだ。灰原を助けられる人は、お前だけ……いや、もう1人いるか」

初めの日に灰原のことを教えてくれた。吉田の顔がちらついた。

「多分、灰原は今日のお前の一言で相当楽になったと思うんだ。喋れるようになるのは後少しだな。分かったか？ お前が助けるんだぞ？」

ニコツと笑った。

そうしたら、岡崎は静かに泣き出してしまった。

「つ……ごめんなさい。本当に……ごめんなさい」

「大丈夫、もう、誰にも怒ってないし、悲しんでないから。ほら、お前が泣いてたら灰原が心配するだろ」

「はいっ」

声は掠れていたが、力強く聞こえた。

良く、乗り越えたよ。お前は。

彼の泣き声は秋の風がさらっていった。

明日が、最後だ

口を閉ざした少女【中編】（新哀）（後書き）

おはようございます！ 昨日更新しようとしたんですが、漆黑見てたんで無理でしたw

それにしても昨日はあらぶりすぎた。11人目のストライカー本当楽しみすぎる。サッカー見てガキみたいに興奮するコナン君を呆れ顔で見る哀ちゃん・・・夫婦だ！！

ということ、中編です。前後編じゃなくて中編が入るっていう。見直しあまりしてません↑しろよw 岡崎君良い子にしたかったの。では、後編で会いましょう＊

口を閉ざした少女【後編】（新哀）（前書き）

口を閉ざした少女、完結です。

口を閉ざした少女【後編】（新哀）

「5日間、短い間だったけど、皆ありがとう」

振り返ればあっという間だった。

たくさんのがあった。勉強になったと思う。やっぱり実習は大切だな、なんて思ったり。

始めてきた時は緊張していた教卓の前も今では馴れたものだ。子供たちの目線も温かい。

別れは、寂しい。

ちらっと灰原を見た。彼女もこちらを見ていた。悲しそうに見えるけど、気のせいかな？

「皆にまたいつか会えるの、楽しみにしてるからな」

俺の教師としての第一歩が終わった。

ここがスタート――

＊

仕事が出来て終わったころにはもう9時を過ぎていた。書類をまとめたりと、意外と時間がかかった。

「……………」

この5日間通い続けた校舎を無言で見る。
寒い、まだ11月だというのに吐く息が白い。そう言えば、今日の夜は冬並みの寒さになるって誰かが言ってたなあ。

最後にもう一度、灰原に会いたいと思ったけれど、無理だった。
一言でも彼女の声を聞くことを望んでいた。まあ、たった5日で彼女を喋らせるなんて不可能だったってことだ。

まだまだ、だな。

シャキシヤキ、足下で落ち葉の音がする。心地よい音色だ。もう、この校舎ともお別れ。

悲しんでいる暇なんてないんだ。

校門を出た。

人影が見える。近付いていくと徐々に姿が見えてきた。

「……はい、ばら」

そこに立っていたのは紛れもなく灰原だった。俺が今、一番会いたかった人。

「ずっと、待ってたのか？」

彼女は頷く。

「俺に会うために？」

彼女はまた頷く。

彼女の身体はガクガクと震えていた。こんなに寒いのに、マフラーも手袋もしていない。

「馬鹿野郎っ！ 風邪でも引いたらどうすんだよ」

思わず怒鳴ってしまった。

彼女はビクツと驚いた。おもむろにスケッチブックを取りだし、文字を書き出した。手が固まってるからか、随分と時間がかかっている。

“ごめんなさい 先生に会いたかったの”

「……バーロー」

顔を赤めて俯く灰原があまりにも可愛かった。

思わず彼女に手を伸ばしてしまった。

ぎゅっときつく抱き締めた。

教師と生徒の恋だなんて。まるでロミオとジュリエット。ロマンチックだな。

なんて、灰原に言ったら笑われるかな？

「寒かったろ？ ほら、これであっただかい。何も言わなくて・・・書かなくていいから」

重なった俺と彼女の心臓。どれが自分のものか分からなくなった。

戸惑いながらも灰原は俺を抱き締めてくれた。ぎこちなさが何だか温かい。

「灰原、」

俺はお前に伝えたい言葉いっぱいある。

ほら、お前も喋りたくなっただろ？ 少しでも喋りたいって思えたんならお前は変わったよ。これから、もっと変われるさ。

「・・・灰原」

何度だってお前の名前を呼ぶよ。

ほら、お前も俺の名前、呼びたくなっただろ？ 今すぐとは言わないから、いつか呼んでくれよ。

・・・そう、いつか。

「俺、お前とこれっきりで会わないつもりないから。絶対にまた会いに来るから。だからその時、お前の声聞きたい」

小さな彼女を抱き締めていると、まだ中学生なんだと実感させられる。俺って小さい子好きだったけ、と探るが、そんなことはなかったと思う。

灰原は違うんだ。そりゃ身体は小さいけど大人っぽい雰囲気というか、何だろう。そういう魅力に惹かれるんだ。

ああ、俺、本当に、

好きなんだ、こいつのこと。

教師と生徒の恋がいけないとか、そんなことは関係ない。好きになっちまったものは取り返しがつかないんだ。

「灰原、俺、お前に言いたいことがある」

たどたどしくそう俺は言った。
心から伝えたいんだ。

「この5日間でお前のこといっぱい知った。暗い過去があることも、喋れないことも、本当は喋りたいってことも、可愛いやつだってことも、頭が良いってことも、」

ちよつと彼女の身体を離して、顔が見れるようにする。

「おめえが俺を好きになったってことも」

ニコツと笑ったら彼女は照れ隠しか俺の胸に顔を埋めた。ぎゅつと俺の袖を掴む。きつと喋れないなりの愛情表現だろう。

（何か、可愛い・・・）

ロミオとジュリエットみたいなロマンチックな恋だとか、数分前に思っていた俺が馬鹿みたいだ。

悲劇の恋とか最後は心中するだとか、馬鹿らしい。本当に馬鹿だ。俺は幸せになってやるさ。

「俺も、灰原のこと、好きだよ」――

彼女の顔を見てはっきりと言った。

最初に驚いた表情を見せたが、すぐにぱあっと顔が明るくなった。喜怒哀楽が分かりやすい顔だな、こいつは。

ロリコンだとか、年の差だとか、そんなこと関係ない。

『自分が相手のことが好き。相手が自分のことを好き。それだけで恋』ってものは成立するのよ。どんな障害があってもね』

そう遠くない昔、確か母さんがそんなことを言ってた気がする。
いや、言ってた筈。

俺が灰原を好き。灰原が俺を好き。
それだけで恋は成り立つ。

「・・・俺、ちゃんと教師になるよ。頑張るからさ。灰原も次会う
ときまでには喋れるようになってろよ。色んなこと聞きたいからな
あ。楽しみだ」

俺が笑うと、灰原も笑顔で返してくれる。

「じゃあ、もう夜も遅いし、帰りな」

その言葉を言うのが辛かった。でも、さすがに9時過ぎだ。

彼女は顔を横に振る。

俺だって、別れたくない。だけど、これが本当の別れじゃないか
ら。これが始まりだから。

「・・・そうだ。灰原にプレゼントあげる。だから今日はさ、もう
帰ろう」

とっておきのプレゼントさ。
まだ誰にもあげたことがないもの。

——彼女の頬にキスを落とした。

「また会える日まで」

灰原は嬉しそうに笑った。

それから、俺の瞳を見た。
透き通った綺麗な瞳だ。

ぎこちなく、けどしっかりと口を開く。かすかに、彼女は言った。

「あ
り
が
と
う」

そのまま駆け足でこの場を去った。

「……っ」

俺の瞳から溢れたのは涙だった。

悲しいから泣いているのではない。嬉しいから泣いているんだ。
俺の願いだった。彼女の言葉を聞くことが。本当に少しだけ
ど、彼女は確かに「ありがとう」と言った。

「こっちこそ、ありがとうだよ……」

＊

数年前の教育実習より緊張する。

無事俺は高校の教師になり、新任にしてクラスを持つことになっ
た。

そのクラスのドアの前。握る拳が汗ばんでいる。でもこういうの
って、嫌いじゃない。

ドアを開ける。
にぎやかだった教室は一瞬で静かになり、生徒たちはすぐさま席に着く。

「えー、初めまして。今日から教師になった工藤新一と言います。
まだ慣れていないので、ダメな所ばかりだとは思いますが、よろしくお願いします」

俺が全て言い終えると、パチパチと生徒たちは拍手をしてくれた。

「それじゃあ、みんなにも自己紹介してもらおうかな」

そう言って、出席番号順に自己紹介をしてもらった。

窓側の真ん中の方の席――

俺は目を疑った。だけど、俺の瞳に映ったものは本物だった。

茶髪で綺麗なウェーブのかかった髪。どこか少し異国の雰囲気を感じる。飛び抜けてオーラが大人っぽい。

間違いない、彼女だ。

彼女が席を立つ。

「2年B組34番、灰原哀です」

俺が見たのは遥かに成長した彼女。

綺麗に、俺に笑いかけた。

あの頃と変わらない笑顔で――

あの時の思い出が、記憶が、恋が、蘇ってくる。

口を閉ざした少女【後編】（新哀）（後書き）

こんばんわ＼（＾Ｏ＾）／ 最後まで読んでいただきありがとうございますございました。 「口を閉ざした少女」 完結です。 疲れた・・・

結構最後の方適當になってしまったorz 申し訳ないと深く反省。 だらだら長く書くと駄目だなあ。 無口哀ちゃんが自分的につぼすぎたwww パラレルなんでちょっと性格が違うのは目を瞑って下さい。

さて、次何を書こうか。 目の見えない少女の話とか書きたいんだけど、また無駄に長くなりそう・・・

今やってる「あづさ弓」という古文がすごい良い話。 これで新志↑ 快書けるわって思ってる。 これ先書くかも。

後は連載頑張りますっ（＊、▽、＊）

笑顔の魔法と「ありがとう」 (快志) (前書き)

新志↓快志。新一死ねた。

笑顔の魔法と「ありがとう」 (快志)

俺の最近の楽しみはこの家にある推理小説を読むこと。その有意義な時間に俺の集中を妨げる人がやってきた。

「新一、宿題やったのか？」

「もう終わったし」

俺の読んでいる本を覗いてきた。

「推理小説ばっか読んでんだな」

「だってこの家にたくさん置いてあるから。父さんのだろ？」

「・・・まあな」

この人は俺の父さん。

俺と顔がほとんど同じ。子供は親に似るというけどここまで似るとはびっくりだ。

「あらあら、新一はまた推理小説読んでるのね」

声がした方を見る。まあ、声だけで誰か分かるんだけどな。

「母さん」

俺の母さんは自慢が出来るほどの美人。昔の写真を見たりするけど、今とほとんど変わっていない。

「志保ちゃん、お帰り」

「ただいま」

そうやって2人で笑い合う。

「母さん、お腹空いた」

「はいはい。黒羽君、手伝いなさい」

「へいへい」

俺は本当に幸せな家庭に生まれたと思う。毎日笑顔が絶えない。親同士も仲が良いし、喧嘩したところなんて見たことがない。

ただ、俺の家庭は普通と違う。

俺の名字は『工藤』。母さんの名字も『工藤』。この家の表札も『工藤』。だけど、父さんの名字だけ『黒羽』なんだ。

それに父さんは母さんを『志保ちゃん』と呼び、甘えていて、母さんは父さんを『黒羽君』と呼び、何だかよそよそしい。

昔、母さんにどうしてか聞いたことがあった。だけど、答えてくれなかった。その時の母さんの瞳は悲しい色をしていた。

それでも幸せだから、何も考えることはない。そう考えてこの14年間を過ごしてきた。

ごはんが出来たと呼ばれて、リビングまで行く。電気がついてなくて、真っ暗だった。

そしたら、いきなりパーンと大きな音が鳴り、電気がついた。

「誕生日おめでとう、新一」

それで鳴ったのはクラッカーだと分かった。

そういえば、今日誕生日だったけ。

「ありがとう、父さん、母さん」

自慢の親で、口では言えないけど、大好きな親。いつも俺のことを考えてくれて。

「ほら、新一の好きなレモンパイ焼いたわよ」

「よっしゃ！　すげえ嬉しいっ」

レモンパイは小さい頃からの俺の大好物。良く母さんが作ってくれて食べていた。

昔からの思い出は確かなものだけど。

たまに父さんは本当の父さんなのかと不安になったりする。母さんの悲しい瞳が脳裏を過る。

きっと2人には何かあると思う。俺の知らない過去だ・・・

気になるのは昔の写真で見た、父さんとそっくりな男。父さんも母さんとも友達だったらしい。だけど、あまり2人はその人の話をしたがらない。名前すら教えてくれない。

聞いてみようか・・・

*

「父さん、話がある」

父さんの部屋に行った。椅子に座っていたがこちらに身体を向けた。

「・・・新一。話ってなんだ？」

「なんで、父さんだけ名字が違うんだ？ 母さんと父さんには何か俺に隠している秘密があるのか？」

「新一は父さんに似て、推理力があるんだなあ」

そう言ってふっと悲しく笑った。もう隠し通すのも限界か、そんな感じだった。

「・・・分かった。話すさ。そろそろ教えるべきだと思ってたしな」

＊

黒ずくめの組織を潰してからすぐ、新一と志保ちゃんは付き合い

始めた。

俺は志保ちゃんのことを好きだったけど、新一という志保ちゃんは幸せそうで。だから俺は諦めた。

3人で仲良く毎日過ごしていた。2人の仲を邪魔するつもりはなかったけど。志保ちゃんといたかったから。

それから1年後、2人から告げられたのは結婚するということ。嬉しい反面、悲しくもあった。今までは志保ちゃんは付き合っているだけで、縛られてるわけではなかった。でも結婚となると完璧に志保ちゃんは新一のものになってしまう。

我儘だけど、俺はそれが嫌で・・・

志保ちゃんの唇を奪って、そのまま抱き締めた――

いけないことだと分かっていたけど。自分の気持ちを抑えきれなくて。志保ちゃんが困った顔をしていたのは知っていた。だけど、それでも・・・欲しかったんだ。志保ちゃんの温もりが。

その後で本当に最低なことをしたと気がついた。罪悪感で押し潰され、眠れない夜もあった。だけど、志保ちゃんは優しかった。そんな俺に笑顔を見せてくれた。

やっぱり好きだった、志保ちゃんが。

それからまた1年後・・・

「志保に子供が出来たんだ！」

新一からその報告を受けた。

「本当か！ 志保ちゃんがお母さんになるってことか。良かったな」

「良かったよ、本当に」

そう言って笑う新一は、愛する妻を思う瞳をしていた。もう父親の顔だ。

「子供の名前とか決めたのお？」

「んー、まだ。でもやっぱり、女の子だったら『あい』とかが良いかなって」

「あー、灰原哀を引きずるわけね」

「言い方悪いな。なんて言うか、忘れないように？」

「じゃあ、男の子だったら、『コナン』にするの？」

「・・・それは可哀想だよな」

『工藤コナン』考えたら可笑しくて2人で笑った。子供の名前の話で随分と盛り上がった。

「ただいま」

そして我らが姫の登場だ。

「おっ！ お帰り、志保」

「お邪魔してます、志保ちゃん」

「あら、黒羽君」

「子供出来たんだってね。おめでとう」

「ありがとう。笑い声が聞こえてきたけど、2人で何話してたの？」

「ああ、子供の名前何にしようかなってさ」

「ふふふ。気が早いわよ、あなた」

無邪気な笑顔が可愛らしかった。その笑顔で『あなた』と呼ぶ志保ちゃんの顔が頭から離れない。

「志保、今日の夜ごはん何？」

「ハンバーグよ。黒羽君も食べていきなさい」

「やった。ありがと、志保ちゃん」

志保ちゃんが自分のものではないことが悔しいし、悲しいけど、

幸せだから。

だけど、闇はすぐ側に迫っていた

「新一が倒れた・・・？」

もう泣きじゃくって声にも鳴らない声で志保ちゃんから電話がかかってきた。

すぐに走って病院に向かった。

「新一っ！」

病院に着くと一目散に新一の病室に向かった。志保ちゃんはベッドの隣に目を赤くして座っていた。

「・・・くろば、くん」

「新一は大丈夫なのか・・・？」

しかしベッドに横になる新一を見るだけで大丈夫じゃないことが分かった。

「・・・もう、駄目なの」

「え？」

「工藤君、ただでさえ免疫力が低いのに、強い病原菌にやられて。直す薬はあるんだけど、それを工藤君に投与したら、死んでしまうの。かといってこのままだと病に蝕まれて死んでしまう」

「・・・そんな」

新一が死ぬ？ 有り得ない。あいつが志保ちゃんを置いて先に逝ってしまふなんて。

「私、工藤君の身体に投与しても大丈夫な薬を作る」

志保ちゃんの決意の瞳は力強かった。

俺も医師に新一の容態を聞いた。相当危険な状態らしい。後何日持つかも分からないらしい……。

志保ちゃんはそれから病室に現れず、博士の家の地下室にこもり、出てこなかった。ずっと研究をしている。

3日後、本当に心配になって志保ちゃんの元を訪れたら……

「志保ちゃんっ」

床に倒れていた。

止めて欲しい。俺の近くにいる人ばかりが倒れていくなんて。

「大丈夫？」

「……大丈夫、夫よ」

大丈夫な筈なのに志保ちゃんは強がって笑顔を見せる。目元には隈ができていた。

「志保ちゃん、寝てないでしょ？」

「……寝てられないわよ。工藤君が死ぬかもしれないのよ？ 私が頑張らなきゃ。工藤君が死んだら、私……」

そこまで言うと言志保ちゃんはまたパソコンの前に座り、キーボードで書き込んでいく。

「無理は止めろ、志保ちゃんっ。お腹の中には赤ちゃんもいるんだぞ？」

肩を掴むと、志保ちゃんに無理矢理それを弾かれた。

「止めてっ。1人にして。もう嫌なの。私のせいで人が死ぬのが！」

もう、志保ちゃんの決意を揺るがすことはできなかった。

その次の日、俺は病院に行った。新一はまだ眠ったままで。

「おい、新一。志保ちゃんが心配してるんだぜ？　起きろよ。お前は死ぬような奴じゃねえだろ？」

新一が死んだら、志保ちゃんの笑顔が消えてしまいそうで。新一の死より、志保ちゃんから笑顔がなくなることが怖い。

「……………んっ」

ベッドに横になる新一が目を開けた。

「新一っ！」

「くろば……」

「待ってろ。今、志保ちゃん呼ぶからっ」

携帯を取りだし、電話をかけようとした。しかし、新一に携帯を取り上げられた。

「・・・呼ぶな・・・」

すぐにでも無事を彼女に伝えたい筈なのに。どうして。

「……俺はもう無理だ。自分でも分かる」

「新一・・・」

新一が諦めるとはよっぽどのことだ。

「見られたくないんだ、志保に死に際を」

「でも、志保ちゃんは・・・」

「期待させたくないんだ」

新一は悔しそうにそう言った。本当は新一だって志保ちゃんを置いていきたくないんだ。

「なあ、黒羽・・・」

夢い瞳で新一は俺を見た。

「志保と子供を、よろしくな」

それが最後。

ニコツと笑ったかと思ったら、新一は目を閉じた。それはもう開くこともなく――

それからすぐだった。葉が出来たと志保ちゃんが病室に入ってきたのは。

志保ちゃんは、泣かなかった。．．．

俺はこの時決意した。志保ちゃんを支えろと。新一の代わりでも構わない。たとえ志保ちゃんがまだ新一を愛していても。

新一の家に行くと、ソファ―に座って写真を見ている志保ちゃん
がいた。

「志保ちゃん・・・」

隣に座り、その写真を覗く。もちろん、結婚式での新一と志保ちゃんのツーショット。

「黒羽君、私、どうしたらいいの？　もう分からないわ」

「ねえ、志保ちゃん。聞いて欲しいことがある」

志保ちゃんがこちらを向く。俺はその瞳を見つめる。

「・・・俺、支えたいんだ。形だけで良い。俺を今志保ちゃんのお腹にいる子供のお父さんにして欲しいんだ」

少し膨らんできたお腹に優しく手を当てた。

「・・・そんな、良いの？」

「俺がそうしたいの。だから、お願い。もう志保ちゃんを1人にし
たくない」

「黒羽君・・・」

背中に腕を回し、彼女の顔を自分の胸に埋める。

「だから、泣いて。涙を我慢する志保ちゃんなんて嫌だ」

きつく抱き締めた。罪悪感なんて勿論あった。だけど、彼女を支えたくて。

「うあああああああああ！」

叫び声のように大きな声で泣き崩れた。

いつもの冷静な志保ちゃんはいなくて。亡くなった夫を思う志保ちゃんしかいなかった――

「くどう、くん・・・」

我を忘れた志保ちゃんはその名前ばかり口にする。

「アイツはもういない」

死んだんだよ。工藤新一は。

「嘘よ。工藤君はずっと一緒にいるって約束したの。貴方が工藤君でしょ？」

「残念だけど、俺は黒羽快斗だ」

工藤新一にはなれない。

「そんな・・・」

「現実を受け止める、志保ちゃん」

受け止めるなんて、残酷な。

「嫌、イヤ、いや・・・」

嫌でも、これが現実なんだ。

ねえ、もう志保ちゃんの笑顔は見れないの・・・？

「工藤君のいない世界なんて、有り得ない」

止めて。そんな悲しいこと言うのは。

笑って。前みたいにな、無邪気にさ。

「・・・死にたい。私は1人だから」

恨むよ、新一。志保ちゃんがこんなにも新一のことを愛していたから、だからこんなにも志保ちゃんはこの世界を嫌っている。

「バーロー。1人なんかじゃねえ、俺がいるだろ、黒羽快斗が」

だから、お願い。

笑って
――

「・・・ありがとう、黒羽君」

志保ちゃんは、笑った
――

その笑顔を見てほっとして一粒の涙を流したのは俺。

それから俺は志保ちゃんを支え続けた。その甲斐があったからか、志保ちゃんと新一の子供は無事に生まれた。

「志保ちゃん、おめでとう」

「ありがとう。黒羽君のお陰よ」

生まれた赤ちゃんは男の子だった。生まれたての赤ちゃんを抱くと、その重みを身に染みて感じた。

「・・・新一にも抱かせてやりたかった」

「そうね」

そう言って遠くを見る志保ちゃんはまだ新一を見ているのか。そう思うと心が痛くて。

「俺、子供の名前決めてきた」

「あら、なんて名前？」

「『新一』」

「…………え？」

「漢字も同じで新しいに一だ」

「そんな。貴方は辛くないの？」

「微妙なところ。だけど、志保ちゃんにたくさん新一の名前を呼んで欲しいし、俺も呼びたい」

それは心からの願望だった。

「・・・そうね。じゃあ、新一で決まり」

「おう」

窓から吹き込んできた風は、新しい始まりを意味していたのかもしれない。

＊

「そして15年。今のお前がいる」

父さんは全て話終え、一息ついた。

「じゃあ、父さんは俺の本当の父さんじゃないってこと？」

「そうだ」

「工藤新一が俺の父さん？」

「ああ」

「母さんはどう思ってるの？」

「分からない」

父さんは今までで一番悲しい顔をしていた。いつも自信家な父さんでいて欲しかった。

父さんにも、母さんにも、本当の父さんにも、俺には考えられないような辛い過去があったんだ。

「だから、新一とは血が繋がってないんだよ。ごめん、騙してきて俺のことは嫌いになって構わない。ここから追い出したって良い。ただ、志保ちゃんが悪くないから。新一が志保ちゃんを支えてあげてくれ」

父さんはそう言うけど、俺は・・・

「出ていくなよ、父さん。母さんを支えられるのは父さんだけなんじゃねえか？ 俺には無理だ」

「それに．．．」と俺は言葉を続ける。

「あんまり素直に言えねえけど、俺、父さんのこと好きだぜ」

「．．．．．へ？」

「いつも母さん想いでさ。俺もいつか父さんみたいに大切な人に会えたら良いなって思うんだ。憧れなんだよ、父さんが」

「しんいち．．．」

「これ、言うの恥ずかしいんだぞ。だけど、父さんだって話してくれたから、俺も言わなきゃな」

父さんの瞳を見た。やっぱり、越えられねえな。

「父さんが父さんで良かった。工藤新一って人もいい人だったんだろうけど、俺は父さんしか知らないから」

ニコツと微笑めば、父さんも笑ってくれた。

「ありがとう、新一」

「これから俺の父さんで居てくれよ？」

「もちろん」

父さんの部屋から出ようとした時、一つ言ってなかった言葉を思い出した。

「父さん、ありがとう」

『ありがとう』俺の大好きな言葉。

「それと、母さん多分父さんのこと好きだと思うぜ？」

それから部屋を出た。

母さんの瞳はもう、工藤新一を映してはいないと思う。だって、素直じゃない母さんが一回だけ・・・

『母さん。母さんが一番好きな人ってやっぱり父さん？』

確か中1の時に聞いた。そしたら、

『ええ。母さんは黒羽君が一番好きよ。愛してるの。新一もいつか運命の人に会えると良いわね』

その時の母さんは一番綺麗だった。それで俺もはやく運命の人に会いたいと思ったんだ。

やっぱり父さんも母さんも大好きだ。

＊

夜中の2時頃に眠気がやってくる。志保ちゃんもそろそろ寝る時間かと思い、彼女の部屋に向かった。

しかしそこに彼女はいなくて、もしかしたらベランダにいるかと思っただけで、予想通りに彼女はいなかった。

「まだ寝ないの？」

その背中に語りかける。

「月が綺麗だね。貴方と初めて会った日を思い出したわ」

「懐かしいなあ」

怪盗キッドなんて本当に昔の思い出だ。

「・・・志保ちゃん、俺、新一に本当のこと話したよ」

そう言ったら、彼女は驚くこともなく、「そう」と一言呟いた。

「新一はなんて？」

「『父さん、ありがとう』って」

ふふ、と志保ちゃんは笑った。

「あの子らしいわ。『ありがとうは私の大好きな言葉なの』って昔教えたからね」

「へえ」

「こうして幸せでいられるのも全て黒羽君のお陰よ。本当に私の支えだったの」

今夜の月は満月だった。その光は俺と志保ちゃんを照らした。・・

「・・・ありがとう、黒羽君」

あの時と同じ言葉だった。

今度は泣かないで、俺も笑った――

＊

「ねえ、あれ高校生探偵の黒羽新一じゃない？」

「あら、本当だわ」

道を歩いていたら世間話が好きそうなおばさん2人が俺を指差す。

「黒羽新一君？」

「そうですが・・・」

話しかけられたので、言葉を返す。

「本物よお！」

「ワタシ、黒羽志保さんの薬のお陰で死を間逃れたんです。ありがとうございます、と伝えておいてください」

「ああ、はい」

「後、黒羽快斗さん。いつまで経ってもダンディーな方よね。彼の書いた本、読んだのよ。いいお話だったわよ。確か、タイトルは・・・」

「『人を愛すこと』ですよね？」

「そうそう」

俺の父さんも母さんも有名人だから、俺なんてまだあまり知られてない方なんだと思い知らされる。

「では・・・」

帰ろうとした時。

「黒羽新一君、探偵頑張るのよ」

おばさんからの言葉だったけど、本当に嬉しかった。俺を応援してくれる人もいるんだ。

「ありがとうございます！」

家まで帰る足取りは軽かった。

「ただいまあ」

2年前に引っ越してきた家に帰ると、母さんと父さんが嬉しそうに話していた。

「おう、新一！」

「お帰り、新一」

2人はいつも以上に楽しそうだ。何か良いことでもあったのか。

「何か良いことあったのか？」

「ああ、すごく良いことだ」

父さんがそう言うと、母さんが微笑んだ。

「新一はお兄さんになるのよ」

言葉を理解するのに時間がかかった。

「マジ・・・？」

「私と黒羽君の子供が出来たの」

笑顔は魔法。

何でも幸せにしてしまおう。この家にはこの魔法があるから、幸せなんだ。

「ありがとう」

感謝の言葉。心温まるそれも皆を幸せにする。

―笑顔の魔法と「ありがとう」―

笑顔の魔法と「ありがとう」 (快志) (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。連載多いんで、結局快志もこっちにまとめることができました。怪盗と科学者は消させていただきます。感想かいて下さった方、申し訳ありませんm(´

【続編】笑顔の魔法と「ありがとう」 (快志) (前書き)

快志。続編です。

【続編】笑顔の魔法と「ありがとう」（快志）

工藤君と黒羽君を重ねて見ていた。だけどいつからだろう、黒羽君を愛すようになったのは……

「ねえ、母さん。どうして父さんだけ名字が違うの？」

星空が綺麗な日。

新一が中1の頃だった。一番恐れていた質問。教えるわけにはいかなかった。

「……もう少し、新一が大人になったら教えるわ」

「何だよそれえ」

ちょっと新一は拗ねた。日に日に彼は工藤君に似てくる。生まれ変わりかと思うくらいに。

「母さん」

「何？」

「母さんが一番好きな人ってやっぱり父さん？」

そろそろ恋愛したい年頃なのかしら？

正直、戸惑った。多分、少し前なら「母さんは他に大好きな人がいるの」と答えていただろう。

だけど、最近黒羽君のことが好きだと感じている。ずっと私の側に居てくれて・・・

「ええ。母さんは黒羽君が一番好きよ。愛してるの。新一もいつか運命の人に会えると良いわね」

そう言えた。

昔は黒羽君を工藤君と重ねていた。だけど、いつからか、黒羽君を見るようになった。

いつまでも工藤君が好きでいたかったけど、私の気持ちは変わっていった。

「新一は好きな子とかいないの？」

「へ．．．？　　ば、バーローいねえよ！！」

赤面して新一は答えた。

「何照れてるのよ？」

「……っ」

息子をからかうのは少し楽しかった。

その照れ方が工藤君にどこかにいて、少し胸が痛んだ。

「……母さん？　泣いてんの？」

新一に言われて、目頭が熱くなってきたことに気が付いた。
馬鹿。何泣いてるのよ？

「ただの欠伸よ」

窓の外を見て答えた。新一の顔は、見れない。

「さあ、もう寝なさい。明日朝早いんでしょ？」

「うん」

新一は多分深入りしてはいけないという空気を感じたんだと思う。
それ以上は聞かないで、部屋に帰っていった。

「・・・工藤君」

久しぶりに言った名前は懐かしかった。涙が溢れてきた。ずっと私を愛してくれて、最後の最後まで私のことを考えてくれた人。

夜空に輝く星を見た。一番輝いているのが彼の星だと決め付け、それに向けて言葉をかけた。

「工藤君、私は今でも貴方を愛してるわ。だけど、私のことを救ってくれた黒羽君のことも、愛してる。まだ、彼には言えないけど。後何年か経ったら、この気持ち、彼に伝えて良いかしら？」

工藤君なら、なんて答えるかしら？
多分、許してくれると思う。彼は優しいから。私が決めたことならって。

「……くどう、くん」

だけど、やっぱり忘れられない。あんなに愛していた人を簡単に忘れられるわけがない。

涙は止まらなかった。

そう言えば、何年もの間、こんな風に彼を思い出すことはなかった。それは黒羽君と新一のお陰だと思う。

「・・・志保、ちゃん？」

声がした方を向くと、黒羽君がいた。

「どうしたの？」

優しく声をかけてくれる。そんな彼が好きなんだって改めて思う。

「・・・工藤君をね、思い出したの」

「そっか」

「新一が、本当に工藤君に似てきて・・・正直辛いわ」

「うん」

頷きながら私の話を聞いてくれる。

「・・・貴方は辛くないの？ 私の隣に居て」

「辛くないって言ったら嘘になるかな？ だけど、志保ちゃんに心配かけたくないから」

と、笑顔で言った。またそういう優しいところに私は惹かれる。

初めは工藤君と重ねて見ていた。黒羽君は工藤君なんだと勝手に

思い込んでいた。だけど、いつからかは黒羽君を見るようになった。
変わったんだと思う。私は。

「ほら、泣かないで志保ちゃん。新一は泣いて欲しいなんて思わないよ」

「・・・そうね。でも、思うように止まらないの。ねえ、黒羽君、」
「何？」

工藤君と似た優しい瞳。だけど、それは黒羽君のもの。

「……抱き締めて？」

柄でもないことを言うな、と自分でも思った。
昔の私、組織にいた頃の私だったら、こんなことは口が裂けても
言わないだろう。今が平凡なことなんだろうか。

「・・・だけど、新一に悪い、」

悲しげな顔でそう彼は言った。

「馬鹿ね。工藤君のことは気にしなくて良いのよ。私の頼みを聞けないの……？」

「んなことねえよ。抱き締めたいし、キスだってしたいし、もっと志保ちゃんに触れたい」

顔を赤くして、だけど真剣な瞳で彼はそう言った。どくん、と胸が高鳴る。

首の後ろに手が回されて、抱き寄せられる。すぐに私の顔は彼の胸に埋まった。

「ずっと、こういう風に抱き締めたかったんだぜ」

耳元で囁かれた。ぴくりとその吐息に身体を震わす。……黒羽君ってこんなに大人だったの？

「泣き止んで、志保ちゃん」

大きな身体で私を包み込む。

そう言えば、工藤君との結婚が決まったとき、キスされて抱き締められたっけ。

温かい。工藤君とは違う、改めてそう思う。別人なんだって。

「……ありがとう、黒羽君」

助けてくれて、ありがとう。

側にいてくれて、ありがとう。

慰めてくれて、ありがとう。

色んなありがとうを黒羽君に伝えたい。

「志保ちゃん、顔上げて？」

そう言われたので、顔を上げた。目の前には黒羽君の顔。一瞬、唇に何か触れた。

それが彼の唇だと気付いた時には、もう彼から解放されていた。一気に顔の熱が上がる。

「ふうん。志保ちゃんもそんな顔するんだあ。可愛いじゃん」

得意気に彼は言った。ニツと白い歯をこちらに見せる。

「おやすみ、志保ちゃん」

そう言って楽しそうに彼は自室へ行った。

＊

新一に全てを話してから、1週間ほど経った。新一は前と同じように俺と接してくれた。それが嬉しかった。

新一に言われた言葉をずっと考えていた。だから、今日こそ聞いてみる。

——志保ちゃんは今、誰を想ってるのか？

深夜、志保ちゃんの部屋のドアをノックした。

「志保ちゃん、入るよ」

「どうぞ」

ドアを開けると、ベッドに座って志保ちゃんはファッション雑誌を見ていた。

「もう1時過ぎよ。何の用？」

志保ちゃんの前の床に腰を下ろす。

「聞きたいことが、あつてさ」

志保ちゃんを前にすると口を閉じてしまう。フラれるのが、怖いかもしれない。

「何？」

「あのさ、」

いつか聞かないといけないことだから。

「……今、誰を想ってるの？」

率直な質問に志保ちゃんの瞳は揺れた。

志保ちゃんの口が徐々に開く。

「……………貴方よ」

ゆっくりと彼女は笑顔でそう言った。

理解出来なかった。志保ちゃんが、俺を想ってる？ 何かの聞き間違え？

「今、なんて？」

「愛してるの、黒羽君を」

確かに志保ちゃんはそう言った。

「……本当？」

「ええ」

「今更嘘なんて言わない？」

「言わないわよ」

「新一は……？」

「工藤君のことも、愛してる」

「……だよな」

その言葉を聞いて少し落ち込んだ。

「でも、一番は黒羽君だと思うわ」

「……え？」

「いつも私を支えてくれて。そんな優しい貴方に私は惹かれたの。愛してる、心から」

その言葉が聞けることをずっと夢見ていた。叶わない夢だと思っていた。だけど、叶った。

「俺も、ずっとずっと前から、志保ちゃんのこと愛してる」

伝えたかった想い。

『愛』って、こんなに温かいんだ。

ぎゅっと彼女を抱き締めた。

「これからは、志保ちゃんは俺だけのものってことだよな？」

「……工藤君みたいなこというのね」

「男だから。1人じめしたい、志保ちゃんを」

「良いわよ。貴方だけのものになっても」

甘い声で彼女は言う。

ねえ、そんなこと言われたら、俺、止まらないよ？

「……志保ちゃんのせいだからな。俺が止まらなくなっても、文句言うなよ?」

「はいはい。ご自由に。私もそれが本望よ?」

クスリと笑う。

ああ、もう無理だ。止まんねえや。

ずっと我慢してきたんだ。志保ちゃんに触れたくても、頑張っ
てその気持ちを殺して今日まで来たんだ。

今日はその、ご褒美ってことだよな?

彼女の身体をベッドに押し倒す。

荒々しく唇を塞ぐ。彼女の喘ぎ声を聞くと、もう現実には戻れな
くなった。それから彼女に触れる。

「愛してる……」

何度も何度も彼女に言った。

2人の間に子供が出来るのは、もう少し後のお話。

【続編】笑顔の魔法と「ありがとう」 (快志) (後書き)

こんばんわ。最後まで読んでいただきありがとうございます。

はい、これで転載完了、(´▽、´)／

この話は以外と気に入ってるんですね。快志ってこういうのが好きです。なんかこう・・・切ないような。黒羽新一君の成長が気になるところです(´・ω・、) 後、新しく生まれる子供。名前は何かな？ 皆さんで考えてみて下さい。生まれるのはきつと女の子だ！！

出来たら今日、活躍報告書きます。後、もう一話更新出来たらします(´o´)／

心は君に寄りにしものを【壺】（新志）（前書き）

新志↑快パラレル。昔々のお話。昔要素特にありませんがW

心は君に寄りにしものを【巻】（新志）

昔々、とある若夫婦が田舎のど真ん中に住んでいました。生活は困難で、明日生きるのがやっとな状況でした。しかし、この夫婦はとても幸せでした。何故なら、2人は愛し合っていたからです。それだけで十分なのでした――

＊

すきま風が寒い。家の中だというのに、外と気温が変わらない。目の前の彼女を見る。着物を着ているだけ。もうじき本格的な冬がやってくるというのに。それでも彼女は何も言わない。優しいんだ、そんなの知ってる。

俺はそんな彼女のためにある1つの決意を固めていた。

「なあ、志保」

「何かしら？」

座りながら何やら編み物をしている彼女に話しかけた。

「俺さ、出稼ぎに行こうと思ってんだ」

「え・・・？」

「この前、宮仕えしてる昔の友達から手紙が来たんだ。人手が足りないから来ないかって。ダメか？」

「何で、急に？」

志保は編む手を止めた。

「急じゃない、俺の中では。ずっと思ってたんだ。こんな生活で志保が幸せな筈ないって。幸せにしてやりたいんだ、お前を」

「工藤君・・・」

「勝手なことだって分かってる。だけど、どうしても俺はこの生活に耐えられない・・・うーん、言い方が違うな・・・こんな生活している志保を見ているのが辛い。そうさせてるのは自分だって考えると余計に」

「分かるわよ、貴方の気持ち。でも、いつ帰ってくるか分からないのに。それに、私は貴方がいるだけで、幸せ。本当よ」

「うん、俺も分かってる。それでも、もっともっとお前を幸せに出来るかもしれないんだ。行かせてくれ」

数分前までは和やかだったこの場も緊迫した空気が流れる。

宮仕えに行くということは連絡手段が途絶えてしまうということだ。前に山へ食材を取りに行ったとき、1週間ほど会わなかったときもあった。しかし、それとは比べ物にならない。帰ってくる時期は不定期だ。だからどれくらいで帰ってくるかも分からない。そんな中で彼女は待つんだ。

「・・・私が貴方をずっと好きでいられるなんて保障どこにもないじゃない」

彼女の目尻には涙が見える。

「信じてるから、志保のこと」

「……………」

彼女を1人にしてしまうことは分かっている。そこまでも、俺は彼女を幸せにしたいんだ。

「馬鹿・・・。そんなことで私が納得いくと思ってるの?」

そう言って彼女は俯いた。多分涙を押さえてるんだろうな。分かるさ、お前の顔を見なくても。空気で伝わってくる。

俺は彼女の身体を引き寄せて、優しく抱き締める。

「うん、思ってる。信じてる、志保。誰よりも」

「・・・本当に貴方は馬鹿ね。私も貴方のこと、信じてるわよ」

「相棒として？」

「旦那として」

ニコツと彼女は笑った。

この笑顔が俺は大好き。

「いってらっしゃい」

彼女は強く俺を抱き締めた。

「ああ、必ず戻ってくる」

キスを交わし、“必ず”と約束した。

*

最愛の彼がここを出てから1年がたった。何も変わらない日常。唯一変わったのは彼がいなくなったこと。そのなくなった彼への想いも変わらなかった。ずっと変わらないものだと思っていた。彼に会うまでは――

天気が良い、春の晴れた日だった。
することもなかったので、ふらっと外に出た。

宛もなくただ歩いていると、途中に1人の男が道端に倒れていた。走って近付き、しゃがんでその人に話しかける。

「大丈夫ですか……？」

んっ、とその人は声を漏らした。どうやら死んではないようだ。頭を抱えながらゆっくりと彼は起き上がる。私はその人の顔を見て、呆然とした。

「くどう、くっ……」

いや、違う。何が違うかはっきりとは分からないが、工藤君ではない。

「あれ、俺どうしたんだ？」

「倒れていたんです、ここに」

初めて彼と目があつた。

「……っ、えっと、君は？」

「あら、普通は男から名乗るんじゃないかしら？」

「え、あ、俺は黒羽快斗。ちょっと訳あって今はふらふらと旅してんだ」

「そう。私は工藤志保。この近所に住んでるのよ。良かったら休憩してかない？ 疲れてるでしょ。まあ、何もないけど」

「本当！？ ありがとう」

何故彼を招いたのか。多分、工藤君に似ていたからだと思う。この時点から重ねていたんだ――2人を。

＊

「……志保ちゃんは、結婚してるの？」

「え？」

私の家に着くなりと言った言葉はこれだった。

「何で急に？」

「うーん、何となく」

曖昧な答えを返してきた。不思議な人だ。

「ええ、一応ね」

「一応って？」

「今はいないの。宮仕えに行っちゃったから。もう1年も会ってない」

彼を思い出すと悲しくなる。涙が溢れてきそうだ。こんなところじゃ泣けないけど。

「・・・酷いな、その人」

黒羽君はそう吐き捨てた。

「彼は悪くないわ。私を幸せにするために出稼ぎに行ったのよ」

「いや、俺だったらこんな美人を1人なんかにしない。愛せるだけ愛すよ。お金なんてなくても良いと思う」

その目は真剣だった。

後から知ったことだが、彼は女の人にふられて悲しくて旅を始めたそうだ。だから彼は「そんな男は嫌いだ」そう言った。

「志保ちゃんは今幸せ？」

「……………」

幸せ、と即答出来なかった。

今この場所に、隣に好きな人がいないだけ。この世界の何処かにはいる。だけど、幸せじゃない。

いつからこんなに贅沢になってしまったか。昔は彼と会えるだけで幸せだったのに。

「ほらね。その人は今志保ちゃんを不幸せにしている。そんなことなら、出稼ぎなんていけないで、ずっとここに居れば良かったんだ」
・・・彼の言っていることが正しいと感じてしまう私がいた。彼を止められなかったのは私なのに。

「寂しいでしょ、今」

「1人でも私は平気よ。でも、たまに心細いの・・・」

初めて会った人にここまで本音を話せるとは思わなかった。黒羽君は優しくすぎた。優しくすぎたの。

「・・・大丈夫」

彼はそう言って、私を抱き締めた。

あまりに一瞬のことで、避けることが出来なかった。

「ちょっと、止め、て」

「止めないよ」

悪戯に彼が笑う。

「・・・その男に後悔させてやるさ。志保ちゃんを1人にしたこと
を」

「え？」

「意味分らないだろ、俺の言ってること。まあ、分かるさ、すぐ
に」

抱き締める力がさっきより強まる。

でも、痛くない。

優しい温もり。

この1年感じられなかった温もり。

まるで、工藤君のような――

心は君に寄りにしものを【壺】（新志）（後書き）

こんばんわ。最後まで読んでいただきありがとうございます。

何故こんな話を書こうとしたかというところ、今古文で『あづさ弓』という素敵な文を読んでいるからです。悲恋のお話。授業中に新志がループしたw 登場人物が勝手に新志＋快に入れ替わった。そして書きたくなり、今に至ります。結末は悲恋なんですよ。まあ、私はハッピーエンド主義なんで、悲恋にはしません。

取り敢えず、サブタイトルの意味は『心は貴方に寄り添っていたのに』です。これは和歌の一部です。

というか、快志要素の方が多い気が．．．それは良いかw というところで後編に続きます。多分更新遅いです。

工藤志保って良いですね（＊、▽、＊）

心は君に寄りにしものを【弐】（新志）（前書き）

新志、続編。

心は君に寄りにしものを【弐】（新志）

記憶が薄れ行くように、

私の恋心も薄れていった。

幸せだった、あの頃は。

貴方に会えなくて、会いたいと思っても会えなくて。
寂しくて、悲しくて。

——今日、貴方との約束を破ります。

＊

黒羽という青年はここに居座った。

「どうして」、と聞くと「旅は止めた」とそれだけ言った。

彼は本当に優しかった。

私のために何でもしてくれた。

顔も工藤君に似てるけど、性格も似ていることが分かった。

気が付けば、工藤君のことを考える時間は少なくなっていた。

自分でも驚く変化だ。

彼がここを出てから2年の月日が経とうとしていた――

「今日も寒いね、志保ちゃん」

隙間風が家に入ってくる。

一昨年の冬は工藤君と。去年の冬は1人で。今年の冬は黒羽君と
過ぎす。

何も変わらない、冬。

彼は帰ってこない。

「・・・工藤君」

たまに思い出す。彼のことを。だけど、私が「工藤君」と口に出すと、黒羽君はとても嫌な顔をする。

「俺の前でその名前出すの止めてくれる？」

いつもは優しい彼も、工藤君に対しては冷たい。何故かなんて私には分からない。……いや、分かりたくないと言った方が正しいか。

「もしかしてまだ好きなの？」

「約束したから」

「なんて？」

「絶対帰ってくるって。工藤君は絶対に帰ってくるの」

そう言ったらそれを聞いて黒羽君は一言吐き捨てた。

「何処までも嫌なやつなんだ、そいつは」

「え？」

「『絶対帰ってくる』なんて確信もない約束で志保ちゃんを縛っているんだ。辛いでしょ、志保ちゃんだって。そんな信用もない約束

信じないでさ、今、目の前にいる俺を信じてよ」

彼は私に近付いてくる。顔と顔との距離は15センチもない。彼の吐息と私の吐息が混ざり合う。

「ちょっと・・・近いわよっ」

そう言って拒もうとするのもっと近付いてくる。鼓動が早くなる私の心臓。

「ねえ、志保ちゃん。もう2年経ったんだよ。後1年で離婚成立、でしょ？」

その通りだ。3年間音信不通だと離婚が成立すると法で定められている（結婚は3日同じ家で過ごせば成立する）。後1年経てば、離婚したくなくても私たちの離婚は成立してしまう。

「・・・俺なんてどう？」

クスッと彼は悪戯っぽく笑った。本当か嘘か分からないではないか。

「馬鹿、言わない、で」

頑張って紡いだ言葉も震えているのがバレバレだ。

「好きだよ、志保ちゃん」

そう言われた。

彼は目を閉じて、唇を近付けて私のそれに触れようとした。

怖かった。キスをしてしまったら、私の心が彼に盗まれてしまい
そう。工藤君との約束を果たせなくなってしまいそうで。

思いきり、彼を押し退け、私は後退りした。

「止め、て・・・」

涙が溢れてきた。

黒羽君の前なんかで弱いところを見せたくなかった。だけど、耐
えられなかった。

何故泣いているのか、理解出来ない。

襲われそうになったのが怖かった？ 工藤君に申し訳ないと思っ

た？ 今まで耐えていた分が溢れ出た？

どれも正しいかもしれない。

どれも間違っているかもしれない。

ただ一つ言えることは、私が弱くなったことだ・・・

*

工藤君が居なくなってから、3度目の冬が訪れた。私の側にいるのは、3年前と違う人。変わったのはそれだけだと思う。

1年前のあの日、黒羽君は謝ってきた。「ごめん」と。だけどその後、「好きなのは本当だから」と付け足された。

正直、彼のことは嫌いではない。1人きりの私に手を差し伸べて優しくしてくれたのは紛れもなく彼だ。

この1年、私は変わった気がする。工藤君のことを考えている時間が減った。そして、黒羽君の機嫌が悪くなると寂しくなるようになった。

黒羽君と出会った時から、少しずつ、少しずつ、気持ちに彼に動いていたのかもしれない――

丁度、工藤君がここから出ていった日の夜だった。

*

「俺と、結婚して下さい」

急なようで急でない黒羽君からのプロポーズだった。彼は土下座をして私に頼み込んできた。

「急に、何で・・・」

惚けたふりをしたが、彼には通用しなかった。

「惚けないで。分かってるだろう？ 何で今日なのかってことくらい」

黒羽君の強い眼差しに思わず首がコクリと頷いた。今日で離婚が成立するからだ。

「絶対幸せにするって誓う。工藤とかいう前の男がやったみたいに志保ちゃんを1人にしない。悲しい思いなんて一秒もさせない。誓うから！」

心はぐらぐらと揺れていた。

黒羽君と結婚したら、幸せになれる。工藤君がいつ帰ってくるかわからない今、黒羽君と結婚した方が良いと思える。だけど、イコール工藤君を裏切ることになってしまう。

「大好きなんだ、志保ちゃんが！」

純粹すぎる彼の想い。

「あの日、志保ちゃんに会って俺は救われたんだ。好きな子にふられてずっと落ち込んでいた俺にとって。志保ちゃんは天使だった。一目惚れしたんだ。そんな志保ちゃんが結婚して旦那がいるって知ったとき、すごく落ち込んだ。だけど、やっとこの日が来た。愛してるよ——志保ちゃん」

初めて聞いた彼の本音。

こんなに私を想ってくれている。

選ばなくてはいけない。

私が出した答えは——

「・・・はい。私と、結婚して下さい」

顔を上げて、驚いた瞳を見せる黒羽君。
瞬間1秒で彼は立ち上がり、強く私を抱き締めた。

「……っ！ 愛してる、志保ちゃん」

そう言って彼は私の唇にそっと自分のそれを重ねた。1年前に拒んだことを、受け入れた。

十数秒、その口付けは続いた。

「・・・キス、上手いのね、」

「そう？ 喜んで貰えて嬉しい」

彼の笑顔は何より輝いていた。

きっと私の選択は間違っていない。
そう信じたい。

『愛』が足りなかった。

『愛』がなくて心細かった。

だから彼の『愛』を求めた。

間違っていない、筈。

とんとん、と扉を叩く音がした。

「お客さんかしら、こんな遅くに」

もう9時過ぎだろうに。

私は玄関に向かおうとした。その時、扉の方から声が聞こえてきた。

なんて、タイミングが悪いのだろう。

「ただいま、志保。開けてくれ」

聞こえてきたのは、工藤君の声

心は君に寄りにしものを【弐】（新志）（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。雛花です。

テスト勉強に疲れ、（というか集中できなくてはかどらない）結局小説に逃げました。

快志うおおおおお！！！！　って感じです。今の私の頭の中は。

快志良いよ。快志！

工藤君が帰ってきてしまいました。さてさてどうなるのやら・・・
続きます！

心は君に寄りにしものを【参】（新志）（前書き）

新志、続きです。完結（＊、▽、＊）

心は君に寄りにしものを【参】（新志）

「ただいま、志保。開けてくれ」

本当にタイミングが悪すぎる。どうしてこうなってしまったのか。久しぶりの彼の声に心が揺らぐ。

「工藤君……っ」

玄関に向かい、走ろうとした。しかし、私の腕は彼に捕まれた。

「行くな、志保」

黒羽君に抱き寄せられた。あっという間に彼に包まれる。初めて呼び捨てで呼ばれた。

2人の言葉が耳に貼り付いて剥がれない。

「……ごめんなさい。すぐ戻ってくるから、別れる話だけさせて」
もちろん彼はそれを肯定しなかった。

「嫌だ。やっと、やっとここまで辿り着いたんだ。もう手離したくねえんだよ」

分かってる。黒羽君の気持ちも。

だけど私の心は不安定で、どちらに傾いているのか分からない。

「大丈夫、だから」

精一杯笑った。

「……………話すだけだ」

「ええ、ありがとう」

彼は私を許し、抱き締める腕を離した。

そして私は玄関へと駆け出した。

「志保、いるんだろ？」

「開けないでっ」

私は扉を背に座り込んだ。話すだけと決めたんだ。完結に話して、黒羽君の所に戻らないと。

「おかえりなさい、工藤君。だけど、ごめんなさい。ここには貴方の居場所はないの」

「……え？ 何言ってるんだ、志保」

「約束、守れなかった。3年間、ずっとずっと貴方のことを待っていた。けどね、寂しかったの。寂しくてたまらなかった。そんな時、優しくしてくれる人がいた。今日、その人に結婚しようって言われた。私はそれに頷いたの。ごめんなさい、今日、結婚します」

彼はどう思ったのだろうか。

きっと怒っただろう。私のために出稼ぎに言ったのに、帰ってきたら他の男と結婚するだなんて言われて――

だけど彼は、

「……そっか」

怒らなかった。

「俺が3年間宮仕えして色々あった。それだけ志保にも3年間色々あったんだよな。俺がお前を幸せにしたように、その人に幸せにしてみらえよ」

残酷なくらい、優しくかった。

涙が溢れてきた。

幸せだった頃の記憶が蘇ってくる。結婚する時、永遠を誓った。ずっと一緒にいると。

馬鹿じゃないか、私は。彼は私のために働きに行った。彼の方が

辛かった筈、寂しかった筈。なのに、私は寂しいからと言い、他の人と結婚するだなんて。彼から見れば私は我儘だ。

数分前までの寂しさはもう消えていた。

黒羽君、ごめんなさい、私――

「私が、間違ってた。昔から、心は貴方に寄り添っていたのに。自分の心に嘘をついてた。ごめんなさい。やっぱり私、貴方のこと……」

背中ごしに、彼の気配を感じない。

扉を開けた。しかし、そこにはもう工藤君は居なかった。きっと、居場所を探しにもう出ていってしまったんだ……

「志保ちゃん、」

後ろから、声がした。工藤君ではなく、黒羽君の。

「話、全部聞いてた」

彼は俯いた。

「……知ってたよ、志保ちゃんの中にはずっと工藤がいること。それでも目を瞑ってた。志保ちゃんと一緒に居たかったから」

「ごめんなさい、もう、忘れるわ。工藤君のこと」

止まらない涙が流れてくる。

そんな私を彼は抱き締めてくれた。

「もう、自分の心に嘘付くのは止めて。俺も諦めるからさ、志保ちゃんのこと。好きなんでしょ？　まだ、工藤のことが。駄目だよ、記憶から無理矢理消そうとするなんて。志保ちゃんにはずっと笑って欲しいんだ。泣いてる姿なんて見たくない。幸せな志保ちゃんが俺は好きだから」

「・・・うつ、黒羽、くん、ごめん、なさい・・・」

悪いことをしてしまった。罪だ、これは。

「今日のことは、無かったことにしよう」

彼は無理矢理笑顔を見せようとした。だけど無理していることがバレバレだ。

黒羽君は私の頬に優しくキスを落とした。

「行ってきな」

涙を脱ぐって私は走った。振り向いてしまったら駄目だと感じた。無我夢中で工藤君を追いかけた。冬の寒さなんて感じなかった。ただひたすらに、追いかけた。

＊

やっと背中を見つけた。さっき躓いて怪我をした膝が痛い。ただどこかで追いかけるのを止めてしまったら、一生後悔する。

「待つ、て！ 工藤、君っ！！」

叫んだら、声が届いた。彼は此方を見て驚いたの表情を見せる。

「・・・志保」

「ごめん、なさい」

口から出た言葉はまた謝罪だった。
はあはあとゆっくり呼吸をして息を整える。

「何で追いかけてきたんだよ！」

「貴方に、伝えたいことがあるからよ」

もう自分の気持ちに嘘を付きたくない。
彼の瞳を見据える。

「間違ってたのは私の方。貴方は他の男と幸せになってって言ったけど、それは違うわ。だって、そしたら貴方が幸せになれないじゃない」

本音をぶつける。

「貴方が私に幸せになってもらいたいように、私も貴方に幸せになつてもらいたい」

偽りなんてしない。

「自分の気持ちに嘘付くのは止めるわ。素直になる。私は、昔からずっと、貴方が大好きなの」

好きで、好きで、たまらない。

「もちろん、今も」

工藤君は黙って聞いていた。ゆっくりと口を開ける。

「でもお前、結婚するんだろ」

「・・・約束、してしまっただけだ。彼、今日のことはなかったことにしようって私の背中を押してくれた」

黒羽君は、優しいから。

その優しさにまた甘えてしまった。

「・・・また、結婚して」

そうとしか言えなかった。

黒羽君が私を手離したくないって言ったように、私も工藤君を手離したくないの。我儘だけど、一度裏切ってしまったけど、また隣にいて欲しい。

彼を見た。唇を噛み締めて涙が溢れるのを我慢しているのが分かる。

「・・・たく」

彼に腕を引っ張られたと思ったら一瞬にして彼の胸に顔が埋まった。背中に温かい腕が回ってくる。私も彼の背中に腕を回した。

「俺が今、どんだけ後悔したと思ってんだよ？俺の側にいることが志保の幸せなら宮仕えなんて行かなきゃ良かったって考えてた」

「そう。ごめんなさい」

「いや、良いんだ。もう謝んな。今こうしてお前を抱き締められることだけでもう幸せなんだ」

「私も、幸せ」

工藤君の心臓の鼓動が聞こえる。側にいる、工藤君が。私を想ってドキドキしてる。

「……ずっと1人にしてごめん」

「謝らないでって言ったの、貴方じゃない」

「あ、そうだった」

2人で笑い合った。

「愛してるよ、志保」

愛の言葉をまた聞いた。

「私も、愛してる。新一」

愛の言葉をまた言えた。

「……!？ 今、新一って」

「さあ、何のことかしら？」

「にやろ・・・」

一度裏切ってしまったけれど、

私と彼の赤い糸は途切れなかった。

固く結ばれた、赤い糸は――

心は君に寄りにしものを【参】（新志）（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。こんばんわ、雛花です。

勉強してません。集中できません。オーマイガーって感じに今雛花は思っています。思ってるだけで、行動に移そうとしてません。↑末期

取り敢えず『心は君に寄りにしものを』完結です。お疲れ様でしたっ！ 自分で思ったけど、新志<快志だと思う。何でこうなった（´・ω・、） まあ、良いか。いや、良くないかwww 雛花の趣味と言うことで。多分志保ちゃんが簡単に快斗君を裏切ったことに納得いかない方もいるかと思います。しかし、雛花が思うには結婚をOKした時もまだ心の何処かに工藤君が居たんだと思います。そう思ってください。

ちなみに、2人が家に帰ったら黒羽君はもういなくて、『お幸せに』という置き手紙だけあって志保ちゃんがまた泣いてしまったという裏話。

本当の『あづさ弓』という話では、もう悲恋の中の悲恋で、元の旦那を追いかけたけど、追いつかないで、途中で女の人は倒れて死んでしまうという話なんです（ノム）… 悲恋すぎつ雛花には書けません。

でことで、ありがとうございました。感想受付中です><＊

今、文章表現鍛えるために表現重視の中学生コ哀小説書いております（´・ω・、） 楽しすぎて仕方がない。しかし、長いので更新は遅いです。楽しみにしてて下さい！↑自分でハードル上げたよコイツwww

僕は君で、君が僕【中学生コ哀】（前書き）

中学生コ哀。青春の真っ只中。

僕は君で、君が僕【中学生コ哀】

寒くて厳しい冬も終わり、ポカポカと温かい、春の陽気が訪れた。新しい学年になって、俺は中学2年生になった。そこそこ頭が良く、それなりに校風も良い学校だ。もちろん、同じ境遇である少女も一緒だ。残念ながら、少年探偵団であった他の子供たちは同じ学校ではない。寂しくはあるが、灰原がいるだけで、俺は十分だった。偶然なのか必然なのか、ずっと灰原とは同じクラスだった。今回も同じクラス。これは仕組まれてるとしか考えられない。仕組んでいるとしたら、博士か。いや、母さんに頼まれて博士がそう頼んでいるのかもしれない。そのことについては、特に疑問を抱いていなかった。もちろん、今も。

だけど、席はそれなりに遠い。まあ、江戸川と灰原では当たり前だが。俺は窓側の一番後ろの席。灰原は廊下側よりで、前から4番目。暇さえあれば灰原を見ているが、彼女は中々此方を見てくれない。

「——おい、江戸川。聞いてるのか？」

前で喋っている先生の声を聞いて、今が授業中だということに気がついた。

「あ、はい」

それだけ適当に返事をした。黒板には化学式がズラズラと並べてあり、そういえば理科の時間だったと思い出した。普通5時間目に理科を入れるか？、と疑問に思った。シャーペンを持ち、黒板に書いてあることをノートに写すふりをした。

先生は普通に授業へ戻った。

だけど、俺のノートには授業のことなんて一切書いていない。一度勉強したことでもあるし、簡単すぎて写す気にもならない。

くるくるとシャーペンを回して弄ぶ。と、灰原が此方を見て、クスリと笑った。あまりに可愛かったのでドキッとした。シャーペンがカシャンと音を立てて床に落ちた。

「何だ？」

「いえ、何でもありません」

先生がジロツと凝視してきたので慌ててそう言った。

（にやろ・・・）

真剣に授業を聞いている灰原に（多分ふりだろうが）、後でお仕置きをしないと思いつながら、またシャーペンを回し始めた。

俺らが小学校3年生の時に、俺のいう黒の組織は潰れた。予定だったらそこでデータをもらい、元に戻る筈だった。しかし、組織はアジトを爆破してしまい、アポトキシン4869のデータは全て消えてしまった。灰原は必死に解毒剤を作ろうとしたが、どれも不完全なもので、完璧に元には戻れなかった。灰原は初めて会った日以来見せなくなった涙を、この時俺に見せた。「ごめんなさい」と何度も謝り、部屋から出て来ない日が何度か続いた。

いつからだろうか、そんな灰原に想いを寄せるようになったのは。蘭のことが嫌いになった訳では決してない。だけど、一番大切な人は？ と聞かれたら、灰原と即答していただろう。

だから俺は元に戻れなくても特に不満は無かった。むしろ、戻れない方が良かった。でも今でもそんなこと灰原に言っても笑われるだろうな、「馬鹿じゃないの」って。

蘭には全てを話した。新一は俺だと言うこと。もう戻れないと言うこと。好きな人が出来たと言うこと。そりゃ相当怒られたし、泣かれたし、大変だった（殴られることはなかった）。だけど、最後は笑ってくれた。「別の姿でも帰ってきてくれたから許す」とそう言ってくれた。何度、蘭に助けられたことか。（因みにその場に一緒にいた園子には一発叩かれたけど）

しかし、一番このことに納得しなかったのは灰原だった。

俺の勇気を持って言った「好き」という言葉も「気のせい」だと返された。でも俺は知っていた、灰原がその後部屋で泣いていたことを。本当は俺のことが好きだということも。罪を感じているんだと思う。自分は役目を果たせなかったのに、幸せになって良いのか。葛藤したんだと思う。1人、戦ったと思う。だけど答えは出ず、今もまだ俺らの関係は曖昧だ。友達以上恋人未満。世間一般から見たらこの言葉が当てはまるだろう。

俺は灰原と付き合いたいと思う。だけどそれが灰原を悲しませるのなら、俺は今のこの曖昧な関係でも良いと思う。

俺らが小学生の頃のままの関係というわけでもない。工藤邸で一緒に住んでいるし、一緒に帰ったり、手を繋いだこともある。もちろん、キスもしたことがある（俺が無理矢理したんだけど）。進展がないわけでもない。徐々に灰原も素直になってきている、と俺は思う。

それなりに楽しい第2の人生を俺らは歩いていた。

（眠い・・・睡魔だ）

昔を振り返っていたら睡魔が俺を襲ってきた。化学式がどうたらこうたらと話している先生の声も届かない。駄目だ、眠い――そのまま俺は眠ってしまった。

*

「――、くん」

なんか声が聞こえる。

「――えどがわ、くん」

俺か？ 俺を呼んでるのか？

「江戸川、君」

聞いたことある声だ。

「江戸川君！」

それと同時に頭に衝撃が走った。

「っ痛え！！」

目を開けると、ガランとした教室に居た。上を見上げると、灰原が国語の教科書を持って呆れた顔をしている。多分、教科書で頭を殴られたようだ。しかも角で。

「やっとお目覚めのようなね。気分はどう？」

「良いわけねえだろ。何処に教科書で殴り起こされて気分の良い奴

が居んだよ」

「ふふ、そうね」

反省の色が見えない。でも、実際気分は良かった。決して教科書で殴られたからではない。目が覚めて初めに目に入ったのが灰原だったからだ。こんなこと言ったらまた殴られるだろうな。

「つーか、今何時？」

「4時だけど」

「ふーん。・・・って4時!？」

さらっと言うその言葉を流してしまいそうだった。教室の時計を見る。間違いなくその時刻を指していた。

6時間目が終わったのが3時30分だ。それから30分も経っている。

「何で起こしてくれなかったんだよ？」

「気持ち良さそうに寝てたから。で、貴方部活は？」

「大丈夫、今日は休みだ」

「へえ」

起こしてくれなかったから怒りたいところだったが、クスツと笑う笑顔に負けて、怒るに怒れなかった。

それにしても、

「お前、待っててくれたのか？ 俺のこと」

「さあ、どうかしら」

「いや、待ってたんだろ」

「江戸川君1人置いていくのは可哀想だと思ったからよ」

ふいっと顔を反らしてしまった。鞆を持って、「帰るわよ」と俺に言う。

相変わらず、素直じゃねえよな。顔に書いてあるぜ、一緒に帰りたいから待ってたって。

嬉しい気分になったからふふんと笑った。

＊

学校の駐輪所に向かい、自転車を出す。それに股がり、ペダルをこごうとしたが、灰原が自転車に乗っていないことに気付いた。

「灰原、チャリは？」

「今日は歩きよ。パンクしたから」

「ふうん」

そういえば朝家出るとき灰原の自転車が置いてあったことを思い出した。先に出た筈なのに（一緒に帰ることは多いが、行くことは少ない。俺が起きるのが遅いだけなんだけど）、と少々疑問に思ったがそこまで気に止めていなかった。

「・・・乗れよ」

「え？」

「『え？』 じゃなくて」

「だって、貴方はどうするの？」

「は・・・？」

「貴方は歩いて帰るの？ そんなの悪いわ」

こんな天然って居たんだ。「乗れよ」で2人乗り以外に何があるってんだよ。解釈が可笑しいだろ、コイツは。わざとか？

「あのなあ。そーいう意味じゃなくて、後ろに乗れつつってんだよ」

「・・・あら、そう」

「ほら、早く。置いてくぞ」

灰原は口に手を当ててどうしようか考えていた。その仕草があまりにも愛らしく、抱き締めてしまいたいくらいだ。・・・いや、止めよう、変な妄想は。

無言で彼女は俺の自転車の後ろにちょこんと乗った。後ろ向きで乗ったから俺は言っちゃった。

「バーロー。そんなんじゃないや振り落とされるぜ？　ちゃんと俺に捕まれよ」

ちよつと顔を赤くして彼女は前に身体を向け、俺にぎゅっとしがみついた。あ、ヤバイ、俺が照れる。緊張で上手くこげない気がしてきた。可愛すぎなんだよ、お前は。

数年前もこんなことあったっけ。あの時はスノーボードだった。元太たちを追うために2人乗りしたんだよな。ちゃんと俺を抱き締めていてくれた。

「その手、離すなよっ」

勢い良くペダルをこいだ。

風が気持ち良い。爽やかすぎる風が俺と灰原の髪をなびかせる。

いつもよりちよつと重いだけ。軽すぎだろ、灰原。ちゃんと飯食って・・・るよな。だって夕飯一緒だし。まさか昼抜いてんのか？

「灰原、お前体重何キロ？」

そう口走って最後まで言ってからいけないことを聞いてしまったと反省した。

「女子に体重を聞くだなんて、貴方デリカシーゼロね」

「ごめん、悪かったって」

「別に、私は気にしてないわよ」

これが俗に言うツンデレなんだな。うん、確かに灰原はツンデレだ。基準とか良く分からないけど。

いつからだろうな、推理よりも本よりも俺の脳が灰原を染めるようになったのは。

「なあ、灰原。昔の話して良いか？」

「急に何よ」

「どうしてさ、俺がお前に好きって言った時、私も好きって言うてくれなかったんだ？」

灰原からこの答えを聞いたことはなかった。だから、聞いてみた。

「それじゃまるで私が貴方を好きみたいな言い方じゃない」

「違くないだろ？」

俺の強い言葉に灰原は反論出来ていなかった。暫く黙り込んでしまった。

「・・・幸せになっちゃいけないと思ったからよ」

か細い声で彼女は呟いた。

「貴方を幸せに出来なかった私が、貴方に幸せにして貰うなんて出来なかった。貴方の気持ちから逃げてたの。運命から逃げないって決めたのにね」

「また貴方に叱られちゃうわね」と灰原は笑った。やっと本音を言ってくれた。まあ、俺が予想していた答えだったけど。

「だけど、貴方といると幸せになっても良いかなって自分に甘えてしまうの。我儘よね、私って」

「バーロー。我儘なんかじゃねえよ。それが当たり前なんだ。お前は組織にいたから分からないかもしれないけど、幸せになりたいって思うのは当たり前」

俺だって思う。幸せになりたいって。灰原とずっと一緒にいたいって。

「そう・・・」

「お前に悲しまれると俺が悲しい」

背中ごしにでも彼女が悲しい顔をしているのが伝わってくる。

「俺にとってはさ、お前が笑うだけで世界中が笑ったように感じるんだ」

「……大袈裟ね」

「本当だぜ？　だってお前が笑うとつられて俺も笑うから。・・・
灰原が世界の全てなんだ・・・流石にこれは言い過ぎか」

ちよつと調子乗った。だけど、大方間違いいではない。だって、今の俺には灰原がいるだけで十分だから。灰原がいなくなったら、俺の世界はなくなるから。

——いつの間にか、灰原の存在は俺の中でどんどん膨らんでいった。

「ふふ、貴方のそういう性格、好きよ。ありがとう」

「・・・っ！」

灰原はさつきより強く抱き締めてきた。不意打ちすぎんだろ。てか、今、『好き』って。……そういうところが好き。

「お前、素直になったよな」

「そ？」

「ああ」

まだ足りないけど。そこは俺の力不足ってことかな。

君が側にいる。

それだけで俺は十分幸せ。

だけど、人間って欲張りだからさ。欲しくなるんだよ、全部。君

の全部を。自分だけのものにしたい。君を俺色に染めたい。

「……めんどいけど、裏道するか」

「え？」

「遅くなっちゃったから早く帰りたいだろ？ 近道だよ、近道」

「そうね。誰かさんのせいで遅くなったからね」

「悪かったって……」

謝罪の気持ちを込めて、さっきよりも早くペダルをこぐ。振り落とされないように灰原がもっと強く抱き締めてきた。

そう言えば、と前を見たら思い出した。この道は『長すぎる』と有名な坂がある。最悪なことに、上り坂だ。

「……坂だ」

「貴方上りきれるの？」

「現役サッカー部なめんじゃないぞ」

でも実際自転車で上ったことがない。しかも2人乗りだ。なんかパワーがねえとな……あ、そうだ。

「この坂、上ってやるよ。……その代わり、」

いつも灰原にいじられてばっかだから今日ばかりは俺のして欲しいことを言おう。

「ちゅーしてよ、背中に」

「な・・・っ」

「じゃないと坂道上んねえよ」

照れた灰原の顔が浮かぶ。それだけで嬉しくなった。

「ほら、早く」

坂道はもうすぐそこだ。早くしないと上りきれない。灰原にキスされたらすげえ頑張れる気がする。

「――全く、しょうがないわね」

そう言って、灰原は俺に分かるようにちゅっと音をたてて、うなじにキスをした。

「さんきゅっ」

大切な人がすぐ側に居る。

ただそんなことだけで幸せになれるんだって俺は知った。
笑ってる君を見ているだけで幸せを感じられるんだ。

俺がお前で、お前が俺。

いつでも2人で1つだから。楽しみも半分ずつ。喜びも半分ずつ。
悔しさも半分ずつ。悲しさも半分ずつ。もちろん、――罪も半分ずつ。

ずっと一緒に生きていこうな？

僕は君で、君が僕【中学生コ哀】（後書き）

息抜きのつもりが最後まで書いてしまった（・ω・）　こんばんわ、雛花です。最後まで読んでいただき、ありがとうございます。最近パラレルでどろどろした新志多かった気がするからちよつと若い中学生のコ哀で青春っぱいのを書きました！　中学生コ哀おいしいですね（^q^）　哀ちゃんはブレザーよりセーラーが激しく思います。コナン君もブレザーより学ランのほうがいいがっこよさが目立つと思います。中学生コ哀らぶ。曖昧な関係が好き。付き合っていないけど、周りから見たらこの人たち付き合ってるよなみたいな感じの。

サブタイトルとお話の内容は少しDECO*27さんの「ペダルハート」という曲からきています。素敵なりア充の曲です！　聞いてみてください！！

取り敢えず今回は心情重視で書いた・・・つもりです！　最後の方疲れてきちゃいましたが。それなりに頑張りました。

私もそうなんですが、長い文章って読む気にあまりなれませんよね。会話だけ読んじゃったり。だけど、こうして書いてみると、作者は細かい部分まで色々考えて書いているということを感じられます。必要なさそうな描写でも、何かを思ったから書いたんです。そう思うと、細かいとこまで読むようになりました。昔の私の文章は会話多めだったんで、そっちの方が皆さんはすらすら読めて読みやすいとは思いますが。今の文章は無駄に表現が多くて、読む気にならないかもしれません。しかし、私としては今の文章を気に入っています。・・・まだまだ修繕点はたくさんありますが。

それと、一つ報告がっ・・・！！　パウリの甥さんがこの作品、「愛とアイと哀と」のレビューを書いて下さりました！　ありがとうございます、（^▽^）／　皆さんどうぞ読んでください。私のハートドルがまた一つ上がった……！　もっと頑張ります（^ω^）

パウリさん本当にありがとうございました／（＾Ｏ＾）／
ってことで、60話でしたっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4054r/>

愛とアイと哀と

2011年12月17日19時49分発行